

fate×メガテンもの  
(旧名・間桐慎二のデビ  
ルサマナー (短編))

メガテニスト (偽)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

題名変更しました。

文才ないけど作者が妄想を抑えきれず、見てもらいたい、  
共感とかが欲しいと思って不定期で書いていきます。感想があると嬉しいです。  
もうこれ短編もあるけど連載に近いなということで一応。  
いつまで続けられるかわかりませんが。

# 目 次

間桐慎二のデビルサマナー	30	追記	123
間桐慎二のほうの設定集	9		
間桐慎二のデビルサマナー（短編）	1		
UA1000越え記念	24		
慎二のメガテンメモリアル／タマモ、 出会いのとき／	24		
セタンタとの出会い 前編	68	56	39
セタンタとの出会い 後編	68	56	39
間桐慎二のデビルサマナー 5話	92		
ある日の日常1	115		

怪奇！住宅地に表れた鬼！衛宮士郎と の出会い編	30	追記	123
邪眼の異界編 前編	130		
邪眼の異界編 後編	152		
凛ちゃんの大冒險！ わんにゃんフェ アリー大戦争！ Part1！	182		
アリー大戦争！ Part2！	208		
アリー大戦争！ Part3！ 8／26	225		
凛ちゃんの大冒險！わんにゃんフェア リー大戦争！	247		
設定変更。			

凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェ	o u r n e y (序章)	365
アリー大戦争！ Part 4！	F a t e / G r a n d O r d e r	272
凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェ	e p i c o f s t r a n g e	j
アリー大戦争！ Part 5	o u r n e y 続き	384
凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェ	F a t e / G r a n d O r d e r	288
アリー大戦争！ Part 6	e p i c o f s t r a n g e	306
凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェ	o u r n e y 3話目	344
アリー大戦争！ Part 7	F a t e / G r a n d O r d e r	324
未来のお話 Part 2 前篇	e p i c o f s t r a n g e	S
F a t e / G r a n d O r d e r	o u r n e y 4話目	
t r a n g e J o u r n e y	F a t e / G r a n d O r d e r	
F a t e / G r a n d O r d e r	e p i c o f s t r a n g e	
e p i c o f s t r a n g e j	o u r n e y 5話目	

o u r n e y (序章)	365
F a t e / G r a n d O r d e r	272
e p i c o f s t r a n g e j	
o u r n e y 続き	384
F a t e / G r a n d O r d e r	288
e p i c o f s t r a n g e 306	
o u r n e y 3話目	344
F a t e / G r a n d O r d e r	324
e p i c o f s t r a n g e	S
o u r n e y 4話目	
F a t e / G r a n d O r d e r	
e p i c o f s t r a n g e	
o u r n e y 5話目	

F a t e / G r a n d O r d e r

e p i c o f s t r a n g e

o u r n e y 6 話目

小ネタ集

ある日のくろひー サブミッション・

黒ひげを追え!

多分、いつか起ることもあるんじゃ  
ない?というようなこと

流星・時を超えた出会い。

しん・めがみてんせい えくすとら

456 451

446

433 j

460

F a t e / E X T L A ダンシング

472

オールナイト



# 間桐慎二のデビルサマナー 間桐慎二のほうの設定集

## 悪魔

神や魔王といった超自然的な存在は、善惡や思想関係なしにすべて「悪魔」と総称される。全てを「悪魔」と呼びつけるその理由とは、彼らが必ずしも人間の敵であるとは限らないし、また味方とも限らないからである。たとえば、一般的に天使といえば慈愛に満ちた存在のように比喩されることが多いが、一方で神の教えに背く者を駆逐したり、神の敵の軍勢と戦うための尖兵としての役割も持っている。また神の敵とされる存在も、堕落した天使や、異教の神が神の勢力によつて貶められた姿が多い。このように、一方的な視点で見た呼称のみで悪魔達の善惡を決めつけられることを避けるため、あえて全ての神をも「悪魔」と呼ぶのである（日本では人に害をなす疫病神や貧乏神も「神」と総称するが、このような考え方をそのまま裏返したと言える）。

（女神転生シリーズ Wikipedia から引用）

ここに本作の設定として、Fateでいう真性悪魔とは異なる。なぜなら基本的に生体マグネットイトという生命力、感情の奔流の発露によって実態をなすものであるため、

比較的思考が人間に近く、決して理解できない存在しかいわけではないからだ。ただし分かり合えるとも限らない。

また、何か形をかぶることでしか現界できないことはFateの悪魔と一緒に。  
もともとが異世界の物理法則に従つたものであるため存在が知られても神祕の減衰が起きず、多人数に実在を知られてしまうほど出現しやすくなり、力も増していく。全人類に存在を知られてしまうような状況になると、世界の裏側がどんどんと現出していく、ロンゴミニアドが本職を失う。（つまり世界を織物だとすると虫食いだらけでおお、もう・・・な事態になる）

また、現界できないほど傷つき構成するマグネットイトが霧散すると強制的に情報体がもといた世界の裏側へ帰る。契約した仲間の場合召喚プログラムの召喚方法で変わる。

また、個体差があるものと、本体からの分霊などパターンがある。

いわゆるなんか突然できた使つても世界が崩壊しにくい裏道なのでみんなが知っているFateキャラも普通に出てくる。

一度悪魔に目をつけられたものは悪魔の目につきやすくなるのか、またかかわってしまうことが多い。

### 生体マグネットイト（M）

悪魔が物質界（人間界）で活動するために必要なエネルギー。略してマグネットイトと

も呼ばれるが、磁鉄鉱とは別物である。MAGと呼ばれるもあり、単位はMで表記される。激しい感情の変動を起こし得る生物が多く持つものとされ、特に人間と悪魔が多く保有する。悪魔は本来肉体を持たない生物であるため、物質界では自らの肉体の実体化を維持するためにMAGを消費し続ける。MAGが失われると徐々に肉体が崩壊してゆき、最終的には死亡に至るため、悪魔は人間を捕食したり、信仰を集めたりしてMAGを吸収する必要があるのである。また悪魔が人間界で実体化する際に十分なMAGが供給されないと、実体化に失敗してスライム化し、手当たり次第にMAGを求めて暴走することもある。エネルギー体のため常態では視覚感知は出来ない

(女神転生シリーズwikiから引用)

本作では生命であれば必ず持っているものとする。また、人間の持つ魔力であるオドの生成の一つにこれを細胞分化のように不可逆の変換を行い生成することができる。悪魔たちはこの方法を使い余剰マグネタイトを消費して魔力を生成している。そのため、生成にある程度時間はかかるものの安静にした状態で多めにマグネタイトを送ることで早く回復することができる。

生命力、感情の発露そのものであるため、これを実体化に使っている悪魔は生きているといつてもいい。

そして、Fateという幻靈にすら生命と、英靈とかに対抗できるくらいの力を与え

ることもできる。

きわめて第3魔法に近いことができるが、肉体という枷に引きずられる魂を、それ単体で存続できるよう固定化し、不老不死を実現する第3魔法と違い、魂を固定化し現世を介入しまくることできない。とどまつていてもマグнетタイトが霧散し、消滅する。肉体が死ぬと大体は冥界に強制に連れていかれる。まれに戻つてくる奴や葛葉キヨウジのように魂を別人の体に移すやつもいるが。（別人の体に魂を定着させるのは第3魔法でないとできない）

魔力とは不可逆であるが、魔力でないとできないことは多く、マグネットタイトでできることには魔力でできるものもある。

魂を構成する物質であり、エーテルに溶ける。このエーテルは液体のエーテルと魔力の塊、魔力結晶がある。

Fateではエーテル塊にはいかなる使い道もないけどここでは普通に使い道ある。やつたね、もうむしょくじやないよ！

### 悪魔召喚プログラム

悪魔召喚の儀式をコンピュータ上でエミュレーションして自動化するプログラム。元祖においては召喚儀式の自動化のみを意図したものであつたが、数多のオカルティストによるアップデートを経ており、付隨的な機能として悪魔言語の翻訳機能、契約、管

理、報酬取引を自動化する機能が付与され、結果として「悪魔使役の総合補助システム」として完成されている。

これが開発される以前から存在する悪魔召喚術（古典的な「黒魔術」における悪魔召喚）は、高度な魔法知識や靈力が要求され、更に魔法陣の構築や生け贋の準備、召喚の儀式など手間がかかり実戦的とは言い難かつた。しかし悪魔召喚プログラムの登場により、コンピュータを扱える知識さえあれば、別段優れた魔法の知識がなくても悪魔との契約や召喚が可能になつたばかりか、戦闘中など状況を問わない召喚の実行や、会話による平和的交渉、複数の悪魔の同時使役などが可能になり、召喚士の能力を飛躍的に向上させることになつた（なお、現代の悪魔は血肉のような現物支給よりも、現金やM A Gを好むらしいので生け贋が不要になつたようである）

（女神転生 wikiより）

コンピュータグラフィックなどで現実にはできないことも仮想空間ではできるのでこれがないとできないものは多い。召喚したらそのままよなシステムのため実際に複雑な演算とかが必要なのは召喚するときのみ。

スマートフォン

みんなご存知。ただし慎二の持つてているものはいろいろと特殊なもので、容量とか演算能力とかつながっているところとかバロウズさんとか頑丈とかがいろいろおかし

い。

## 固有異界

悪魔が展開する空間。悪魔によつてさまざま。程度の低い悪魔ならちよつと違う現実のような空間になるが、

高位の悪魔が展開するそれはもはや悪魔の世界そのものである。

その程度がどの程度のものであれ、すべて現実とは異なる次元にあるため、普通の人間には認識できない。そして介入することもできない。

また、蜘蛛の巣のように張つて、狙つた相手を引き込んで食らうような使い方もできる。

現状異界に強制的に入り込む異界開きはスマートフォンのアプリでしかできない。

また、高位の悪魔が展開する異界が発生すると、現実の人間世界にも影響を及ぼし、常識の改変が起きる。

これをパラダイムシフトと呼称する。これに抗えるのは一部の人間だけで、範囲内の耐性のない人間はそれに疑問をもたないまま過ぎる。改変された常識にもよるが耐性があるものからすると一発でわかる。

世界が交わつてあまりたつていない頃は契約をしていない悪魔は異界の中でしか実体化した活動をできず、神隠しのようにものや人を引き込んで食べたりするが、時が進

むにつれて現実と地続きの固有ではない異界が発生するようになる。

低位の異界であつても、スマートフォンにはサーチするアプリがある。

### レベルアップ

通常、人間が持てるマグネットイトには限りはあるが、悪魔を倒してそのマグを少しづつ取り込むことにより、魂の器を拡張、強化することができる。これがレベルアップ。悪魔も同じ。

保有マグネットイトが上昇することで肉体にも影響を及ぼし、強くなっていく。また、その人物の概念、意味が強化される。つまり永久的な成長型の強化魔術のようなもの。武器、銃器などを使う場合でも、レベルの差によつて、概念強化の上乗せが違うため明確に威力に差が出る。

通常、オドには限りがあるが、それを際限なく増やしていくことも可能となる。

### 魔界魔法

魔界に存在する根源的なパワーを引き出し、力として行使する。

のだが、本作では自分の魂に刻み込み、魂を魔術基盤として行使するもの。魔力を通すことでも発動するが世界に刻み付けられたルールではなく、異世界の物理法則なためやつぱり知られたことによる神秘の減衰が起こらない。

ただし刻み付ける行為はそつれなりに苦痛を生じる。

その他の考えている設定として、序盤はまだ混じつて馴染みきつていないので物理法則が変わるだけで済んでいるが、侵食が進んでいくと、メガテンに出ている奴らが出てくるという設定。

つまり、ヴエルバーとソウルハツカーズのファントムソサエティが信仰している「大いなるものが」たまたま周期かぶつてシマ争いしたり、マニトゥが出てきたりする。メム・アレフとシユバルツバースが発生する場合自分で身を守れるから真祖がそれほど重要じやなくなりリストラの危機に陥る可能性もある  
もしくは

# 間桐慎二のデビルサマナー（短編）

始まりは中学校に上がったころだつた。

なぜそれが落ちていたのかもわからない。ただ一つだけ言えるのは、それを拾つたことによつて僕の人生はどうしようもないほどに狂つてしまつたということだけだ。

「ん？ なんだこれ？」

自分の部屋に戻る途中、廊下を歩いていると黒い板状のなにかを見つけた。

近くによつて見てもそれが何なのかよくわからないそもそもなぜこんなものが家の中に落ちているのかもわからずとても怪しかつた。

興味を惹かれてそれを拾い上げてしらべてみると、黒くてつるつるするほうが表だとすると横に数個のボタンのようなものと、表にも一つのボタンがついていた。試しに押してみてが何の反応もない。

ただのおもちゃかと思い興味が薄れ、ごみ箱にでも捨てておこうかと思い目を離した

後、

「えつ・・・、うわっ!?」

起動したのかそれは目を開けていられないほどの光を放ち、そして、文字通り世界は変わってしまった。

目を開けて初めに感じたのは、まるで世界が変わってしまったかのような感覚だった。

ここは自分の住んでいる家だと断言できるはずなのに、どうしようもない違和感に襲われ、まるで幽霊でも出てきそうな不気味な雰囲気を醸し出していた。

不安が押し寄せてきた僕はいてもたってもいられなくなり、持っているものが光を放つたことを気にも留めず部屋に向かってあるき出そうとした。そのとき、それの輝きが増した。そこでようやく僕はそれを注視した。そこには、

「悪魔召喚プログラム・・・?なんだこれ?」

そこには悪魔召喚プログラムという文字ととても精密に書かれた魔法陣のようなものが表記されていた。

“この板状のものはとてつもなく小さなパソコンなのだろうか?”

そんなことを考えられないくらい混乱したまま画面を見ていると、魔法陣が動いていき、輝きを強めていた。

まるで儀式でも行われているみたいに何かが次々と処理されている。それを見ていると魔法陣が止まり、輝きが一層増してきた。

「お、おい・・・冗談だろ・・・悪魔なんて召喚されるはずないだろ・・・」

思わずそうつぶやいてるとまた目が開けられないほどの光がはなたれ、しばらくして目を開いたが、

そこにはなにもなかつた。

「な、なんだよ驚かせやがつて・・・」

思わずほつと息を吐くと、気が付いた。自分以外の息の漏れる音がすることに。  
誰だと思い振り返るとそこにそいつはいた

そいつの風貌はまるで骨と皮でできていて唯一腹だけが出ていた。どこかで見たことがある特徴に思えたが思い出せない。どこから入ってきたかもわからないそいつに「お、おい、なんだお前！どこから入ってきたんだ！」

と声を震わせながら怒鳴った。そこでそいつはようやく僕に気が付いたようだつた。そいつはまるで恨めしそうな目でよだれを垂らしながらちらをふりむいて近づいてきた。

「お、おい……なんだよ、言つておくが僕の家は魔術師なんだぞ！お、お前みたいなやつ父さんやおじい様がきたらあつという間なんだからな！」

そう虚勢をはりつつも後ずさりしていく。そして次の瞬間そいつは振りかぶつてひつかいてきた。

「うわっ！」

とつさに腕で防ぐと、衝撃と痛みとともに僕は弾き飛ばされ、しりもちをついた。腕を見ると大きな切り傷ができていた。僕は目の前の何かに恐怖を感じ、何とか立ち上がり走つて逃げだした。

「はつ、はつ、な、なんだよあいつ……なんなんだよあいつ！」

しばらく走つたのち、適当な場所に隠れて追つてきてないか確認し、姿が確認できないことを確かめると息をついた。そして、手放していなかつた板状の何かを見て、そこに、

幽鬼ガキ Lv. 3 : 状態 : 未契約 : 召喚中

と書かれているのを発見した。ガキ？ もしかしてさつきのやつか？ ではやつぱりこれのせいで召喚されこんな目にあつているのか？ と思ひながらその下に

妖精ピクシー Lv. 1 : 状態 : 未契約 : 非召喚

と書かれているのを発見した。もしかしてまたさつきのやつみたいに召喚されるん

じゃ…と思ったが何も反応がない。そもそもどう動かすかもわからないまま恐る恐るさわってみると、

Error! 問題が起きデータが初期化され再起動しました認証を開始します。  
ホームボタンに指を数回タップしてください

と文字とともに持つているものを表した絵が表記された。

「ホームボタン…こ、これか?」

と書かれていることを実行した。すると、認証中と表記され、続いて認証が完了しました。と表記された。そして、バロウズ起動します と表記され、

「女性型オペレーティングシステムバロウズよ、初めまして、マスター。」

「う、うわあ！しゃ、しゃべった！」

突如それはしゃべりだし、驚きのあまり声をあげてしまった。あわてて周囲を確認して

何もないことを確かめて、ため息をついた。正直もう何が何だかわからなかつた。

「なんなんだよ…なにがおきているつてんだよもう…」

「あら？どうかした？マスター」

「つ!?僕が言つたことに返事した!?おい!なんなんだおまえ!なにがおきてるのかしつているのか?!あの抜けものはいつたいなんなんだ!」

「ちよつと待つて、スキヤンしてみるわ」

「す、スキヤン？」

「そういつてまた黙り込んで何やらし始めたそれを黙つてみてないと終わつたのかしゃべり始めた。」

「まず何が起きているかだけど端的に話すとここは異界化しているわ。そしてあなたが言つたバケモノは悪魔ね悪魔召喚プログラムが誤作動を起こし制御できなまま召喚されたみたい。」

「い、異界化？ 悪魔？」

「そう、悪魔というのは神や魔王といった超自然的な存在のこと。ただしこの世界だとちよつと違うみたいね、善惡や思想関係なしにすべて「悪魔」と総称されるわ。全てを「悪魔」と呼びつけるその理由とは、彼らが必ずしも人間の敵であるとは限らないし、また味方とも限らないからであるからよ。」

そう説明を聞いていると現実感が薄れてきそうになる。まるで自分がゲームの中に入り込んだみたいだつた。

「唚然としているのもお構いなしに、

「そして異界というのは悪魔によつて作られる現実とは異なる空間のことよ。作る悪魔によつてどんなものが違つてくるけど。この異界は作つている悪魔が低級なおかげ

で現実に近いわ。そのおかげで発生した現実の場所に近い構造になつているみたい。  
そしてここからが重要よ、その悪魔を倒さない限りここからは出られないわ。」

「なんだつて!? うそだろおい！」

「事実よ。マスター。」

唐突にそんなことを告げられそんな言葉が出た。今さつき傷つけられたときのこと  
を思い返し、恐怖がこみあげてくる。とても立ち向かおうという気になれなかつた。

「ど、どうにかなんないのかよおい」

「てはあるわ。悪魔には悪魔。悪魔召喚プログラムの使用を推奨します。」

「つ、使つても大丈夫なのかよ。さつきのやつはそれで召喚されて襲い掛かつてきただぞ。」

「契約を結んだ悪魔であれば問題ないわ。契約の仕方は未契約の悪魔に対して悪魔会話  
アプリを使用して交渉するの。使用の仕方は……」

何やら現実感が戻らないまま説明を聞いて操作していく。

「そう、そんなかんじよ。では、実際に使用してみましょーか。」

「し、使用するつて言つたつて……」

「悪魔召喚プログラムにピクシーが未契約のままいるわね？ それを召喚して交渉して。

召喚の仕方は……」

いわれるままピクシーのアイコンをタップすると “召喚しますか？” “はい” “いいえ”と、表示される。

僕はそれを迷った末に深呼吸して “はい” を押した。  
そしてまたもガキが召喚された時と同じように魔法陣が構築され、光り輝いて、それは召喚された。

「ん～？」「どこー？　おにいさんだあれ～？」

「で、できた・・・。つてアプリアプリ：」

召喚できたことに改めて驚きつつも会話アプリを起動させて（起動させずに会話すると精神を汚染されるらしい）目の前の小人と交渉を開始した。

「お兄さん会話したいの？　いいよ！　暇だししてあげる！」

「と、突然で悪いんだけどさ、仲間になつてくれないか？　ほしいものはできるだけあげるからさ。」

「あたしを仲魔にしたいの？　うん、じゃあおいしいものがたべたい！」

「あ、ああいいぞここから出たらなんでもたべさせてやる。」

「じゃあ交渉成立ね、あたしピクシー、コンゴトモヨロシク！」

そういうとピクシーは近づいてきた。おもわずたじろぐととくすくすと笑つたあと、光のような粒子状のものになつて板状のものに吸い込まれていった。

「ホ、ほんとに契約できたのか？」

「ええ、おめでとうマスター 契約成立よ。確認してみて。」

確認すると確かに

妖精ピクシー L v1 : 契約済み : 非召喚 : 通常

となつていた。呼び出す場合はもう一回召喚した時と同じようにすればいいらしい。「それと注意点があるわ。悪魔を召喚するときと召喚を維持している間は生体マグнетайトを消費するの。」

「生体マグネットタイト？なんだそれ？」

「生体マグネットタイトはそうね、知的活動、感情の強い発露、生命力の発露ともいえるエネルギーよ。悪魔は本来肉体を持たない生物。物質界では自らの肉体の実体化を維持するためにはMAGを消費し続けるの。これの性質によつて脳をもたないはずの悪魔が考えたり、動いたりできるの。」

それは魔力とは違うものなのだろうか本とかで学んだ魔力は生命力を交換したものであつたはずだ。

「ええ、生体マグネットタイトは本来この世界になかったものだから魔力とは違うの」

「どういうことだろうか？本来この世界にない？」

「まあ生体マグネットタイトの残量には注意してということ。足りない場合維持できなく

なつてこのスマホに戻されるわ。やられた場合も。」

この板状のものはスマホというらしい。それはともかくとしてだんだん落ち着いてくるとピクシーの小ささに不安を感じてきた。あの大きさで対抗できるのだろうか一方的にやられるのではないだろうか。

「悪魔には魔界魔法を使うものもいるわピクシーもそのうちの一つかね。」

「魔界魔法？ 魔術じゃないのか？」

魔法とはその文明ではなしえないことをなしえるもので6つしかないはずだ  
「これもこの世界にはなかつたものよ。それは置いといてピクシーは電撃を放つジオと傷をいやすデイアがつかえるわ。見たところ怪我しているみたいだし癒してもらうことを推奨するわ。」

半信半疑ながらいわれたとおりにピクシーを召還し、デイアをお願いすると、了解され魔法が使用された。すると怪我していたところが熱くなり、怪我がみるみると治つていった。おおつ、と感嘆していると

「これで信じてもらえた？ では行くわよ。」

「行くつてどちらに？」

「決まってるでしよう異界化を起こしているガキを倒すのよ。」

あれを倒すといわれてまた不安に駆られたが、ピクシーを見て、いけるかもしれない

と少し力が入った。

「何か身を守るものがあつたほうがいいわね、マスター何かない？」

「そういわれてあたりを見回したが丈夫そうな椅子くらいしかない

「ないよりはましねそれを持つていきましょう。」

椅子を持ち上げてガキを探しながら移動していくと、最初と同じ場所にガキはいた。「いいか、合図したら前に出てジオをありつたけ食らわせるんだ。」

「わかったー。」

能天気なかわいらしい声の返事が返つてくると、深呼吸をして気持ちを落ち着かせタ

イミングをはかる。そして、1, 2の：

「3だ！」

「ジオ！」

その瞬間、まばゆい光とともに雷撃が走り同時に敵を打ち据えた。次々と放たれてい  
く雷撃と雷鳴に気分が高揚していく。雷光や衝撃でほこりなどが舞いよく見えないが  
無事ではいられないでろうと思えるほどのものであつた。

「や、やつたか!?」

しかし雷撃がやんだ瞬間、骨と皮ばかりに見える手がぬうつと伸び・・・

「え？・・・あ・・・」

前のほうにいたピクシーの体が引き裂かれ何か生暖かいものが僕に降りかかってきた。それは血だった。ガキは所々が黒焦げになり消して少なくないダメージを受けてなお生きて反撃してきたのだ。そしてこちらをなおも憎しみで満ちた目でにらんでいる。

「ひつ」

死への恐怖がまた戻ってくる。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。殺される。あの爪に引き裂かれて。そう思うと恐怖で動けなくなつた。

「しつかりなさい！あいつを今倒さなければあなたが殺されるだけよ！動きなさい！」

はつとなり、もう何が何だかわからぬまま手に持っているものを振り上げガキを思いつきり殴りつけた。するとガキは吹き飛ばされ、踏ん張れずとおつと倒れた。ジオでかなりダメージを受けていたのだろう。そして僕は何度もガキに向かつて椅子を振り下ろした。

何度も、何度も、何度も、何度も。

手に伝わってくる感触が気持ち悪かつた。だけど振り下ろした。

顔についた何かの感触が気持ち悪かつた。だけど振り下ろした。

もはやガキは動かなくなつていた。

だけど振り下ろした。

そしてもう持ち上げれなくなつて地面に手をついて気持ちが悪くなつて吐いた。

「ガキの消滅を確認。異界が消えていくわマスター。」  
僕は返事もできずに気を失った。

次に目が覚めた時にはベッドに横たわっていた。体を起こしてあたりを見ると、机の上にスマホが置いてあり、あれが夢ではなかつたことを実感させた。

そしてドアが開き、父さんが入ってきた。

「大丈夫か慎二？なぜあんなところに倒れていたんだ？」

尋ねられた僕は気を失う前のことをありのままに話した。しかし、

「そんなことがあるわけないだろう。まだ寝ぼけているんじやないか？」

と、言われ証拠としてスマホを起動しようとしたが起動しない。それでも必死に説明したが

「熱もあるんじやないか？もう休んでなさい。」

と言つて父さんは出ていく。そして出て行つたあとスマホは起動した。そして開口一番バロウズは

「あまり私のことはしやべらないほうがいいわ。悪魔のことも。」

なぜだ、神秘の秘匿か？と聞くと、この世界とは違う物理法則の世界から来たらしく、この世界の悪魔とそちらの世界の悪魔は名称が一緒のものでも出現の仕方が違うらしい。神秘の減衰などがなく、この出現の仕方が知られれば知られるほどこの方法による悪魔が出現がしやすくなるのだという。僕に知られている、この方法で召喚ができるしまつている時点でもはや出現は止められないができるだけ知らないに越したことはないという。

「じゃあ発生したときはどうするんだよ？」

「あなたが戦うのよ。」

「冗談じゃない！もうあんな目に合うのはごめんだ！僕はやらないぞ！」

「いいえそれは無理だわ。あなたはこの世界で初めてこの方式に触れた人間。そして一度悪魔にかかわったものは必然的に悪魔に目を付けられる。あなたが望む望まないにかかわらず悪魔はあなたを襲いに来るわ。」

嘘だと思ったかった。全部夢で寝て起きたら全部なかつたことになつてほしかつた。だがあの肉と骨をたたきつける生々しい感触、あれが現実だと教えていた。

「それがあの方式の悪魔が展開する異界はこの世界ではこちらから乗り込む方法がまだないの。あなたしか戦えるひとはいないわ。このスマホに認証されたあなたしか。酷

なことを言つている自覚はあるわ。だけど戦わなければあなたが死ぬだけよ。」

「戦わなければ…死ぬ…」

それは日本で平和に生きていた13歳にはあまりにも遠いことに思えた。

「今日は疲れているみたいでしょし受け止めるには時間が必要だしこれくらいにしましょう。good night マスター。」

そういうつてスマホの電源が落ちた。そして僕も今日起こつた出来事とかいろいろ考えながら眠りに落ちた。

そして僕がそれを受け入れる日はそう遠くなかった。そして僕はこの日常を歩んでいくことになる…

# UA1000越え記念

「最新のニュースをお伝えします、冬木市で発生している、連續して小学生から高校生ほどの未成年の児童が連續して失踪する事件において、昨日、9人目の行方不明者が出来ました。名前は…」

テレビで流れているニュースを適当に聞き流しつつ朝食を食べていく。最近は料理することにも慣れてきた。今までの価値観が崩れたことや、プライドが崩れたあの出来事があつてから僕はあの家にいることつらくなり、家を出てマンションを借りて生活している。そのほうが都合がよかつたこともあつたから。

おじいさまは表の身分のこともあつてだろうマンションの家賃や学費、生活費を仕送りしてくれている。建前上は一人で生活することによつて社会勉強しようとする立派な学生という孫のことを応援して。

初めは慣れないことの連續で失敗することもあつたが今は慣れてきて、料理などの趣味に時間を割く余裕も出てきている。飯はうまいほうがいい。

「マスター、今発生している異界の解析は進んでいるわ。もう少しで異界開きができるわよ。」

「ホ？ そろそろ出番……ホ？ 思う存分解体するね……ホ。」

「物騒ですねー、あ、サマナー醤油とつて。」

今さつきしゃべったのはバロウズとサマナー（悪魔を召喚し、悪魔を倒す者たちをそういうらしい）として活動するうちに、異界で仲魔にしたり、アプリの悪魔合体ブログラムで新たに仲魔になつたやつらだ。

上から順に

L V 1 0 外道ジヤック・ザ・リッパー

悪魔合体で仲魔になつた。かなり物騒ではあるが頼もしい。かなり露出の多い幼女のすぐたをしている。なんでだ。物理型。

L V 1 3 妖精ジャックフロスト L V 1 5 妖精ジャック・ランタン

妖精が多発して現実の人間が方向音痴になる異界で出会つた悪魔たち。甘いものがすきで、いっぱい食べれるからという理由と、ついていくと面白そうという理由で仲魔になつた。どちらも攻撃魔法型。

L V 9 妖獣クダギツネ 異界で行き倒れていたところを拾つた。本人はタマモと呼べと言つている。格が落ちに落ちた状態で召喚されたらしい。きつね耳つけた小人にしか見えない。支援タイプ。そろそろレベルが上がり、ハイレベルアップして格があ

る程度取り戻せそうだという。

「まあなんにせよ学校が終わつてからだ。食べたらさつさと片付けるよ、そろそろ行かないと学校に遅れる。」

こんな感じで朝を過ごし、昼は学校に行つて、買い物などを済ませた後、異界が発生していれば異界の探索という生活を送つてゐる。

授業が終わり、学校から帰る途中、食材を買つて帰ることにし、商店街を歩いていく。青果店をのぞき込むと、リンゴが安い。あいつらのためにも買つていこうかと思つていると、突如として目の前でリンゴがいくつか消えた。今発生している異界は商店街もエリアに含んでいたな、と思い、これは悪魔の仕業か、とあたりをつける。誰も気づかなかつた様子だ。

僕はそのままリンゴを買つて帰つた。

帰宅後、いろいろと持つていくものを準備して、家を出る。クダギツネは幻術が使えるらしく、これを使って、武器を隠しながら移動していく。武器は目立つからね。

異界の展開している中心に到着すると、スマホを操作し、異界を開けるアプリを起動する。

今発生している異界は異界開きをして侵入しようとすると侵入経路に迷路ができる、迷ったまま出られなくなる可能性があったので、しばらく解析を進めていた。それが完了したのでいよいよ解決に乗り出したというわけだ。

「異界に侵入するわよ、準備はいい？」

ああ、と返事をすると、アプリが起動。目の前の空間が徐々に歪んでいき、侵入経路ができた。迷わず足を踏み入れると、足場がないようにも思える不思議な空間に出た。そこをまっすぐ進んでいくと、出口のようなものが見え、そこをくぐると、異界に出た。そこは建物の中で、ギリシャ風の建築様式だった。装飾などはなく、ただ廊下がずっと続いている。周囲をマッピングするアプリを使い、あたりを調べると、どうやらここは迷宮となっているようだ。

「やつかいだな・・・だけどこの異界の主の正体は絞り込みやすい。」

「そうね、おそらくこここの迷宮の主はミノタウロスよ。」

ミノタウロス。ギリシャ神話においてミノス王の妻パーシパエーがポセイドンの送つた白い牡牛と混じつて生まれた怪物。

ミーノータウロスは成長するにしたがい乱暴になり、ミーノース王に迷<sup>ラビュリントス</sup>宮に閉じ込められ、生贊の少年少女を食らい、最後には英雄テセウスに倒された。

伝承のことを考えるとニュースで一定いた行方不明者が年若いものばかりだったのもうなづける。

僕たちはエネミーソナーを起動し、慎重に移動していく。エネミーソナーの反応をたどつていけば、いつか遭遇するはずだ。

移動していると早速反応が現れる。指示示す場所へ向かっていくとそこにはミノタウロスではなく、骨でできた兵士が大量にいた。

「エネミー解析…、あれはスバルトイよ！」

スバルトイたちはこちらに気づいて、こちらに向かってくる。

「リッパーは僕と前に出て足止め！無理に攻撃しなくていい！タマモは僕とリッパーにラクカジャとスクカジャ！それと回復！足止めしたすきにフロストとランタンは魔法を打ちまくれ！」

「了解しました…スクカジャ！ラクカジャ！」

「うん、わかった…ホ」

「了解だホー!!」

指示を出すと迅速に行動していく。スバルトイは物理攻撃型。タマモたちは打たれ弱く、相手の数が多すぎるので、魔法で一気に削っていく戦法を取った。

それでもさすがに数が多く、何度も攻撃をもらってしまった。何とかすべて倒したことを確認すると力を抜いた。

ふう、一息つくと、ソナーに反応があることに気が付いた。大分近くにいる様子でたりを見回すと影からこちらを見ているものが多い。こちらに見つかることに気が付くとどこかへ走り去ってしまったので、少々迷った末、追いかけることにした。

逃げていく反応を追いかけていくと、行き止まりに行き着いた。そこにいたのは、くすんだ灰色の髪を後ろで結んでポニーテールにした3人の同じ顔をした少女がいた。

そして、3人とも目と口に特徴的なペイントのようなものがしてあつた。

そして僕たちの姿を確認した少女たちは順番にしゃべりだした。

「まあ、こんなところにまで追ってくるなんて！おしまいだわ、私たちさつきの骸骨みたいにあつさりと殺されちゃうのよ！」

「まあ、あの時みたいにいじめられるのね！きっと人間なんてみんなそうだわ！」

「まあ、そんなの嫌よ!! どうしましよう!」

ぴいぴいと同じ声で同じ感じのトーンでしゃべっている。

「なんというかいやに悲観的ですねえ彼女ら。」

とタマモ。

とりあえず傷つける意思がないことを説明して交渉を開始しようか。  
知りたいこともあるし。

「なあ、」

「ぴい！」

全員驚いて後ずさつたのに声を出したのは一人だけだ。というより出したくても出せない感じがした。

「そんなにおびえなくともあんたらを害するつもりはない。僕は聞きたいことがあるだけだ」

「嘘よ！ 用済みになつたら始末するつもりでしよう!?」

まいつたな…聞く耳なしか…と、その時3人娘の周囲に何か落ちていることに気が付いた。あれは…リンゴの芯？しかも大量にある。じゃあこいつらが店から果物を盗んでいた犯人か。

そこで、あるアイデイアが浮かんできた。僕は買っていたリンゴを取り出すと、3人娘たちはリンゴにくぎ付けになつた。

「なあ、本当に傷つけるつもりはないんだ、聞きたいことがあるだけなんだよ。これやるから教えてくれないか?」

「うわあ、絵面とかセリフが完全に怪しい人のそれですねサマナー。」  
うるさいぞ。駄狐。

それはともかくとして少女たちはハツとなつて首を振ると、

「駄目よ! 人間は信用できないわ!」

とリングから目を離さないまま言つた。

仕方ない、とりあえず少女たちにリンゴを3つほど投げ渡してやつた。  
手に持つたりングにくぎ付けになつている少女たちに、

「まずはそれをお近づきの証にさしあげよう。僕からのプレゼントさ。質問に答えてくれたらもつと差し上げるよ。」

そういうと、3人の少女はかわるがわるしゃべりながら相談し始めた。

どうやら少しはいい人なんじゃないかという結論になつたようだ。ちよろいぞこいつら。

「い、いいわ。相談に乗つてあげる。それで何が聞きたいのかしら?」

「ミノタウロスの居場所を知りたいんだ。何か知つていなか?」

そう、聞きたいこととはそのことであった。ソナーを頼りにやみくもに探してもいいが、広さがどれだけあるのかわからず、出会えなければ必然的に戦いがおき消耗していくため、内部に詳しい悪魔に案内してもらおうと思つたのだ。

スバルトイは数が多く、悠長に交渉している暇がなく、好戦的だつたためあきらめたが、戦いを見て逃げ出したこいつらならいけるだろうと踏んで追いかけて正解だつた。「ミノタウロス? ああ、この異界の主ね? 知つてゐるわ。あれは特定のルートを回つているからそこに行けば会えるはずよ。場所は?」

「なるほど。」

そのことを聞いた僕はお礼として約束通りリンゴをまた3つほど渡した。  
すると誰かにくいくいと袖を引っ張られた。見るとジャックたちだつた。  
こちらを見上げ、

「ねえねえ、僕たちの分は?」

とたずねてきた。そういうえば少し小腹がすいてきたし、ここで休憩がてら少しおやつにしようか。僕はバッグからいろいろなおやつを取り出した。

ふと、視線を感じて顔をあげると、3人娘たちがこちらをみていた。何かとたずねる

「ね、ねえそれはなに?」

「おやつをみていたようだ。試しにあげてみると、順番に口に入れていく。そして  
「おいしいわ!」「おいしいわ!」「おいしいわ!」  
と順番に感想を言つていく。

「ねえ、それもつとない?」

「残念!僕の分はそれで全部です!他の仲魔たちもすでに食べ終わっている。  
すると3人娘たちは何やら相談すると、こう尋ねてきた

「ねえあなたについていけばもつと食べられるの?」

「ああ、まあ、そうだな。」

「なら私たちを仲魔にしない?」

「そういわれて少し考える。召喚プログラムには枠はまだある。数の増加は単純な戦  
力の増加にもつながる。仲魔になつてくれる悪魔はそこまで多くなかつたことも含め、  
結論を出した。

「ああ、いいぜ。」

「契約成立ね、私はパムブレードー。」

「私はエニユーオー。」

「私はデイノー。」

「3人!」「合わせて!」「グライアイよ!コンゴトモヨロシク!」

「契約完了。グライアイ3姉妹を登録したわ。能力は：主に強化や弱体化、状態異常の魔法を使うようね。」

こうしてグライアイを仲魔にした僕たちは、休憩して回復した後、グライアイの案内の元、途中悪魔を蹴散らしながら、ミノタウロスの元へ向かう。そして、

「エネミーソナーに強い反応!くるわよ!」

バロウズの警告を聞き、身構える。すると廊下の曲がり角から、牛の面をかぶった、角の生えた大男が斧をもつて出てきた。あれがミノタウロスか!

「うううううう・・・うおおおおああああ!!!」

ミノタウロスは最初に悲しそうな声を上げた後、凶器に染まつた叫び声をあげ、勢いよく突っ込んできた!

「全員!避けろ!」

とつさに指示して、避けると、ミノタウロスは勢いよく壁に突っ込んだ。すると、壁がいとも簡単に崩れ、その向こう側が見えた。

「なんて馬鹿力だよ・・・あれはまともに受けたらやばいぞ。みんな!避けるのを優先しつつ攻撃しろ!」

指示を出して、攻撃を加えていく、大振りなため、避けやすく隙が多い。しかし、向

こうの攻撃は馬鹿力に任せており、斧をふるうスピードはとても速いため、なかなか踏み込んだ攻撃ができない。耐久力も高く、

「ヒホヽ、あっちを倒すより先にこつちの魔力が切れそうだホ！」  
と完全にジリ貧の状態だ。

「つと、うわつ！？」

攻撃を加えた後避けたが、バランスを崩してしまった。まずい！と、ミノタウロスのほうを見ると、すでに斧を振りかぶっていた。

やられる！と思つた瞬間、デイナーの眼の色が変わり、ミノタウロスを見つめた。すると、ミノタウロスの動きが止まつた。ぴくぴくとしているが動けないみたいだ！

チャンスだと思い、体内のありつたけのマグネットイトをフロストにまわす。

「きたきたー！くらえ！ ブフダイソー！」

とてつもなく冷氣がミノタウロスに直撃した！かなりのダメージを受けつつも、まだ倒してないことを確認すると僕はミノタウロスにとびかかり、持つていたものを思いつきりたたきつけた！

ミノタウロスは吹つ飛んで壁にたたきつけられ、面が取れた。そしてなおも動こうとするが、そこへジャック・リツパーがミノタウロスに近づき、その胸に持つていたナイフを突き立てた。

ミノタウロスの狂気に染まつた目が理性の光を取り戻し

「うううあ・・・ありがとう・・・」

と言つてミノタウロスは消滅した。

「ミノタウロス消滅確認。やつたわねマスター。」

バロウズにそう告げられ、ようやく力を抜いた。ふとミノタウロスが開けた壁の向こうを見てみると、何やらバッグのようなものが落ちている。これは・・・

周りを見渡すといろいろと落ちていた。行方不明者たちの遺留品だろう。血で染まっているのもあつた。

「それをどうするつもり? マスター。」

「持つて帰つて・・・人が見つけやすいところに適当にこつそりとおこうと思う。死を示すものがあればその死を受け入れやすい。早めにあきらめさせたほうがその親族にとつてもいいと思つた。決定的な証拠を突き付けられなければいつまでもあきらめられずいないものをずつと追つてしまふやつだつているだろう。それに……いや、なんでもない。」

「そう、なら何も言わないわ、マスター。」

そうして遺留品を集めていくと、異界が消滅しだした。

「そろそろ限界ね、戻るわよ、マスター!」

急いで遺留品をしまい、異界にはいつたときにでた場所へ戻り、アプリを起動する。すると、来た時と同じ道が開いて、そこへ進み来た道を戻つてゆく。道を通り抜けると、そこは異界を開いた場所だつた。今回も戻つてこられたことに安堵する。

やれやれ、今回も疲れたな。いろいろやらなければならぬことは多いが、とりあえず今日はもう帰つて休もう。

「次のニュースです。最近冬木市で起きている連続失踪事件ですが、被害者の血の付いた遺留品が見つかつたことで、警察は……」

今日も変わらずテレビで流れているニュースを適当に聞き流しながら、朝食を食べていく。今日もうまい。

「ん~、ちょっと味噌汁塩分濃いですねー。」

「お魚、解体するよ！ · · · ヒホ」

「サマナー、これ、たべていいかしら？」

「サマナー、これは？」

「サマナー、こつちは？」

「ちょっと騒がしいのが増えたが大体平常運転だ。朝食を食べ終えると、食器を片付け、

かばんをもつて登校する。

さて、今日も一日頑張りますか！

# 慎二のメガテンメモリアル～タマモ、出会いのとき～

初めて悪魔とかかわつてから2か月ほどが経つた。

あれから2回ほど悪魔は出現し、巻き込まれ、何とか倒して戦いにも少しは慣れていたが、ここ3週間ほどは出現せず、平和を謳歌していくころだつた。

「マスター、異界が発生を検知したわ。」

と、唐突に言われた。しかし、

「異界が発生した？ だけどどこにだよ。」

僕が悪魔のことにはじいたい異界に引き込まれていたので、今回みたいに引き込まれずに異界の発生を感じしたのは初めてだつたのだ。

「場所は……こね、紅州宴歳館 泰山。」

紅州宴歳館 泰山。知る人ぞ知る何も知らずに食うとトラウマになるレベルの麻婆を

出すといわれる中華料理店だ。ハマるやつはとことんハマるというが……。

それにも随分と狭い範囲だな。

「ええ。でも影響を及ぼす範囲が狭いだけで異界が狭いと決まつたわけじゃないわ。

今までが現実を元に異界になつたところが多かつたからそう思うかもしれないけど。」

なるほど、そういうものなのか。

しかし、異界が発生したのはわかつたがどうやつて異界に行くんだ？近くに行つて引き込まれるのを待つか？

「いいえ、あれから少しづついろいろなプログラムをダウンロードしたの。

その中に異界と現実をつなぐゲートを作り出すアプリもあるわ。

今回はそれを使って侵入するわよ。」

ダ、ダウンロード？アプリ？

「ダウンロードというのはプログラムやデータを、ネットワーク上のサーバーから、

手元のコンピュータに転送すること。要するにすでにできるものをどこかから持つてくるのよ。

アプリはアプリケーションの略。命令を受けて働くプログラム…

そうね、あなたにとつてわかりやすくいうと、魔術みたいなものよ。」

なるほど、なんとなくわかつた。しかしそれだといつたいどこから持つてきたのか。疑問に思つたがそもそもこいつ自体かなり謎が多いし、今更かと思ひ尋ねなかつた。

「今はこの程度のアプリしか使えないけど、異界には侵入できるわ。

「それじゃ、準備したらいきましょう。」  
「それはありがたい。何日もかけるつもりはないが、時間がかかる可能性もあるからな。」

「それじゃ、準備したらいきましょう。」

「ああ、了解だ。」

「僕は、適当に武器になりそうなものを見繕つて、できるだけ怪しまれないようにして出かけた。」

「ここ」が異界の発生している紅州宴歳館 泰山だな。それで、どうやつてアプリを起動するんだ？」

「ちよつと待つて。そうね、できるだけ人目に付きにくい場所・・・裏口らへんに移動してから開きましょう。」

いわれて、裏口に移動しようとすると、店内がちらつと見えた。  
……きつね耳だつた。

いや待てあれなんだ。なんできつね耳しているんだあの店員。そういう店なのか？

「あれは異界の影響ね。常識改変、パラダイムシフトを起こしているの。

異界の影響は本人たちは感じ取れないし、疑問に思わないわ。

それが常識：疑問を持つようなことだつて思わないから。あれはまだ影響が低いほうね。」

まじか。あれ影響低いのか。社会的には大分影響起こすだろあれ。

「ま、そこらへんはごまかしやすい、影響がなくなつても都合がいいように解釈できる分影響が低いつてことね。あまりに強いと影響のある所だけ世紀末なんてこともあるみたいだし。」

そ、そんなものなのか。戦慄しながらも移動して、

ここらへんでいいかと、バロウズが言うと、アプリを起動した。

そして、何やら目の前がゆがみ、輪のようなものができた。これがゲートか…。

「ええ。それじゃいりましょ。」

恐る恐る足を踏み入れると、しつかりと足は地面を踏みしめているように感じた。

頭も入れると、景色が見えた。そこは足が地面についてる感覚はあるのに、

地面がないような不思議な空間だつた。遠くにもう一つ話のようなものが見える。

あれが異界の入り口か。

僕は二歩目を踏み出し、ちゃんと歩けることを確認すると、ゲートに向かつて歩き、

ゲートをくぐつた。

そこは、どこかオリエンタルな、中華風の建築様式の場所だった。今まで現実の風景がちょっと変わったまま異界になつてているところがすべてだつたから、ちょっと感動した。

「こんな感じの異界は異界の主による影響を受けるわ。ここは中国系の悪魔が異界の主みたいね。」

そうなのか。説明を聞きながら僕は武器として持つてきた金属バットを取り出し、契約しているピクシーとドヴエルガーを召喚した。

「サマナー、出番?」

「おお、出番か。」

「ああ。今回も働いてもらうぞ。」

「あ、それとマスター。スマホを見てくれる?」

「ここに、エネミーソナーつてあるでしよう。これを使えば敵の接近がわかるわ。それとヒロえもん。これで敵を倒したときに、アイテムを取得できるわ。」

なんだそれ。どうやつたらそうなるんだ?

「そうね、悪魔は情報にマグネット型を吹き込まれて活動するのよ。いうなれば概念の塊ね。ヒロえもんは敵を倒したときに、

霧散した概念の一部をマグネットイトとともに結晶化するの。

そしてできた結晶がアイテムよ。

強力な異界ではヒロえもんがなくともまれに結晶化するけど。

ふくん、で、それは役に立つのか？

「ええ、それはもちろん。使いきりだけど魔法の概念が込められた石などもあるわ。」

なるほど、積極的に拾つてみるか。

と、その時、エネミーソナーに反応があつた。

「さつそくおでましね。迎え撃つわよ、マスター！」

出てきた悪魔は、鳥のくちばし、赤い眼、羽毛が生えている人型の悪魔が3体。

「悪魔データを解析……あれはウミンよ！」

ウミンたちはこちらに気が付くと、低空飛行しながら襲い掛かつてきた。

「ピクシーは後ろからジオ！、ドウエルガーは僕と一緒にピクシーを守りつつ攻撃！」

指示を出して動き始める。まずは突っ込んできたウミンに合わせてバットを思い切り振り下ろす。バットはウミンの羽が生えているあたりにあたり、ウミンは地面にたたきつけられた。続いて突っ込んできたやつはドヴエルガーに邪魔されて上に離脱。

最後の一匹はピクシーのジオが当たり、黒焦げになつて消滅した。

どうやら電撃が弱点みたいだ。

僕はまず地面にたたきつけたウミンの頭めがけてバットを思い切り振り下ろしとどめを刺す。

そしてピクシーに上に離脱したやつに向かいジオを放てと命令し、ジオが当たつた最後のウミンも黒焦げになり消滅。

戦闘後、ウミンが消滅したところに、何かが落ちているのを発見した。なんだろうか、石に見えるが。

「それは魔石ね。不活性化マグネットイトの塊で使えば傷をいやせるわ。」

ふむ、回復アイテムか。なかなか便利そうだな。

僕はそれを拾うとまた探索を始めた。

人面で体は赤い牛で馬の脚をもつアツユ、火をまとう、赤いネズミのカソ、どうみてもかまいたちにしか見えないキュウキなど、

様々な悪魔が出てきたがこれらも倒していく。アイテムは、

アツユからは魔石。

カソからはアギストーンやマハラギストーンと呼ばれるルビーみたいな石。

キュウキからはザンストーンやマハザンストーン。これはまるでエメラルドみたいだ。

ある程度悪魔たちを蹴散らしつつ進んでいくと、途中宝箱のようなものがあつた。

……なんでこんなものがあるんだろうか。

「たまに異界にはこういった宝箱が落ちていることがあるわ。

これも概念の結晶ね。まあ、罠が仕掛けられている場合もあるけど。」  
まじか。なんなんだ異界すげーな。

とりあえず、恐る恐る開けてみると、そこには真珠のようなものがあつた。  
「それは宝玉よ。高純度の不活性マグネタイトでできた結晶で使えば  
致命傷ですら治せるわね。結構貴重よ？」

そんなにいいものなのか。見ると宝玉のほかにもいくつか宝石があつた。  
ルビーやサファイア、エメラルド。アギストーンなどかとも思つたが、  
「いいえ、それは正真正銘ただの宝石ね。持つて行つてもいいんじゃない？」  
むしろなんでそんなもの・・・と思つてやめた。考えるだけ無駄そうだ。

中身を取つてまた進み始めると、今度は宝物庫のような部屋があつた。  
宝箱がいっぱい置いてある。

……うん、ぶつちやけかなり怪しい。

「罠の類はないみたいだけど……。まあ、あやしいわね。」

だよね！これはスルーしていくこう。宝物庫を通つてほかの部屋にも行けるみたいなので、宝箱をスルーしてほかの道を調べる。悪魔を倒しつつ調べたが、何もなく、

あとは1つの道だけだ。僕たちは最後の道を進んでいった。

するとそこにはなんかきつね耳の小人がいた。しかもうつぶせで倒れていた。  
あれが今回の異界を作った悪魔だろうか？

「いいえ、大分弱っているしこの悪魔じゃないと思うわよ？」

そ、そうか。とりあえず動かないし、ほつといても害はないだろうと思い、  
そこから離れようとすると、

ぐぎゅるうぐぐぐぐ

と大きい音がした。音の発生源は倒れている悪魔からだ。

こいつもしかして……

「行き倒れみたいね。」

行き倒れって：悪魔が行き倒れるのかよ。

「何かがあつて、マグネットイトを補給できなかつたみたいね。

どうするマスター？ 助けてあげる？」

いや助けるつて…ほつといても問題はないだろう？

「あら、何か情報を聞き出せるかもしれないわよ？  
助けても損はしないんじやなくて？」

いや元気になつたら襲い掛かってくるとか……

いやまあ、行き倒れてる奴なんかたいしたことないか。

そうと決まれば、悪魔に近づいてゆく。

「おい、大丈夫か？これでも食うか？」

何をあげればよいのかわからないので、マグネタイトの塊だという魔石を差し出してみる。

「た、食べれるわけないでしよう・・・そんなまずそうなもの。

私はグルメなんです。最高級の油揚げを希望します。」

おいこいつよわつているわりにずうずうしいぞ。

つーか油揚げなんて持つてねえよ。

「いつたんもどつて買つてくる？」

まあ、一度助けると決めたしそれくらいの面倒はいいか。

来た道を戻り、ゲートを通つて現実に戻つていく。

油揚げを買うために豆腐店に向かう途中、泰山の中を見ると、

なんかきつね耳をはやしたマーぼー豆腐を一心不乱に食べている神父が見えた。

なんか見たくないものを見てしまつた……。

げんなりしつつ、油揚げを購入して気が付いた。

あれ？油揚げをるのはいいがどうやってマグネタイトを供給するんだ？

「そうね、料理に宝玉をまぶしたらどうかしら?」

「まぶすつて……しかも宝玉かよ貴重じやなかつたのか?」

「魔石だと純度が低いし足りないかもしれないわ。」

「そうか、じゃあまずは家に戻つて適当に料理するか。  
そう決めた後は、家に戻り、バロウズが表示したレシピのものを10分ほどで作り、  
持つていく。」

「おい、持つてきたぞ。」

油揚げを味付けして、酢飯じやない普通のご飯にかぶせた稻荷を取り出し、皿の上に  
おいて、宝玉を碎いてまぶし、悪魔の近くに近づけると、

「くんくん、これは! おいなり!」

いきなりがばつと身を起こし皿をひつたくると一心不乱に食べだした。

あくまでも上品な感じに。

「おいしい、おいしいです! ちょっとざつかなーと思わないところでもないですけど  
文句は言いません、空腹は最高のスペースです!」

「こいつ…

もりもりと食べていく悪魔を見ていると、食べ終わつたのかこちらに向き直り、「ありがとうございます。感謝いたします。」

「ああ、もつと感謝してもいいんだぞ？」

「最初見捨てようとしたくせに…（ボソツ）」

「ん？なんかいつたか？」

「いえいえ、それで、何か御用がありまして？」

「ああ、ここのことでの何か知らないか？」

「うーん、そうですねえ、この鍵が何か関係あるかもしません。」

そういうと、鍵を取り出した。これは…？

そういうえばここに来る前に鍵の付いた扉があつたな。あそこは開かなくて探索をあきらめていた。

「では、助けてくれたお礼に、これを差し上げましょ。」

そういうと鍵を差し出してきた。

鍵を受け取つて扉まで向かおうと歩き出すると、

「あ、ちょっとお待ちくださいまし。ところでこいつですの？」

「こいつ、何で知らないんだ？」

「……」は異界よ。現実とは異なるこの世界とは異なる世界の物理法則によつてできた異次元の空間。現実と世界の裏側のはざまのようなものよ。」

「へえ、ええええええええええええええ!?なぜそんなものができてるんですか!?あなたたちはなぜこんなところに!?」

僕はこれまでの経緯を途中バロウズの解説を挟みつつ話した。

「え？え？それが本当なら今絶賛世界の危機じやないですか？!  
というかなんで世界滅んでないんですか？!ありえなくないですか！?  
あり得てるんだから今この状況になつてているんだろう。

「む、むむむ・・・まさかそんなどになつていたとは…」

これはほつといたらちよつとまずいですねえ…うムムム…」

目の前の悪魔は何やら考え込むと、何か決断したのか、よし！、  
「決めました！私もあなたたちについていくことにします！」

どうしてそうなつた？まあ、戦力が多いにこしたことはないが。  
なんか交渉する暇もなく襲つてくる奴が多いんだよなあ。

そのせいであまり仲魔が増えない。

目の前の悪魔の提案はそれなりにありがたいものではあつた。  
よし、では契約だ。

「決まりですね、わたくしはタマモ。コンゴトモヨロシク……」

「契約完了。L V 7 妖獸クダギツネ。おもに補助魔法と回復魔法が得意みたい。」

あれ？ クダギツネなのにタマモ？

「い、いまはなぜか格が落ちて落ちてているだけで本当はあの、玉藻の前だつたんです！」  
ほんとかあ？ どうも信じられないぞ。

「む、むむむ・・・ど、どうにか格を取り戻せたら証明できるのに…。」

「悪魔の中にはレベルアップをしていくとハイレベルアップといつて違う悪魔に  
進化できることもあるわ。それを繰り返せば証明できるんじやないかしら？」

「ミコーン！ それ！ そうです！ こうなつたらレベルを上げまくりますよー！」

なにがなんだかわからないがとりあえず契約を完了した。

探索に戻ろう。

扉の前まで戻つてくると、鍵をカギ穴に差し込んでみた。  
すると、ガチャつと音がして、扉が開いた。

やつぱりこの鍵でよかつたらしい。

中に入ると、何やらなんか弱弱しい狐がいた。

「コ、コーン。お前なんで宝箱の中身取らないんだコーン。

欲望の力がとれないから、力が出ないコーン。」

弱弱しい感じの声で目の前の悪魔が言う。

いやあ、だつて、あんなにどうぞ取つてくださいと言わんばかりのものなんて場所が場所なだけに怪しすぎるでしょう？

「コ、コーン。も、盲点だつたコーン。」

こいつかなりボンコツだぞ、おい。

「解析終了。あれの名前はチエフエイね。漢字で書くと桀妃。

夏の桀王の妃である<sup>ぱつき</sup>嬉<sup>うれ</sup>という女性のことを指す言葉よ。

美女である末喜に溺れた桀王は彼女に言われるままに放蕩を尽くして国を傾け、最終的に殷に攻め滅ぼされてしまつたといわれているわ。

この桀妃のエピソードは、後世の傾国である妲己、褒姒と関連付けられていて、妲己、褒姒は白面金毛九尾の狐が化けたともいわれているわね。

？嬉も白面金毛九尾の狐が化けたものだつたんじやないかしら？。」

なるほど。つまり目の前の前のチエフエイは白面金毛九尾の狐の別側面と、あれ？白面金毛九尾の狐つて今隣にいるやつ…

「別悪魔です。」

え？ いやだつて、

「別悪魔です！こんな簡単なことにも気が付かない

ポンコツと一緒にしないでもらえますか！

そもそも姫己ともいつしょにしないでください！」

お、おう。そ、そういうのなら。

「コ、コーンやるしかないコーン。」

そういっておそいかかつてくるチエフェイ。

だが、悲しいかな。物理攻撃しかできないうえそれも弱いとあつてはどうしようもなく、1分もしないうちに、

「コ、コーン・・・やつぱり・・・ダメだコーン。」

どうしよう。なんか罪悪感がわいてきたぞ。

害をなすものだつてわかっているのに。

「き、きにするな、コーン。もともと僕は退治される存在だ、コーン。  
しかたない、コーン。」

そ、そ、うか。：なんで悪魔に慰められているのだろうか？

あ、消滅した。

「チエフェイの消滅を確認。やつたわね、マスター。」

バロウズの声を聞いて、とりあえず武器をおろす。

みると、チエフエイがいたところに何か落ちている。  
拾つてみると、それは：

「お香？」

「あら、それは…知恵の香ね。焚いた煙を吸うと知能が上がるわよ。」

ふーん。なんか副作用とかありそうで怖いな。

聞いたところ特に副作用はないらしい。今度使つてみようか。

香をしまうと、

「異界が崩壊するわ。このタイプの異界は崩壊に巻き込まれると

どこか異次元をさまようことになるわよ。完全に崩壊しないうちに戻つて。」

そりやまずい。とつととこんなところからはおさらばするか。

来た道を戻り再度ゲートを通つて現実に戻る。完全に異界が崩壊すると、  
ゲートはなくなつた。

帰る途中、泰山の中を見てみると、店員の頭からきつね耳はなくなつていた。  
どうやら戻つたようだ。

やれやれ、今回はなんか肉体的にも精神的にも疲れたな。さつさと帰つて休むか。  
そう思つた僕は家へと帰る道を歩いた。

# セタンタとの出会い 前編

「異界の発生を感じしたわ。マスター」

バロウズはそう宣言し他のを聞き、少しこわばる。

「それで、場所はどこなんだ?」

場所を訪ねるとバロウズは、ここよ。と、場所を示すマップを表示した。

それによると、場所は郊外にある、森を指し示していた。

うげえ、かなり遠いところにあるぞ。自転車を用意していくか。

そう思い、準備を進めていく。最近は武器をいいものに変え始めた。

模造刀とナイフ、それと改造エアガン。異界で手に入れたもので問題ないものを  
こつそりと換金した金で手に入れた。

改造エアガンは、バロウズいわく、

「武器そのものの攻撃力も威力につながるけど、だれが撃つかでも変わるのはよ。  
レベルが上がるほどそれは強くなるわ。改造エアガンでもそれなりに  
ダメージは与えられるわよ。」

のこと。というワケなので、バロウズが検索して手に入れた情報をもとに、

買つてきたエアガンに改造を施した。

弾と換えるバッテリーや用意し、これまた取り寄せた防刃服とタクティカルベストを装備していく。模造刀がなければサバゲーにでも行く中学生にしか見えないだろう。

それはそれでかなり怪しいから人目につかないようにする必要があるけど。

一通り準備し終わつた僕はタマモを召喚。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん♪ サマナー、ご用ですか？」

「ああ、いつも通り幻術で目立たない様にしてくれ。」

「アイアイサー、ほいほいと。」

幻術がかかつたことを確認すると出発する。

自転車に乗つてしばらくこぎ続け、目的地に到着する。

目の前には森が広がつていた。

「おや？ 魔術で迷わせる機能がある森みたいですね。森の奥にあるどこかにたどりつかせないための。まあ、この程度問題ないのですけど。」

つまりこの森つてどこかの魔術師のトリトリーかよ。面倒だな。

「そこはわたくしが魔力と気配を遮断しますので気づかれませんわ。」

「ま、これくらいは当然のこと。ほめてもなにもでませんわよ。」

「ま、これくらいは当然のこと。ほめてもなにもでませんわよ。」

得意げな顔で言うタマモ。

尻尾を揺らしていることには触れないでおこう。では、異界を開けるポイントまで移動するか。

無事にポイントまでたどり着くと、アプリを起動。

いつものようにゲートを潜り抜ける。

ゲートを潜り抜けた先は…広い草原だつた。それと小さな丘をくりぬいて中に入れ  
るようになしたようなものが見える。  
「エリアを解析…だいぶひろいわね、ここ。それとあれは羨道墳ね。  
新石器時代に造られた、個別の玄室に向かつて、天井のない低く、  
狭い通路がある墓よ。」

へえ、そうなのか。にしてもここはどういう異界なんだ？

「うーん。情報が少ないわね。悪魔が出ればわかるかもしれないけど。」  
そうか、ならまずは移動するとしよう。

武器を取り出し、仲間を召喚する。

「出番だね…ホ。」

「やあつてやるホー！」

「出番かしら？ちゃんと、守つてよね？」

ジャックブラザーズとバムプレードーを追加で召喚した。長いから最近は名前を略して呼んでいる。リッパー、フロスト、ランタン、バンプという感じで。

(バムプレードーはあまりいい顔していなかつたけど。)

エネミーソナーを起動し、敵を探してゆく。しばらく進むと、反応があつた。

警戒しながら進むと、全身に長い暗緑色の毛を生やし、丸まつた長い尾を持つ牛並みに大きな犬が4匹、宙に浮いたまま移動していた。

「データ解析中・・・。あれはクー・シーね。スコットランドに伝わる犬の妖精よ。」

幸い気づかれていないようなので、エアガンを取り出し、作戦を簡潔に伝える。

そして、まずエアガンと同時に魔法で遠距離から奇襲を仕掛けた。

ブフーラとアギラオが2匹のクー・シーにあたり、敵がこつちに気が付いた。

エアガンを掃射すると、魔法が当たつた2匹ともう一匹にあたり、

魔法が当たつていたほうは力尽きて消滅。もう一匹も弱つている。

そこへリッパーが弱つたほうにとどめを刺そと走り出す。

無傷のクー・シーが邪魔しようとジャックに向かつたが、バンプの魔眼によつて動きを封じられ、僕がそこへ模造刀を抜いて振り下ろした。

抵抗できなまま切り付けられたクー・シーは一撃で消滅。

リツパーのほうもとどめを刺し終えたようだ。

「……なぜ二ワトリの死体があるのだろうか。」

「他にも落ちていた魔石とガーネットはまだそういうものだと受け入れやすい。」

「二ワトリの死体は何なんだろうか。わざわざ攫つて食おうとしたのだろうか。」

「いいえ、それヒロえもんによつて、クー・シーの一部が変化したものよ。」

「なんでだ。どこをどうやつたらその変化が起きるんだ。どんな過程があつたんだ。」

「さあ? 考えたこともないわ。それよりマスター、それ、どうするの?」

「どうするつて言つたつて……捨てていくのも拾つていくのも迷うぞこれ。」

「……まあ、なんかの役に立つかもしれないし持つしていくか。」

「アイテムを拾つて再度探索を進めていく。」

しばらく進むと、こんどは大きな湖がある場所に出た。

「おつきいね……ホ。」

「広いホ。」

「広い湖ね……水も澄んでいるみたいだわ。」

「水は澄んでても凶悪な悪魔は大量にいますけどね。」

湖にはざつと10匹ほどの悪魔たちが見える。どれも凶悪な姿をしている。

友好は

望めなさそうだ。

敵対するにしても数が多い。ここはほつといて他のところを調べることにしよう。

そう思つて、別のところへ移動しようとすると、

「待つてください。」

と声が聞こえた。周りを見渡すと、そこには女性の姿があつた。

この女性も悪魔だろうか？

何か用かとたずねると、

「あそこにある悪魔たちを追い払つてはもらえないでしようか。

あそこは私の家だつたのに奪われてしまつたのです。」

といつた。

「データ解析：湖の乙女ヴィヴィアンね。データ上はあの悪魔たちにも負けないくらいの強さを誇るはずよ。」

ん？じやあなんで僕たちに頼むんだ？自分で追い払えばいいだろう。

「それが…。」

なんでも、最近、現実に干渉しやすくなる場所を見つけて、うきうき気分で使おうとしたら、かなり力が制限された状態の分霊でしかこれず、あいつらと同じくらいの力しかないのだという。それでも、周りに敵がいない、とりあえずいい感じの湖を家にして、

活動していたら、あいつらがあそこに住み着いて、追い出されたのだという。  
「お願ひ！あいつらを追い出して！お礼に役に立つものをあげるから。」

…どうしよう。こいつ割とあの悪魔たちと変わらないくらい迷惑かけそうなんだが。  
ほつといて探索を進めようか。

「それにはいつら湖に何かを沈めて大切に守っているみたい。

とても貴重な財宝かもしだいわ？」

む。なんだろうか、そういうわれるとかなりきになるぞ。

しようがない、やつてやりますか。

依頼を承諾して、湖に向かつた。

さて、倒すにしても数が多くすぎる。

遠くから解析して弱点か何かないか調べることにしよう。

「データ解析中……。あの馬みたいな悪魔はケルピー。

スコットランドに伝わる人間を引きずり込み、食べる悪魔よ。

もう1種類の毛むくじやらの悪魔はピアレイ。

あれもスコットランドの水辺にいる悪魔ね。

ケルピーはザン系、ピアレイはアギがよく聞くわ。」

もたらされた情報から、作戦を立てていく。

まずは、これまで異界で手に入ってきた、アギストーン、マハラギストーン、ザンストーン。マハザンストーンを全部取り出して、タマモ、バムブレードーにいくつか持たせておいた。

そして、リップバーと二人で隠れながら湖まで近づいて、

ケルピー数匹に向かつて銃を掃射。2匹に連続して当たり、消滅。

そこで残る8匹の悪魔がこちらに気づいたので銃をしまつて逃走。代わりに模擬刀を抜いて他の仲魔のところへ走った。

逃走途中、ケルピーたちに追いつかれるが、リップバーが、持たせておいたナイフを投げ、こつちも拳銃の改造エアガンを抜いて発砲し、けん制。その隙に予定の場所まで走ると、全員に向かつて合図した。

「今だ！」

合図すると、追つてきたケルピーたちにザンストーン、マハザンストーンを投げつけ、ケルピーたちを攻撃していく。弱点を突かれ、動搖したケルピーたちを瞬く間に打ち取つた。

その後、続いて追いついてきたピアレイたちも、同様の手で攻撃。ピアレイたちはしぶとく、反撃して毒ガスを吐いてきた。が、何とか倒した。戦闘後、

「ミコーン！タマモちゃんはレベルアップー！」

どうやらタマモがレベルアップしたらしい。

「これはキタ！キタ！きましたよー！タマモ、進化ー！」

B B B B B B B B B B B B B

「ちょつ、Bボタン連打するのやめてください！まつたく…

改めまして、ハイ！レベル！アーップ！」

するとタマモが光に包まれて：その姿が変化した。

小さかつた体格は人間大になり、一つだつた尾が二つに分かれた。

「妖獸オサキ、タマモでござります。コンゴトモヨロシク…」

「妖獸LV20 オサキ ハイレベルアップしたことで攻撃魔法もつかえるようになつ

た

みたいね。」

あ、それは助かる。物理以外は万能だな。

「そうでしょう。そうでしょう。なんてつたつて良妻目指してますから。」

なんだそれ。初めて聞いたけど。

ま、それはおいといて、アイテム回収アイテム回収。

アイテムを回収した後、ヴィヴィアンの元へ向かい、報告した。

「ありがとうございます！これで湖に戻れます！それじゃ！」

そういうつて走つていくヴィヴィアンはあつという間に見えなくなつた。

「…お礼は？」

「…もらつてないな。仕方ない、追いかけるか。

ヴィヴィアンを追いかけて湖に向かう。

湖につくと、ヴィヴィアンが湖に入ろうとしているところだつた。

おーい、ちょっと待つてくれ。

「あら、何か御用？…ああ、お礼の品でしたね、すっかり忘れておりました。

では、ちょっととつてまいりますわ。」

そういうつて湖に潜るヴィヴィアン。しばらく経つと、浮き上がつてきて、「はい、これがあいつらが守つていた宝です。それとこれを。」

これは？

「チャクラドロップね。使うと魔力が即座に回復するわ。」

なかなか便利そうだ。ありがたくもらつておこう。

そして、水精たちが守つていた宝箱を開けた。

中身は赤い、棘が付いた槍とスマホだつた。この槍は何だろうか？

「それはゲイボルクね。アルスターの英雄クーフーリンが持つていた槍よ。」

そんなにすごいものを守っていたのか。：僕槍なんて扱つたことないぞ。

「宝の持ち腐れですねえ。それにしてもなんでそんなものが？」

わからん。とりあえずもらつておこう。それとなぜスマホがはいつていたんだ？ 改造されたスマホね。二つ持つてもあまり意味はないけど。

もしかしたら向こうの世界から流れ着いたのかもしれないわ。」  
ふーん…。まあ、もらつていくか。

「では、私はこれで。よーし、これで安心して人間世界にちよつかいだせるぞー！」

……僕たちが異界の主を攻略したらこの異界は崩壊するんだよな？バロウズ。

「え」、

「ええ、この異界はなくなつて、中にいた悪魔たちはみんな世界の裏側へ帰るわ。」

「え”え”えええええええ！」

優雅さとか取り繕つていた何かを投げ捨てて叫んでいる。

そもそも何しに僕らがここに来たのか疑問に思わなかつたのだろうか？

「え、えーと、この異界の主倒さずに帰りませんかーつて」

却下。そんなことをすれば世界が大変なことになる。

人間にちよつかい出されないように退治しに来てるんだ。ほつとけない。

「そ、そうですか。う、うーん……。

……あなたたちどういつた経緯でここにきたんですか？」

僕たちはこれまでの経緯を話した。

反応はタマモと似たような感じだつた。そして、

「うん。私もあなたたちについていきます！ 楽しめそうだし！」

「ええく……。この人仲間にするんですかサマナー？ 欲望駄々洩れですよ？」

まあ、そこまでやばいことはしないだろう。たぶん。

「では契約成立ね？ 私は妖精ヴィヴィアン。今後ともよろしくお願ひしますわ。」

「妖精LV22ヴィヴィアン。氷結系の魔法と補助魔法が得意みたいね。」

新たにヴィヴィアンを加えて湖を離れ、探索に戻つた。

# セタンタとの出会い 後編

ヴィヴィアンを仲間にした僕たちは、再度進むことにした。

「今までの出現悪魔からすると、ここはスコットランド系の悪魔が支配する異界みたいね。」

バロウズはそう言つた。

「それでえ、スコットランドの悪魔が展開した異界なのはわかつたんですが肝心のそいつはどこにいるんでしょうねえ。このままあてもなく進むとかいやですよ？」

わたくし。」

こつちも同感だ。何かないのか？

「ちよつと待つて…。あら？ 何かが反応してる…これは…：

ねえ、ちよつとさつき手に入れたゲイボルク見せてくれる？

……やつぱりだわ。この槍から何か反応がある。どうやら方向を指し示しているみたい。

もしかしたら、この槍、持ち主のところに戻ろうとしているのかも。」

持ち主？持ち主ということは、クー・フーリンか？

「ゲイボルクの持ち主は複数いたけど、その可能性は高いわね。どうする？行つてみる？」

他に当てもない。行つてみるだけ行つてみよう。

そういうわけで、反応の指し示す方向へ向かつた。

結構な距離を歩いたので、道中、かなりの悪魔に襲われた。

クー・シー、ピアレイ、クー・シー、デュラハン、クー・シー、ケルピー、クー・シー、クー・シー、クー・シー…。

クー・シー多いな！おかげでアイテムも充実した。

デュラハンは武器として、鞭を落とした。攻撃に使つてきたやつだろうか？ 5つくらいニワトリの死骸手に入れたけど。これ本格的にどうしよう…。と、そこで視線に気が付いた。タマモからだ。

：欲しいのか？と問うと、コクリとうなずいた。

「それを眺めていると獣の本能が刺激されまくるんです。

こう、がぶつといきたくなる。みたいな？」

なるほど、本能なら仕方ない。ほら、一つやるよ。ついでにここらで休憩しよう。さすがに長時間歩きっぱなしで疲れた。

「贊せーい。ねえねえサマナー、おかしちょうだい。おなかすいちゃつた。」

「おいらたちもー。」

「わたしもよ。」

「わたくしもです。」

「ほいほい、順番な、順番。はい、はい、はい、は……？」

「気が付くと見知らぬ人物……悪魔がいることに気が付いた。誰だお前！」

「これは失礼。私はニスロク。しがない悪魔でござります。」

「ニスロク。第二級の魔神、ベルゼビュート（ベルゼブブ）の料理長、美味による誘惑と食卓の楽しみの権威者とされているわ。墮天前のニスロクはエデンの園の禁断の

樹

の守衛を担当し、得意料理はその果実を使つたものだそうよ。

天使のころ、守護していた国を唯一神に滅ぼされ、

愛想をつかして墮天したらしいわ。

もとはセンナケリブに崇拜されたアッシリヤの神だそうよ。」

「おや、私も知られたものですね。」

「あんたが誰なのかは分かつた。で、なんのようだ？」

「実は……。食料とマグネットを分けていただけないかと思いまして……」

食料とマグネットイトを？

「ええ、お恥ずかしいことに。こここの悪魔は大体徒党を組んでいるでしょ？」

まああつたやつはだいたい組んでいたな。デュラハンは違つたけど。

「私一人ではどうしても数の差でやられてしまうのです。

そうして何も補給できずにさまよつてていたところなのです。」

なるほど。いいぞ。ほら、マグネットイトと食料。

「ありがとうございます！お礼に何か調理してご覧に入れましょ！」

お、いいのか？じやあ：

そのとき、ニワトリの死体を食べようとしているタマモの姿が見えた。

そうだ！こいつ料理できるか？

「ニワトリの死体ですか？朝飯前ですとも！」

よし！おーいタマモ、ストップ！それ調理してくれるつてよ！

「ええ、おあづけですかあ？…まあ、ちよつとはしたないかなー

つて思うところもありましたけども。」

そういうつてニワトリの死体をニスロクに渡すタマモ。

受け取つたニスロクはすぐさまどこから取り出したナイフを使って死体をさばき、また服から取り出した調味料をふりかけ、

魔法を使って炎を出し、直火で焼いていく。魔法って…  
つーかなんでナイフと調味料はもつてたんだ。

「料理人だから、でござります。」

そうかい。

ニス口クは焼き終わつた肉を取り出した皿に盛りつけていく。  
かなりいいにおいがする。一切れフォークで刺して、口に運んだ。  
「うーんデリシャス！最高の素材に、最高の焼き加減！

そして最高の加減のあじつけ！ああ、し・あ・わ・せ…。」

「おいしいね！おいしいよ！」

「いくらでも食えそうだホー！」

「おいしいわ！」「おいしいわ！」「おいしいわ！」

うん。たしかにうまい。ただ焼いてあじ付けしただけなのにこれほどうまいとは、  
シンプルだからこそ引き立つ技術。あんた凄腕の料理人だな。  
だてに伝説になつてないわけだ。

「お気に召していただけたようで恐悦至極。」

僕たちは料理をあつという間に平らげた。

ふう食べた食べた。ところであんた、これからどうするつもりなんだ？

「そうですね、どうしましようか。なぜここにいるのかもわかりませんし。」

「そうだな。あんたスコットランドの悪魔ってわけじゃないし。

「まあ、スコットランドの悪魔限定というワケではないわ。多いというだけで。

召喚されることもあるんじゃない?」

「そうなのか。……なあ、

「はい、なんでしょう?」

「あんたさえよかつたら僕の仲魔にならないか? 行く当てとかもないんだろ?」

「それは…そうですね。しかし…うーむ。」

「それに思いつきり料理させてやるぞ。うちには最新の調理器具もある。

「こんなのとか。

「ほほう! これはこれは…。

「…………ええ! わかりました! そこまで言うのならあなたの仲魔になりましょう!」

「私はニスロク。こんごともよろしく!」

「堕天使ニスロクLV23炎を使うのが得意なだけあつてアギ系がとくいよ。

「そして、刃物を使つた攻撃も得意みたい。」

「なるほど。物理もできるアタッカーか。こいつは頼もしい。

さてと、休憩したし、また探索再開だ。

そうしてまた歩き続けると、大きな川があつた。とてつもなく横幅が大きく、100mはあるんじやなかろうか？さてどうしよう。反応はこの先なんだよな？「ええ。そちらを指し示しているわ。…あら？これ流れているの

淡水じゃなくて海水みたいね。」

ふーん。これ海水なのか。と、何かが聞こえてきた。泣き声だ。

声のするほうへ行くと、近くの岩場で泣いている女がいる。なぜこんなところに？異界にまきこられたのか？疑問に思いながらも話しかける。

なあ、何であんた泣いてんだ？

そう声をかけると、最初は驚いたものの、話始めた。

「毛皮を奪われて帰れなくなつちやつたの。取り返そうと思つたけど、私弱いし、奪つたやつが強くて…。」

「データ解析あなた、セルキーね。そいつはどうここにいるの？」

僕たちが取り返してやる。その代わり、ボクたちのお願いを聞いてくれないか？

「ほんと！あいつはあそここの森にいるわ。首がない馬に乗つてて、

自分の頭を抱えてるやつよ。」

デュラハンか。よし、いくぞ！

森に入るとすぐにそいつは見つかった。今度は鞭の代わりに剣を持っているな。

そいつはこちらに気づいて突進してきた！うお、かなり早い！

とつさに避けたがそいつが通った後はまるで嵐が通ったみたいだつた。こいつかなりやばいぞ！デュラハンは振り返ると再度突進してきた。

僕は銃で撃つが、構わず突進してくる。くそつ、あまり効いていないみたいだ。

近接攻撃をしようにも、早すぎて攻撃できない！それに直線状にいる必要があつて、危険すぎる！どうにかする方法がないか：機動力を奪えればいいんだが…

そうだ!!僕はある作戦を思ついた。

みんな！こつちだ！川の方向へ逃げろ！

「何か作戦があるんですね！了解！」

川の方向へ向かつて走る。それを見逃すデュラハンではなく、突進してくる。

デュラハンはすれ違いざまに、剣で斬りつけてきた。とつさに刀で防御するが、吹き飛ばされてしまう。何とか無事ではあるが、刀が刃こぼれしてしまつた。

くそつ、高かつたんだぞこれ！悪態をつきながらも川へとたどり着く。

そして指令を出していく。

「フロストとヴィヴィアンは川の水を全力で凍らせろ！そして、デイナーは金縛りの魔眼をデュラハンに！動きを10秒だけでも止めるんだ！そしてタマモは強化魔法で僕のパワーを強化！」

指示を聞いてフロストは川を凍らせ始めた。そして、デュラハンが突進してきたのに合わせて、デイノーが金縛りで動きを封じた。

そして僕は水を凍らせた氷をあいつの上に投げつけた！  
「いまだ！・リッパーとニスロクは氷を細かく解体して、ランタンとニスロクは氷をとかせ！」

言われたとおりに仲間が行動する。そして、溶けた大量の氷は、水となつて、デュラハンの周りに降り注ぐ。すると、デュラハンの乗つている馬、コシユタ・パワーは動きを止めた。

よし！作戦成功！前にデュラハンと戦つた時、

コシユタ・パワーのことを聞いていたのだ。

この前に戦つたデュラハンはあまり動かなかつたので楽に倒せたが、こいつは積極的に動いてきたのでかなり強かつた。

だけど厄介な機動力を封じれば…！

その後は囮んでふくろだた：げふんげふんにして、倒した。

相手は魔法も使つてきたし、もともとのパワーもすごかつたので少し苦戦したが、無事に倒せた。消滅した後、持つていた剣が落ちていた。ちょうどいい、もらつていこう。

その後、森の木にかけてあつたアザラシの皮を取り返して、セルキーに渡した。

「ああ！これよ・ありがとう！私もう帰れないかと思つたわ！」

そうか、それはよかつた。ところで僕たちは向こう側にわたりたいんだ。

何かいい方法ないかな？

「それなら私が連れて行つてあげるわ！」

僕はひとまず仲間をスマホに戻し、セルキーにつかまつて、川を渡つた。

「本当にありがとう！これはお礼よ！チユツ！じゃあね！」

そういうつてセルキーは頬にキスをして何か渡して海へ帰つていつた。

こ、こんなことほんとにあるんだなあ。ちょっとどきどきした。

「うぶですねえ。」

うるさいぞ！

それはそうとして、何を渡していつたんだ？

「これはテトラジャストーンね。一度だけ呪いなどによる味方の即死を

防いでくれるわ！とつてもいいものよ。」

すごいじやないか！使うことになる場面が来ないのが一番だけど。

「ま、そうね。それじゃ、先を急ぎましょ。」

そうやつてまた進んでいくと、また広い草原に出た。

……なんだ？ 激しい音が聞こえる。 いつてみよう！

音のする方向へ急ぐと、誰かが20体ものヤギの頭をした悪魔に襲われている！  
誰かは、20体を相手に一步も引いていないが、苦戦している。

あつ、持っている槍が折れた！

「ゲイボルクの反応はあの戦っている子に対してだわ！」

データ解析：あれはセタンタ、クーフーリンの幼名よ！

そして戦っている悪魔はフオーモリア。アイルランド神話に登場する巨人族よ！」

あれがクーフーリンか！ よし、みんな！ 助けに行くぞ！

セタンタは徒手での戦いを余儀なくされ、いよいよ追い詰められてきている。

そこへ、まず魔法で奇襲を仕掛けた。いきなり魔法で攻撃されたフオーモリアたちは混乱し、そこへ新しく手に入れた剣をもつて突っ込んでゆく。

進む先にいるフオーモリアたちを斬りながら進み、セタンタの元へとたどり着く。

「大丈夫か、加勢する！」

「誰だか知らないが、ありがてえ！ 感謝するぜ！」

そして、槍をなくしているセタンタに、持っていたゲイボルクを渡した。

「これは奪われてた俺の槍！ 取り返してくれたのか、二重に感謝するぜ！  
さあ、てめえら、覚悟はいいか！」

本来の得物を取り返したセタンタの姿が変わり、成長した姿になつた。

そこからは鬼神のごとき働きで、フォーモリアを倒してゆく。

「なんだ？ 剣から不思議な力を感じる：その力を使おうとすると、体からマグネタイトが剣に吸収され、体が勝手に動いた。

そして、目のまえにいたフォーモリア数体を一撃で倒してしまつた。

これは…リツパーが使うようなスキル？ この剣の力か？

…っと、まだ戦いは終わっていない。集中しなくては！

そして、クーフーリンが半数近く討ち取つて敵をせん滅した。

殲滅し終わつて、クーフーリンが話しかけてきた。

「よう。さつきはあぶねえところを助けられちまつたな。あらためて感謝するぜ。

俺はクーフーリンつてんだ。よろしくな。」

よろしく。ところでなんでクーフーリンはあいつらと戦つてたんだ？

「しらねえな、あいつらがいきなり襲つてきやがつたんだ。

あいつらは一人の王のもとで動いている。そいつの名はバロール。

俺の父ルーが倒したはずの俺のひい爺さんだ。」

「バロール。魔眼のバロールの異名を持つ悪魔ね。バロールの片方の目は、視線で相手を殺すことができる魔眼といわれているわ。通常は閉じられており、戦場では4人がか

りで取つ手を回し、瞼を押し上げると言われているの。この他にも魔力で嵐を起こし、海を炎の海にすることが出来るらしいわ。」

なんだそれ！無茶苦茶強いじやないか！そいつがこの異界の主なのかよ！くそつ、でもやるしかないか…。

「なんだ、お前らバロールを倒しに来たのかよ。よし、それじや俺が仲間になつてやる。あいつらには借りはたっぷりとあるしな。」

それはかなり心強いぞ！これなら勝てるかもしれない！

俄然希望が湧いてきた。

「よし。それじやいくぞ。」

いくぞ、つてどこにだよ。

「決まつてんじやねえか、ボウズ。バロールの居城だよ。」

「ちよつ、ちよつと待てよまだ契約してないぞ！」

「あん？ 契約だ？」

僕は契約のことを話した。

「なるほどな。いいぜ契約してやる。我が名はクーフーリン！

この槍、お前に預ける。」

「幻魔LV36クーフーリン。物理攻撃が得意でかなり強力よ。ルーン魔術も扱える

わ。」

L V 3 6!? 僕のレベルより9は高いじゃないか!

とんでもないな…

「まあ、さっきまで弱体化してたんだがな。ほら話は終わつたら、  
さっさと行くぞ。」

ちよつと待てよ！さっきまで苦戦してただろ！少し休んで回復しよう。  
万全の状態で挑んだほうがいい。それにやみくもに突撃するよりかは作戦を立てた  
ほうがいい。食事でもしながら作戦を立てるぞ。

「あん？ま、いいや。コゾウ：いや、えーっと、何て呼べばいいんだ？」  
サマナーでいい。

「サマナーに従うとしますかね。」

よし、決まつたな。それじゃあ、移動するぞ。あ、アイテムも回収していこう。  
トパーズと、傷薬？それと、：黒ヤギの頭か、まあいいや、持つていこう。  
そうして移動した先で、ニスロクに黒ヤギの頭を料理してもらつた。  
まあ、うまいかもしれないし：。そして実際にうまかつた。

「おーつ、こりやうめえ！あんた凄腕だな！」

そうだろうそうだろう。

「なんでサマナーが誇らしげなんですか…。」

とタマモが言った。

マグネットイトを全員に十分に供給しつつ、話始める。  
敵の居城のことと、バロールへの対処、それと周りにいるであろうフォーモリアの  
対処の3つを話した。

「できるだけ見つからないように潜入しよう。見つかったら数で踏みつぶされる。  
それと、バロールと戦っている間、邪魔が入らないように陽動できたら  
いいんだが…。」

そこでクーフーリンが、

「ではその役目、俺が担おう。サマナーたちは潜入してバロールを倒せ。」  
確かにクーフーリンであるならばやられずにフォーモリアたちを引き付けておける  
だろう。これ以上の適任はいなかつた。  
作戦を決めて、敵の居城へ向かつた。

「それでは俺は行つてくる。奴らが俺に向かつてきる隙に忍び込め。」

そういうつてクーフーリンは敵の居城の正面に進むと、

「我が名はクーフーリン！借りを返しに来たぞ！バロール！」

「ふん。まだ死んでいなかつたか死にぞこないめが。愚かにも一人で向かつてくる

勇気を称えて褒美をやろう。」

「へえ、何をくれるつていうんだ？」

「貴様の死だ！」

「上等だ、俺の命貴様らにとれるか？」

次々とフォーモリアたちがクーフーリンに殺到していく。

いまならば手薄なはずだ。僕たちは裏手からこっそりと侵入した。

そして、瞬く間にバロールのいるところにたどり着いた。

「ほう。クーフーリン一人だけかと思えば仲間がいたか。だがそれも無意味だ。

なぜならば貴様らはここで死ぬからな。」

「ほぞけつてんですよ！やられるつもりはありません！」

僕たちがお前を倒しちゃうかもよ？

「ほう、ほぞいたな。ならば死ね！」

そうして戦闘が始まった。

「タマモ、強化と回復に専念しろ！リッパーはかく乱！他は魔法で攻撃だ！」

指示を出して、バロールへと向かう。

「ほい！タルカジヤ！スクカジヤ！ラクカジヤ！」

強化魔法がかかって、体が軽くなる。勢いよくバロールに飛びかかった。

「むっ、なかなかはやい！」

攻撃はバロールの体をかすめただけでかわされてしまった。

そしてバロールが腕で薙ぎ払ってきたのを後ろへ跳んで回避する。「ふん、なかなかやるではないか。ではこれでどうだ？」

マハラギオン！マハザンマ！」

そういうと今度は広範囲にわたつて強力な威力を持つ魔法を放ってきた。とつさに回避したが、これでは近づけない！

「ふん、手も足も出ないか。……むう？」

あいつがマハラギオンを放つてきたのに合わせてフロストにブフーラを放たせる。魔法がぶつかり、相殺されたところに突つ込んで接近。

今度は剣に力を注ぎこんで……！

「くらえ！デスバウンド！」

放つた攻撃は正確にバロールをとらえ、複数回当たつてバロールを吹き飛ばした。

「どんなもんだい！ざまあみろ！」

「どうやら我を本気にさせてしまったようだな……むん！」

今度はさつきと桁違ひの威力の魔法が放たれる。くそつ今まで手加減していたのか！

そしてあることに気が付く。バロールの目が少しづつ開いている……！  
まずいぞ、目が完全に開かれたらおしまいだ！

しかし、桁違いの威力の魔法に近づくこともできない。くそつ何とかする方法は……！

「サマナー。」

ジャックフロストとジャックランタンが話しかけてくる。

「オイラたちを悪魔合体してほしいホ。」

何を……それをしたらお前たちは！

「このままじゃみんなやられちゃうホ。

オイラたち、サマナーに生きててほしいんだホ。

お願ひだホ！」

……………わかつた。バロウズ！

「了解！合体プログラム起動！」

そして、ジャックフロストとジャックランタンが檻のようなものに包まれる。

「じゃあね、サマナー。元気でね。」

そうして2体は概念へと分解され、抽出されたより高純度の概念がかけ合わさり、

一つになつていく！

そして生まれた悪魔がバロールへと向かつてゆく。

バロールの魔法を突破して、バロールに接近。吹き飛ばした。

「ヒーホー！ オイラはジャアクフロスト！ こんごとも、よろしく・・・。」

「ふん。小癩なあ！」

バロールは即座に復帰し、ジャアクフロストに攻撃を仕掛ける。

「無駄だホ！ オイラには炎は効かないホ！」

「ならばこれはどうだ！」

バロールはジャアクフロストに殴り掛けた。ジャアクフロストは、それを受け止め、

反撃を加える。

「ぬうう！」

よし、効いてるぞ！ 僕もバロールに向かって攻撃を仕掛けていく。

「ふんっ！ まだまだあ！」

しかし、バロールは倒れない。その間にもどんどん目は開いていく。  
まずいまずいまずいまずい……！！！

焦りから前へ出て攻撃を加えたところをバロールに反撃される。

攻撃が直撃し、僕は地面にものすごい勢いでたたきつけられた。

「がはつ・・・ああ!?」

「「「サマナー！」」」

痛い。とてつもなく痛い。全身が激痛に襲われ、意識が遠のきそうになる。

まだだつ……！動いてくれつボクの体！

何とか体を動かそうともがくが、動いてくれない。

その間にバロールの目が開かれた。

「これで終わりだ……死ねい！」

くそつこんなところで死ぬのかよ……仲魔を犠牲にしてまで……！

悔しい。悔しくてしようがない。

……その時、手に何か当たつた。僕はそれをとつさに力を籠め、投げた。  
そして、魔眼が力を發揮し、絶対的な死をもたらさんとしたときに、  
投げたものは破裂し粉々に碎け、僕らを守つた。

「なに……？」

そう、投げたのはセルキーにもらつたテトラジヤの石だ。

それは即死させる呪いを一度だけ防いでくれる。

「小癩な。たかが少し寿命が延びただけだ。」

確かにそうだ。いまも体は満足に動けない。どうしようもない。  
だがそのとき、何かの接近を感じた。これは……！

契約したパスを通じてジャアクフロストに指示を送る。

ジャアクフロストはまっすぐバロールに突っ込んだ。

そして、バロールに組み付き動きを抑える。

「ぬうう、まだ動けたか！だが…、ふん！」

「ヒホッ！」

ジャアクフロストが至近距離で衝撃魔法を食らい吹っ飛ぶ。

「ふん。我をここまでこづらせた礼だ。せめて魔眼で葬つてやろう。」

「いや、その必要はない。」

バロールの後方から声が聞こえる。

「なにつ!?」

僕はありつけのマグネットをその存在にたたきつけた！

「その心臓貫い受ける！『刺し穿つ死棘の槍』！」

因果逆転の槍がバロールの心臓目掛け、かけていく。

そしてそれは、バロールを貫いた。

「ぐふう!?

心臓を貫かれたバロールの体が崩れ落ちた。そして、消滅した。

「いよう。サマナー、危ないところだつたな?」

ああ。助かつたよクーフーリン。

「今回復します!」

タマモに回復魔法をかけてもらいようやく動ける程度にはなつた。

「バロール消滅確認。お疲れさま。マスター。」

ああ、本当にやばかった。

バロールが消滅したところを見ると、何やら赤い水晶のようなものが落ちていた。

これは・・・?

「解析中…だめね、さっぱりわからないわ。今のアブリじや解析できない。」

「どうか。とりあえずは持つていこう。それにしてもまずいぞ。」

早くゲートまで戻らないと!

「マスター、異界の崩壊が始まつたわ! 急いで!」

そういわれて焦る。しかしようやく動かせる程度で満足に動けるわけじやない。

そこへヴィヴィアンが、

「仲魔を全員戻して私につかまつて!」

といった。何をするつもりなんだ…？しかし他に手はない。  
いうとおりにすると、

「行くわよ…・トラエスト！」

体を不思議な感覚が襲つた。次の瞬間、現実世界に戻つてきていた。  
ここはどうやらゲートを開いた場所のようだ。いまのは？

「魔法よ。瞬間移動の。どうやらもどつてこれたみたいね。」

ああ。助かつた。ありがとう。

何とか体を起こして動き始め、自転車のある所まで戻り、這う這うの体で帰る。  
もちろん幻術をかけてもらうのも忘れずに。

⋮ところでなんか忘れてる気がするけどなんだつけ？

まあ、いいやとりあえずしばらく学校休むことになるかも知れない。

それとバロールが残したもののが気がかりだ。

それはいきなり出現した。領地の森に。しかもとても傷ついた状態で。

そして動き始め、外にあつた自転車に乗り、帰つていつた。

外にあつた自転車に乗つたということはあれはそれのものであるのだろう。  
しかしながら置いてあつたのか、なぜ突如出現したのか、なぜ傷ついていたのかが  
わからない。とても怪しいそれを調べることにした。

# 間桐慎二のデビルサマナー 5話

気が付くと、何やら神祕を感じさせる空間にいた。

はて、私はさつきまで自分が管理している教会にいたはずだが？

その時、何かが飛んでくるのを感じ取り、その場を後ろに跳んで避けた。

次の瞬間、自分が立っていた場所が吹き飛ばされていた。

あたりに目を向けると、古めかしい衣装をまとう背中に羽の生えた人間がいた。

なんだあれは…と思っていると、何やらし始め、とつさに横に転がると、

衝撃が横を通過していった。魔術か！

体勢を立て直すと、その人間のような存在に向かつて黒鍵を投擲。つき刺さるが、

その存在は何一つとして傷ついていなかつた。

いや、突き刺さつてなどいない。刀身が触れたところから消失していた。  
なにー？

動搖している間もなくさらに衝撃を飛ばしてくる。目視はできないが、まつすぐ飛んでくる

だけであれば、避けることなどたやすい。

避けつつもどう対処しようか迷つていると当たらないことにしびれを切らしたのか接近してくる。そして手に持った剣を振り下ろした。

避けてとつさに拳をふるうと今度は当たつて吹き飛んで行つた。

見ると明らかに傷ついている。ふむ。もしやとは思うが：いや、弱すぎる。

考えを頭からふるい、今度はこちらから近づき追撃した。

それが当たつたその存在は血を吐き出すと消滅した。

消滅した？魔力で構成されていたのか？疑問は尽きないが、考えていてもわからな

い。  
ひとまずそこから離れることにした。

バロウズから、異界が発生したといわれて3日。

今回の異界は中心である場所を隠されているらしく、大体の場所しかわからなかつた。

異界の範囲は新都全域。そこをバロウズの機能を使いながら

しらみつぶしに探していく。

くつそう、こんなんで探し当てるのかよ。歩き続けているが範囲が絞れるだけで一向に見つからない。自転車で移動しながらそんなことを思っていると、教会の近くに出た。

そういうえばこんなところあつたんだつけな。

そんなことを思つていると、

「待つて、マスター…その教会の方向に反応があるわ！」

とバロウズが言つた。

やつと見つかるか…？

そんなことを思いながら教会のほうへ向かうと、

「サークル…あつたわ！…ここが異界の中心よ！」

と言われた。

よし！すぐに準備するぞ！だが今日はもう遅い。幸い明日は休みだし、明日行こう。と伝えて家へと帰る。

次の日、準備をおえた僕は教会へとたどり着くと、異界を開いた。  
ゲートが開き、そこを潜り抜けると、どこかの教会のような、厳かな雰囲気の建物

の中に出了。すぐさまスマホを操作して仲魔を呼び出す。

「ヒホ？出番？がんばるね…ホ。」

「今度は教会ですか。私、結婚式は神前式派なんですが。」  
知るか。そもそも相手はどこにいるんだ？」

「うぐつ、そ、それは…。いつか！いつかきっと見つかるはずです！」  
「はいはい。私はウエディングドレス派だからここでもよさげだけど、  
なーんか拒否されそうな雰囲気ねー。それに連なるもの以外を寄せ付けない？  
みたいな。」

「そうね。居心地悪いわ。」

とヴィヴィアンとデイノー。

「ええ。ここはどうやら天使たちの展開した異界のようですね。  
教会に発生したのもそういうことでしよう。」

とニスロクが言つた。そうか、元天使だつて。なら詳しいのも当然か。

「ええ…。どうやら歓迎されているみたいですよ？私たち。」

その時、廊下の曲がり角からぞろぞろと羽の生えた人間の姿をした悪魔がでてきた。

全部で6体か。

「データ解析…。あれは天使LV15エンジェルね。複数いるからエンジェルズ

といったところかしら。数は多いけどマスターたちの相手ではないわ。』  
 エンジエルたちは少し離れたところから一斉に魔法を放ってきた。

なるほど、確かにそれなら安全を確保しやすいだろうな。だが！  
 僕とジャックは魔法を躲しながら一気に距離を詰めると、

「デス……バウンド！」

スキルで、2体を残してエンジェルズを倒した。

残った2体は慌てて僕に向かつて魔法を打とうとするが、

「させないよ？……スクラッチダンス！」

と後ろにまわっていたリップーに倒された。

ふう。確かにそこまで大した敵ではないな。これならクーフーリンやジャアクフロ  
 ストの出番はなさそうだ。この2体は強すぎるのであんまり頼りすぎないように、  
 やばい敵以外のときはあまり使わないことにしていた。

そして、仲間のほうを見るとこつちに全力で駆けだってきていた。  
 どうしたんだ？

「後ろおーーーーー！私たちの後方おーーーーー！」

タマモがそう叫んでいたので天井に頭をぶつけない範囲でジャンプしてみてみると、  
 うおつ！なんだあれ！優に百体は越しているであろうエンジェルともう一種類の悪

魔がこちらに向かつてきいていた。さすがにあれは相手にできないぞ。  
「に、逃げましよう！あんなに相手してらんないですよおー！」

同感だ！逃げるぞ！

天使たちとは逆の方向へ走り出していくと、廊下の曲がり角に差し掛かつた。  
曲がつた先にはまた長い廊下が：こんなの走り続けてたらきりがない！  
いつか追いつかれる！

と、そのとき、まがつた先の廊下の壁の一部に違和感を感じた。調べると、  
隠し扉があつた。僕はイチかバチかかけて飛び込むことにした。このままでは  
追いつかれて死ぬ未来しかなかつたかも知れないからだ。

扉の向こうに入つた後、大群の足音が遠ざかつていくのを感じた。  
どうやら撒けたようだ。

「サマナーツて運いいですよね…」

ああ。ありがたいことにな。

扉の奥には道が続いていた。いま戻つたら見つかるかも知れないでの、  
奥を調べることにした。

進んでいくと、部屋に出た。そこには机と椅子があり、椅子に天使が座つていた。  
天使はほかの天使と違つてなんか甘口リ？の服を着ていてる…。

慌てて隠れようとすると、どうも様子がおかしい。天使の様子を確認すると、「ZZZ…」

急速に体の力が抜けてくる。こいつ、寝てやがる。つーか悪魔つて眠る必要ないはずじゃ?

「どうする? マスター?」

…起こしてみよう。何か情報が得られるかもしねないし。

おーい、起きろー。

「ZZZ… あと5分はねさせてくださいよー。」

ダメだこいつ…早く何とかしないと…。

おい! 起きろって!

「うーん…、ぐへへへへ…、おいしいものがいっぱい…、本もいっぱい…。」

だめだこりや。あきらめて代わりに何かないかと部屋を探す。

部屋の中には大量に本がある。ただ字が読めないので内容はわからない。後、奥のほうに厨房があつた。結構いい器具そろえてやがる…。

…そうだ! ニスロク、お前ちよつと一人前料理してくれ。

こいつ食いしん坊そудし匂いで起きるんじやないか?

「はあ…、そううまくいきますかね?」

そういうながらもニスロクは料理を開始した。いいにおいがこちらにも広がつてく  
る。

そして、天使が反応し、飛び起きた！

「とてもいいにおいがします！おなかがすきました！」

ほんとに起きたよこいつ…。こいつほんとに天使か？

「失礼な！私はれつきとした天使です！…ところであなたたちは？」

どうしよう。答えに困つたぞ。まさか侵入者ともいうわけにもいかないし…。

えーと、僕たちは世界を守るためにここに来たんだ。僕は間桐慎二という。

何か此処のことと知つてること教えてくれないか？あ、料理は食べていいからさ。

「確かにサマナーは嘘は言つてませんね、うんうん。」

ヴィヴィアンがそんなことを言つてゐる。ウルサイヨ。

「本当ですか！？であれば協力せねばなりませんね、うんうん。

決して、決して料理につられたわけではありませんとも！」

何に対しても弁明してゐるんだこいつ？天使らしく神か？

「まふはどふいふあほほふあふあふあなひまひようふあねー？」

（まずはどういったことから話しましようかねー？）

いい！いいから！食い終わつてから話せ！聞き取りづらい！

「ではお言葉に甘えてー。」

とものすごい勢いで食べ始めた。食べ終わると、

「おかわり！」

…ニスロク、食材追加で…。

さらにニスロクが作り続けて最近ダウンロードしたという4次元の倉庫に収納するアプリによつてしまわれていた食料の半分が消えたところで、「ごちそうさまでした！…とてもおいしかったです！…で、何が聞きたいんでしたつけ？」

やつと食い終わったか…此処の異界のことだよ！異界を展開している悪…天使を探してゐるんだ。展開され続けられていると世界が大変なことになるから止めに行くんだ。

俺たちは発生する異界を消していくデビルサマナーなんだ。

「なるほど、そんな事情が…。ムムム、それは見過せませんね！私も協力いたします！…そのために私も契約いたします！」

ええ…食費が大変なことになりそうだけど…。まあ、いつか。

それにしても食べ物関係で仲間になるやつ多いな！

「そ、それは言わないでください…。」

「決まりですね！私は天使アーケンジエル！今後ともよろしくお願ひします！」

…」

「あ、私攻撃スキル使えないです…。でも！回復と補助魔法は得意ですよ！  
それに今レベル26です！」

そ、そ、うかい。また後方支援系が増えたな。専念できる人材な分ありがたいが。  
それで、こここの異界を展開しているであろうやつはどこにいるんだ？

「えーーと、……思い出しました！パワー様なら礼拝堂にいるはずです！」

パワー？えーと、天使の階級でいえば6番目のやつだづけか。  
「そう。能天使。エクシシア、デュナメスともいうわね。悪魔の軍勢と最前線で  
戦う役目をもつた天使よ。」

強そうだな…とりあえず、案内してもらえるか？

「はい！」

隠し部屋を出ると、アークエンジェルの案内の元、移動する。

そういうえばなんであんなところにいたんだ？

「ぎくつ。……じ、実はよくあそこでさぼって本を読んでるんです。」

おいこいつ本当に天使か？イメージと全然違うんだが？

道中で天使に合うと、有無を言わさず襲い掛かってきたので戦闘になつた。  
アークエンジェルに大丈夫かとたずねると、

「話も聞かずに襲い掛かつてくるなんておかしいです！調べないと！」

倒しちゃつて構いません！」

という力強い言葉を得られた。それじゃ遠慮なく！

天使たちを蹴散らしながら進んでいくと天使たちが密集しているところに出くわした。

あれは避けて通ろうかと思つたが、よく見たら何かを囲んでいる？

囲んでいるものを見ると、それは人間だつた。

神父の服を着ている人間は天使たちの攻撃を避けながら反撃し、  
天使を倒している。

なんだ？かなり強いぞあの神父！

だけどさすがに多勢に無勢らしく突破することができないでいるようだ。

全員！あの神父を助けるぞ！この厚みなら誤射を心配する必要はない。

遠くから魔法を一斉掃射！リツパーは僕と一緒に包囲網を破るぞ！

指示を出すと仲間が動き始めた。僕とリツパーがかけだと、

後ろから魔法が飛んできて包囲網の一部にあたる。そこにたどり着くと、

「そこをどけえ！冥界破！」

一気に包囲網を食い破つた。そして神父に、

「こっちだ！」

というと、神父がこちらに気づき天使を蹴散らしてこちらに向かってくる。天使たちはそれを阻もうと神父の前に移動するが、

「させないよ。…霞駆け！」

トリッパーに邪魔をされる。

神父と合流した後、神父を連れて戻る際に、仲間たちに魔法でけん制することを指示して駆ける。

無事に神父を連れて仲間のところに戻ると、エンジェルに神父の回復を指示して攻撃に参加する。少し距離ができるので、持ってきている改造エアガンを掃射していく。あれだけいれば狙わなくとも当たりやすい。

中距離戦になつたが実力の差で有利に運んでいる。

それでも数が多く、反撃の魔法が飛んでくることもあつたが何とか殲滅。

距離を近づけられた後は物理で殴つた。

戦闘が終わつた後、少し休めるところを探して、神父と話することにした。えーと、あんた、大丈夫か？

「ああ。たいした怪我はない。礼を言おう少年。…ところで君の名は？」

「僕の名は慎二。間桐慎二だ。あんたの名前は？」

「間桐？…そうか、君は魔術師の間桐の家の二子息か。私は言峰綺礼見ての通り教会の神父だ。」

家のことを知っているのか？…まあいや、それよりなんであなたは囮まれてたんだ

？

どうしてここに？

「知らぬ。教会にいたと思えばいきなりここにいた。

私からも質問したい。君はなぜここにいる。ここはどこだ。

あの人のような者たちはいつたい何者なのだ？」

ちよつと待て。ひとつづつ答えるから。

ここは異界。現実とは異なる空間だ。僕はそれを消滅させるために來た。

あいつらは悪魔。悪魔といつても神も含めるこつちの単語だけど。

その中であいつらは天使だな。エンジエルとアークエンジエルだ。

「天使？天使だと？あれがか？」

ああ。まあ、天使といつてもかなり弱かつたけどな。

「ああいう悪魔は一般的な概念の皮をかぶつて出てくるものなの。

天使ではあるけども皮が弱いせいであまり強くないし、個性が出にくいくわ。  
そこのお嬢さんは違うみたいだけど。」

「そうですか？ 照れますねえー。」

といつて照れている。こいつといるとなんか力が抜けてくる…。

とりあえず、僕たちは今から個々の異界を展開してやつを倒しにいく。  
あなたも一緒に来てくれ。脱出するときに不都合だし。

「いろいろ聞きたいことはあるが、まあいいだろう。了解した。」

少し休憩して傷をいやした後、また探索を開始した。

礼拝堂につくと、ドアを開けた。そこには今まであつてない天使がいた。

「おや？ ここまでたどり着くとは…まあ、いいでしょ。」

お前がパワーか？ こここの異界を展開してるのはあんただな？

「ええそうです。そこの天使から聞いたようですね。」

ああ。こここの異界を解いて帰つてくれないか？ ここが展開されていると  
世界に悪影響が出る。

「それはできない相談ですね。私たちにもやることがある。  
罪がない一般人にも被害が出るんだけど？」

「ええ。それはとても痛ましいことでござります。ですが、神の意志を遂げるための大きいなる犠牲としてです。それは喜ぶべきことでしょ？」

ふざけんな！あんたたちの価値観を押し付けるな！

そこまでしてやることなのかよそれは！

「そうですよ！パワー様！地上のことに対する手を出すなんてもつてのほかです！」

それが神様のご意思なんですか！？」

「そうですが？むしろ神の意志を遂げる以上のことことがおありで？」

「…それにそこの天使よ。私に神の声は聞こえません。ですが、

これは神のためなのです。力を蓄えることで神の意志を遂げるための一歩とする。

これはそのためには必要なことなのです。」

「うわー、典型的な狂信者ですねこれ…。しかも自己判断つて…。」とタマモ。

「そんなの間違つてます！地上のことは人間に任せておくべきです！」

それが世界のルールだつたはずです！」

「ではなぜ今私はここにいるのですか？世界のルールとやらは？」

わかりますか。これは神の意志なのです。この異界を開拓し、

力を蓄えよとの天啓なのです！！」

「つまりどうしても異界を開く気はないってことか。

しようがない。もともとそのつもりで来たんだ。穩便に済めばと思つたんだけどね！

「ほう。立ち向かつてくるつもりですか。ならば神罰を与えましよう！」

「いや、私も戦おう。なに、足手まといにはならんさ。」

ああもう！どうなつても知らないからな！

戦闘が始まつた。まずは格上と戦うためのお決まり通り、補助魔法をかけさせる。

そして僕は礼拝堂の床を踏み碎き一気に距離を詰めて、まずは一閃。

「グラム・カット！」

「はっ！ふんっ！」

しかし、それは受けながされ、反撃の横なぎの一閃を僕は後ろに飛んで回避した。  
続いてくる突きや薙ぎ払い、振り下ろしなどを躱し、受け流し、隙を見て反撃を加え  
る。

しかし、難なく躱される。そしてどんどん後ろにさがりながら攻撃を捌いていく。  
近距離戦はちょっと不利か。

「あーら、お足元注意、ですわよ？」

いつのまにかタマモが下に符を張り付けていたようだ。足元から炎が吹き上がり、パ

ワーと僕は後ろにさがつて

それを回避。距離が開いた。ナイス！タマモ！助かった。

「いえいえ、お礼には及びませんことよ？それよりもどうします？」

近距離は不利。ならば魔法しかないだろ？

「ですよねー。では…アギラオ！」

「そうなるわよね…ブフーラ！」

「それでは！狂信者は丸焼きです！アギラオ！」

「私たちだつて守られてばかりじやないのよ？ザンマ！」

「くつ、ちょこざいなあ！ジャベリンレイン！」  
エニユーオーのザンマが当たり、大きくのけぞる。  
パワーハラ放たれたエネルギーの槍が大量に降り注いできた！

「わっわっ！あぶなー」「キヤツ！つもう！危ないじやない！」「おつと！」「きやああ！」

タマモ、ヴィヴィアン、ニスロクは無事だけどエニユーオーが！  
「ごめんなさい、サマナー。 私、先に戻つてるわ…。」  
エニユーオーが粒子となつてスマホに戻つていく。

くそつ。パワーを見ると、タマモたちのほうへ向かっていた。させるか！

タマモたちと、パワーの間に入つて、ふるわれた槍を捌く。

タマモたちに、距離を取り、隙を見て魔法で攻撃するように指示。次々と繰り出される攻撃を捌いていく。

しかし、徐々に押されていく。

「あなた一人では隙を作り出すこともできないようですね！ふんっ！」

「では二人ではどうかな？」

「なにつ！？：はつ！」

今まで見に徹していた神父がパワーに攻撃を仕掛ける。持っていた黒い剣のようないものをパワーに投擲した。

パワーは投擲された剣を槍ではじいた。

「わたしたちもいるよ！」

「ぐわっ！くつ：：はあっ！」

パワーの後ろからリップバーが攻撃を仕掛けた。パワーの背中をナイフで切り裂き、傷を負わせた後、

パワーの反撃をかわした。

3人でパワーを囮るように立つ。僕が剣でパワーに攻撃を仕掛け、神父が投擲と接近

して殴ることで、

リップバーが素早く隙を伺いながら攻撃することでパワーを抑え込んでいく。  
その間にタマモたちも魔法によつて攻撃することによつて、パワーは少しづつダメージを負つていった。

「くつ、不利か…ならば！ ジヤベリン…！」

させるか！ 僕は素早く攻撃を加えた。

「ぐうつ！？」

攻撃を食らつたパワーは後方へとどんで、

「はあつはあつ、なかなかやりますね。ならばこれはどうだあ！ メギド！」

パワーは今度はエネルギーの塊のようなものを放つてきた。それは高速でこちらに向かつて来て爆発した！

「ぬつ！」「きやつ！」

幸い前衛にしか届かなかつたようだ。僕たちは何とか回避した。パワーは、

「マダマダア！ メギ…ぐわつ！」

「こちらもお忘れないでいただきたいものですわ！」

メギドを放とうとして後方から飛んできた魔法を食らつた。

今がチャンス！ 僕は一気に距離を詰めると、

「これで！終わりだああああ！！怪力乱神！」

渾身の力を込めてパワーにたたきつけた！パワーは吹き飛ばされ、礼拝堂の壁にぶち当たり、動かなくなつて

消滅した。

「天使パワー消滅確認。やつたわね、マスター。」

フウっ、と息を吐く。そこに神父が声をかけてきた。

「終わつたようだな。」

「ああ。：あんた神父なんだろ？天使と戦つてよかつたのかよ？つーかなんであんなに強いんだあんた？」

「ほおつておけば罪なき者が犠牲になつたのだろう？であるならばやぶさかではない。」  
タマモがしゃべつた。

「ほーんとですかねえ？なーんか嫌な臭いがブンブンしますよこの神父。うさんくさい」というか。」

「これは心外だな。敬遠な神のしもべとして日々働いているつもりだがね？」

「おしゃべりもいいけれど早く脱出しないとまずいわよ？」

おつと、それは大変だ。神父を連れてゲートの場所まで戻り、ゲートをくぐつて現実

世界に戻る。

教会に出ると、僕はバロウズに相談した。

「おい、どうする？この神父が初めて連れて帰った生存者だけど。また悪魔に付け狙われるんじゃないのか？」

「その心配はなくなっていると思うわ。だんだん法則の侵食が強まつてきてる。悪魔に狙われる人、巻き込まれる人が増えるから相対的に危険は下がっているわ。悪魔が存在していることを知つてしまつてるのはどうしようもないけど。」

「ふむ、存在を知つていると何か不都合なのかね？」

神父が話に入ってきた。そこで僕たちはこれまでの経緯を話すことになった。

「ああ、待ちたまえ、ここで話すのもあれだ。部屋に案内しよう。」

といったので教会にある部屋の一つにはいった。机をはさんで椅子に座るとこれまでの経緯を話した。

「ほう、これまでの物理法則とは違う法則によつて出てきた悪魔は実在を知られると出現しやすくなると。

では、記憶を消した場合はどうなるのかね？」

「それを知ることは深層心理にまで影響するわ。完全に影響をなくすことはできない。だけど影響はかなり小さくなるでしようね。」

「なるほど。では少年。」

神父はこちらに向き直ると、

「私が記憶の処理、および事後処理において協力しよう。」  
といつてきた。ありがたいけど、いいのかよ?」

「なに、構う必要はない。それが生業だつたからな。」

断る理由もないのにそれを受けることにした。

教会を出て、帰るさい、神父がこちらに向かい、

「君の道中に幸いがあらんことを祈つてゐるよ。」

といつてきた。そいつはどーもと返して、家路を急いだ。



# ある日の日常1

迫りくる槍を躱し、そらし、受け止め、隙を見て反撃を加える。

1合、2合、3合…そうして応酬を繰り広げていく。

ふと隙が見えたと思い少し踏み込む。しかし、どれはどうやらフェイントだったようだ。

素早い攻撃が繰り出され、攻撃をしのごうとして剣で受けつづけるが、体勢を崩され、立て直そうとしたところで目の前に槍が突き付けられる。

「ほい終了。」

そういうつてクーフーリンが宣言すると、体の力を抜く。

それを確認するとクーフーリンは突きつけていた槍を直した。

くそう。また負けた。なかなかうまくいかないもんだな。

「おう。まだまだだな。しかしかなり飲み込みは早いほうだと思うぜ？」

ほんとかよ？まあ、いいや、朝ご飯にしよう。

そういうつて家に戻っていく。時刻は現在朝6時。かれこれ1時間は修練していた。最近はこうしてクーフーリンに稽古をつけてもらっている。

レベルアップのほかにもこうして戦う技術を磨いたほうがいいと思ったからだ。家に戻ると、ニスロク、タマモと一緒に朝食を作る。

最近はニスロクに料理を教えてもらっている。タマモはオサキになつたことで人と同じくらいの大きさになつた頃から手伝ってくれている。

はじめのころはレンチン女子だつたが、花嫁修業ということで僕と一緒にニスロクから料理を教わっている。

朝食を食べると、各自好きなことをし始める。クーフーリンは釣り。

ジヤアクフロストとリツパーは外に遊びに行つた。

まさかジヤアクフロストがあんな変身するなんて：まあ、目立たない格好になつてているからいいか。

タマモとヴィヴィアンとニスロクはバイトへ。クーフーリンを含めたこの4人はいろいろとごまかしながらバイトしたりして働いている。

グラライアイ3姉妹とアーケンジエルは町の図書館へ行つた。

どちらも本を読むのが好きらしい。

僕も学校に行く準備をして、登校した。

学校から帰ってきた。荷物を片付けると掃除機を出す。

掃除は当番制にしている。今日は僕の番だ。リビングにあるものを片付けつつ掃除機をかけていく。

すでに帰っていたタマモとヴィヴィアンがソファーに転がりながら雑誌を見ている。タマモはたまも俱楽部という雑誌。ヴィヴィアンは普通のファッショントマモも俱楽部の表紙をちらつと見ると肉食系奥様のための簡単呪術レッスンだの書かれていた。どんな雑誌だ。

タマモは雑誌を見ながら、

「なるほどなー。甘える時はダンナ様が暇そうな時、

甘えさせる時は落ち込んでいる時かー。  
うん、知ってる知ってる。

タマモちゃん、そういうの分かつちやう♡」

などとほざいている。どうやら結婚後を想定した雑誌らしい。

お前…、まずはそのダンナを見つけることから始めたらどうだ?

「うぐつ、…も、もうちょっと後でもいいかなー、なんて…。」

それで見つかるのか?・もうちょっと積極的に言つたほうがいい気もするけど?

「う、うるさいですね！ほつといてくださいませ！」

あ、すねた。…まあいいや、続き続き。掃除を進めていると床に脱ぎ捨てられた衣服が落ちていた。ヴィヴィアンのだなこれ。

おい！ヴィヴィアン！服を脱ぎ散らかすな！かごに入れろかごに！

「あー、ごめーん。入れといてー！」

入れといてってお前…、だらしないなおい。

「家の中でくらいごろごろしたいモーン。」

なんというか女子に対しても幻想が壊されるのってこういうことを言うのだろうか。見た目は美人なのに…。

掃除機をかけ終わると、窓を拭いていく。その時玄関が開いて、

「ただいまー！サマナーおやつちようだい！」

「ただいままだホー！オイラも！」

はいはい、まずは手を洗つてからだ：おい！二人ともかなり服汚れてるぞ！

まず着替えてこい！それから手を洗え！

そういうて着替えをもつてきて、リツパーたちに着替えさせる。

汚れた服はそこのかごに入れとけよ。洗濯するから。

「はーい。」

素直でよろしい。

着替え終わつたりツパーたちが手を洗つてゐる間に冷蔵庫で冷やしていたおやつとジュースをとりだす。今日はティラミスだ。  
ほら、おやつだぞ。

「わーい。いただきまーす！」

ティラミスを食べていくリツパーとジャアクフロスト。

食べ終わるとリツパーのほつぺにクリームが付いていた。

リツパー、ほつぺについてるぞ。：ああもう、とつてやるからこつちむけ。  
そういつてとつてやると、とつた後もリツパーがこちらをじつと向いている。  
どうしたんだ？

「サマナーつて…おかあさんみたい！」

…………はあつ！お母さんつてお前…そこはお父さんじやないのかよ？

「あ、わかる。なんかおかんつて感じ。」

「主婦感出てますよねー。」

なんだとう…なんかわからないけどショックだ。

リツパーはなおも僕に、

「ねえ、サマナー、今度からおかあさん、つて呼んでもいい？」

え。……せ、せめてお兄：お父さんにしてくれないか？

「おとうさん？つてなに？…ねえ、ダメ？」

ううつ、こんな目で見られると…。わかった。うちの中ならない。でもせめて外ではお父さんと呼んでくれ。

するとぱあっと笑顔になつて、

「うん！わかつた！おかあさん！」

やれやれ。それでも気になることを言つていたな。父親という概念を知らない

？

「結局認めましたね…。そんなんだからおかんといわれるんじや…。」

「そうよねー。」

そこー！うるさいぞ！まつたく：まあいや、掃除掃除。

窓を拭き終わった後、トイレも掃除すると、グライアイとアーケンジエルが帰ってきた。いい時間になつたので、夕食をつくりはじめる。今日はハンバーグだ。

夕食を食べた後、順番に風呂に入る。風呂に入つた後は、

テレビゲームをしていたところ、タマモやヴィヴィアンたちが乱入。桃鉄をやり始める。ヒートアップして、9時ごろにお開きになつた。

まだちよつと眠くないので、バロウズに頼んで、パソコンのプログラミングなどの

勉強をする。普段使っているこのスマホのこととか、もつと知つておきたいと思ったのだ。

実は基礎的な知識を収めた後、スマホのアプリのプログラムを見せてもらつたことがある。しかし、ちんぶんかんぶんだつた。もつと勉強してスマホに入つてるプログラム

のことを完全に把握したら、いつか、サマナー業に役に立つアプリとかプログラムを自分で作つてみたい。

寝たのは1時間くらい勉強して10時ほどのことだつた。

深夜。寂静まつたころ、慎二の寝室にジャック・リッパーが入つてきた。  
リッパーは慎二を見つけると、ゆっくりと近づいてナイフを振り上げ：「  
はい、そこまでです。」

タマモに呼び止められた。

「どうして邪魔するの？私たちは帰りたいだけなのに…。」

「帰つてしまつてはもう甘えることもできませんよ?」  
「でも…。」

「そこから何度かやり取りをし、やさしく諭すように言うと、リツパーは、「うん。わかつた。我慢する。」と言つた後、

「お母さん、おやすみなさい。」

と言つて部屋から出ていつた。残されたタマモは、「やれやれ、どうにか説得できましたか。」  
いつくしむような顔で慎二を見て、

「おやすみなさい、サマナー。」

と言つて部屋から出た。

ちよつと未来のお話。8／9 22：30 追記

みなさん、こんにちは。私の名前は間桐桜。

穂群原学園に通う1年生の普通の女の子です。

突然ですが、私には兄がいます。兄は…

「くおら！ 間桐慎二ーー！ 待ちなさーい！ まーた無断で学校さぼつてーー！」

「悪い。けどこっちにも事情が…」

「じゃあその事情を教えて？」

「悪い、無理。」

「そんなん通るかーー！ こら待てーー！ 学園一の問題児ーー！」

学園の不良生徒です。

「まーた朝からやつてんねー。」

「あ、美綴先輩、おはようございます。」

「ああ、おはよう、桜。しつかし慎二のやつ、

また学校さぼつて街散策してたのかよ。」

「はい。バイクで移動しながら何やら聞きまわっていたそうです。」

「ふーん…。ま、いいや、朝練いくよ。」

「はい。」

そうして2人で弓道場へ向かう。弓道場の中に入ると藤村先生から逃げてきた兄さん

が先にいた。

「おはよう。慎二。まーたやつてたのかよ。」

「…美綴と桜か、おはよう。…悪いとは思つてんだけどな。」

「ならもうちよつと心配させない様にしたら? 藤村先生かなり心配してたぞ?」

「この前だつて包帯まいて登校してきたし。」

「…だから悪いと思つてんだよ。それより桜、」

「あ、話そらした。」

「うるさいな。…桜、弁当。忘れてたぞ。」

「あ、ありがとうございます、兄さん。」

兄さんは不良生徒です。でも、根は素直で本当はとてもやさしい人です。

兄さんは不良ということで大体の生徒からは怖がられています。でも、

「間桐——！後生でござる——！勉強教えてくれ——！今回ピンチなんでござる——！」

「俺もだ——！数学教えてくれ——！」

「悪い慎二、俺も今回英語ちょっとまずい。教えてくれないか？」

「うおつ——！……わかつたからすがりつくな——！」

「間桐氏——！その卵焼きを一口くれ——！」

「あたしにもだ——！」

「たかるな！お前ら——！」

「慎二の卵焼きは絶品だからな……無理もあるまい……どうやってあの味を  
出しているのか……、穂群原<sup>7</sup>不思議の一つだ。」

「見てないで止めてくれませんかね？……おい！蒔寺！唐揚げまで取るな！」

「おい。」

「あ、間桐先輩。どうしました？」

「……お前の場合、ここはこうしたほうがいい。」

「…あ、本當だ！少し樂になりました！ありがとうございます！」

こんな風に面倒見がいいのでクラスメイトや後輩からは慕われています。それに、一部の女子にそれなりにモテるようです。

授業が終わって、下校するとき、兄さんが衛宮先輩をバイクの後ろに乗せてどこかへ行こうとしていました。

「桜、今日は先に帰つてくれ。帰りは遅くなると思う。」

「悪い、桜。ちょっと慎二借りてくる。」

「はい、兄さん。先輩。」

そうして家である一軒家に帰ります。前の実家は火事があつて燃えてしましました。その後、家にいる人たちで夕飯をおえて9時ごろ、兄さんたちが帰つてきました。今日は怪我をしてないみたいですね。

「ただいま。」

「おかえりなさい、兄さん。お夕飯温めなおしますね。」

「ああ、頼む。」

夕ご飯を食べると、兄さんはお風呂に入り、12時ぐらいまで部屋で勉強をします。そうして12時ごろ就寝。おやすみなさい、兄さん。

夜のとばりが落ちた街を高速で駆けていく影がある。

道路をあつという間に駆け抜け、瞬きする間に横を通り過ぎるくらいの速さ。ほかに車どころか人の影すら見えず、

それはまるで世界に一人取り残されたようだつた。

だがその時、

「慎二、そつちに行つたぞ！」  
「わかつた。迎撃する。」

手に持つた携帯・スマホから声が聞こえた。その向こうにはもう一人の人間が、

そして、慎二と呼ばれた少年のところには…。

瞬間、突如としてビルの隙間から巨大な影がぬつと伸びた。

道路を粉碎し、建物を破壊して、破壊の嵐をまき散らしながら。

まるで怪獣映画のように重く、それでいて高速で現れた。

「こいつがこここの異界を展開している悪魔か。：竜王ペンドラゴン。

アーサー王伝説にててくる概念としての竜の王ね。」

それは王の強権の象徴であるとも考えられ、またその姿はイギリスの騎士の盾の紋章などにも見ることができる。そういうものの皮をかぶつて出てきた悪魔。

ペンドラゴンは既に傷ついている。不利を悟つて逃げてきたのだ。

ペンドラゴンは慎二の姿を確認すると一目散に突っ込んできた！

もはや逃れられぬと悟つたのであろうか。目の前の小さな、しかし強大な敵を打ち倒すべく破壊しながら歩を進める。

慎二是それを前にして避けようともせず、ただ銃をつきつけて、

「至高の魔弾！」

放った。

放たれたそれはペンドラゴンの眉間にあたり、その鱗を貫通し、ペンドラゴンの体を突き抜け、抉り、蹂躪した。

体内を蹂躪されたペンドラゴンの巨体が崩れ落ちる。

そして、粒子状となつて消滅した。

「おしまい、と。終わったぞ、衛宮。」

「ああ、こつちでも確認した。お疲れ、慎二。」

ペンドラゴンが消滅した後、急速に世界が崩れていく。

そして次の瞬間、先ほどまでの破壊は嘘のようになくなり、そこには人と車が行き交う喧騒が戻っていた。

なんということはない。異界が崩壊して現実に戻つただけだ。スマホから聞こえる声に返事をする。

「お疲れさま。じやあ俺は帰る。」

「わかった。また明日な、慎二。」

そういつて通話を切り、バイクにまたがり、家路についた。

# 怪奇！住宅地に表れた鬼！衛宮士郎との出会い編

少年が走っている。わき目も降らずに。追跡者から逃れるため。

「はあつはあつはあつ。・・・つ。」

息が切れ、フラフラになりながらも、足を止めることはしない。

本能で理解しているからだ。

——追いつかれたら殺される。

後ろを振り向かず、一心不乱に走る。とうとう足をもつれさせ、転んでしまった。立ち上がりろうとして、影が覆いかぶさったのに気が付いた。

追いつかれただ——！

後ろを振り向くとそこにそれはいた。人に似た形でありながら、人間以上の巨体、赤みがかつたはだ。そして、頭に生えた角——。これを形容する言葉があるとしたら、鬼。

その言葉以外ありえないであろう容姿をした化け物がいた。

鬼はその手に金棒を持っている。それがふるわれれば人などなすすべもなくはじけとぶだろう。

あの金棒が振り下ろされれば俺はさつき殺された人と同じようにぺしゃんこになつてあちこちに体をぶちまけて殺される。

だというのに動けない。手足が震え、少しづつ後ろに後ずさることくらいしかできない。

今すぐ立ち上がりつてわき目も降らずに逃げるべきなのに、その鬼から目を離せなかつた。

心臓が爆発するように鼓動する。ここまで走つてきたこととその鬼に対する恐怖によつて。

鬼が金棒を振り上げた。思わず息をのんだ。ますます鼓動は早くなる。

だというのに手足は冷えたようを感じられる。

そして金棒が振り下ろされ、俺はそれを見続けていた。世界がとてもゆっくりに見える。

金棒もゆっくりと俺に近づいてくるように見える。そして俺を押しつぶす——  
ことはなかつた。

金属音とともに金棒は突如現れた誰かに受け止められ、その歩みを止めている。  
鬼はすぐさま金棒を戻すと今度は軌跡が見えないほどのスピードで横にふるう。

びよう、とこちらに届くほどぐふうの颶風を伴つたそれはしかし、またも受け止められる。それを繰り返すこと10回、時間にして1秒もかからなかつたと思う。

そのいずれもがその人を傷つけることはなく、しごれを切らしたのか鬼は両手持ちに切り替えて振り上げた。

「まずつ——。」

そんな言葉とともに俺の目の前にいた人が俺をいきなり蹴り上げた。

吹っ飛ばされ、ごろごろと転がつていく俺。

そして、轟音が響き、衝撃とともに破片が体にぶつかる。後に静寂が訪れた。

すぐに顔を上げ、鬼がいた方向を見ると、鬼は上半身と下半身に分かれ、

ずずうんという重い音とともに地面に崩れ落ちた。そして消滅していく。  
そんな光景を呑み込めないでいる俺に鬼を倒した誰かが近づいてきて手を差し出しながらこういった。

「おまえ、大丈夫か?」

目が覚める。時計を見ると時刻は朝5時半。起き上がりつて布団をかたずけると、日課である鍛錬をする。

「九十八つ、九十九つ、百、と？」

柔軟をしつかりした後、腕立て伏せと腹筋、スクワットを百回。

鍛錬が終わつた後は朝食の支度をする。時刻は6時。

今日は大根と油揚げの味噌汁とほうれん草のおひたしとたくあん、主菜に鮭の塩焼  
き。

準備を終えて皿に盛りつけていくと、

「おはよう、士郎。」

「おはよう、じいさん。」

養父である衛宮切嗣が入つてきた。そして、

「おはようございます！切嗣さん。士郎もおはよう！」

「おはよう、藤ねえ。」

「ああ、おはよう、大河ちゃん。」

隣に住むその筋の人の孫娘である藤ねえこと藤村大河が入つてきて食卓を囲む。

「「「いただきます。」」」

そろつて礼をして朝食を食べ始める。

力チャ力チャと箸を動かす音と食器を動かす音だけが聞こえる。時折聞こえる声も、「士郎ー、お醤油とつてー。」

「ん。」

というくらいのものである。

朝食を食べ終えて、

「ごちそうさま。」

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまー！あ！もうこんな時間！早く大学行かないと！いつときまーす！」

「いつてらっしやい、 大河ちゃん。」

「いつてらっしやい、 藤ねえ。」

と慌ただしく藤ねえが出ていく。

俺も食器を片付けると、切嗣に行つてきますと告げ、学校に向かう。

H Rの時間、最近事故や殺人事件が多発しているから注意するようになると

担任の先生が言つていた。胸が痛ましく感じた。

1日の授業を終えて下校する。帰る途中、商店街へ寄つて夕食の材料を買うことにした。

商店街を歩いて八百屋と肉屋に寄る。今日はシチューとハンバーグを作ることにする。

人参と玉ねぎ、じゃがいもと、鶏肉とあいびきミンチ肉を買って、家へと帰ろうとする。

道で困つてそんな人を見かけた。どうしたのかたずねると、

「親戚の住んでいるところに行きたいのだけど道に迷つてしまつて…。」

そこで俺は案内をかつて出た。

「ほんとう？ ありがたいけど買い物の途中なんじやないの？」

「いいよ。それにもう買い物は済ませたし。急ぎの用事があるわけでもないし。」

「そう？ なら頼んでもいいかしら？」

「ああ、まかせといてくれ。」

その人の住所は少し遠いところだつたが何とか案内することができた。

お礼の品を渡そうしてくれたけど、

「いいよ、好きでやつてることだし。」

と断つて別れ、家路についた。時刻は夕方。もうすでに日が落ちようとしていた。

「やばつ、急いで帰んねえと。」

そう思つて家路を急ぐ。走つていると、急に違和感を感じた。自分が今立つている場

所が

さつきまでいた世界とは違う。そんな感覚だ。

思わず立ち止まると、何かいいようの知れぬ不安に襲われる。いてもたつてもいられず、周りを見渡して、また走り出す。いきなり悲鳴が聞こえた。

声のした方向へ走り出すと、曲がり角に差し掛かる。声は左から聞こえた。そうつとのぞき込むと、そこには化け物がいた。

2m以上はある巨体に赤い肌に角、そして手には金棒。まるでそれは昔話にててくる鬼のような姿をしていた。

そして鬼の向かい側には腰が抜けた人がいた。鬼はその人に金棒を振り上げて、振り下ろした。

振り下ろされた人はつぶれていろいろなものを周囲にまき散らした。

—鼓動が早くなる。目の前で人が殺され頭が真っ白になつた。  
逃げるべきなのに体を動かすことを忘れていた。

その鬼は死体に近づくと死体を食べ始めた。血肉をすする光景に思わず後ずさる。と、その時鬼がこちらを向いた。目が、あつた。

自分が今、逃走していると気が付くと逃走することに全力をかたむける。

一目で人とは違うとわかるアレに、人では対抗できないことは理解できた。自分になすすべはない。逃走することしかできない。

理解しているからこそ追いつかれないようにできるだけ曲がり路を曲がりながら逃げる。

ふと気が付いた。人がいないことに。家にすら人のいる気配が感じられない。

さつきの違和感を思い返す。もしかしてここに結界を張ったのか？ここは結界の中？

だけどこんなに広い結界をどうやつて？人がいない理由は？

そんな考えが次々浮かぶがすべて打ち払う。

今は逃走することに専念しないとー。

どれくらい走つただろうか。すでに息は切れ、体は限界を訴えている。  
だが体を動かすことをやめない。

しかし、限界が来た体は意思とは裏腹に言うことを聞かない。足が絡まり、転んだ。鬼に追いつかれ、死がせまる。そして・・・

——その日、運命に出会いう。

いつもの朝。鍛練を終え、朝食をとつているとバロウズが異界の発生を告げた。

発生域は住宅街全体。人がかなり多い場所に発生したようだ。  
つーかまた全域か？探すの大変そうだ。

それに運の悪いことに今日は学校がある日だ。さぼつてしまおうか。  
いやでも見つかると通報されて面倒なことになる。

しかし早めに見つけないと被害が増えていく。それはいやだ。

「ちよつといいかしら？」

新しくダウンロードしたバロウズのアプリで不可視の<sup>ドローン</sup>探査機を飛ばせ、  
それでしばらく解析すれば、エリアの絞り込みができるらしい。

かなりありがたいがもうちよつとはやくほしかったなー。新都のときとか。

「あら？ それを受けたダウンロードしたのよ？」

あ、そう。にしてもどんどん便利になつてくな。

「ほんとチートかつてくらいですよね。つーかそれどつから持つてきたのか。」

「企業秘密よ。」

ま、ともかく僕が直接足で調べなくて済むのはよかつた。  
また駆けずり回る羽目になるところだつたからな。

朝食をおえて学校に行く支度を済ませて出発する：前に、  
言峰神父に異界の発生を告げておこう。

H R の時間、最近行方不明者や殺人事件が多発しているので注意するように、と  
担任の先生から注意があつた。悪魔関連のこともあるのだろう。  
言峰神父が働きかけて、事故や事件ということになつたようだ。

授業が終わつて下校する。すぐさま商店街へ寄つて買い物をすまし、  
家に帰つて準備をする。バロウズによると半径 5 km 圏内まで絞り込めたようだ。  
そこまで絞り込めたならば現地に行けばそこまで時間もかからず

ゲートを開ける場所を見つけられるだろう。

直行してゲートを開こうとすると、バロウズは、

「ちよつと待つて：ゲート開く必要もないわねこれ。」  
と言つた。

どういうことだとたずねると、

「現実との差がかなり少ない異界よ。初めにマスターが経験したみたいな。まずいわね。人がかなり巻き込まれるタイプよこれ。

人が多い分被害もかなりでかくなつてゐるかも。」

なんだつて!?それを聞いてたら悠長に学校になんて…。

とりあえず早く侵入するぞ!もうすぐ帰宅ラッシュが始まる!

そうなれば被害も増える!これ以上の被害が出る前に!

「了解。」

スマホを操作すると、一瞬の違和感に襲われる。

どことなく違う空気が漂う。ここはもう異界のようだ。

仲間を召喚して、バロウズに、異界でドローンを飛ばせるか尋ねた。  
「できるわ。けどマップ作製がせいぜいね。敵を感知する機能はないわ。  
……まつて、生命反応多数。そのうちの一つが消滅。  
近くにあつたもう一つが移動してる。

悪魔の反応もついてきてるわ。追われてるわね。」

なんだつて!?よし!まずはそこに行くぞ!

現場のほうに急行する。

走つていくと遠目に赤い角の生えた鬼のような悪魔が見える。

手に持つてゐる金棒を振り上げた先に赤毛の少年がいる！ まざい！ 僕は補助魔法をかけさせ、一気に距離を詰め、金棒を剣で受ける。補助魔法のおかげでもあるのか力負けしていない。が、結構重い。何回もは受けきれないぞ！

何回か受けていると、しごれを切らしたのか両手に持ち替えようとする。まざい！ 両手がしごれてきたところにあれば受けきれない！ かといって避けたら後ろのやつにあたる！

とつさに後ろのやつを文字通り蹴飛ばして金棒を受け流しつつ、悪魔の懷に飛び込んだ。そして、

「絶命剣！」

スキルを放つて胴を両断。上半身と下半身に分かれた悪魔は消滅した。戦闘が終わって、蹴飛ばした奴の無事を確かめると、手を差し出した。

お前、大丈夫か？

とたずねると、

「あ、ああ、だいじょうぶだ。」

といつた。こいつよく見たらどつかで見たような？

「なあ、あんた別のクラスの間桐慎二だろ？」

同じ中学の同級生だった。どうりで。

「なあ、今のつて…「ちょっと待つてくださいよー！」ん？」

どうやらおいてきたタマモたちが追いついたようだつた。

「はあはあ、やつとおいつきましたよ！もう！」

一人で突つ走られると困るんですけどー？」

悪い。けど急がないと間に合わなかつた。

「えつと、その人たちは？人…じゃないよな？」

さつきのやつらと同じような感じがするんだけど。」

「ちよつと！あんなのといっしょにしないでもらえますか！」

「え？」「ごめんなさい…」

ちよつと黙つてくれ。話が進まない。

つーかそんなに悠長にしてられない。歩きながら説明するぞ。

そういうつて悪魔の反応を頼りに移動していく。

今回は悪魔も少ないようだ。

一番強い悪魔の反応をたどりながら話す。

「つまり、この人らは契約した悪魔で、味方つてことだな。

契約したつてことは……もしかして魔術が使えるのか？」

「なに？お前もしかして魔術師の家系なの？」

「え？うん。まだ修行中の強化すら使えない半人前だけど。」

「あ、そう。……魔術師の家系だけど魔術回路閉じきつて魔術は使えない。」

「え？じゃあどうやつて？？その手に持つてる機械か？」

「そうだよ。もつともこれは僕専用だけど。」

（地味ーに魔術が使えると聞いて嫉妬してますね。）

（それがコンプレックスみたいだしね。）

なんか後ろでひそひそ話してやがるが話を続ける。

なんか隣でこいつ：衛宮士郎という名前の少年が考え込んでいる。

そして、

「なあ！俺も仲間に入ってくれないか！」

とかいいだした。

はあ？お前なに言つてんの？さつき死にかけてたのに？

「俺、さつきのあんたみたいに理不尽に殺される人を救いたいんだ！」

…そんなこといつても鍛えるとかできないぞ？

僕基本的に異界もぐつて悪魔倒してレベルアップして強くなつたし。

「じゃあ、俺も異界にもぐつて悪魔を倒す！」

悪魔が出てくると人が死ぬんだろ？一石二鳥だ！」

そんなこと言つてもこのスマホのおかげで契約も侵入もできるようになつたんだぞ？これは譲れないし…。

「そつか…。」

と、その時、胸元で何かが反応していることに気づく。

取り出してみると、もう一つのスマホだつた。もしかして…。

「この子に反応してるんじゃない？」

とバロウズ。

嘘だろ？ そうだとしても渡さなくとも…

「そのスマホが反応したということはどのみちこの子は悪魔にかかわりつづけるわ。

そのときに有効な対抗手段があつたほうがいいんじゃない？」

それに、戦力は多いほうがいいんでしょ？」

ぐ…。わかつたよ。ほらよ。

スマホを渡すと何やら認証するという言葉が表示されている。

「あー、えーっと？」

指で触れればいい。とつたえると、わかつたといいタツチする。

しばらくすると、認証が終わつたようだ。

「えーっと、で、これはどうすれば？悪魔召喚プログラムとかあるけど。」

「…？そのスマホ、バロウズ入つてないのか？」

「帰つたら教えてやる。いまはここを出ることを優先するぞ。」

「それと、これも持つとけ。」

「そういつてアギストーンなどの魔法石を渡し、

異界を進みながら悪魔を倒していく。」

海岸近くに行くと、一番強い反応の悪魔が近づいてきた。

悪魔を見つけると、クモのような見た目をしている。

「だけどそいつの頭は牛のようだつた。」

「あれは牛鬼ね。非常に残忍・獰猛な性格で、毒を吐き、人を食い殺すこと

を好み、主に海岸に現れ、浜辺を歩く人間を襲うとされているわ。」

「なるほどな。よし、気づかれないうちに奇襲をかけるぞ。」

「そろりそろりと近づいていく。衛宮は離れたところでニスロクに

護衛させている。十分な距離に近づくと、一斉に炎魔法を放たせる。」

「主に水辺にいるのであれば、弱点は炎か電撃なはず。」

魔法が放たれると同時に前衛がかけだして牛鬼に近づく。  
かく乱して後衛を攻撃させないためだ。

近づいて攻撃しながら、後衛に魔法を撃たせる。

予想に反して炎も電撃もそこまで効果はないよう見られた。  
しかし、地力で優っているため、そこまで苦戦はしていない。  
自重に任せた体当たりは厄介だが躲せないほどではない。  
このままいけば順当に倒せる。

「ぐあつ!?

そう思っていた矢先、衛宮の悲鳴が上がる。

見ると2体のオニが衛宮達に襲い掛かっている。

1体はニスロクが受け持つていてがもう1体は衛宮のほうに向かっていた。  
衛宮は持たせていた石を投げつけているがオニはじりじりと迫ってくる。  
くそつ！ここからじや守りに行けない！

後衛も離れていて今からでは魔法を撃つても間に合わない。

鬼が獲物を振り上げ、まずいつと思つた瞬間、

衛宮の持つていたスマホが光を放ち、召喚された騎士のような悪魔が  
現れたかと思うとオニを剣で両断した。

ニスロクも相手していたオニを焼き払ったのを確認して、  
弱りつつあつた牛鬼の隙をついてスキルを発動。

「怪力乱神！」

牛鬼を吹つ飛ばす。牛鬼は家に突つ込んで動かなくなり消滅。  
それを確認すると急いで衛宮のほうに向かう。

おい！だいじょうぶか？

「ああ。この人が守つてくれたから。えーっと、」

「私の名前はアコロンです。以後、お見知りおきを。」

「ああ。俺の名前は衛宮士郎だ。よろしく！アコロン！」

勝手に出てきたように見えたけどそいつ、ちゃんと契約してるのか？

「え？・えーっと、契約…してないな。」

じゃあどうやつて召喚されたんだ？マグネットイトは？

「たぶん、マスターのを少しづつ集めてたんじゃないかしら？」

普段生活している中でスマホにマグネットイトを集める機能を使つて。

「え？そんなことしてたの？悪魔倒す以外にもそんな集め方あつたんだ。  
あら？·いつてなかつた？普段の生活で出てくるマグネットイト集めてること。  
ちなみにレベルが上がると生産するマグネットイトも増えるわよ。」

「まあいいや、それで、どうするんだ？」  
「どう…つて？」

「そいつと契約するかだよ。しないのか？」

「しない場合もうすぐ異界の消滅にともなつてどこかに消えることになるぞ。

「えっと？俺と契約してくれないか？アコロン。」

「む？それはまずい。…いいでしよう。この身はあなたを守る剣となりましよう。」

「契約が完了したようだ。それと同時に異界が解かれ、現実に戻る。

言峰に連絡を取り、ひそかにドローンでマーカーを  
つけておいた人たちの記憶処理と事後処理を頼んだ。  
そして衛宮に話しかける。

「今日はもう遅いから帰るぞ。明日から詳しいことを教えてやる。」

「ああ。…やべつ、もうこんな時間かよ！急いで帰らねえと！  
じやあな！」

「あ！それと今日のことと悪魔のことは誰にも言うなよ！

そう叫ぶと、わかつたと返事が来た。

衛宮を見送ると、言峰のところに行く。案内をするために。  
やれやれ今日は遅くなりそうだ。

少しため息をついた。

オニがせまつてくる。ニスロクさんはほかのオニと戦っている。  
こつちを助ける余裕はない。

渡された魔法石をぶつけていくが足を止めてもこちらに少しづつ近づいてくる。  
魔法石を投げようとしてすべて使い切ったことに気づいた。

少しは効いているのか動きは鈍っているが、

あんなもの振り下ろされた時点で死ぬのは避けられない。

振り下ろされた金棒を避ける。その余波だけで吹き飛ばされ、  
壁にたたきつけられ、息ができなくなり、動けなくなる。

「ぐあっ！」

思わず悲鳴を上げた。

オニは動けない俺に迫つてくる。俺の前まで来ると、手に持った金棒を振り上げた。

俺はオニを、その凶器を見つめていた。当然だ。

だつてあれが振り下ろされれば自分は死ぬ。目の前で殺された人と同じように、  
ペしやんこになつて、いろいろものをぶちまけながら。

そのあと血肉をすすられるかもしねない。

⋮ふざけてる。

そんなのは認められない。こんなところで意味もなく死ぬわけにはいかない。助けてもらつたのだ。なら、助けてもらつたからには簡単には死ねない。

俺は生きて義務を果たさなければならないのに、死んでは義務が果たせない。

そんな簡単の人を殺すなんて、そんな簡単に俺が死ぬなんてふざけてる。

悪魔に二度も同じようなカタチで殺されかけるなんて、そんなバカな話もふざけてる。

ああもう、本当に何もかもふざけていて、おとなしく怯えてさえいられず、

「ふざけるな、俺は——」

こんなところで意味もなく、お前みたいなやつに、殺されてやるものか——

それは、本当に。魔法のように、現れた。

スマホが光を放つ中、それは現れた。思考が停止している。

現れたそれが騎士のような恰好をしていることしかわからない。

ぎいいいん、という音。

それは現れるなり、俺を叩き潰そうとした金棒を打ちはじき、戸惑うことなくオニの懷に飛び込み、両断した。

鬼を倒したそれは静かにこちらへ振り返り、  
「けがはありませんか？」

と手を差し伸べて優しく尋ねた。

# 邪眼の異界編 前編

衛宮との出会いがあつたあの事件から3週間程がたつた。

あの後、衛宮から相談された結果、衛宮の父親に打ち明けることになった。  
その時にその父親、衛宮切嗣さんから詰め寄られたり、

いつしょに異界騒ぎにまきこまれたりしたけどされはまた別の機会に。  
結局衛宮がデビルサマナーになることは認めてもらつた。

スマホの使い方を教えた後、出てくる悪魔が弱い異界が発生すれば一緒にもぐり、  
戦いを見守る方針で実力をつけていくのを見守つていて。今はLV15くらい。

戦いがない日でも道場でアコロンに剣の稽古をつけてもらつていて。  
その時は僕も一緒に混ざることもある。

レベルアップの仕組みと効果を説明した後、

切嗣さんからは銃器をもらい、その扱い方を教えてもらつた。

なんで使えるのかとかなぜ持つているのかは深くは聞かなかつたが、  
戦う上ではとても役に立つ。ありがたく教授してもらつた。

普段の訓練に加えている。弾は貴重なので改造エアガンで代用してるので。

最近のことを説明し終わつたところで、今日の昼の話になる。  
学校の給食の最中に、スマホが反応を示した。

クラスメイトから見えないように隠し、

誰にも見つからないようにこつそりと屋上にのぼり、  
スマホをとりだすと、バロウズから報告を受けた。

「新都の一部に異界が発生。いまドローンを飛ばしたわ。」

とのこと。スマホをポケットにしまい、また何食わぬ顔で教室に戻る。  
授業がすべて終わつた後、衛宮に声をかけて、知らせておく。

どうやらエミヤのスマホにはダウンロード機能とかがないらしい。  
異界検知機能と異界開き機能はあつても、ドローンとかはないので、  
こつちから情報を共有するのは大事なのだ。

バロウズが言つていた異界が発生しているところまできた。  
しかしどこか様子がおかしい。街ゆく人々が身に着けているものや  
街中のあちこちに、

「目を模したものが大量にあるな…。」

そう、目をモチーフにしたであらうものが大量にある。アクセサリーであつたり、

広告であつたり。そちらかしこから見つめられてるようで氣味が悪い。

それに、周りを見回すと、変なオブジェがあるのだ。

なんだろうかと思い近づくと正体がわかつた。

石像だ。しかも恐ろしいものを見たような恐怖を張り付けた顔。

まるで人間をそのまま石に変えたかのようなあまりに精巧な石像。

もしかして……。

「おい、慎二。これって……！」

「そうでしょうね。……それにこの石像、1時間くらい前まで生きていたようね。衛宮も気が付いたようだ。まるでではなく本当に石に変えられたのだろう。バロウズに伺うと、

「そうでしょうね。……それにこの石像、1時間くらい前まで生きていたようね。今は手遅れだけど、生きていれば元に戻すこともできるわ。」

その言葉を聞いて、こうしてはいられないと、異界開きできるところへむかう。ゲートを開くと突入した。ゲートを出た先は、

「島？ 向こうには洞窟もあるな。」

なんというか空気が乾いた感じがする島だつた。

なにがともあれ、仲魔を召喚する。一度バイト中に呼び出したこともあり、

最近は呼び出される前に身代わりを置いていくらしい。

「はーい！タマモ、ただいま参上いたしました♪」

「おう、呼ばれたぜ。」「はいはい。出番ね。」

「出番ですねー？がんばります！」

「出番？頑張るね？ホ。」「ガンバルホー！」

「出番かしら？わかつたわ。……、かなり懐かしい雰囲気がするわ。」

なつかしい？どういうこつちや？

「なんだかお姉さまの気配がする…。」

お姉さま？お姉さまっていふと、

「ゴルゴーン3姉妹のことね。中でもメドウーサは見たものを石に変える魔眼をもつわ。

パラダイムシフトによつて目をモチーフにしたものが多くなつたのもそれが関係しているのかもしれないわね。」

つまりここで出てくる悪魔は目、特に邪眼に関係するやつが多いかもしだれないつてことか。見られるだけでアウトなのは厄介だな。

「その場合は私が治療できますー。安心してくださいー。」

だからつて食らいたいものでもないんだけど。

邪眼と言えば、あいつを思い出すな。いやな思い出だけど。

「バロールか。もしかしたら出てくるかもしんねえな。ま、そん時はもう一度倒すだけだ。そうだろう？」

そうだな。よし、いくぞ！

「その洞窟の中から反応があるわ。そつちを調べてみて。」

僕たちは洞窟へと向かつた。

探索していると、広い場所に出た。そこには多数の石に変えられた人たちがいる。

「……残念だけど生命反応は一つもないわ。近くに下手人がいるはずよ気を付けて。」

どこからか音が聞こえたので、音のするほうへ慎重に近づくと、何やらとさかと体がやたらでかいトカゲがいる。

まだこつちには気づいていないようだ。隠れてバロウズに解析を頼む。

「……でたわ。あれはバジリスク。見るものに死をもたらし、

強力な毒をもつといわれる伝説上の生物ね。

ファンタジー小説とかだと石化の魔眼をもつことが多いわ。」

確定だな。こここの悪魔は邪眼に関係するものが多そうだ。

そこら辺の対策があればいいんだけど、どうしようか。

「今のマスターなら見られてすぐに石になることはないと思うわ。」

「こちらの札を持っていれば抵抗力が増しましてよ。」

それとちよつとおまぬけな名前ですけど：予防のパウパウ！  
これでしばらくは状態異常が無効化できますわ。

具体的に言うと次のターンまで。」

次のターンってなんだ？

「こつちも少しは抵抗力を増やせるわよ。」

「ルーンもあるぜ。…なんだ、気にしなくてもよさそうじやねえか。」

こういうときお前らが仲魔でよかつたと思うよ。

まあまずはあいつを奇襲してみられる前にやろう。

見られずにやるに越したことはない。

そうと決まれば話は早い。前衛3人はこつそりと後ろへ回り込むと、

「まずは一発！アギダイン！」「いくわよ！ブフダイン！」「ザンダイン！」  
魔法で攻撃させて氣を引いた隙に前衛3人でとびかかつた。

「スクラツチダンス！」「絶命剣！」「デスマウンド！」

まずは一気につきでダメージを与える。

バジリスクにあたつたが感触は少し硬い。大きくは切り裂けていないな。

「なるほど、確かにかてえ。少しほは楽しめそうだぜ。」

硬いがどうということはない。このままダメージを与えていくだけだ。

と、その時、バジリスクがこちらを向いた。

そして前足を振り上げこちらにたきつけてきた。

3人ともそれをばらばらの方向へ回避。同時に見つめられないよう分散する。後衛も岩陰に隠れながら援護を放つていく。

タマモたちは魔法で、衛宮は弓で。

アコロンは他の悪魔から後衛を守るため警戒している。

バジリスクは今度は口から何か煙のようなものを吐き出した。

それを吸うと気分が悪くなる。これは毒ガスか！

「予防きれちゃつてました!? 予防のパウパウ！」

「でも治せないんですねーこれ。」

「そこはまかせてください！ ポズムデイ！」

プリンシパリティ（この前ハイレベルアップした）の魔法で気分がよくなる。ナイス！ ふたたびバジリスクを攻撃していく。

ちらつと仲魔を見ると、リツパーの動きが少し鈍っている。もしかすると。プリンシパリティ！ リツパーにパトラ！

「はーい！ パトラ！」

どうやら当たっていたようだ。リツパーの動きがよくなつた。

「ありがと！」

このように状態異常に苦しめられながらもバジリスクに少しづつ傷を負わせていく。クーフーリンが目を細め、会心の眼光を発動し、

「そらよ！ 暗夜剣！」

バジリスクの傷が深いところを2回ざっくりと抉った。  
そして、バジリスクはこのままではやられると思ったのか、  
目を見開き手当たり次第に暴れだした。周囲の岩や石像が破壊されていく。  
中には血をぶちまけた石像もあつた。

「あいつ……」

岩陰に隠れていた衛宮がバジリスクをにらみ、弓に矢をつがえバジリスクの目を狙つて矢を放つた。さつきまでは瞼を閉じて対処していたバジリスクだが、半狂乱になつていていたためか矢に気が付いていない。

矢は正確にバジリスクの目をとらえ、バジリスクは苦しみ悶え始めた。

今がチャンスだ！ クーフーリン！

クーフーリンに合図を出すと、クーフーリンはバジリスクの頭めがけて跳び、「そら、これでしまいだ！」

射貫かれた眼窩へと槍を突き出し、バジリスクの頭蓋を貫いた。

倒れたバジリスクはそのまま消滅した。

戦いの後、衛宮に声をかける。

「お前、やるじyan。目を正確に射貫くなんて。」

「おう、サンキュ、慎二。…あそこ、なんか落ちてるぞ。」

いわれてバジリスクが倒れた場所を見ると何やら落ちている。

拾つてみるとそれは青いガラスに白、水色で目が描かれたものだつた。

「それはナザール・ボンジュウね。」

邪視から災いをはねのけると信じられているお守りで、

トルコの代表的なお土産よ。」

「何やらそれからは神秘を感じますね。」

邪視に対しても効果があるんじやないでしようか?」

つまりこれを身につけておけばある程度楽になるということか。

しかし一つしかないな。」

「俺は前に出て戦わないんだし、慎二がつけてろよ。」

「大将のサマナーがつけておいたほうがいいと思うぜ。」

「お母さんがつけていたほうがいいと思う。」

「という意見があつたので、僕がつけておくことにする。」

穴をあけてひもを通して、首からかけ、服の中へ。

しかしガラスでできている分耐久性に不安があるな。

そんな心配をよそに、倒した後開いた扉の奥にあつた宝箱を開けて中身を取った。何やら奇妙な文様だ。手の一部分にも見えるし目？の一部も書かれている。

「おそらくはそれ分割されちゃつたんじゃないかしら？」

残りも探してみたら？」

そうしたいのはやまやまだけど一刻も早く異界を解きたいな。

とりあえず進もう。

進んでいくと、今度は人工的に作られたような大きな空間に出た。

岩を削つてホールにしたような感じだ。天井には月の満ち欠けが描かれている。

他のところに通じている道が入つてきた道を含めて5つあり、あちこちに石像があり、ホールの中心には大きな5つの石像がある。そしてその奥には扉があつた。押してみたが開かない。

仕方がないので中心の石像に近づいてよく見てみた。

1つは頭部を落とされ、頭部の目の周辺が破壊されているが4つは無事だ。

それぞれ、ニワトリとドラゴンを合わせたような生き物、

とても頭のでかい牛、バイザー付けた美女、なんか見たことあるやつ<sup>ローラー</sup>

の形をした石像だ。

これつてもしかして…。

「ここ」の異界にいるボスの石像って感じね。もしかしたらバジリスクは  
こここのボスのうちの一體だったのかも。」

やつぱりか。なんとなくゲームっぽい異界だなあ。

起きてる被害は冗談で済まされないのに。

しかも嫌な予感通りまたバロールか。テトラジャストーンないぞ。

「あー・テトラジャ使えます！」

まじで？ならプリンシパリティをやられないように戦えばいいな。

あれからさらに強くなつたんだ。今度はそう簡単にはやられない…と思う。

「頼りねえなあ、おい。」

うるさい…こつぴどくやられたほうは苦手意識が強くなるんだよ！

それについても石像から悪魔の情報がわからないかな？こんだけ特徴出てるし。

「ええ。ここまで出ていたら推測はできるわ。違うのを出してくる可能性も

あるけどね。

ニワトリの頭をもつてるのはコカトリス。

さつきのバジリスクから派生して生まれた怪物。

バジリスクと能力はそう変わらないわ。

とても頭の大きい牛はカトブレバスね。西エチオピアに存在するという、  
当時ナイル川の源流であると信じられていたニグリスという泉の傍に住む動物よ。  
非常に重い頭部を持ち、そのためいつも頭を地面に垂らしているといわれてるわ。  
カトブレバスの眼を見た人間は即死すると言われているわ。

最近のファンタジー小説とかでは石化の魔眼になつてゐるみたいだけど。

まーた即死の魔眼が石化に変わつてんのか…。

「まあ石化も即死も普通の人間にはあんまり変わりませんものね。」

まあそなんだけどさあ。

「そして最後の石像は…。『メドウーサよ。』

途中でバムブレードーが遮る。

「その石像はメドウーサお姉さまの姿よ。」

ええー？ほんとでござるかー？どう見てもバイザー付けた美女にしか見えないぞ。

「予測していたことではあるけど、やつぱりね。」

とバロウズ。

スマホが震えている。どうやら他のグライアイも召喚してもらいたいようだ。  
他のグライアイも召喚した。

3人そろって召喚された状態のグライアイは並んで話しかけてきた。

「ねえ、サマナー。」「お願いがあるの。」「メドウーサお姉さまと話をさせて。」

順番に話すグライアイ。

それはいいけど、どうしてだ?

「私たち。」「お姉さまと戦いたくないの。」「説得させて。」

「それに、話したいことだつてあるわ。」

そんなこと言つてもあつちが聞いてくれる保証はないぞ?

石像があることから操られている可能性もある。

それに、倒さないとあそこにある扉が開かない可能性だつて。

「お願ひよ!!」「お願ひよ!!」「お願ひよ!!」

グライアイたちは同じ顔でこちらをじつと見つめてくる。

⋮しようがないな。無理そうならあきらめろよ? その時はお前たち抜きで相手する。

「ありがとう! サマナー!」「ありがとう! サマナー!」「ありがとう! サマナー!」  
ぱあっと顔を輝かせるグライアイ。

まあさすがに慕つてる姉と戦わせたくないしな。

それにもしかしたらメドウーサがいなない場合だつてあるし、  
1発で遭遇するわけでもない。さつさと行くぞ。

そういうつて僕たちは続いてる道の一つを歩き始めた。

続いている道の先にいたのはコカトリスだつた。

斬りつけたり、槍でついた際に毒でおかしてくる点や、

衝撃魔法を放つてくる点、石化の魔眼は厄介だつたが、

バジリスクとそこまで戦法が変わらないので先ほどよりは楽に戦えた。

ナザール・ボンジュウのおかげか先ほどより魔眼の効果は感じられなかつた。

続いての道にいたのはカトブレパス。

奇襲を仕掛け、先制攻撃を放つと、その重い頭をハンマーのように振り回して攻撃してきた。その一撃はクレーターをもうけ、衝撃だけで吹き飛ばされるほどである。巨体による攻撃も厄介ではあつたが、重すぎる頭のせいで動きは鈍く、簡単に避けられた。

むしろ厄介だつたのは石化の魔眼である。コカトリスやバジリスクより強力で、手足が石のようにはじかめられ、動かなくなる速さが早かつた。

そういう時はプリンシパリティのメパトラによつてすぐに治療された。しかし相手の傷が増えるにつれ、体の動きが激しくなつていく。うかつに近づけばやられるため、すきを窺つて攻撃していく。と、突如頭の動きを止めた。また魔眼を使う氣だ！

その時、エニユーオーが魔眼を発動した。

「その重い頭、もつと重くしてあげるわ！」

カトブレバスは頭を地面につけ、動きが止めた。

「今だ！ リツパー！ クーフーリン！」

僕はカトブレバスの頭へ走り、スキル・暗夜剣を発動。

とつさに目を閉じたカトブレバスの厚い瞼を二回斬りつける。

そこへリツパーがさらに紫煙乱打で傷を深くして、

そしてクーフーリンが、

「食らいな！」

地獄突きを発動。傷の深いところから数回、脳髄まで抉る。

食らったカトブレバスはそのまま動かなくなり消滅した。

コカトリス、バジリスクと倒した後、開いた扉の奥にあつた宝箱を開けると、やはり欠片があつた。それぞのやつを合わせると、

手の半分から上と、目の半分から上が描かれた文様が書かれている。

それに鍵を指の上に載せている。

「…これはハムサのようだけど…鍵を載せているものなんて

聞いたことないわね。

ハムサは主に中東で使われる、邪視から身を守るための護符よ。ファーティマの手あるいはファーティマの目としても知られる、手の形をしたデザイン・シンボルね。イスラム社会、

中東のユダヤ教徒社会で使われたわ。

まだ完成していないみたいだけど完成したらこれも効力を發揮すると思うわ。」  
鍵…。もしかしてこれあの扉を開くためのものなんじや?

だとしたら鍵を守る門番つてことか。回りくどいことするなあ…:  
「サマナー、それ言っちゃおしまいです。お約束つてやつですよ。  
それに直行できたらゲームがつまんないじやないですか。」

お前は何を言つているんだ。

…次行こう。さつさと完成させるぞ。

ホールに戻つて次のバスへの道を行く。

「早くお姉さまに会いたいわ。」

とエニユースターがぼやいていた。

次に出た大きなフロアにはどこかけだるげな美女がいた。

「おや。生きている人間がここに来るとは。戦うつもりですか? 面倒ですね。」  
はあ、とため息をついている。

「お姉さま!」「お姉さま!」「お姉さま!」

グライアイ3姉妹がメドウーサに駆け寄つた。

即座にメドウーサに鎖で威嚇された。

「あなたたちなんて知りません。人違いでは?」

「メドウーサお姉さま!<sup>グライアイ</sup>私たちよ!」「わからないの?!」

「知りません。私を売った姉妹なんて。」

しつかり覚えてるじやねーか。

グラライアイたちは気まずそうに顔を背ける。

「それは…。」

「今までさんざん私に頼つてきたのに。ねえ?言つてあげましょうか?

あなたたちの弱い過去を。」

そういうとメドウーサは話始める。

ある時は—

「できたわ!お姉さまたちにあげる花冠!」

「<sup>エニュー</sup>オーフリ もよ!」

「私デイノも！」

「あいつらだな…おい嬢ちゃんたち、こち辺にメドウーサつてやつがいるだろう。  
そいつのところまで案内しな。」

「キヤー！誰よ！あなた！」「いやよ！ひどい」とするんでしよう！」

「あなたなんかに教えてあげるもんですか！ベーツ！」

「なんだとこの野郎！」

「キヤー！」「助けてー！」「お姉さまー！」

魔眼を使って動きを止めた後、逃げていくグライアイ。

そしてそのままそれを追う追跡者。別の視点から見れば案内している。  
「はあ、またですか。：死になさい。」

「ぐがあつ!?」

「ありがとうお姉さま！」「これ、あげる！いつものお礼よ！」「お姉さま大好きー！」

「ふふっ、ありがとう。」

またある時—

「もうちよつと右よ！」「よいしょ、よいしょ。」「とれたわ！」

「いっぱい取れたわね！  
デイノ・バムブレード 私デイノ・バムブレードたデイノ・バムブレードちデイノ・バムブレード！」

「早速お姉さまたちのところに持つていきましょう！  
エニユーオー・バムブレード 私エニユーオー・バムブレードたエニユーオー・バムブレードちエニユーオー・バムブレード！」

「ええ！…ああ！それ私たちがとつたものよ！返して！」

「いやなこつた。それより嬢ちゃんたち、案内してくれよ。」

「嫌よ！」「果物返しなさいよ！」「ドロボー！」

「ピイピイやかましいな。どうせ怪物の仲間だ。殺しちまうか。」

「イヤー！」「助けてー！」「お姉さまー！」

「よくも私の妹たちを…！死になさい！」

「ぐわー！」

「ありがとうお姉さま！」「これ、取ってきたの！」「ほめて！」

「よしよし、いい子いい子。」

またある時—

「お嬢さん。ここら辺にメドウーサという怪物がいるそうなんだ。

どにいるか知らないかい？」

「メドウーサは私たちの姉よ！」「お姉さまを売るもんですか！」

「帰りなさい！」

「下手に出ればいい気になりやがつて…！」

「お姉さまー！」

以下略

「ふふつ、思い出しましたか？自分たちがいじめられていたときのことを。」  
……………」「いつら昔からいじめられっ子体質だったのね。

今でも割とよく泣きついてくるぞ。

「ザマ”ナ”ー!!リッパーにおやつとられたあ”ー!!」

「こら！僕のやるから返してあげなさい！ほら、あやまつて！」  
「ごめんなさい…。」

「な、何よこいつ…や、やる気?!本気出せばあなたなんて…。」

「バウツー！」

「ピヤツ！サマナー！」

「あー。ほらほら大丈夫だから。なんで悪魔と戦うのは平気なのに  
犬はダメなんだ…。」

「サササマナー。い、一緒に寝てあげてもいいわよ?」

「断る。寝る前にホラー映画なんか見るからだろ‥。姉妹で寝ろよ。」「うつ、ぐすつ、ひぐつ。」

「わかつたわかつた。ほら、入れよ。」「あ”り”がと”――!』

「な、何でばらすのよー!」「ひどーい!」「サマナーの馬鹿ー!」

「フフフ、ほらやつぱり。誰かに頼らないと生きていけない。

そんなあなたたちを守つてあげていたのに‥。

どうしてペルセウスなんかに売ったのですか?ねえ?」

「それは…」

少女たちは姉と同じであつた。正確にはステンノとエウリュアレの二人の姉。

か弱く、一人ではたやすく傷つき、飢えて、死ぬ。

「誰かに守られなければ生きられない少女」

姉たちのように3人とも同じ存在で、そして、男たちに支配されるために産まれた神格。

しかし、姉たちとは違い、可憐というワケではなかつた。

生まれからしていじめられ、嗜虐心を満たすために生み出された存在。男の夢見る一つの理想であり、男の支配欲を満たすための存在だつた。しかし、いじめられすぎて精神が死なれてはこまる。

そこで神々はグライアイに目を与えた。それが魔眼。

それにより逃げることができた。それによりいつそう嗜虐心を、支配欲を刺激しながらも。

姉たちにあつたのはいじめられて逃げているときだつた。自分たちによく似てゐる。

そういわれて拾われた。そこからは姉に守られる日々が続いた。形のない島に行くときもついていった。

そこでは幸せだつた。時折いじめられても姉メドウーサが守つてくれた。姉メドウーサにお礼をするといつも微笑んでくれた。

だけど。姉メドウーサは怪物になつてしまつた。私たちも守つてくれなくなつた。

それでも姉メドウーサのそばから離れる気にはなれなかつた。

幸い魔眼があれば鳥だつて落とせるし、姉ステン・エウリュアレさまたち

とは違つて、木に登つて果物を取るくらいのことはできた。

生きしていくことができた。

あの日、あの男ペルセウスが来るまでは。

「すいません。あなたたちがグライアイですか？」

またか。とおもつた。その男は

「メドウーサの居場所を教えてほしい。人々を苦しめる怪物を対峙しに來た。」

といつた。

「嫌よ。」「今は怪物になつてしまつっていてもあの人は私たちの姉よ。」

「姉を売るような真似なんてしないわ！」

そういうとペルセウスはいつたん引いた。

その夜だつた。ペルセウスは私たちの魔眼を編んでいる三位一体の冠を取つた。

朝起きてそのことに気が付いて恐怖した。

あれがなければ私たちは元のか弱い、自分で自分を守ることのできない少女に戻る。

そして、ペルセウスがやつてきた。

「…あなたたちの探し物はこれでしよう。もう一度聞きます。  
メドウーサの居場所を教えてください。」

従うしかなかつた。あれがなければ身を守れない。

しぶしぶ姉の居場所を教えた。

「さあ!」「教えたわよ!」「返してちようだい!」

それをことりあろうかあの男は、

「ええ、返します。ですがメドウーサに来たことを告げられては困る。

しばらく預からせてもらいますよ。」

と言つて走り去つた。

私たちはそれを追いかけた。

「まつて!」「それがないと!」「わたしたち!」

そしてついた先の湖に男は冠を投げ入れた。

湖を必死に探した。だけど深くて取れなかつた。途方に暮れるしかなかつた。

それから姉のところへ行くと手遅れだつた。姉は殺されていた。悲しんだ。

食べ物は取れる。だけど身を守ることができない。

あの日、ねぐらへ帰る途中に獣に襲われて…。

うつむいたままグラライアイたちは顔を上げない。

「はあ、もういい。ここで死になさい。」

そういってメドウーサは石化の魔眼でグラライアイたちをにらむ。

「くうつ……」

苦悶の声を上げるグラライアイ。

そこで顔を上げた。

「私たち<sup>グラライアイ</sup>は確かにペルセウスに場所を教えたわ。」

「それは言い訳できない。」

「だけど、お姉さまを愛しているわ！ 今でも！」

「言いたいことはそれだけですか……！」

メドウーサはさらに重圧をかける。

「バムブレードー！ エニユーオー！ デイノー！」

思わず駆け寄ろうとする。メドウーサが鎖で威嚇してきた。

「邪魔を……するな！」

さらに重圧を強める瞳。ふと、グラライアイを見ると泣いていた。

「ごめんなさい…。」「場所を言つてしまつてごめんなさい…。」

「今更命乞いですか。あなたたちはそればかりですね。」

メドウーサがグラライアイに手を触れるぐらいまで近づく。

「守つてあげられなくてごめんなさい…。」

「……！」

「すぐにそばに行つてあげられなくてごめんなさい…。」

「そばで守つてあげられなくてごめんなさい…。」

この3姉妹は後悔しているのだ。

姉を守つてあげられなかつたことに。

大好きな姉が死んでしまつたことに。

死んだときにはそばにいることができなかつたことに。

「あの時すぐにお姉さまのところに行くべきだつた。

なのに…。だからごめんなさい。」

「ふふふふふ、守る、ですつて？今まで守られてきたあなたたちが？

笑わせてくれますね。」

そしてメドウーサはグラライアイに手を触れ、魔眼を解いた。

「…気が変わりました。あなたたちは殺しません。

人質にします。そちらの方々への。」

「ひやつ！」「きやあ！」「ぴい！」

グラライアイをぎゅうっと、しかし優しく抱きしめながらメドウーサが言う。やさしく頭とかもなでちやつてる。

……あの、すいません。人質にするとか全く説得力がないです。

どう見ても妹をいつくしむ姉の姿しか見えません。

つかやつぱり姉馬鹿じやないか！過去のこととでちよつと拗ねてたけどさつきの発言で全部許しちゃつた系の姉馬鹿じやないか！

「おつと。そこから先に進むとこの子たちの命は保証しませんよ？」

さらにぎゅうっと抱きしめる力を強める姉メドウーサ

「ちよつと」「苦しいわ」「お姉さま！」

「もう少し我慢してください。人質の自覚が薄いですよ？」

そういうながら微笑むメドウーサ。

どうしよう。さつきがとてもシリアルスだつただけにやる気がもりもり下がつてくる。

「さあ、とつとと出て行ってください。いまなら見逃してあげます。」

こいつ絶対そのあとだんらんを楽しむ気だよ…。

仕方ない。空気を読まないようで少し心苦しいが、交渉だ。

メドウーサ、そこの扉を開いてくれないか？

「なぜ私がそんなことを？それにこちらには人質がいるのですよ？」

この異界が発生していると人間が、ひいては世界が大変なことになるんだ。

「知つたことではありません。むしろ滅べばいい。」

滅べばそいつらともまた離れ離れになるぞ。

僕が死ねば契約が解かれ、現世にとどまることができなくなる。

そうなればまた別れることになる。頼むよ。このとおり。

そういって頭を下げた。

「かといって異界が滅べば私は世界の裏側、座のようなところに帰る。どちらにしろ別れることになるのなら4人水入らずで過ぎします。」

「ねえ、お姉さま。」「お姉さまも契約しちゃえといいのよ！」

「そうすればずっと一緒にいられるわ！」

「それは……。」

何やら考え出した。このままうまくまとまるといいんだけど。

「押し付けられたとはいへこの番人である以上戦わずしてそれはできません。矜持のようなものです。」

ダメか…。こうなれば仕方ない。

「お姉さま…。」

グラライアイがメドウーサを見つめる。

「下がっていなさい。」

くそつ！結局こうなるのかよ！

メドウーサが斬りかかる。仕方なく剣を構える。

早い！3次元的な動きをしながらこちらに迫ってくる！

しかし、動きは直線的でわかりやすい！斬りかかるてきたところを切り返した。

「ぐわー、やーらーれーたー。」

……は？

「完膚なきまでにやられました。仲魔になるのでどうか命だけはお慈悲をー。

というワケでよろしくお願ひします。」

こいつこんな猿芝居で…。

「もともと押し付けられて乗り気じやなかつたんですよね。

それに戦つて負けて仲魔になつたのでセーフです。」

：ああ、そう。お前がそれでいいならもういいよ…。

奥にある扉が開く。これで開いちやうんだ…。

宝箱を開けると欠片が入つていた。

欠片を取ると、つなぎ合わせてみる。すると、ハムサが完成した。  
「あれ？ 完成したぞ？」

じゃあもう一つのボス：バロールの宝箱には何が入つてるんだ？  
「わからないわ。けどこれで異界の主のところへは乗り込めるわ。  
どうする？ マスター？」

しばらく考える。

「なんだか怪しいな。バロールにも挑んでみよう。  
方針を決めてバロールのところへ向かうことにした。  
「ふふふ…。」

姉馬鹿状態のメドウーサを仲魔にいれて。

# 邪眼の異界編 後編

姉馬鹿のメドウーサを仲間に加えた僕たちはバロールのところへ向かう。「にしてもまたやつと戦うことになるとはね。」

もうすでに戦うこと前提だな。

「そりやそりや。あいつが俺たちを見逃すと思うか？」

いや、全然。魔王って感じだつたし。

「そりや間違ひねえ。あいつは王だ。敵対するものを滅ぼすものだ。

となりやあこの状況で戦わないという選択肢はないだろうよ。」

話をするくらいの余裕はあつてほしいもんだけどね。

それよりもアレ…。

ちらつと後ろを振り向くとグラライアイに囮まれたメドウーサがいる。

全員警戒しているものの大分近い。メドウーサを守るように布陣している。

さつきの言葉通りそばで守っているつもりなのか？

後ろのほうにいる衛宮とかもちよつと居心地悪そうだ。少し離れている。

「ちよつとあれ大丈夫なんですか？・いざというときはサマナーリ

妹たち守りそ�ですけど？ つーか妹戦わせなさそ�なんですけど？」

：後方防衛をアコロンと変わつてもらおう。おーい衛宮！ アコロン！ メドウーサ！

「なんだ？ どうかしたのか？ 憤」。

「どうかしたのかい？」

「どうかしましたか？」

後方防衛交代。メドウーサが後方を守つてアコロンは前衛に行つてくれ。

「わかつた。それでいいか？ アコロン。」

「ええ。士郎がそういうなら。」

「わかりました。」

そういうつて配置につきながらバロールのもとへと向かう。

道を抜けて広場に出た。ここも整えられたよう壁が作られている。

奥のほうには一度戦つたバロールが椅子に座つて退屈そうにしている。

フォーモリアの軍勢はいよいよだ。バロールがこちらに気が付いた。

「ふん。またも貴様らか。」

どことなく不機嫌そうなバロール。

「愉快なものか。いきなり召喚された挙句このよだな役目を押し付けられた。

おまけに軍勢もなし。不機嫌になろうというものの。」

バロールにとつてこの状況は不本意なものらしい。

「なら扉を開けて僕たちを通してくれないかなー？異界の主倒してやるからさ？」

「断る。あやつは気に入らんがお前らに利することも気に食わん。

どうしても通りたくば我を倒していくがいい。

退屈していたところだ。満足させろよ？」

笑いながら椅子から立ち上がり大剣を抜くバロール。

やつぱり戦うしかないみたいね。

「この前は不覚を取つたが今度はそうはいかんぞ。前のような幸運はないとおもえ。」

「言つてろ。僕たちだって強くなつてるんだ。前みたいにはいかないぞ。

「マスター。バロールは前よりも強くなつているわ。気を付けて。」

「まずはこれからだ。マハラギオン！マハザンマ！」

いきなり広範囲魔法を放つてくる。強い炎と衝撃が僕らを襲う。  
しかし、この程度なら！

前衛は全員炎と風を切り裂いて突破しバロールに接近。

「ふん。この程度ではやはりな。しかし！」

手に持つていた大剣が横に振るわれる。それを剣で受けて防ぐ。

後ろへはじき飛ばされそうになるのを踏みとどまる。

続けて大剣をふるおうとしているバロールの目に向けて射撃。  
バロールは少し引いて大剣を盾にして弾を防ぐ。  
そこにアコロンとクーフーリンが攻撃を仕掛ける。

「アギダイン！ ザンダイン！」

バロールはアコロンとクーフーリンを魔法で牽制。

「ちつ」「くつ」

二人とも飛びのいて回避。バロールは体勢を立て直す。

今度はバロールから接近して仕掛けってきた。

狙いは僕らしくまっすぐに向かってくる。一瞬で距離を詰めてきた。

ふるわれた大剣を剣で受け、踏ん張り、何とか打ち払う。

「タルカジヤ！ スクカジヤ！」「タルカジヤ！ ラクカジヤ！」

タマモとヴィヴィアンが補助魔法を使う。

そのおかげでバロールの大剣を何度も受けても吹き飛ばされないでいる。  
ふるわれる剣を受け、はじき、そらし、避け、すきを窺つて剣をふるう。  
それは避けられたり、かする程度にしか当たらないが少しは傷をつける。  
そうして剣戟を繰り返す。こちらも何度か剣が掠るすることもあつた。

「マハラギ！」

時折差し込まれる魔法に直撃を避けつつも肌を焼かれる。

「俺たちを忘れてもらつちやあ困るな。」

クーフーリンが横やりを入れ、それを防ぐバロール。

お返しとばかりにクーフーリンへと剣をふるう。

それを槍で受け、流し、反撃するクーフーリン。

それを繰り返し、流れるように打ち合う二人。

その隙にプリンシパリティが回復魔法で傷をいやす。

二人の打ち合いにアコロンと僕が加わり、押し込んでいく。

リップーも死角からナイフを投げたりしてバロールを傷つける。

さつきとは打つて変わつて後退していくバロール。

不利と見たのか大きく薙ぎ払つて後退しようとする。

それを見逃すわけもないが、後退する際に、

「マハラギダン！」

かなり強い広範囲魔法を撃つてきたので避けるしかなく、距離を開けられた。

さらに広範囲の強力な炎を放つてくるバロール。

魔眼を使う時間を稼ぐつもりか。

そうはさせんか！

「させません！ブフダイン！」「やらせないわ！ザンダイン！」「私たちも！ザンダイン！」

と後衛に魔法を放たせ、炎を打ち消させる。

ジャアクフロストがそこへ突っ込むのに合わせて僕たちも突っ込む。

「オイラに炎は効かないホー！」

ジャアクフロストが壁になつて距離を詰め、接近戦を仕掛けていく。

「アクセルクロー！」

距離を詰めると同時にバロールに攻撃を仕掛けるジャアクフロスト。爪で裂かれたバロールはひるむことなく大剣をふるい、

ジャアクフロストを弾き飛ばす。ジャアクフロストは吹き飛ばされたもののあまりダメージは負っていないようだ。

僕は追撃の魔法を放とうとしているバロールへ攻撃を仕掛ける。

魔法を放つのをやめ、大剣で迎撃するバロール。

縦にふるわれた大剣を下から迎撃する。

「怪力乱神！」

スキルを発動させるとてつもないパワーが全身にいきわたり、バロールの大剣を弾き飛ばした。

大剣を弾き飛ばされ体勢を崩すバロール。そこから立て直そうとするも、間髪入れずアコロンに斬りかかられ致命傷を避けるために体勢の崩れたまま後退。

「隙を見逃すクーフーリンではなく。後ろから跳躍、大量のマグネットを使い、  
突き穿つ死翔の槍！」

槍を投擲。バロールを貫いた。

倒れるバロール。しかし、よろよろとまた立ち上がりと、

「前は運に助けられ、今度は実力で勝つか。短期間でここまで強くなるとは。

：気に入った。我を呼べ。気に入っているうちは助力してやろう。」  
と言つて消滅した。

仲間として呼べってことか？

「バロールとの契約を確認したわ。召喚プログラムを構成。

あと12時間で召喚可能となるわ。」

あ、有無を言わさず契約するんですね。

「ま、抑え込めるだけの力量をつければいいだけの話だろ？簡単じゃねえか。」

簡単な話かよ、それが…。ま、頑張るとしますかね。

どうやらプリンシパリティがレベルアップしたらしい。ハイレベルアップするようだ。

「天使パワーです。これからもよろしくおねがいします。サマナー！」

「ああ。こちらこそ。

ハイレベルアップを見届けた後、宝箱へ向かう。

宝箱を開くと中に入っていたのはネックレスだった。

なんだか目玉のような模様をしている。

「天眼石のネックレスね。英語ではアイアゲート。メノウの一種ね。

古くから魔除けの力が期待されていたようで、法具や護符として用いられていたわ。地中で見つかったことから天から降ってきたと考えられ、

天眼石という名前になつたの。

アゲート：メノウは「共有」「集合」の意味が込められていると伝えられるわ。」「ふーん…。でも結局これ何の役に立つんだ？」

「さあ？」

さあつて…。それにしても「共有」と「集合」か。

「共有と」「集合…。」「ねえサマナ！」それ私たちにくれない？」

…まあいつか。ほら。

「ありがとう！」

グラライアイに渡すと3つに分かれてブレスレットになつた。

どういう仕組み!?

「野暮なこと考えますねサマナー。そんなのどうだつていいじゃないですか。」  
いやまあそうだけどもさ。

氣を取り直してホールへ戻る。中央の石像は全て壊れている。  
メドウーサのもクリア扱いになつたからだろうか。

奥の扉に近づいてハムサを掲げる。ハムサが光り輝き、扉が開かれる。  
開いた後、ハムサのカギが消えた。さていよいよ異界の主とご対面だ。

扉を開いた先、廊下を抜けるとそこには大きな目をもつ月が天井に描かれた  
ホールがあり、とても神秘的で禍々しい雰囲気が漂っていた。

「ここまでたどり着きましたか。悪魔召喚術士よ。」

一瞬、声のしたほう、ホールの中央にたたずむ悪魔に目を奪われる。

しかし、すぐに氣を引き締める。あれが異界の主か。

「データ解析。あれはサリエルね。エグリゴリの一員で、

月の運行に関する知識を人間に教え墮天した天使。

そして邪視（邪眼・魔眼）の元祖と目されている天使。

サリエルの任務の一つは靈魂を罪にいざなう人の子らの靈魂の看守であるといわれ、  
人間がその魂を汚すことを防ぐという役目から死を司る天使ともされるわ。

他の天使を墮天させることと月の支配を役目とし、鍵を象徴とするわ。」

「…私のことをよくお知りのようで。その通り、私がサリエルです。

しかし、出てきたはいいものの力がかなり弱まつた状態でして。

人間を養分とし、力を取り戻すための糧としているのですよ。

見てください周りの石像を。苦悶の表情で動かないそれらから

私に力が集まつてくるのがよく見えるでしよう？」

「生命反応確認。まだ生きているわ！あの石像にされた人たち！」  
「ええ。こういうのは生かしながらゆつくり吸つたほうが効率がいい。

強い恐怖と絶望の感情が出て力にしやすいですから。」

人を食い物にしている場面を実際に目の当たりにするとかなりの不快感だ。

少し前に目の当たりにした光景も思い浮かべ、振り払う。

目の前の存在に強い嫌悪感を抱く。

それはほかの仲間も同様みたいだ。特にパワーと衛宮はかなり表情をゆがませてい  
る。

「一応聞いておくよ。なんでこんなことをする。」

「私はですね、人間を愛しているのですよ。だからこそ導きたいのです。

しかしそのためには力が足りない。だからこそ一番手つ取り早く力をつけるためこうしてマグネタイトの多い人間を襲つたのです。

いずれ来る神との戦い。その時までにこうして力を蓄え神に勝利した暁には

今度こそ私たちが永遠に人間を導くのです！

彼らはそのため必要な犠牲だつたのです。」

…ふざけてるな。

「ああ。それには同意する。ふざけてる、こんなこと。」

と士郎。僕たちは身構える。

「理解していただけないとは残念です。あなたたちは私にはむかうというのですね。

それならばあなたたちもここで私の糧となるがいい！」

石像の一体からマグネタイトを一気に吸い上げるサリエル。

吸われつくした石像は崩れ落ちた。

そして、サリエルはその邪眼を開いた！体が重くなつて動きが制限されていく！

「いきなりぶっぱですか…！くうつ！」

「ちつ！体が重くなつてきやがつた！」

「くそつ！護符をもつていても…あれはどうだ？！」

苦し紛れにハムサを掲げる。すると邪視の効果が薄れ、体が軽くなつた。

同時にハムサのペンダントにひびが。あまり何度も使えないか…!?

「むっ！なぜその邪視よけが…まあいいでしょ。」

邪視がなくても今まで吸つた命の力、ここでお見せしましょう！」

そういうと大量の魔法を放つてくる。炎、氷、風、電撃。まるで弾幕のごとく放たれる

る

それらを回避、迎撃しつつ近づいて斬りかかる。

サリエルはそれを回避していく。そして目を開けようとしたところに、

士郎が放つた矢が襲い掛かる。

「ちいっ！」

憎々しげに舌打ちを放つサリエル。回避しつつ距離を取りながら魔法を放つてきた。サリエルの放つた氷の槍をあたるものだけ斬り、いくつかに貫かれながらも、また距離を詰めていく。

どうやら広範囲の魔法はなく、単発の魔法ばかりのようだ。

それでもかなり数が多い。近づきずらいな。

近づけないうちに石像を吸いつくし、また邪視を放つてくる。

ハムサのひびが深くなつた。

「弾幕ならわたくしも負けませんよ！それそれ！」

「こつちも負けてないわよ！」

「こちらもです！」

そういうつてタマモが魔法を符で放ち、ヴィヴィアンとニスロクも連続して魔法を放つ。

それらにより弾幕が撃ち落されていく。絶対数はあちらが上だが弾幕が減るのはありがたい。道が開いて距離を詰めていく。

「そらよー」「食らいなさい！」「いくよー」「それ！」

前衛が距離を詰めて相手に息もつかせぬ攻撃を放つ。

サリエルはそれを避けることに気を取られ、あまり魔法を撃つてこない。

その隙に後衛の何人かに石像を安全な場所に運び、石化を解くよう指示する。「ちいっ！厄介な！…むつ！させませんよ！」

サリエルは石像を運んでいる衛宮に魔法を放つ。

「させません！」「させないホ！」

魔法をタマモが撃ち落し、ジャアクフロストが盾になり衛宮を守る。

「よそ見とはいいで胸じやねえか。」

「グツ！」

魔法をはなつた好きにクーフーリンがサリエルに槍をお見舞いする。

突きはサリエルの横つ腹を貫いた。血を出しながらも魔法の弾幕を放ち、大きく後退するサリエル。見るとさつき貫かれたところがどんどんふさがっていく。回復できるのか？ だとしたら厄介だな。長期戦になる。

「外見を取り繕つてから回復してやがるな。消費分は周りから徴収して補うか。つくづく気に食わねえ真似しやがる。」

「傷は回復してもマグネットは消費しているはずよ。リソースである石像さえどうにかしてしまえばあまり回復もできなくなるはず。」

それに回復もできないほど一気に傷つければ勝てるわ！ 頑張つて！ マスター！」つまり短期決戦で仕留めるときは大技で一気に仕留めろつてことだな。

長期戦ならリソースが切れるまで頑張るしかないってことか。

消耗戦になつたら確実にこつちが負ける。しかし大技を使い隙を見せたら魔眼がくる。

きついな。

ふたたびサリエルとの戦闘を開始する。回避を優先して攻撃をあまりしかけてこない。

魔法を使い隙を見せたところを確実に削つていく。

動きはそれなりに素早く、浅い傷しかつけられず、それもすぐに修復される。スキルや魔法を使い、こちらのマグネットイトがどんどん減っていく。

「えーい！止まりなさい！」

デイナーが魔眼をサリエルに使う。しかしあまり効いていないようだ。「何かと思えばそのような。私に効くとおもいでか。」

そういうつて逆に魔眼を使うサリエル。……今……？

「なら私のはどうですか？」

メドウーサも加わり重圧をかける。サリエルの動きがかなり鈍った。

そこへ近接で怒涛の攻めをかける。さつきよりも深い手傷を負わせていく。「くっ！邪魔だ！」

サリエルが魔法をはなつ。魔眼を使っている姉妹に魔法の弾幕が迫る。

それは回避されたが魔眼の効果もなくなる。

だが同時に隙を見せたサリエルにいつせいに斬りかかり、魔法を放つ。

サリエルをえぐり、焼き、貫いていく。

たまらずサリエルはめちゃくちやに魔法をはなち、大きく後退する。

「ぐうううううううう……！」

怒りの表情で僕たちをにらむサリエル。

ホールにあるすべての石像から大量のマグнетライトが吸収され、石像が次々碎け散っていく。

「追い詰められてなりふり構つていられなくなつたつて所か。

「ここだ正念場だぞサマナー。」

「許さぬ…許さぬぞ悪魔召喚士！」

そういうつて魔眼をカツと開くサリエル。これまで以上のとんでもない力が襲い掛かってくる。ハムサに力を籠めるがどんどんひび割れていく。「くつ、これまずいですよ…！予防のパウパウ！」

「とんでもない力です！テトラジャ！」

ハムサが割れた。邪眼による力の奔流が物理的な破壊を伴つて僕たちに襲い掛かる。テトラジャと予防のパウパウのおかげで即死は免れたが、

ハムサにマグネットイトを込めていたおかげでかなり消耗している。

だがそれはあちらも同じことだ。かなり消耗した様子のサリエル。「はあ、はあ、まだ死にそこなつていましたか。ではもう一度！」

「させるか！」

衛宮が矢をサリエルの目に放つ。それは避けられるが時間を稼いでいる。その間にタマモが体勢を立て直し、魔法の弾幕を放つていく。

体内のマグネットイトがどんどん減っていくのを感じる。残り3割くらいか。クーフーリンのゲイボルクを3、4発撃てるくらいだ。

あつちはリソースがなくなつた代わりに元気いっぱい。まずいぞ。

その時、デイノーから念話が届いた。

「サマナー。私たちに作戦があるの。」

作戦？ いつたいどんな？

デイノーは作戦の内容を話し始めた。それは…。

話し終えると、メドウーサに話しかけ、おぶられて移動していくグライアイ。作戦のため、再びサリエルに向かつていく僕たち。

そしてさつきよりも猛攻を加えていく。傷を負うのも構わずにサリエルを攻撃。「随分と余裕がないようですね…！くつ！」

そのかいあつてどんどん傷を負わせていく。

「食らいなさい！アギラオ！」  
「デスバウンド！」

炎が僕を直撃する。しかし構わず突っ込んで、

「なつ、あ…！」

デスバウンドを叩き込みサリエルを大きく傷つけ吹き飛ばす。

サリエルが空中で体勢を立て直し、力を集中していく。魔眼を使うつもりだ！

「テトラジャ！」

魔眼を使うサリエル。物理的な破壊を伴つたそれは仲間を容赦なく傷つけ、

「あうう…ごめんなさいサマナー…ここまでです。」

「悪いわね、ここまでみたい…。」

「すいません、ここまでです…。」

「ごめんねお母さん…。」

「すみません…。」

「すいません、シロウ。ここまでのようだ。」

体力の少ないジャックと衛宮をかばつたアコロン、後衛が全員やられてしまつた。

残っているクーフーリンとジャアクフロストと僕もかなりボロボロだ。

なおも魔眼を放つて居るサリエル。そこに、

「こちらを向きなさい！」

サリエルをはさんで向こう側。

僕たちとは反対の方向にグライアイとメドウーサがいた。

そして魔眼をはなつ。それにより体から力が抜けていくサリエル。

魔眼の威力も弱まっている。

「小娘があ！」

その邪視をグライアイとメドウーサに向けるサリエル。

今のうちに！

持っていた魔石をクーフーリンに使い、回復させる。

そして少しづつクーフーリンに力を送る。

サリエルとグライアイたちは文字通りにらみ合いを続けている。

しかしグライアイたちは押されてきている。

「くうううう！！」

グラライアイのうち一人しかその魔眼は放てない。放つデイナーを支える二人。  
少しづつ足から石になっていく。

まずい！今まででは準備をおえるよりもあちらが押し負ける！

その時、グラライアイのつけている天眼石が光を放ちバラバラになつて  
メドウーサを含めた姉妹を取り囲んだ。

デイナーだけでなく、エニユーオー、バムブレードーの魔眼も発動している。  
そしてなにか、誰かに似ている二人の少女が傍らにいるような気がした。

「それは多数の目だつた。墮天使を見つめる12の瞳。それは…。  
 「天よりきたれ、姉妹の絆！」

「このチカラはあああ?!」

サリエルの動きが完全に止まる。それと同時に準備が完了した。  
 いけつ！ クーフーリン！

「この一撃、手向けと受け取れ！ 突き穿つ死翔の槍！」

サリエルは槍により貫かれ、体に大穴を開けて、消滅した。

サリエルとかいう墮天使がマグネットайтをいっぱい吸収して力を取り戻した。  
 こつちは消耗しててこのままじややられちやうかもしれない。

せつかくメドウーサお姉さまと会えたのに、またお別れ？ そんなのいや！

それにサマナーたちは家族だと思つてる。また家族を守れないなんて絶対いや！

だから、だからとつても怖いけど、足が震えそうになるけど、  
 サマナーにある作戦を提案した。それは、私たちが魔眼で足を止めてる隙に、  
 サリエルを一撃で倒すというもの。

魔眼を使つてゐる間はあちらも抵抗力が落ちるみたい。

その間なら動きを止めることができる。

だけど、それは向こうも同じ。こつともにらんでいる間は抵抗力が落ちる。その間にらみ合いを続ければどちらかが倒れる。

それはこちらが圧倒的に不利。石にされて粉々にされてしまうかもしない。もしかしたら負けちやつて守れないかもしない。

だけど勇気を振り絞つてそれを実行した。

メドウーサお姉さまにも概要を伝える。最初お姉さまは渋つた。だけど、私の目を見て覚悟を感じ取つたのかうなずいてくれた。

移動したところで、サリエルが魔眼を発動した。

いましかない！

「こちらを向きなさい！」

く。  
氣を引くために叫んでサリエルをにらむ。動きの鈍つたサリエルがこちらへ振り向

その瞬間、体がとても重くなる。サマナーからあらかじめ渡されたナザールのおかげ

で 少しは抵抗力が高まつてゐるけれどそれでも押しつぶされそう！

けど気力を振り絞つて睨み続ける。

だんだんと体に違和感が出てきた。手足が動かない。それはどんどんと侵食していく。

だけど目をそらさない。

思いつきりにらみつける。けどもうだめかもしねないと思つた。  
その時、

「まつたく、しようがない子たちね。」「もうすこしがんばりなさい。」

天から、なつかしい声が聞こえた。

天眼石が私たちを囮む。確かにそこに感じる一人の姉さま。

「上姉さま……下姉さま……！」

あきらめそうになつた心がどこかにいつた。

氣合を入れなおしてサリエルを見つめ返す！

姉妹6人分の瞳がサリエルを見つめ返す！

「天より來たれ、姉妹の糾！」

「このチカラはあああ?!」

サリエルの動きが完全に止まつた。

そこにクーフーリンが跳躍して槍を投げる。

「この一撃、手向けと受け取れ！突き穿つ死翔の槍！」

その一撃でサリエルは消滅した。

とたんに体の力が抜ける。同時に倒れそうになつて、「危ないホ！」

いつの間にか近くにいたジャアクフロストに姉妹全員受け止められる。

サマナーが駆け寄つて、持つているアイテムで石化を解いてくれた。

「ねえ、サマナー。」「私たち。」「役に立つた。」

「ああ！今回のMVPだよお前らは！」

それは、よかつた。

「もう休んでろ。」

そういうつてスマホを操作して姉妹全員が帰還させられた。

グラライアイたちを帰還させると、急いで生き残つてゐる人たちを運ぶ。

崩落に巻き込まれないうちに全員ゲートまで運ばないと！

体格の大きいジヤアクフロストが残つていてくれてよかつた。全員を運んできりぎり崩落に巻き込まれずにはすんだ。

現実に帰還すると、言峰に連絡をする。すぐに被害者たちを引き取りに来た。同時にどつと疲れが押し寄せてきた。

それは衛宮も同様らしく、すぐに解散することにし、帰宅して、すぐに眠りについた。

翌日、ご褒美として、大量のリンゴを買って、いろんなリンゴ料理を作る。

今回大活躍のグラライアイたちは大喜びしていた。

メドウーサもその姿を見て心なしか表情を和らげている。

早速なじめそうかな？

と、その時、スマホが勝手に起動して何かが召喚され始める。そこにいたのは美女だつた。

思わずどちらさま？とたずねると、

「我だ。」

とだけ言つた。我…?もしかしてこいつバロールか?! なんでそんな姿なんだ!?

「やたらと女ばかり仲魔にしているからてつきりそういうことかと思つたのだが？」

「ちよつと？ サマナー？ これは私の一夫多妻去勢拳が火を噴くときですかね？」

「なんだその技？！ちよつと？！誤解だからシャドーするのやめろ！」

第一お前性別変えられんのかよ！

「安心しろ。女装だ。たぶんな。」

cm 女装?! お前体格まで変わってるじやないか！ どこどうやつたら3mくらいが170

くらいまでちぢむんだよ！ つーかたぶんってなんだ！ はつきりしないな！

あとお前の目は節穴か！ クーフーリンとジャアクフロストがいるだろ！？

「む？ もしやそういう趣味か？」

「お？ なんだサマナー、 そういうことか？」

「そういうことホー？」

ちつがーーう！！ああもう！ お前らわざとだろ！

そういうと全員いつせいに笑い出す。

なんだかまた騒がしくなりそうだ。



# 凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェアリー大戦争！

## Part 1！

「…………ん。」

何か鳴つてる。

じりり。じりり。

「…………うるさい。止まれ。」

音は止まない。じりりじりりと、まるでわたしが親の敵だといわんばかりの騒々しさ。

感触を頼りに手だけで騒音のもとを探り当てる。

それをつかむとベルを止め、体を起こしてしぶしぶベッドから出た。

時刻は6時半を指していた。

冷えた廊下を渡つて、冷えた居間へと移動した。

冬木の町は冬でもそれなりに暖かい気候なので、家中は吐く息が白くなるほど寒くはないが、それでも寒いものは寒い。

「…………暖房、暖房…………。」

ヒーターをオンにして、洗面所に向かう。こういう時、一人暮らしというのには不便だ。自分より先に起きている人間がいるのなら、今はとっくに暖房が行き届いているだろうに。

洗面所で顔を洗う。長い髪にブラシを通して、身支度を整える。

寒い朝、冷えた洗面所。

唯一の利点といつたら、冷たい水が否応なしに眠気を吹っ飛ばしてくれることぐら  
い。

きゅつ、と襟元のリボンを結んで準備完了。

後は朝食を済ませて登校するだけ。

時計を見ればまだ7時にもなっていない。

すこしは家の中でゆっくりとすごせそうだ。

朝食を済ませて、かばんを手に取る。時刻は7時半。

そろそろ出ないと学校に間に合わない。

十分体に暖気をため込んで家の外に出る。

冷たい空気の中に暖かい日差しが気持ちいい。

短く、魔力を込めて言葉を紡ぐ。

魔術師たるもの、自分の根城を留守にするときは警戒を怠ってはならない。

戸締りをして敷地の外に出るとすでに通学する生徒や通勤する人々でにぎわっていた。

通学路を歩いて自分の通う中学校へと向かう。

歩いているとうわさ話をしている女子生徒たちの声が聞こえた。

「ねえねえ、あの噂聞いた？」

「えー？ なになに？ 何のうわさ？」

「この前新都のほうで死人とか行方不明者とかが100人くらい出たじゃん？」

あれさ、被害者の石像が出たんだって！ 怯えるような表情でかなり精密だから

石にされたんじゃないかつて！ それでね、それが夜な夜な歩き回るらしいよー！

なんでも生き返るために人を食べるんだってー！」

「あー！ 知ってる知ってる！ 怖いよねー！ それにしても最近このあたり物騒だよねー。

2か月くらい前もテレビで、住宅街でいっぱい死人がでたって聞いたしー！」

その前にも新都で悪人だけ行方不明になつたりねー。

噂ではまたあの殺人鬼が戻ってきたんだって！」

「怖いよねー。」

「怖いよねー。」

そういうつてその話を打ち切り、別の話へと移行する。

よくあるたあいのないうわさ話だ。だけどおかしい。人が石像になるなんてこと…。それに被害人数が多すぎる。魔術がかかわっているみたいだ。

だけど、誰が、何の目的でそれをしたのか。

それだけのことをどうやつてやつたのか。石化の魔眼?

だとしても魔力の痕跡をどうやつて消したのか。

私が事件の起きたあたりを捜査してもなんの手掛かりも得られなかつた。

凄腕の魔術師だからだといえбаそれで済むけどそれにしては隠蔽がすきんだ。ニュースになるくらいなんだから。

それにニュースで原因を言つていたがメディアの情報が意図的に操作されたみたいな…。

こんなことができるるのは権力を持つている連中。

だけど魔術協会からはそんなこと何も言われなかつた。

だとしたら聖堂教会。もしかしたらあの神父が何か知つてゐるかもしけない。

放課後、教会へ訪ねることにした。

放課後、教会へと足を運ぶ。奥へと進んで礼拝堂の扉を開けると神父の姿が見えた。  
「おや、凜。どうした?今日は武術の手ほどきをする日ではないが?

よもや神に祈りを捧げに来たわけではあるまい。」

「ええ。聞きたいことがあるのよ。最近冬木市周辺で起ころつてる事件のこと。メディアの情報が操作されることについて。あんたなんか関わっているでしょ？」

そういうと神父…言峰綺礼は、

「ああそりうだが？…しかし、凜。それを知つてどうする？」

お前が解決するとでもいうのか？…だとしたらやめておけ。

未熟なお前では死ににゆくようなものだ。

もつとも、どうしてもというなら止めはしないが。」

と忠告するようになら止めた。余計な一言も足して。

苛立ちながら綺礼にたずねる。

「わかってるわよ。私じや神秘の痕跡すらも確かめられなかつた。

相手はかなりやばいやつね。

だけどこの土地のセカンドオーナーとして知る義務はあるわ。

いつたいどこの誰がこんな事しでかしてるの？聖堂教会がそれを隠す意図は何？」

「…ふむ。…悪いがそれには一切答えることができない。

そして悪いことは言わない。このことは忘れろ。そして関わるな。

すべてこちらで解決する。」

「な——。」

その言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になつた。思わず怒鳴り声をあげる。

「どういうことよ!? 何が起こつてているかも知らせずに手を引けだなんて。」

こともあるうかこの神父は私に何も知らせず、この件に関わるなどいつてきた。

犯人どころか何が起こつてているかすら知らせない。知ることすらタブー。

冬木市のセカンドオーダーである私にすらそれは適用される。

これって、かなりまずいやつじや。悪魔でも出たというのか。

「どういうことも何もそのままだが? これ以上探るなということだ。」

魔術師でも、いや、代行者でも命を捨てねば解決できんだろうな。

だが、幸い命を捨てずに解決できるものはいる。

そいつに任せて私は事後処理担当をしているとだけ答えよう。」

元代行者だつた綺礼ですら解決できないなんて。悔しいけどあいつの実力は本物だ。

それでも死を覚悟しなければいけないなんて。

だとしたら解決できるようなやつっていつたいどんな…。

考えていても仕方ない。ひとまず思考を打ち切る。

そのとき電話が鳴つた。神父は失礼と言つて電話を取りにいった。

これ以上ここにいる必要もない。早々に帰ることにした。

「わかつたわよ。邪魔したわね。」

そういうつて礼拝堂を出て、教会を後にした。

電話の主は間桐慎二からであつた。新都方面にて異界が発生したらしい。

「ちようどそれ関連で一人来ている。ないとは思うが一応忠告でもしておこう。  
おい、凜。一つ忠告しておく。今日は新都方面へは近づくな…、

「おや、もう行つてしまつたか。まあいい。巻き込まれるなど早々あるまい。  
それよりも事件の後始末の準備だ。情報を操作し、巻き込まれたものを受け入れ、  
記憶の処理をする。その際に心の傷をえぐつてしまうかもしけんが。  
ふと礼拝堂を見ると珍しい客人が訪れている。

「これは…老人。いかがなようかな？」

「ふむ。そのことについてはお答えしかねる。

「何しろ一切知らせることが禁じられているのでね。」

「それは怖い。では、新都にて事が起こつているとだけ答えておこう。」

そういうと早々に客人は去つた。こちらとしてもあまり長く話していくくなかった

ゆえ

行幸ともいえる。

「しかし、どうなることやら、な」

顔に笑みを浮かべながらそう独りごちた。

教会を出て新都をあてもなくぶらつく。

やばいものだとはわかつたが、それでも蚊帳の外というのはむかむかする。気晴らしに新都でストレスを発散させよう、そうしよう。

と思ってとりあえず小腹がすいたのでクレープを買ってぶらついていると、何かがおかしい。違和感が私を襲つた。とつさに魔力を使つて探る。しかし、神秘の足跡すらうかがえない。

「もしかしてこれ綺礼の言つてた…。」

もしかしたら気のせいかもしれない。だけど本能がここから逃げ出せと叫んでいる。私は危機感に襲われて一刻も早くここから逃げ出そうと踵を返し、来た道を走りだしていく途中、違和感の正体に気が付いた。どこかで見たことがあるような紋章：3本の脚が円のように放射状に広がっている。その紋章が街のいたるところに見られる。

こんなもの普段はないはず――

そして猫を見かけた。その猫は尻尾がなかつた。

切られたのではない。最初からないみたいだつた。あんな品種みたことない。どこか外国の猫のような…。

それとつさにレストランで食事をしている人を見ると、やたらと茹でジヤガイモと燻製ニシンの開きを食べている人が多い。この3つ、どこかで共通していることがあつたような…。

違和感の正体に気づきながらも頭から追い出して走る。

今はここから逃げないと――！

走つて走つて無我夢中で走つてゐるうちに気が付いた。立ち止まり、青ざめる。  
そこは草原だつた。

いつの間にか私は草原にいたのだ。

「嘘…、さつきまでここは新都の中だつたじやない…!?

転移…?!いやでもここどう見ても日本じやない。日本にこんなところはないはず。それに仮に転移だとしたら距離がおかしいほど遠いところにある。」

そこは気候からして日本と違つた様子だ。寒いけどそこまでではない。

それに周りに見える植物がどこか海外を思わせる植生をしていた。

転移だとしたら距離がおかしい。馬鹿みたいに魔力を使うことになる。

それだとすぐに気づけるはず。なのに魔力が使われた形跡はない。

ならばここはどこだというのか。どうやつてここに連れてこられたのか。

「もしかして…、固有結界？」

そう考えてあまりにもばかばかしいと思つた。

固有結界というのは世界を塗りつぶす禁呪。そんなもの、使つたとしても  
すぐに世界に修正される。つまり維持のために莫大な魔力が必要となる。

それゆえ展開できたとしても短い時間だ。その間に人々を虐殺したとでもいうのか。  
それに何のために石像にしたりしたというのだ。

高位の死徒であるならばできるかも知れないけど…。

そこまで考えてふとそのことを思い出す。

もともと固有結界は悪魔が持つものだということを。

もしかしたら綺礼はこれが悪魔の仕業だと知つていたから隠していたのだろうか？

だけど悪魔なんてこの現代にホイホイ現れるはずがない。

それに最初に現れたときに退治されていなかつたとしたら成長して

もつと大惨事になつてゐる。聖堂教会が見逃すはずもないし。

それに表れるのに間隔がある。そのたびに退治されているとしたら、冬木市に悪魔が異常なほど発生しているということになる。  
なおさらおかしい。

「考えても仕方ない、か。」

とりあえずここは敵地。どんなことが起こってもおかしくない。

気を引き締めて生き延びることを優先しよう。

そう思い、臨戦態勢を整える。魔術回路を励起し、魔力を生産する。

敵地だとしたらすでに私のことは気が付いているはず。

わざわざここにとりこんだということは何かを仕掛けてくるからに違いない。

警戒しながら草原を歩きだす。

しばらく歩いているとがさがさという音がした。

振り向いて指を音のした方向へ向ける。

草むらから出てきたのは羽の生えた小さな小人だつた。

「あー！ ニンゲンだー！」

なんて言つて私を指さしている。私を誘拐したやつの使い魔だろうか？

「あなただれ！ わたしをどうするつもり!?」

「んー？ どうしよつかなー？ そうだ！ お話ししない？ 私ニンゲンにキョーミあるんだ

！」

「お話？人間に興味がある？あなた、使い魔じやないの？」

「使い魔？それって仲魔のこと？私は誰とも契約してないよ？」

「あ！分かつた！お姉ちゃん契約してほしいんだね！」

「じやあね、じやあね、何かチョーダイ！甘いものがいいな！」

「何かを一人合点したのか契約することになつてる。」

「とりあえずこの子は誰とも契約していないし使い魔でもない。」

「じやあ何だろうか。精霊の類？だけどここまで感情豊かだつただろうか？」

「それに目に見える。」

「ねえねえ？まだー？」

「そういつて膨れる妖精みたいな生物。」

「無邪気そうなその姿を見ていると毒気が抜かれる。」

「とりあえず甘いもの…持っていたクレープでいいかな？」

「これだね！わーい！ありがとー…おいしー！」

「そういつてクレープを食べ始める妖精生物。」

「食べ終わるとまだ食べたりないのか、」

「ねえねえ、もつとない？」

「そんなこと言われても、飴があつたわ。これでいい？」  
「うん！ いいよ！」

いつの間にかポケットに入つていた飴を差し出すとなめ始める。

対価は支払つたのだ。今度はこつちの番だ。

「ねえ、あなたここがどこだかわからない？」

「んー？ ここはね、島だよ！」

「島？ 何て名前？」

「えーっと、確か、マント！ だつたかなあ…？」

「マント？ マント…、マン島?!」

マン島つて言つたらイギリスにある島じやない！

そんなところまで一瞬で連れてくるつてどうやつて！？

「それでね、こここの王様はマニヤニヤンマクリル？ つていうんだけどね、

最近、クーデター？ つていうのが起つて王様が変わつちゃつたんだ。」

マニヤニヤンマクリル？ 確かマン島にかかわりの深い神様にケルト神話の

マナナーン・マクリルがいる。それのことだろうか？

だとしたらおかしい。神秘の薄れた現代に神靈が降臨するなんて。  
神靈を騙つた何者かだろう。おそらく。

話をしているうちに飴を食べ終わつたみたいだ。

「おいしかつたー！じゃあ約束通り契約だね！だけどお姉ちゃんCOMP持つてないね。」

どうしよう…。」

そういうつて私の周りをまわりはじめる。そして何かを見つけたのか、

「あ！ねえねえ、お姉ちゃん宝石持つてる？」

宝石？…持ち歩いている宝石の一つがあつたはずだけど…。

それをどうしようというのか。

「それ出して！それを依り代にするから！」

「依り代？依り代なんかなくともあなた存在してはるしこのままでもいいじゃない？」

「そうじやなくてねー、このまま契約しちゃうとお姉ちゃんの精神の負担が  
大きくなつて悪影響が出ちゃうんだー。」

それにお姉ちゃん呼びだす方法分からぬでしょ？

だからね、宝石に召喚するための情報を書き込んで、マグネットイトを流し込めば  
私を召喚できるようにするの。

こうしておけばやられちゃつても回復したらまた召喚できるの。  
「なるほど。負担を軽減するための方法だつたつてわけね。」

それについてもマグнетタイトって何？』

マグネットタイトとはこの子たちが活動するのに必要なエネルギーだそうだ。  
説明を聞いていると要は生命力のようにも聞こえるけど、

生命力とは同じであつて別のものらしい。

「うーん、説明するより実際に感じたほうが早いかも。  
ちょっとお姉ちゃんのマグネットタイトもらうね。』

そういうつて私に触れるピクシー。ちょっと警戒したけど殺す気なら既に襲つてるか、  
と思い、触らせる。すると何かが私の中から出ていく感触がある。

魔力とはまた違つた何か。だけど今まで感じたことがない。これがマグネットタイト？  
「うん！ そうだよ！ ジャあ契約するね！ 私は妖精ピクシー！ こんどもよろしく！」

そういうつて分解して宝石に吸収されるピクシー。すると宝石が確かに変わった。  
何やら見たことのない魔法陣やらが刻まれている。

するとどこからか声が聞こえる。

「召喚するにはねー、さつきのマグネットタイトを宝石に込めればいいんだー。』

宝石に刻んだ召喚法を頭に思い浮かべながらマグネットタイトを送つてみて！』  
宝石を解析。すると頭にとてつもなく膨大な情報が流れ込んでくる。

これが召喚方法？ ピクシーを召喚するだけでこんなに複雑なことを…。

その前にそれが宝石に刻み付けられているなんて！

考えるだけでもとんでもない。これすごいことしてんじや？

何とか一通り解析するとさつき感じた感触のままにマグネットイトを送つてみると、宝石が光始める。次々と処理されいく様子は儀式のようなものが滞りなく行われていくようだつた。

そしてひときわ輝くと、魔法陣のようなものが大きく現れ出て、

そこからマグネットイトが情報とともに出て収束。ピクシーが現れた。

「召喚成功！これが悪魔召喚だよ！」

本日何回目の驚きだろうか。召喚がこんなに簡単にできるとは。

実際には降霊をしたわけではないのだろうが、それでもかなりすごいことだ。

使い魔をしまつておける宝石とは。便利そうだ。

それに悪魔召喚？この子自分のこと悪魔って言つた？

それになんだか思いがけないことで使い魔をゲットしちゃつたぞ。

その使い魔は自我のある妖精とは思いもよらなかつたけど。

情報が頭をさまぐるしくかけめぐる。それになんだか疲労感もある。

これがマグネットイトが出ていつたことによるものだろうか。

そこにピクシーが話しかけてきた。

「ねえねえサマナー！これからどうするの？」

「サマナー？ 召喚士とでも言いたいのだろうか。それにどうするか、か…。少し考えたけどやつぱりこれつきやないわよね。」

「私をここに引きずり込んだ奴のところに行くわ。」

「どうせここから出る方法もわからないし。」

「それならそいつのところに乗り込んでぶちのめして無理やりにでも出させてやるんだから！」

「おおー！ 勇ましー！」

「そうと決まれば善は急げだ。ここから離れて探索することにしよう。お供にピクシーを連れて、私は歩き始めた。」

# 凛ちゃんの大冒険！ わんにやんフェアリー大戦争！

## Part 2！

お供にフェアリーを連れてずんずん進む。

歩いている途中、フェアリーから悪魔のこと、マグнетタイトのこと、魔界魔法のこと、異界のこと、いろんなことを聞いた。

聞けば聞くほど今までの魔術世界の常識が崩れしていく。

ただし、変にこちらの常識とも合致する場面があつて理解できちゃうから余計に頭が痛い。

悪魔。マグネットタイトを魔力、名前や形をがわとして考えると、やつてることは魔力で肉体を構成するようなものなのだ。

これは自然の精霊だつてやつてることだ。そんなにおかしいことじゃない。

それがはつきりとした自我をもち、

形をもつて出られるようになつたことがおかしいだけで。

聞くと、一般的な概念に命が吹き込まれて出てくる、現象のような悪魔もいるという。

ただし、エネルギーにしているもののおかげですべからく感情があるのだとか。

これが魔力で現れているものとの違いもある。

次にマグネットイト。生命力そのものであり、魂を構成するもの。また、感情の奔流。要は情報に魂と精神を与え、物質化するだけである。

：かなり大層なものだつた!? 第3魔法に近いじゃない!? とんでもないことだ。これが一番頭が痛い情報だつた。

ちなみに魔力にも生成できるらしい。

魔界魔法。これはすんなり理解できた。魂、概念に刻み込まれた魔術基盤を通して発現する魔術なだけだからだ。それに精霊が起こす現象だつてそんなものだし。昔お父様に聞いたことがある。もともと魔術回路は魂にあるものだつたと。

それを考えたら納得できた。

魂に使い方さえ刻めば人間にも使えるらしい。

異界。固有結界のことを踏まえたうえで話を聞くとわかりやすかつた。  
要は世界の裏側と表側の間に作られた固有結界なのだ。

人間が使う固有結界は表側の現実を塗りつぶす。

ふつうはそんなものが表に出れば世界に修正されるため、

維持に莫大な魔力を要求される。

しかし、このはざまに作られた異界であれば、世界そのものを塗りつぶしているわけ

ではないので負担は少ない。

かといつて表にも影響を及ぼすので、修正されないわけじゃない。  
それゆえ異界の主がいなくなれば維持できなくなつて消滅する。

どれだけ裏側に近いか。その深度と、異界を開いたものによつて、その形を決定する。  
また、深度によつて、消滅した際に表に自動的に戻れるかが変わる、と。

「つまり異界の主を倒しちゃつたら私帰れる保証がないってこと?」

「そうなるねー。」

その場合どこに行くのだろう。

綺札が言つていた命を捨てなければ解決できないというのはこのコトだつたのね。

道理で近づくなといつていたはずだわ。

近づくなといつたほかの理由も知ることができたけど知れば知るほど恐ろしく感じ  
る。

なによ実在を知られれば知られるほど増えるつて。

こんなのが大量発生するなんて悪夢よ。

しばらく歩いていると、草むらのほうから悲鳴が聞こえてきた。

「助けてー！誰かー！助けてほしいニヤンー！」

にやん？とりあえず人語をしゃべつて助けを求めているなら確かめに行こう。

後味悪いことになるかもしれないし。

そう思つて声のする方向へ行くと、複数の動く影を見つけた。

「助けてー！ 助けてー！ 誰かー！」

そこには黒い犬と緑の犬に追いかけられている尻尾のない猫がいた。

二足歩行しているその猫は必死に逃げている。4足歩行でいけばいいのに…。

「にやふん。」

あ、転んだ。しかも後ろを振り返つてしまつたりもち付きながら後退している。

「あああ…おしまいだニヤン。ここでこいちらに食われちゃうんだニヤン。」

ああ、どうか神様、僕らの王様マニヤニヤンマクリル様、お助けください…。」

しかも両手を合わせて神に祈つてる。どうも人間臭いなあの猫。なんかかわいいぞ。

そんな他人：他猫？の不幸をほつこり見ていたが、なんだかかわいそうになつてきた。

どうせ他に誰もいないし、助けてやりますか。話も聞けそ удashi。

そう思うと、立ち上がり草むらから飛び出た。

まずは開幕一発！ ガンドを緑の犬のほうに放つ。でかい団体しているそいつにガンドが命中。緑犬は傷つき、ひるんだ。そこにピクシーがすかさず追撃の、

「ジオ！」

電撃を放つた。電撃は緑犬を焼き焦がして、消滅させた。  
こちらに気が付いた黒犬が今度はこちらに向かってくる。

早い――

「まずつ――！」

慌ててガンドを放つけど避けられる。そして黒犬はとんで、噛みついてきた。  
咄嗟に腕を強化して顔の前に出す。腕をかまれたまま押し倒された。

「――つづう！」

痛い。黒犬は容赦なく腕に牙をたてる。牙は私の腕に食い込み、引き裂いていく。  
強化しておるおかげでそこまで深刻なけがはしてないけど、腕からは血が垂れている。  
「こんのお！」

こちらを押し倒している黒犬の腹を思いつきり蹴り上げる。

強化している足での一撃だ。黒犬は吹き飛ばされた。

そこにピクシーが電撃を放ち、とどめを刺す。黒犬は消滅した。  
戦いには勝つたけど腕にかなりのけがを負つた。

蹴り飛ばした際に腕をさらに引き裂かれて血もかなり出ている。

「大丈夫――？ ディア！」

ピクシーがよってきて何やら魔術を使つた。

するとかまれた傷が跡形もなく修復された。

「痛くない……」

魔界魔法とやらはどんなでもないものらしい。呪文を唱えるだけで集中した様子もな  
く

怪我を治してしまつた。服の破れだけが怪我の跡だ。

「あなた……すごいのね……。」

素直に感心してしまう。そこに、

「にやー。あのー。」

「ひやつ！ だれ！？」

「助けていただいてありがとうございますにや。」

オイラの名前はケット・シーですにや。」

ケット・シー。アイルランドの猫の妖精。道理で二足歩行してしゃべると思った。  
「あなたはおいらの命の恩人ですにや。そこでおいらたちの王国へ招待しますにや。  
たいしたもてなしもできないかもせんがにや。」

どうやらこの猫は王国へ招待してくれるらしいが、

そんなことより聞きたいことがある。

「ねえあなた、さつき僕らの王様マナナン・マクリル様って言つてたでしょ？」

あれどういうこと?」

そういうと途端に顔が曇った。かと思うと取り繕つて、

「そちらへんも含めてご説明しますにや。ささつ、どうぞこちらへ…。」

怪しい。怪しいことこの上ない。だけどほかに手がかりもないし、行つてみるとこころにする。

ケット・シーに連れられて森を抜けると、広い場所に出た。

そこには城や家が立ち並び、ケット・シーが行き交う王国だつた。

「お城はこちらですにや。」

そういうつてお城へと進み、門を潜り抜ける。城に入つたところで、

「おーい! みんにやー! 今帰つたにやー! 救いの女神も連れて帰つたにやー!  
デビルサマナーの人間にやー!」

と大声で叫びながらずんずん進んでいく。

「お城の二階の貴賓室でお待ちくださいにや。」

紅茶とお茶請けを用意しておきますので。

そこで事情を説明いたしますにや。」

といつてどこかへ去つてしまつた。そこにすかさずほかのケット・シーが現れて、

「貴賓室はこちらですにや。」

といつて案内する。ついていくと豪華なつくりの部屋へ案内された。  
すべての調度品が見る人が見れば高級なものだとわかるようなものだ。  
：猫なのに正直かなり文化的だ。

運ばれてきたお茶菓子をつまみながら礼儀正しく待っていると、ドアが開かれ、  
何やら大臣のような猫が現れた。

「お待たせいたしまして誠に申し訳ございませんにや。

私はここの大臣を任せられておりますケット・シーでございますにや。

この度は我が同朋の命を救つていただき、誠に感謝申し上げますにや。」

丁寧なお礼をされてこちらも丁寧に返し、自己紹介をした。

「遠坂凜さままでござりますにや。今、この国はある危機に見舞われておりますにや。

あなた様も見たでござりますにや？あの犬の悪魔たちを。

今この国はあの犬の悪魔たちの国によつて滅ぼされようとしておりますにや。」

ここまで聞いて正直笑いがこみあげてくる。

だつて犬と猫の戦争よ？実際はそんなファンシーなものではないかもしけないけど

とんでもなくファンシーな響きの出来事が起こつている。

私が笑いをこらえていると大臣は続きを話し始める。

「もともとこの国はマニヤニヤン・マクリル様が治めておりましたにや。  
 だけど犬の国を治めているルーというものがクーデターを起こして  
 マニヤニヤン・マクリル様をどこかへ幽閉してしまったのでござりますにや。  
 その際にマクリル様の持つていた宝物もどこかへ隠してしまわれて：  
 我らも何とか抵抗したのですが王様がいなくてはいまいち統制が取れず、  
 負け続きで数を減らしてしまったのですニヤン。」

犬にクーデターされる猫つて。

「いや、それよりも聞き逃せない単語があつた。ルーですって？  
 「ねえ、そのルーってどんなやつなの？」

「ルーはマクリル様の養子でござりますにや。マクリル様のもとで、

あの犬たちを統治していたのでござりますニヤン。

クーデターの時までは犬も猫も一緒に仲良く暮らしていたのに……。  
 どうしてこんなことになってしまったのかにやん……」

目の前の大臣は落ち込んだ様子だ。

それにマナナン・マクリルの養子のルーってやつぱりケルト神話の長腕のルー？

だとしたらなんでクーデターなんか？

がばつと大臣が顔を上げてこちらを見て、

「どうか、どうかお願ひしますニヤン！ 我らを、我らをお救いくださいニヤン！」

「そ、そんなこと言われても…第一私はここから出たいだけなのに。」

「もちろんたどはいいませんにや。お救いいただければお礼の品を

差し上げますにや。」

お礼の品。こんな豪華なお城をたててこんなに高級な調度品があるくらいだもの、

これってかなり期待できるんじやない？

そんな打算のもと、

「ええい、いわ！ それでいつたい何をすればいいのかしら？」

「おお！ ありがとうございますにや！ じつはすでにや、この国が今まで持つてきた  
理由の一つが我らに協力してくださる方々にあるのですにや。

その方々へ会つてはいただけないでござりますかにや？」

「お安い御用よ。」

「ありがとうございますにや。ありがとうございますにや。

案内させますにや。どうぞこちらに…。」

案内された場所には一列に並んで槍をもつて修練している猫たちがいた。

その前に、誰かが立っていた。

「もつと腰を落とせ！ それでは敵は倒せぬぞ！」

「スカサハ殿、デビルサマナーの遠坂凜様をおつれいたしましたにや。」「ん？大臣殿か。その娘がデビルサマナーか。

「…ダメだな。その娘では力量が足らぬ。到底われらを養うことはできん。」  
なんかあつていきなりダメだしされた。

「ちよつと！ どういうことよ！ 力量が足りないって！」

「そのままの意味だ。おぬしではマグネタイトの生産量も貯蔵量も足らぬ。

我らが十全に戦うには力不足だ。」

「マグネタイトの生産量も貯蔵量も足りない？ それとあなたたちが十全に戦うことには

何の関係があるのよ？」

「大臣？ 説明しておらぬのか？」

「申し訳ございません。救いの神が現れたと聞いて舞い上がつてしまい…。」

スカサハと呼ばれた女ははあつとため息をついて説明し始める。

「そもそも我らは高密度の情報にマグネタイトを吹き込んで活動する。

その概念が強ければ強いほど要求されるマグネタイトも多くなる。

しかし、我ら自身はマグネタイトを生産することができぬ。

それゆえどこかから持つてくる必要がある。

たとえば、他の悪魔を倒してそのマグネタイトを奪う。

もしくは生産できるもの：生きている人間などと契約するといったふうにな。だが他の悪魔を倒すのにもエネルギーを必要とする。それゆえマグネットaitoをためにくいのだ。

全力を出せばあつという間に尽きてしまう。そうなれば体を維持できぬ。それゆえ、悪魔と契約できる人間を探しておつたのだが…。

そなたではレベルが低くてマグネットaitoの生産量も貯蔵量も足りぬ。契約して戦おうものならあつという間に吸い尽くされるだろう。」

うつ、正直にズバッといわれるどほんどのことだから反論できない。「悪かつたわね、期待させて。」

「いえいえ、元はといえば我らがふがいないせいですにや。

あなた様が謝る必要はございませんにや。」

「まあ待て、そう話を急ぐな。要是今はレベルが足りぬゆえこうなつておるのだ。つまり、レベルを上げてしまえば済む話だ。」

「えつと、それつて…。」

「特訓だ！」

そこからは地獄だった。スカサハ師匠にいきなり槍持たされたと思つたら、

徹底的なしぐきによつて基本的な槍の動作を覚えさせられ、  
くたくたになつたところで早速実践させられる。

敵を引き寄せるルーンで集まつた敵をひたすら倒していくという鬼のような内容だ。  
一回周りを囮まれたときは死を覚悟した。

ようやく終わつたと思つたら座学のルーン講座が始まつた。  
すべてが終わつたころにはもう精魂尽き果ててベッドに直行した。  
これが一日目の内容。いきなり逃げ出したくなつた。

二日目からはいきなり実戦だつた。半日やつて昼食とつてまた半日。  
終わつたらまたルーン講座。正直かなり疲れる。

昨日とは違つてベッドに直行しない程度には余裕はあつた。

：シヨウジキズツトマジユツコウザノホウガイイ。

そしてそれが毎日続いた。大体1か月くらい。

修業がつらくてあまり氣にする余裕がなかつたけど1か月も行方不明つてどんでも  
ない。

学校から捜索願が出されてるころだろうな。綺礼も探してくれてるかな?  
いや、あいつに限つてそれはないか。

ある日、実戦の途中でスカサハ師匠が、

「今日はここまでだ。明日に備えておけ。」

といった。どうしてか尋ねると、

「マナナン・マクリルの宝物のありがわかつた。それは番人に守られている。

番人を倒し、それを取つてくるのが明日の修行だ。」

あ、あくまでも修行の体裁なのね……。」

いわれたとおりに休息をとることにする。それにも急に暇になつた。

そういえばまだこの国を見て回つたことないな。今日は見て回ることにしよう。

そう決めてぶらつこうとすると、あるケット・シーが、

「ではわたくしがご案内いたしますにや。」

と案内をかつて出てくれた。

街中を歩いていると、いろんなお店や住民がいた。

パン屋に服屋に鍛冶のお店。中世のような街並みだつた。

そこに住む猫たちは外見上は見分けつかないやつもいるけど、個性あふれる面々がそこでしつかりと根付いて生活していた。

こんな世界があるなんて今まで生きてきた常識の中にはなかつた。

歩いていると、ある場所に案内された。そこには白いローブをかぶつた青年がいた。

「こちらの方はスカサハ様同様我らに協力していただいている、

マーリン様でござりますにや。」

「どうも。ご紹介にあずかりましたマーリンだ。よろしくね?」

「マーリン!? マーリンってあのアーサー王伝説のマーリン!?」

「そのマーリンだ。いやあ、ほんとは出てくる気なかつたんだけどねえ、  
ちょっとどこに用があつたからこいつのついでに召喚されたのさ。」  
そういうと隣にいる巨大な猫を指さす。途端に猫にパンチされた。

「こいつとはなんだこいつとは。」

「いたたたたたタタキヤスパリーグ、団体が大きくなつたら

怒りっぽくなつたんじやないか? あ、ちょっとこらやめなさい。いてててて……  
……ではちょっと用事があるからこれで。」

そういうつて嵐のようにどこかへ去つていつた。

「忙しい人ですかにや。さ、次の方のところへまいりましよう。」

いつの間にかあいさつ回りになつてゐる。

次に連れてこられたところには剣を二つ佩いた鎧姿の人がいた。

「ん? だれだおめえ? 新入りか?」

「こちら遠坂凜様でござりますにや。凜様。こちらベイリン卿でござりますにや。」

「そういやあのばあさんに特訓させられてるやつがいるつて聞いたな。そいつか。」

……うおつ!? どつから飛んできやがった!?

いきなり飛んできたナイフを避けるベイリン。

絶対にスカサハ師匠だ…。

「ま、死なねえ程度に頑張んな。あのスバルタンのところじや、

それを望むべくもねえけどよ。…またかよ!?

今度は槍が飛んできた。それを避けて森へと消えていった。

「ベイリン卿は犬たちの軍勢を食い止めておられるのですにや。

今のこの平穏はベイリン卿のご活躍あつてのものでありますにや。」

最後に城へとたどり着いて、

「以上が我が国のすべてですにや！ ゴ堪能、いただけましたかにや？」

「ええ。正直ここまでいい国だとは思わなかつたわ。」

「それは結構。では、私はこれで失礼しますにや。」

ケット・シーがどこかにいくと、部屋に戻つた。

夕食を食べて、お風呂に入つて、ふかふかのベッドで眠る。

誰かが夕食を作つてくれて、お風呂も入れてくれて、ベッドメイキングしてくれれる。

毎日がこんな生活だつたらいいのにな…。特訓はいらぬいけど。

翌日、いつも通りにケット・シーに起こされて、身支度を整える。

そしてスカサハ師匠に連れられて島のどこかへ移動する。

「ついたな。ここだ。：あそこには誰かいるのが見えるだろう？」

あれが番人だ。あやつが守っている宝箱にマクリルのドルイドの杖が入つておる。あれを取り戻してくるのだ。儂はここで見ておるからな。」

などとのたまつて私を送り出した。しぶしぶ歩き出してふと後ろを振り向くとジーツと背中を見つめている。ほんとにそこで見てる気かあんた。

ええい！やつてやろうじやないの！とりあえず仲魔を召喚して番人へと近づく。仲魔はハイピクシーとケット・シーの2体。

番人の目の前まで来ると騎士らしいその悪魔は槍を構えて警告する。

「止まりなさい。これ以上進むのであればたとえ女子供であろうとも容赦しません。できれば将来美人に育ちそうなあなたを手にかけたくはない。早々にたちさりなさい。」

開口一番なんかあれな言動を食らつた。

「その宝箱に用があるのよ。通してもらうわ！」

「ならば仕方ない。私の名はタム・リン！ゆくぞ！少女よ！」

そういつてこちらへ向かつてくるタムリン。

突き出された槍を避けて突き返し、払い、切り返す。

付け焼刃だけど教わったことはしつかりと身についている。

そのまま槍で打ち合っていく。あっちのほうが技量は上。何回もケガさせられる。だけどそのたびにハイピクシーが治してくれる。

致命傷を食らいそうになつたときはケット・シーが邪魔をする。

長いこと打ち合っていると、どうにも手加減されているようだ。

容赦はしないといつておきながらどういうことだろうか？

悔しいから目にもの見せてやるつもりで槍でルーンを刻んだ。

刻んだのはアンサズ。炎がタム・リンを襲う。

いきなり炎が出てきて驚いたのか慌てて後退するタム・リン。ざまーみなさい！

「くつ。少女とみて侮つていてはいけませんね。」

と槍を構えなおした。その時、どこかからものすごい音がして、ケット・シーが轢かれてやられた。宝石へと戻るケット・シー。

襲撃者の正体は首なしの馬に乗つた首なしの騎士だった。

アレってデュラハン？！

氣を抜いていられない。その間にもタムリンはこちらを攻め立ててくる。

デュラハンがこつちに向かってくる！それを避けようとしてタムリンに体勢を崩され、

「あ。」

ダメだ。これ死んだな。お父様、お母様、こんなところで死んでしまう不出来な娘をお許しください。

心の中で謝りながら来る衝撃に備えて目をつぶる。

瞬間、ひと際高い金属音が鳴った。衝撃はこない。

……？スカサハ師匠が助けてくれたのだろうか。

ああ、いつも心の中でいつか復讐してやるとか言つてごめんなさい。

今回ばかりは本当に見てるだけなんてことはしないんですね、ありがとうございます。目を開けてみるとそこにいたのはスカサハ師匠ではなく、

とても立派な剣を持った騎士だつた。

タムリンの槍をはじく騎士。その姿に見とれていたが、はつとした。

デュラハンはどこに？

周りを見渡すと、飛んでくる矢に対応して身動きが取れないでいるデュラハンがいた。

体勢を立て直してない今ならこつちのもんよ！

容赦なくガンドとルーンによつてデュラハンをやつつけた。

そしてタムリンと騎士のほうを向くとタムリンが押されている。

騎士の怒涛の攻めにタムリンは後退しながら受けることしかできない。

一瞬体勢を崩したすきに一気に胴を切られ、

「ふつ、私の負けですか…。できれば…マブ…い…。」

といつて消滅した。最後までそろばつかか。

剣をおろした騎士がこつちに来て、

「ご無事ですか？お嬢さん？」

と手を差し出した。

「ありがとう。」

手を取つて立ち上がりると、改めてお礼を言つた。

「助けてくれてありがとうございます。私の名前は遠坂凜。あなたは？」

「私の名はアコロン。よろしく。ミス遠坂。」

ミ、ミス遠坂だなんて。

と、向こうから誰かがやつてくる。矢が飛んできたほうだ。

「無事だったか？ええと、きみ？」

そういつて出てきたのは赤い髪の私と同じ年くらいの少年だった。

「ええ、助けてくれてありがとうございます。私は遠坂凜よ。よろしくね。」

「そうか、よろしく、遠坂さん。俺は衛宮士郎。」

それで、何で槍持つて戦つてたんだ？」

「それについては後で説明しよう。」

あ、スバルタンランサー。本当に見てるだけでしたね貴女。

そう思つていると頭を小突かれた。星が！星が見えるスター！

「邪念が漏れているぞ。もう少し隠す努力をしろ。」

それよりも、番人は倒した。マクリルの杖を取つて来い。

「…帰つたら今日の特訓は倍だな。」

そ、そんな。これ以上の地獄だなんて。

足取り重く宝箱に近づいてそつと開けるとそこには典型的なドルイドの杖があつた。手に取つて確かめてみるとんでもないほどの神秘が込められている。

これ、宝具級の代物じやない？

もしかして本物のマクリルの杖？じやあ、あのスカサハもマクリルも本物?! てつきり今まで概念をかぶつただけの偽物かと思つてた。

「どうした？手に入れたのならすぐに戻つて来い。」

急かすスカサハ師匠の声で我に返り、慌てて戻る。

「あの程度のやつにやられるとは情けない。とはいえよくやつた。

「これで反撃の一歩はふめたな。」

「そうですね、 ししょー！」

「あの…。」

声をかけられる。ずっと待っていたようだ。

「おお。 そうであつた。 私の名はスカサハ。 影の国の女王だ。  
いまはわけあつてケット・シーの国の用心棒のようなことをしておる。  
それで、 おぬしたちは？」

嘘だ！ 用心棒つてよりオニ教官じやない！

「俺たちは、 この異界を消滅させにきたデビルサマナーです。  
あつちに他の仲間がいます。 まずは合流しましよう。」

そういうと移動する。 ついていくとそこにはワカメみたいな  
髪のやはり同じ年くらいの少年と、 8体の悪魔がいた。

「ん？ 終わったのか？」

「ああ。 何とか助けれた。」

「あなたは？」

少年はこちらを向くと、

「僕は間桐慎一。 こいつと同じデビルサマナーだ。」

# 凛ちゃんの大冒険！わんにゃんフェアリー大戦争！

## a r t 3 ! 8 / 2 6 設定変更。

いつもの朝。なんだかグライアイが楽しそうにしている。  
エニユースーに聞いてみると、

「今日お姉さまが遊園地に連れて行つてくれるの！」

輝かんばかりの笑顔である。

へー、よかつたな。

「うん！」

というと元気なお返事をもらつた後、

またいそいそと着ていく服とかの準備に戻つていくエニユースー。

そんな時バロウズの、

「異界の発生を確認したわ。場所は新都方面。範囲が広いわね。」

という空気を読まない発言があつた。

いや、空気を読んでないのは異界を発生させた悪魔か。

とりあえず準備していたメドウーサとグライアイのほうを見てみると、

グライアイは気づいていないがメドウーサは聞いていたらしく、こちらをガン見していた。

思わず目をそらしたけど、言わないわけにもいかない。  
グライアイを呼んだ。

「なあに?」「どうかした?」「なにがあつたの?」

「……異界発生したけどバロウズの新アプリでレベルが低いことはわかってるから、僕たちだけで解決してくる。お前らは楽しんでくるといいよ。」

「ええー?」「いいの?」「だいじょうぶ?」

「心配しなくとも僕たちだけで何とかなるレベルだから! 気にせず行つてこい!」「わかったわ!」「ありがとう!」「がんばつてね!」

異界の発生を聞いた時、顔を曇らせていたけど気にせずに行つてこいでまた笑顔に。タマモがそばに寄ってきて、

「いいんですかあ? そんな嘘ついて?」

僕には…あの笑顔を曇らせることはできない…。

「そんなこと言つてメドウーサさんの視線が怖いだけじゃないんですか?」

それも一つの理由なのは否定できない。

だつてやばい、あれやばい。瞳孔ひらいてたもん。くわつとしてたもん。

メドウーサさん、目えこわつ！状態だつたもん。

「文字通りの蛇にらみでしたね、あれ‥。」

あいつはいってきてまだ日数立つてないからかなんか好感度低いんだもん。  
サマナーの命へグライアイの幸せ つてくらいの好感度だもん。

まあ、グライアイの笑顔を曇らせたくないつてのも理由だよ。

ようやく姉妹の一人と出会えたんだ。それまでを取り戻すのを邪魔したくないし。  
‥まあ、死ななければいいだけの話だ。ついでに戦闘人数が多すぎて、  
消費がきついのもあるし。

「ふーん、ま、いいんですけど。」

と、タマモは離れていった。

‥そういえば異界に行つてる間のマグネットイト供給どうしよう。助けて！バロえも  
ん！

「それに？マスター。：マグネットイトを最初にかなり送つておけばいいわ。

戦闘をしない限りは消費も多くならないし、

無くならないうちに戻れば問題ないわ。」

なるほど。じゃあそれで。

「ただし、なにかマスターの代わりに依り代となるものがいるわ。

できればマスターの体の一部とか、普段身に着けているものとかがいいわね。  
：服とか、髪とかがいいんじゃないかしら？」

「あ、じゃあ私にもれます？髪。」

「さ、マナーの身代わりに使う人形を作るんですよ。髪を使つた人形なら髪単体よりも、  
依り代としての効果は高いはずです。」

そうなのか。じゃあ頼む。

「はーい、任せましたー。じゃあ、ちよっきちんと。」

：いきなり髪を切られた。それはもうざつくりと。いつもたやすく、えげつなぐ。  
おおお、おまえなあ！

「あ、ちよつと動かないでください。いま動かれるともつと変な髪形になりますよ。」

ぐつ。そういわれると止まるしかない。つーか床に髪がこぼれるだろ！

「そこはご安心。呪術でホイホイっと1本も逃さず集めますから。」

そういうながら髪を切つていくタマモ。結構な量が切られた。

「これでよし、と。じゃ、軽く作つてきますね。」

そういうつて部屋に引っ込んだ。と思つたらドアから身を乗り出して、

「けつして、のぞかないでくださいね…。」

などと言つている。お前狐だろーが！

とまあ、こんな騒がしい朝の出来事があつて、異界に突入したのであつた。  
異界で出てくる悪魔はほんとにそれなりにレベルが低かつたので、  
衛宮のレベル上げもかねて基本的に衛宮が戦うこととした。

そして、探索しているうちに、遠坂嬢がやられそうになつてゐる場面に会い、  
今に至る。

自己紹介すると、目の前の少女は一瞬止まつて、何事もなかつたかのように、  
「私の名前は遠坂凜よ。よろしく。」

と言つてきた。

遠坂：桜の元実家じゃないか。聖杯戦争御三家がこれで2人デビルサマナーになるなあ。  
とは。

いや、そもそも魔術師の子供ばつかデビルサマナーになるなあ。  
そんなことを考へてゐると、

「なにを正在する？挨拶は済ませたのか？…む？」

奥からなんか全身タイツの女の悪魔が出てきた。

「げえつ!? 師匠!？」

なんかクーフーリンが驚いている。あいつの師匠って確か?」  
 「スカサハね。影の国の女王で、武芸の達人。ガイボルクをクーフーリンに授けたのも彼女よ。」

ふーん。解説を聞いていると二人は話し始める。

「げえつ、とはなんだげえつとは。まるで会いたくなかったみたいだが?」

「き、気のせいだろ?。それよりもなんでもあなたがここにいるんだよ? 影の国から出られないはずだろ?」

「これは分霊だ。私本人は影の国にいる。まあ、触覚のようなものだ。本来なら分霊なぞ作れぬが、

世界の異常により分霊を作りここに送り込むことができた。」

「そうじやねえよ。わかってんだろう?」

「……に来た理由は、呼ばれたからだ。マナナン・マクリルにな。あやつは幽閉される前に足掻きとして我らを呼びだした。退屈しのぎにはなるかと思い、手を貸しているだけだ。」

「なるほどね。にしてもマナナン・マクリルが幽閉? 誰にだよ?」「お前の父、ルード。」

「お、親父があ!? 親父がここにいんのかよ!」

「あやつがここにいるのか。しかもマナナンも。これは面白くなつてきたな。」「ああ。ま、詳しいことは我らの拠点で話そう。ついてまいれ。」

そういうつてスカサハは歩き始めた。それについていく。

歩いている途中、思いつめた顔をしていた遠坂がこちらに近づいて、こつそり話しかけてきた。

「ね、ねえ、桜は元気にしてる?」

どうやら桜のことが心配らしい。…どう答えたものか。

「1年ちかく家に帰つてないからわからない。」

「はあつ!? ちよつとそれつてどういう…!」

思わず大声を上げる遠坂。みんながコツチを見てるのに気が付いて、コホンと咳払いすると、

「それで、帰つてないつてどういうことよ?」

「家出した。マンションに住んでる。」

なんか目が冷ややかなものになつてくる。

「あなた…魔術を捨てたの? 魔術師の家系のくせに?」

「僕に魔術回路はない。後継者は桜になるだろうよ。僕はいらない子だつてさ。」

遠坂の目が驚きに満ちたものになる。

「じゃ、じゃああなたどうやつて悪魔を使役してるのよ!?」

「これでだけど? そもそもマグネットイトを扱うのには魔術回路いらないし。」  
スマホを取り出すとジーっと見つめている。

「こんなのでできるの?」

「悪魔召喚プログラムがあるからな。」

「悪魔召喚プログラムう? なによそれ。」  
ざつとした説明をすると、

「そんな便利なものがあるのね。私はこれよ。」

と宝石を取り出してきた。これから召喚するらしい。

なんでもこれに召喚するための情報が書き込まれているとか。

バロウズが割り込んできた。

「その方式だと1, 2体しか同時に召喚できないわね。」

その代わりマグネットイトの扱いによって機械式ではできないこともできるわよ。」

「びっくりした?: あなたなに?」

「私はバロウズ。このスマホにいる使い魔のようなものよ。よろしくね? お嬢さん。」

それで、その方式でできることだけど…。」

バロウズが説明を始めたのでスマホを渡して離れる。

そのうち広い場所に出た。城があつて町がある。

「ついたぞ。ここが我らの拠点だ。あの城で詳しい話を聞くがいい。

私はここで失礼する。凛は私とともに来い。それとクーフーリンも後で来い。」

「はつはつはつ、ぜつてーいかねえ。」

「逃げても無駄だぞ。久しぶりにたっぷり稽古をつけてやろうではないか。」

「まじかよ…。」

「案内いたしますにや。こちらでござりますにや。」

遠坂とスカサハと別れて城へとケット・シーに案内される。

どうやらここは猫の王国らしい。なんだかファンタジーの異世界に来た気分だ。  
かなり今更だけど。

「なんていうか、かなり生活感あふれてるな。みんな幸せそうだ。」

「キヤメロットもこんな感じでした。いやあ、なつかしい。」

衛宮とアコロンがそんなことを話している。

城についた。門を潜り抜け、豪華な部屋に案内され、大臣らしき猫から説明を受ける。

なんでも、ルーは犬の軍勢を率いてこの猫の王国にクーデターを起こしたらしい。

猫の国の王様がマナナン・マクリルでもともとは一緒に統治していたのがある日突

然、

つといった感じで、マナナンはどこかに幽閉されたらしい。  
幽閉される前に呼び出したのがスカサハやほかの悪魔で、  
今は猫の王国に協力しているとのこと。

説明が終わつたところで疑問がある。

なんでマナナン・マクリルは猫と犬の王国を作つたんだ?

それに異界を作つたのはマナナンなのか?

だとしたら殺されたんじやなくて幽閉されたのもわかるけど。  
マナナン・マクリルに猫に関する伝説なんてなかつたはずだ。

「さてな。あいつのことだからろくでもない理由でやつてそうではある。  
」  
というバロール。

え? なに? ろくでもないやつだつたの?

異界を作つてる時点で割とろくでもないか。

「お願ひしますにや! 我が猫の王国をお救いくださいにや!」

救うつて言つてもな…。

「別にいいじゃないか慎一。」

衛宮に小声で話しかける。

一応言つとぐが救つたところで異界が消滅したら、こも消えるんだぞ。

「あ、そつか。：：でもほつとけない。何が起きているのか調べるためにも  
「ここは協力したほうがいいだろ？」

まあ、ルーと戦うのに猫の軍勢が付くのはありがたいけど。

……わかつた。協力しよう。

「おお！本当にございますか！ありがとうございますにや！

では我らに協力していただいている方々のもとへご案内しますにや。

その方々と契約していただくことにより、

力を最大限発揮できるようにしてほしいのですにや。」

その時、ドアがノックされ、

「お茶菓子をお持ちしたのだな。」

という言葉とともに返事も待たずになんか入つてきた。

「おお！ネコマタ殿、ありがとうございますにや。

こちら、家庭的なネコマタ殿。我らに協力していただいておられる方の

おひとりでございます。とても家事が得意なのでございますよ。

：：おや、どうされました？：：おお！そう言えばそちらのタマモ殿にそつくり…。

入ってきたのはどうみても犬の手足と尻尾をつけたタマモであつた。

あれでネコマタとか無理があるだろう…。

「むむむ、そなたはオリジナルではないか。ここであつたが百年目! サインくれ。ファイトはその後だワン!」

ワンつて言つちやつたよ。キララがつかめない。

「げえつ! タマモキヤツト! なぜあなたがここに!?」

「呼ばれて飛び出てわわわわーんなのだ。2足歩行の猫より犬のほうがハント魂がくすぐられるゆえな。」

そんな理由なんだ?:。呼ばれたつてマクリルにか?

「キヤツツ。手足のつながりからなのだ。」

どんなつながりだ。

とりあえずこつちには戦う理由なんてないぞ。それに僕らは味方だ。

「そうなのか。ならばよし! この場は丸つと収めるとしよう。」

もうすでに契約したご主人がおるゆえ、我はここで。

いつもヘロヘロなご主人のために気力を充電する料理を作らねばならぬゆえな。」

そういうつてタマモキヤツトは嵐のように去つていつた。

氣を取り直して案内される。

案内されたもとにいたのは騎士と白いローブをかぶった魔術師だった。

「騎士はこちらを見るなりいきなり二つの剣を抜きアコロンに斬りかかつてきた！  
アコロンは持っていた剣で騎士の剣を受け止める。

「おい…てめえ。だれだかしらねえがなぜその剣をもつてやがる。」「いきなり斬りかかつておいてそれですか…！せいつ！」

アコロンは騎士をはねのけた。下がる騎士。

「おい。もう一度聞く。なんでその剣を、アーサー王の剣、

エクスカリバーを持つていやがる。」

アコロンは顔を曇らせて、エクスカリバーに目を落とし、

「…なぜこの剣がまた私のもとにあるのか、私にも…わかりません…。」  
と消え入りそうな声で言つた。

「あん？なんだそりや。まあいい、どうせ盗んだかなんかしたんだろ。」

「おい！お前！誰だかわからんねえけどアコロンを悪く言うな！」

士郎が食つて掛かつた。

「ああん？なんだガキ？これは俺とあいつとあいつの持つている剣の問題だ。

「関係ねえ奴はすつこんでろ。」

「関係なんかない！俺はアコロンのマスターだ！」

「シロウ…。」

「あいつのマスターだ？ はん。なるほどね。その剣持つてガキの子守か。いい身分なことで。それはそれはさぞかし立派な騎士様なんだろうよ。」  
皮肉気に騎士が嘲笑する。

「てめえ…！ ガキの子守なんかじやない！」

それにいつしょに戦ってくれる立派な騎士だ！ 笑うな！」

「一緒に戦うだあ？ てめえがか？ おいおい、あんまり笑わせるなよ。

そのナリで何ができるつてんだよ？ どうせ後ろで見て応援してるだけだろ？  
がんばれー、まけるなー、つてな。」

「なんだと…！」

「そこまでです。これ以上私のマスターを侮辱するのはやめてもらいましょう。  
それと、先ほどの言葉、取り消してもらいましょーか。

シロウは私と共に戦う立派なマスターです。」

「やだね。どうしてもつていうんなら力ずくできな。できるもんならな。」  
「いいでしょー。その決闘、のつた。」

なんだか決闘する流れになつちやつたぞ。

「これだから男の子つてやつは…。」とタマモ。

「いやあねえ、まつたく。」とヴィヴィアン。

「喧嘩はよくないですよー。」とパワー。

「いいじやねえか。好きだぜ。このノリ。」とクーフーリン。

「ほんと、ベイリン卿は血の気が多いなあ。」と…誰だあんた？

「これは失礼。私の名前はマーリン。この猫の王国に協力している魔術師だ。

君たちを待つていたよ。」

待つていた？それってどういうことだ？

「いまこの世界…現実で起こっている異界の発生する理由は私も把握している。

ついでに君がそれを拾わなければ即座にこの世界が消えていたことも。

世界が終わるか終わらないかがかかつてているし、君たちを手伝おうと思つてね。  
それで異界に出れば君たちが来るだろうと踏んで待つっていたのさ。」

え？スマホ拾わなかつたら即座に世界滅んでたの？何それ怖い。

つーかそんなこと聞いてなかつたぞ、バロウズ。

「…見かたを変えれば、すべての元凶があなたにあると思い詰めるかもしけないと  
思つて黙つていたの。ごめんなさい。」

…そつか。それならいい。許す。

「おつと、決闘がはじまるみたいだよ。」

みると、両者が剣を構えてにらみあつてゐる。そのまま動かない。

と、ベイリンが動いた。

「どうした？そつちが来ねえんならこつちから行くぜ？…そらあ！」

とアコロンに接近し、右手に持った剣をふるう。

アコロンはそれを受け流し、反撃する。

しかし、それはベイリンが左手に持った剣で受け流されてしまつた。

さらに踏み込んでけりを入れるアコロン。ベイリンは後ろに跳んでそれを避けた。

「まだまだいくぜえ！」

続く、ベイリンの連撃。アコロンはそれらをひとつづつ丁寧に対処していく。

剣と剣がぶつかり合う。打ち合う騎士たち。

時に斬撃を甲冑で受け流し、時には転がつて回避し、蹴りも使う。

一進一退の攻防を繰り広げていた。

ベイリンは2つの剣を巧みに使い、攻撃に、防御に、隙を見せない。

アコロンはその中で丁寧に対処し、隙を作り出し、果敢に攻めていく。

何十合も打ち合つて、アコロンが仕掛けた。

ベイリンの剣を受けると同時にさらに踏み込んで懐に入り体当たりを食らわせる。

たらを踏んだベイリンにさらに剣をふるう。

ベイリンはそれを後ろに跳んで避けた。アコロンが剣を突き付ける。

「さあ！降参しますか？負けを認めるならマスターへ謝罪してもらいますよ！」  
 「へつ、だれが負けを認めるか！まだ本気を出してもいねえぞ！  
 …できればあれは使いたくなかったんだがな…。」

ベイリンは右手に持っていた剣を放り出すと、

近くの木に立てかけてあつた剣を取つた。

「おーい、ベイリン卿ー？それはあまり使わないほうがいいんじゃないかなー？」

「うるせえ！本気も出してねえのにやられっぱなしで黙つてられつか！」

ベイリンは剣を抜いて構えた。なんだか禍々しい感じがする剣だ。

「いくぜ…！最も優れたる蛮人の剣！」

より禍々しさを強めた剣でベイリンはアコロンに斬りかかつた。

明らかに先ほどよりも早い！アコロンは剣で受けるがたたらを踏んでいた。

なるほど、さつきよりも早く、力も強くなっているのだろう。

それゆえ力加減を誤ったということか。

先ほどよりも素早く、重い剣の連撃にアコロンは防戦一方になつてしまつた。

受けることはできるが、反撃する余裕もない。じりじりと後退していく。

「そらそらそらあ！どうした！もうおしまいか！？」

「くつ…！」

じわじわと傷を増やしていくアコロン。ついにベイリンの繰り出した蹴りをまともにもらひ、後ろに吹き飛ばされ、倒れる。

頭にベイリンの追撃が迫る。アコロンはすぐに転がつてそれを避け、体勢を立て直そうとするが、すでにベイリンは剣を振り上げていた。

「しめえだ。」

剣が振り下ろされた。

「衛宮が叫んだ。

「負けるな! アコローン!」

剣がアコロンの頭をとらえる直前。アコロンは突如ものすごい勢いでベイリンに体当たりを食らわせた。

それでも剣をふるつたが剣はアコロンの肩をとらえ、鎧にはじかれる。

ベイリンは吹き飛んだものの空中で体勢を整え、地面に両足をつけ踏ん張る。

「ちっ!? 今何しやがった! ?」

ベイリンが構えなおした瞬間、アコロンはまるで吹つ飛んだかのような加速でベイリンに接近して剣をふるつた。

「なつ! ?」

それを防ぐベイリン。だが剣ごと持つていかれそうな剣戟に反撃ができない。

そして立て続けざまの連撃により、今度はベイリンが後退しながら受けることしかできなかつた。

一撃ごとに体勢を崩してくるその剣戟に反撃することもできず圧倒される。ベイリンほどであるならば。しばらくすれば慣れるであろうそれも、

今は怒涛の瀑布のような勢いでベイリンを飲み込まんとしていた。そして。「グッ!? まずっ…!?

両剣をしたからかちあげられ、致命的なまでに体勢を崩したベイリンの胴に、剣が横なぎにふるわれ、その胴を両断…

「おい、てめえ。なぜとどめをささない？ こつちは殺す氣でやつたんだぞ。」

しなかつた。剣はベイリンの胴ぎりぎりで寸止めされていた。

アコロンは、

「いまはこうしてマスターへの侮辱を返上させるため決闘していますが、

我らは猫の王国を共に守らんとする同士。同士討ちするなんて馬鹿らしいでしょ

？

それに、あなたの命を取つたところでマスターは喜ばない。

「…これでもあなたが負けを認めないのであれば話は別ですが?」

と返し、ベイリンは、

「わかったよ。認めるよ、認めりやいいんだろ?」

といつて、剣をおろした。アコロンもそれを認めると剣をおろした。  
そしてベイリンは士郎とアコロンに向かって、

「悪かつたな。だがさつきの言葉は取り消さねえ。」

「な!負けを認めるのでしよう?!」

「だがそいつの実力を認めたわけじゃねえ。まだ見たわけじゃねえしな。」

「貴方ねえ…!」

「いいんだ、アコロン。そいつの言うとおりだ。アコロンの実力しか見せてない。  
そんなので俺の実力をを見せたなんて言わない。」

だからさ、今度は俺の実力を見せてやるよ!次の戦いで!

だから、俺と契約してくれ!一番近くで見れるように!」

「はつ!おもしれえ!いいぜ、その提案、乗った!俺はベイリン!よろしくな、  
ええと…。」

「士郎だ!士郎でいい。よろしくな!ベイリン!」

「おう!分かったぜ!シロウ!」

やれやれ、うまくまとまつたようだ。

「なんか少年漫画的なノリで解決しちゃいましたねえ…。」とあきれるタマモ。

「ほーんと、こういうの好きよねえ、男の子つて。」とヴィヴィアン。

「なにがともあれ無事解決してよかつたです！」とパワー。

「やれやれ、終わつたみたいだねえ。」

マーリンがそんなことを言うと、ベイリンが近づいてきて、

「おい、マーリン。ちょっと面貸せや。な？」

ちつとばかし聞きたいことができたからよお？」

と言つてマーリンを連れて行つてしまつた。

「それについてあんなの隠してたなんてずるいぞ、アコロン。」

「いやあ、シロウが叫ぶと同時にものすごい力が送られて、

その時に、あれの使い方が頭に思い浮かんだのです。

魔力を風に変換して放出する方法が。同時にそれに合わせた剣技も。

あれは何だつたんでしょうか。」

「へー。どうしてだろうな？あれ？アコロン。お前傷治つてる？」

「あ、本当ですね。どうしてでしよう？」

ベイリンがマーリンに詰め寄る。

「おいてめえ、あれはどういうこつた。ありや風を放出して加速してんだろう? あれと同じのを見たことがある。

おんなじ剣:聖剣エクスカリバーを使うもの、アーサー王。

ありやアーサー王と同じ戦い方だ!ご丁寧に剣技までそつくりときた!

それにどことなくアーサー王に似ていやがる!

こいつはどういうことだ!魔術師!

「痛い痛い。もうちよつと優しく。」

「ふざけてんじやねえぞ、こら…。」

「わかつた。わかつた。はなすよ。」

…アコロンはね、アーサー王より先に作られたんだ。」

「おい…、それって、まさか?!」

「アコロンはね、アーサー王のプロトタイプ。」

出来損ないの、アーサー王になれなかつたものだ。

つまり、アーサー王の実の兄さ。」

ベイリンは啞然としている。マーリンはそれを気にせず話を続ける。

「最初、アコロンを作り出したとき、竜の因子が発現しなかつた。

彼では赤い竜の化身たる理想の王になれない。

アーサー王の魔力放出は竜の因子によるものもあるし、

魔力を作り出すこともできず、エクスカリバーを放つこともできなかつただろうね。だから生まれたときに失敗作と分かつた。

それゆえ、万が一に備えて魔力放出とか封印した後、

何も知らせずに騎士の家に預けた。生まれてしまつたものは仕方ないからね。

まあ、彼の失敗があつたからアーサー王は失敗せずに生み出せたともいえるけど。だからこそ予想外だつたよ。モルガンがアコロンを恋人にして、

王位に立て、その王妃として統治をしようとしたときは。

何せまぎれもなくウーサーの息子だ。正当な王位繼承権はある。

いやあ、あの時は本当に焦つた。どうしようかと頭を悩ませたぐらいだ。ま、モルガンがエクスカリバーを奪つてくれたおかげでそれも解決したけど。マーリンはなおも立て続けにしゃべる。

「今のは契約しているマスターに埋め込まれているものと、彼の特性から、  
バスを通じて流れ込んだものによつてそれが覚醒してしまつたのだろう。

完全に予想外だ。とはいへ、マスターがいなければこんなことできなけれどね。  
：本当なら、生前の彼なら、こんなことはできない。

驚いたね、まさか死後に成長し、強くなるとは思わなかつた。

これも、彼が英靈になれるほどではなく、幻靈としてさ迷い歩いていたからだろう。  
こんなこと今まで千里眼で見てきた中でも初めてだ。

今の彼の素質ならアーサー王になれるんじやないかな？

まあもう死んじゃつてるけど。」

長い沈黙が二人を包む。

ベイリンはやつと口を開き、

「そうかい。」

というと踵を返した。

「おや？ もういいのかい？ 罵倒の一つは覚悟したんだけど。」

「聞きたいことは聞けたからな。」

振り返らずにそういつてベイリンは歩きだした。

「そうか、なら何も言わないでおこう。」

とマーリンはそれについていった。

# 凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェアリー大戦争！

## Part 4！

マーリンたちが話し合いを終えたのか戻ってきた。

なんだかベイリンは少し不機嫌そうにしている。

「やあ、待たせてしまって申し訳ない。話は終わつたから、

次の協力者のところにいこうか。えーっと、次は？」

その時森の奥からのつそりとでかい猫っぽい生き物が現れた。

マーリンをちょうど口で咥えれそうでかさだ。

「おお、ちょうどよかつたキヤスパリーグ。彼らが私が待つていた子たちだ。  
さあ、だれと契約するんだい？」

キヤスパリーグと呼ばれた猫っぽいのはジーツとこちらを見つめた後、「こつちの赤い髪のほう。ワカメは何かやだ。海産物臭そう。」

とのたまつた。嫌な理由いう必要あつたんですかねえ？

キヤスパリーグは士郎のほうに近づいて、鼻先を近づけた後、

また離れて森のほうに消えていった。

「えーっと、契約は終わってるな。うん。」

「どうやら契約はしたらしい。」

「まつたく、いつまでたつてもコミュ力不足なんだから…。…ドフォーウツ!?」  
なんてマーリンが言うとどこからかマーリンに岩が飛んできた。

「余計なお世話だ。」

「返答に暴力を織り交ぜてくるんじやない！そんな子に育てた覚えはないぞ！」

「漫才終わつた？次行こうぜ。」

「もうちよつと心配してくれたつていいんじやないかな？」

「ああ、そうだ。忘れる所だつたけど、私も契約を交わしておかないと。」

士郎君。君と契約を交わす。私は花の魔術師マーリン。ま、ほどほどによろしく。」

契約が済んだところで次のところに向かう。次つて確か…。」

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ。」

スカサハがこちらへ振り返つて言う。

傍らには遠坂が槍持つてぜえぜえ言いながら座つていた。

他にも周りに槍持つた猫たちが倒れ伏している。まさに死屍累々と言つたところだ。

「ふむ…そちらの少年であれば満足にマグネットを供給できるであろう。」

体質の問題だな。それとその機械によるものもあるか。」

まあ、供給するのに問題がないのであればよい。おぬしと契約しよう。」

それを聞いた遠坂がガバッと身を起こすと、

「じゃあこれでの修行という名のただひたすら戦うサバイバルをする必要はないのね！」

もともと契約してマグネットイトが十分供給できるようにするためのやつだつたし！」「たわけ。何をぬかすか。私と契約する必要はなくなつたが、おぬしはまだまだレベルが低い。これくらいで修業が終わると思うなよ？」

それに先ほどその機械の使い魔との話を聞いていたが、  
その方式ならではの方法があるそうではないか？

次はそれをマスターせねばならんな？」

「そ、そんなあーー！」

がっくりうなだれる遠坂。

「それと、おぬしたちにも修行をつけてやろう。

本来なら試練を潜り抜けねばならんが、そもそも言つてられん。

見たところまだまだ技術は粗削りといつたところか。

この先の戦い、さらに厳しくなるであろう。

そのためにも常に戦うすべを磨いておけ。」

「俺は戦いの中で磨くタイプなんで辞退しまーす！」

「はつはつはつ、クーフーリン。そんなに私と戦いたいか。うれしいぞ。ではこちらに来るがいい。久しぶりに直々に稽古をつけてやろうではないか。」

そんな師弟漫才を繰り広げている二人。

今にもクーフーリンを引きずつて連れて行こうとしたところで、

「緊急ー！緊急ー！至急お伝えしたいことがありますにやーー！」

と叫びながら一匹の猫が走ってきた。伝令のようだ。

「む？どうした？」

「ええええ…、マニヤニヤンマクリル様が幽閉されている場所が見つかりましたにや！」

「これより救出のため、そちらへ向かつてもらいたいのですにや！」

「なるほど。では案内いたせ。」

「はっ！」

急遽マナナンの救助に向かうことになつた。

クーフーリンは、

「助かつたぜ…。」

などとこぼしていた。

案内されて森の中を移動していく。最初はそこまで敵の数も多くなかったけど、進むにつれてかなり増えてきた。警備が厳重な証だ。

「しつかしどこもかしこも犬、犬、犬。こりやほんとに犬だらけだな。」

「ああ。しかも基本的なのが全部クーシーだからな。時々ヘルハウンド。おかげでアイテムがたまるたまる。ガーネットもこんなに手に入った。それ以上にニワトリの死骸が多いけどな！」

「あーらしいですわね。そんなにあるのなら、いつも通り、2つや3つや10個くらい、分けてくれてくださいまし？」

「わたしもわたしもー？」

タマモとヴィヴィアンが猫なで声で要求する。

まあガーネットばっかりあつても、売るにしたつて怪しまれるからな。ほら、できるだけ大きいのを選んどいたぞ。

宝石を渡すとタマモとヴィヴィアンは喜んでいた。：ん？

なんだか視線を感じて振り返ると遠坂がこちらをガン見していた。視線の先には大量のガーネット。そういえば宝石で契約してたな。欲しいのか？と聞いてみた。

「いいの!?じゃあ遠慮なく！」

ほんとにごつそりと持つてつたな！何に使うんだ？

「なにについて魔術よ。私の家は宝石魔術の家系なの。宝石に魔力を込めてため込んで、使うときは一気に開放する。そういうふうな魔術なの。」

ふーん。なるほどね。：いちいち宝石を使うつてことはかなり金食い虫だな。なるほど。それでそんなに宝石を見てたのか。

：そうか。バロウズのアプリがないからアイテムが手に入る確率が低いのか。  
「ん？それじや何時も倒すときにそんなアイテム手に入れてるの？」

ああ。宝石はほかのに比べて落ちる頻度は少ないけど、

結構な数戦つてると自然とたまつていくな。ほら。

ジヤラジヤラとスマホのストレージにしまつておいた宝石を取り出す。

ルビー、サファイア、エメラルド、ダイアモンド：。

軽くリツトル換算で45リツトルくらいの宝石がたまつていた。

あれ？こんなにため込んでたか。

「俺とも山分けしてるけど結構あるよなそれ。サマナーツて傍目からはもうけてそういう職業だよな。」

あつても怪しまれそうだけどな。

ところでそれつて概念が結晶化してマグネタイトにより、

具現化・物質化したものだけど、ちゃんと魔力通るのか？

「ええ！ むしろかなり魔力通しやすいわ！ いいわね、これ！」

私これからもサマナー頑張る！ これが天職だつたのよ！」

などと喜んでいる。

さて、ニワトリの死骸はどうしようか。猫つて確かニワトリとか食べるよな？ あいつらにあげようか？

「おかあさん、おかあさん。これ、解体していい？」

「慎一、慎二。ぜひとも報酬にこれをもらいたいのだが？」

獣の本能としてこれを頭からバリバリしたい欲求に駆られておるのだ。」

処理に困つてたところだ。いいぞ。救出終わつたらね！ それまで我慢しろよ？ 「わーい！ 思う存分解体するね！」

「うむ、まさに狐まつしぐら！ 多少のおあずけは我慢しよう。」

そんなこんなで進んでいくと、何やらとても警備が厳重な砦があつた。木造でできていて、いたるところに犬が入れそうなドアがある。人間サイズが通るところもあるが。

あれがマナナンのとらわれている場所か？

「そうですね。あの中から声が聞こえますでしょ？」

耳を澄ませてみると、確かに声が聞こえる。

「出せーー！ここから出すにやーー！僕はマニヤニヤンマクリルだぞーー！この島の王様だぞーー！」

誰かーー！だしてくれニヤーー！」

なんか高い声の助けを呼ぶ声が聞こえた。

「…まあ確かにあつたことはあるがこんな声だつたか覚えておらぬ。

そもそも今の我のように姿を変えるなぞできるやつはできるからな。」

まあ確かにお前の変貌ぶり見てるとそう思えるけどさ。

「今まで突っ込んでなかつたけどなんで女装したまま戦つてんの？」

「こつちの姿のほうが好みだからだ。」

さ、さいですか…。

とりあえずあの建物を攻略しよう。警備している犬たちは今まで見たことないけど

…。

バロウズ！

「データ解析中…。あれはガルムね。北欧神話に登場する冥界の番犬よ。」

冥界に近づく生者を遠ざけ、冥界から逃げ出す死者を見張る役目を持っているわ。ラグナロクの際に自由となつてトールをかみ殺したといわれているわ。今はそんなにレベルが高いわけじやないみたいね。

ヘルハウンドよりは強いけどマスターたちなら負けることはないと思うわ。」見たところガルムの数自体は多くない。が、手間は少ないほうがいい。

二手に分かれて片方が侵入して救出。片方が囮となつて陽動することにしよう。救出した後は増援を呼ばれる前に速やかに逃げる。これでいいか？

「ああ。それじゃ囮は俺たちがやる。」

「ちよつと待つて。あなたたちだけじや数が少ないわ。私たちも残る。」

ああそうだな。戦うのが主目的じやない囮はレベルの低いお前らのほうがいい。

万が一危ないときは逃げられるしな。

作戦は決まつた。二手に分かれた僕たちは救出チームが砦に近づき、囮チームは建物の正面に移動。

合図を送ると、衛宮達が魔法をはなつと同時に近接チームによる奇襲を仕掛けた。

敵が衛宮達に集まつてくる。それを見た僕らは砦に侵入した。

砦の中にはまだ結構敵が残つていた。

それらを倒しながら奥へ奥へと砦を進んでいくと、

なんだか広い場所に出た。奥の広いところには檻がある。

そこからマナナンの声が聞こえる。

そして、その正面には大きい二つ頭で尻尾が蛇の犬がいる。これは…！

「どうやら誘い込まれたようだな。」

「グッグツグツ、オマエタチ、ココデシヌ。オレサマ、  
ルーサマニココマモルヨウメイジラレタ。

オレサマ、オマエタチ、マルカジリ！アオーン！」

二つ頭の犬が一声吠えると周りから次々ガルムやクーシーが出てくる。  
「あれはオルトロスね。テュポーンとエキドナの息子で、ケルベロスの弟よ。  
ネメアの獅子、スフィンクスの父で、

ヘラクレスにこん棒で殴り殺されたというわ。」

「またぞろぞろと出てきやがったな。いいぜ。かかつて来いよ。」

クーフーリンが槍を構える。そして群れに突っ込んでいき次々と倒していく。  
「なんだよ。数だけかあ？つまんねえな。」

クーフーリンにオルトロスが突っ込んできた。

地面を碎き、爪をふるい、炎の息まで吐いてクーフーリンを攻撃する。

クーフーリンはそれらを避け、炎の息の中を突っ切つて接近し、

目にもとまらぬ速さで槍を突く。

オルトロスはそれを左右に二回避け、続く薙ぎ払いを上に大きく跳んで回避。降りてくるとともに爪によるスキルを発動して攻撃。

範囲の大きいそれをクーフーリンは後ろに跳んで避ける。

避けたところに爪の連撃が迫り、クーフーリンは一回、二回と避け、最後の一撃を槍で受ける。

「へつ、少しはやるじゃねえか。いいね。面白くなつてきた！」

そういうとオルトロスと戦い始める。

僕たちはその間に周りの雑兵と戦い始める。

「あやつめ、一人だけ楽しみおつて。そらつ！」

数は多いけどあまり強くない。それに動きも統制されてるとはいがたい。

はつきり言つて苦戦するような相手ではなく、次々と狩つて、数を減らしていく。

そしてあらかた狩り終えると、

クーフーリン！あらかた片付いたぞ！遊びはおしまいだ！

「なんだよ？もうしめえかよ。ま、そそここ楽しめたぜ。

刺し穿つ死<sup>ボ</sup><sub>ル</sub>棘<sup>ゲ</sup><sub>ク</sub>の槍！」

クーフーリンの槍がオルトロスの心臓をとらえる。オルトロスは崩れ落ちて消滅し

た。

オルトロスのいた場所を調べると、カギが落ちていた。これは檻のカギだろうか？檻に近づくと、何やら黒い袋をかぶせられた奴がもがいている。

おい、大丈夫か？助けて来たぞ。

「ほんとにや！早く助けてくれにや！」

檻のカギを解除して檻を開けると黒い袋ごと檻から出してきつく縛つてある紐をほどいた。

そして袋から何かが出てき……た……？

出てきたそれは銀色の髪に頭に猫の耳をつけていて片目は青、もう片方は黄色で、所謂スク水を着ていて、

そのゼツケンにはひらがなで「まにやにやん・まくりる」と書かれている。

手と足には猫の手足をつけていて、それなりに太い、先端に猫の手をつけた尻尾をつけている小柄な少女だった。

もう一度言おう。

出てきたそれは銀色の髪に頭に猫の耳をつけていて片目は青、もう片方は黄色で、所謂スク水を着ていて、

そのゼツケンにはひらがなで「まにやにやん・まくりる」と書かれている。手と足には猫の手足をつけていて、それなりに太い、先端に猫の手をつけた尻尾をついている小柄な少女だった。

訳が分からなかつた。

とりあえず目がおかしくなつたんじやないかと思い目をこすつてみたが、現実は何も変わらなかつた。

思わず仲魔のほうを見たが全員啞然とした表情を浮かべている。当たり前だ。スカサハも、バロールも、クーフーリンですらこのどおりである。

誰もその場からリアクションすら取れず、身動きが取れなかつた。

仮称マナナン・マクリルが窮屈そうなところから出てうーんと背伸びをすると、「ふー。助かつたにゃん。誰だかわからないけどありがとうだにゃん。」

といつた。そこでやつと僕は目の前の人物に名前をたずねることができた。

「わたし？わたしの名前はマニヤニヤン・マクリル、だにゃん♪

あ！バロール！久しぶりだにゃん！元気？悪さしてない？」

目の前の人物はマニヤニヤン・マクリルと名乗つた。嘘だろ？  
おいバロール。ほんとにこいつがマナナン・マクリルなのか？

バロールは何も答えずに顔を背けるだけだつた。

いや待て、名前が似ている他人の空似かもしれない。

あんたはマニヤニヤンであつてマナナンではないのか？

「んー？ マナナンともいう！」

とどや顔で言われた。うぜえ。とりあえずその姿は何なのかを尋ねると、「よくぞ聞いてくれました！ これこそ時代を先取りしたファツション！」

西暦2016年のはやりだにやん！

これで人気急上昇だにやん！」

時代を先取りしすぎである。いまは西暦2001年だ！ 15年早えよ！ 馬鹿！ なんだか頭が痛くなってきた。ケルトの神様こんなばつかか！ 「おい、我をこれと同類にするな！」

鏡見てから言え！

「どう考へても狙いすぎですよねえ。あざといことこの上ないですよ、猫耳なんて。」

お前も鏡見てからものを言え！ 頭に思いつきりきつね耳つけてんだろうが！ もういい。救出した以上いつまでもこんなところにいる必要はない。さつさと逃げるぞ！

砦を脱出すると、戦っている衛宮達に向かつて叫んだ。  
とりあえず救出はした！ 逃げるぞ！

「わかった！」

衛宮達と合流して逃げる。犬は執拗に追いかけてきたが、やがてあきらめたのか、追いかけてこなくなつた。

合流した後、マナナンが自己紹介したが、大体の反応は同じだつたので割愛する。ファツションのことを聞かれた返答を聞いて、遠坂は「今は2001年よ…。」衛宮は「なんですか。」と言つていた。

猫の王国に帰ると、マナナンは歎声をもつて受け入れられた。城につくと大臣が、「おお、マニャニヤン様…よくぞ…無事で…」と泣いていた。

「うむ。私が留守の間ご苦労だつたにゃん。えらいえらい。」

と喉元をなでるマナナン。大臣は気持ちよさそうにごろごろ言つている。マナナンは自分の杖を持つと、さつと一振りした。

すると、スク水の上に、いろいろとフリルが付いた、白いロリータファツションの服が現れた。

「ふつふつふ。これが真の姿だにゃん！」

変態度はぐつと下がったが、どちらにしろ色物なのは変わっていない。

「よーし！国民を城に集めよ！これより演説を行う！」

「これよりルーとの決戦だにやん！」

とマナナンは宣言した。

# 凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェアリー大戦争！

## Part 5

マナナン・マクリルが国民を集めよと宣言してから、城内が慌ただしくなった。兵たちが城から出て町のほうへお触れを言つて回っている。

マナナンは何やら紙に書いている。どうやら演説の内容のようだ。聞きたいことがあつたが、忙しそうなので後で聞くことにしよう。

やがて国民が城のもとに大勢詰めかけてきた。

マナナンはバルコニーに出ると、どつからかマイクを出して演説を始める。

「あー、あー、諸君！ よくぞ今まで堪え難きを堪え、忍び難きを忍び、今まで頑張つてくれた！」

諸君らの頑張りによつて私はここに帰つてきた！

私が帰つてきたからにはもはやルーいでかい顔はさせない！

ルーは私がここに帰つてきたことをすでに知つて、ここを攻め落とさんがために決戦の準備をしていることだろう！

どこにブン投げられても立ち上がるのがこの島のモットーだ！

賽が投げられた今こそがその立つ時だ！

敵は強大だ！しかし！知つての通り諸君らには心強い味方がいる！

私と私を助け出してくれたデビルサマナーの彼ら、

そして私に協力してくれた悪魔の彼らである！

ここに諸君らが手を貸してくれればもはや怖いものなし！

攻めてくるルーを倒し、見事我らの島を取り戻そうではないか！」

マナナンが宣言すると、国民たちが次々と拍手を送り、歓声を上げる。

マナナンはどや顔で掌を上にして両手を上げている。うれしいのか尻尾が立つてい

た。

それよりもいつの間にか僕らもルーと戦うことになつていて

「まあいいじゃないか。慎二。」

よくない。ここに何しに来たのか忘れたのか？

「なにつて異界を消滅させに……あ。」

初登場のインパクトと、その後の脱出ですっかり聞くのを忘れていたが、

この異界はマナナンが作り出した異界がどうか聞いていなかつた。

異界を作り出したのがマナナンの場合、あいつを倒せばこの異界は消滅する。

マナナンが演説を終えて、杖を一振りしてまたスク水に戻つた。

なんでだ。

「そこはまあ、ボクは海神だからにやん！」

胸を張つて言うマナナン。海神要素そこでいいのか。  
つとそんなことが聞きたいわけじゃない。

单刀直入に聞こう。この異界を作つたのはあんたか？

「うん、そうだよ？」

やつぱりか。つまりあんたを倒せばこの異界は消滅するんだな。よし倒そう。  
「ちよ、ちよ、ちよつと待つにや！ ボクを倒したところでこの異界は消えないにやん！  
だからその剣をしまうにやん！」

どういうことだ？ あんたが作り出した異界なんだろ？ あんたが主じやないのか？

「つかまつている間に、異界の支配に割り込まれたにやん。

今この異界を維持しているのはボク以外にもう一人いるにやん。

そいつも倒さない限りボクを倒したところでこの異界は消滅しないにやん。  
きつとこれはルーの仕業にやん。だから一緒にルーを倒すにやん。

ルーを倒したら次はお前の番だけどな。

「わかつた！ ルーを倒したらこの異界は消滅させるにやん！

だから殺さないでほしいにやん！

まつたく…、野蛮だにやん…異界くらいいじやないかにやん。

一般人を引きずり込むような仕組みにしてないのに…。」

「私気が付いたら異界にいたけどあれは引きずり込まれていないので？」

思いつきり引きずり込まれてますね。

「にや?!にやにやにや…。お嬢ちゃんの才能のせいだニヤ。

まさかパラダイムシフトに自力で気づけるとは思わなかつたにやん。

かなり深層に作つたのに…。」

なんかこれまでのやつらと違つてかなり異界のことに詳しいみたいだな?

「あつたりまえにやん! 僕は魔術師の神だにやん。これくらい朝飯前さ!」

じやあ異界が発生しているとどんどん世界の裏側が現実に近づいて、

次第に悪魔の発生も増えて世界が破滅することも?

「…え?」

どうやら知らなかつたようだ。素になつている。

「待つて!? 待とう!? それほんと!? うそでしょ!?

あつちやー。やつちやつたなー。それ知つてたらやらなかつたのになー。

せいぜい表層近くに作つたら人が巻き込まれるくらいだと思つてたんだけどなー。」

「私もそんなこと聞いてないけど!」

遠坂も驚いている。どうやら知らなかつたらしい。そういえば説明してなかつたな。  
どうやつてマグネットайのこととか知つたのか聞いてなかつた。

とりあえずこれまでの経緯を説明した。

「なるほど。ただの裏道ではなかつたということか。

よもや異世界の法則であつたとは。して、そのようなことになつて世界は無事なのか  
？」

「いいえ。今はゆつくりと侵食しつつ馴染んでいつている最中。

だからこのまま完全に世界の法則として安定するまで、

世界の裏側の侵食を食い止めなければ、異世界の法則を異物として認識し、排除。  
矛盾を認識した上、リソースを失つたこの世界は消滅するでしようね。」

「神様連中は知つたら積極的に出てこようとする奴らも多いだろうにや、異界のこと。

神代のころのように世界に関わりたい連中はいるだろうしにゃん。

それでなくとも信仰を取り戻したい奴はごまんといるにゃん。

もつとも、消滅まではさせたいとは思わないだろうけど。

それを知らずに出てこられたら大迷惑だにゃん。」

鏡、鏡。ブーメランが頭に突き刺さつてゐるぞ。

「にゃふん…。そこまでよく調べなかつたにゃー。反省反省。

だけどほんとにどうしても出てこようとするやつはきっといるにやん。

もうあの虚ろな状態は嫌つてやつは多いにやん。」

とりあえず、ルーを倒したらこの異界は消滅させないと世界がやばい。  
今はルーを倒すために共闘することになるな。

(だけどそれを知つてゐるあのバロウズとかいうの何者にやん?)  
(世界の破滅を食い止めるためにシンジをデビルサマナーに

仕立て上げたのはわかるが、何か隠している様子。

それが何であるかはわからぬゆえ、今後も見張らねばならぬか。)

マナナンとスカサハが何やら話してゐる。どうした?

「何でもないにや。それよりも早く戦いの準備をするにやん。

ルーは今頃決戦の準備をしているにやん。」

そういうとマナナンは、こつちにや、といいある部屋に案内した。  
そこには大きいテーブルがあり、その上に地図があつた。  
ここで作戦会議つてことか。

「そういうことだにや。現在、アイツの軍勢のほうが数が多いにやん。  
だからアイツが取る戦略としては数でのゴリ押しが妥当だろうにやん。  
練度としては調練を担当してたスカサハ、そこはどうだにやん?」

「クーシー、ヘルハウンドであれば、1体1であれば負けることはない。

それに連携もこちらが上だ。数を頼みにされても長くはもたんが。

そうだな：せいぜい休み無しで半日もつかどうか。」

「であるにやらば、短期決戦しかないということだにや。」

僕らが取るては少數精銳による大将撃破にや。

それはあちらも承知してるだろうし、周りを固めるだろうにや。

ただその間に軍勢が負けたら一気にそちらに向かってくるだろうにや。

それに、軍勢と拠点がヤラれれば島の支配権も全部奪われるにや。  
つまり、軍勢は長くもたせる、ルーは倒す。

どつちもやらないといけにやいので、

僕とデビルサマナーで一番強いやつがルーを倒しに。

そのほか二人で軍勢の手助けをしてほしいにや。

あちらにも将となる周りより強い悪魔がいるだろうし。

そいつらの相手は任せたにや。」

了解。僕がルーと戦おう。で、決戦の場所は？

「それはここにや。」

そういうある場所を指した。

「こゝには広大な草原が広がっているにや。数を頼みとするならば、ここに布陣するだろうにや。斥候もここに移動するルーの軍勢を見たという報告をしたにや。

ここで横に布陣して持ちこたえてる隙に大将を獲るにや。」

地図を見るとその隣には森が広がっている。

ここから奇襲してくるとかはないんだろうな？あいつらは犬の悪魔なんだろ？

森だからといって機動力は落ちないだろうし。

それに本丸のこの拠点は大丈夫なのか？強襲されたらひとたまりもないだろ？  
「こゝは安心にや。支配がきいてるこゝならボクが隠せるにや。

結界で攪乱して入れないようにも出来るにや。

それに、あいつらは機動力が落ちないと言つても、

足並みをそろえることが難しいにや。ルーはそれを嫌うだろうにや。」

ならないんだけど。

「話は決まつたにや。じゃあ行こうにや！」

部屋を出て広場に向かうと既に兵隊が並んでいた。数え切れなくらいだ。

こんなにいたつけ？

「ボクが支配している猫ならある程度は即席で増やせるにや。ただ練度はお察しにや。

それでも、練度の高い猫を小隊長として数匹を引きいらせば、ましだにや。数は力だにや。数には数で対抗するしかないにや。」

そういうとマナナンは兵士の前に立つて演説を始める。

兵士たちはみんなマナナンの演説に聴き入っている。

：なんか見ると人間の集団のようにも見えてくるなあ。

ここまで感情豊かな雑魚悪魔とか見たことなかつたし。

「そうだな。ここまで感情豊かな量産悪魔はいなかつたな。」

「そうなの？ 私ここ以外の異界に行つたことなかつたから知らないんだけど…。」

例外なく感情も自我もあるけどここまで感情豊かではなかつたな。

ガワのせいか、支配のせいか、それともマグネットイトの保有量か…。  
「そのことなんだけど、あの猫ちゃんたち、なんだか普通の悪魔とは少し違う反応ね。なんだか物理的な生命反応の仕方というか…。」  
どういうことだ？あの猫達の相違点つて…？

そのとき、とてつもない熱気とともに雄叫びが轟いた。

ニヤー！とかフシャー！だけど。

どうやら演説が終わつたらしい。兵隊が移動を開始している。

疑問は残るが、とりあえず移動しよう。

移動した先の平原には既に大量の犬が並んでいた。そしてそれに相対する猫の軍団。見た目はファンシーでも、これだけいれば壯觀だなあ。

「それではボクと慎二は中央、凜と士郎はそれぞれ右翼、左翼へ向かつてほしいにや。ぶつかつたらボクたちは正面突破してルーのところに行くから、

右翼、左翼から中央をカバーしつつ軍隊を持たしてほしいにや。」

「それじゃ、俺は右翼にいく。無事でな、慎二。遠坂。」

「私はこっちね。これで帰れるのね、頑張りましょ。」

そう言つてそれぞれ別れると、配置についていく。

ちようど睨み合う配置になつた両軍。緊張が走る。

何かのきつかけですぐに崩れるであろうそれは今か今かとまつっていた。

心臓が高鳴る。そして…、

「全軍！突撃にやーーー！！！」

マナナンの号令とともに両軍が堰を切つたようになだれ込む。

そしてぶつかり、戦いが始まつた！

僕達も先頭を切つて突撃をする。最初の一撃でまずは敵の勢いを止める！

「冥界破！」

スキルによつて発生した波が周りにいた犬をまとめて上空へ、横へ、地面へ、ぶつ飛ばして叩きつける。その一撃によつて周りの悪魔たちが止まる。今のうちに畳み掛けるぞ！

「おう！ 暴れまくりだ！ ジャベリンレイン！」

「木つ端微塵斬りです！ ついでにウエルダンで焼いて差し上げましょう！」

マハラギオン！ デイ・モールトベネ！ いい焼き具合です！」

「ベノンザツパーだよ！ ……ヒホ」「どれ、準備運動だ。モータルジハード！」

「それじやかるーく、マハブフーラ！ マハアクエス！

…どう？ 水の乙女の真髄、感じたかしら？」

「ペルソナあ！ ジやないと言うのにアクア系とは、さすがヴィヴィアン。汚いですね、さすがヴィヴィアン汚い…メギド!!」

「いつの間にメギドなんて習得したんですか？ タマモさん。

おつとつと、タルカジヤ！ スクカジヤ！ ラクカジヤです！

回復と補助は任せください！」

「大群だというのなら我に任せろ。バロールの魔眼を見せてやろう！  
バロールードーステラ  
絶死の魔眼！ ふはははは！」

おつと、少々猫も見てしまつたか。」

「それでこつち見ないでくれにや！つーか味方巻き込むにや！」

「味方は攻撃しちゃダメだホ？ マハラギオン！ マハブフーラ！ メガトンプレス！」

次々に派手にスキルをぶつ放していく仲魔たち。

中央にポツカリと穴が空くくらいの蹂躪である。ひどいもんである。

勢いは止めた！ このままルーのところまで一直線だ！

だけど消費が結構激しいからここからは少し、温存していくぞ！

「こういう時、水天日光天照八野鎮石があればいいんですけどねえ。いらない時に黒天洞の代わりにあつて欲しいときにはい。

ほんとに使えないですねえ、あの鏡！」

なんかタマモが言つているがないものは仕方ないだろ、行くぞ！

そう言うと一目散に突撃していく。相手も困んで叩こうとするが、いかんせん実力の差で蹴散らされていく。そして、森に入つた。

開戦と同時に中央から突撃していく。そして、戦闘の慎二たちが会敵すると、中央の敵が文字通り吹つ飛ばされていく。

「派手にやるじやねえか。こつちも負けてらんねえな。」

「敵が吹っ飛んでいきますねえ。こんな戦争、あまり見たことないですよ。」  
あまりつてことは見たことがあるのか…。

「ええ、王が囮まれた時に風で吹き飛ばしたりしてました。」

「あの時はアルトリアも若かつたからね。つい突っ込んでやつたんだよね。」

「オイ、何呑気に話してやがる。さつさと俺たちも行くぞ！」

そう言うとベイリンが突撃していく。そうだな！ 行こう！

「ええ！ まいりましよう！」

そう言うと俺達も突っ込んで、敵の悪魔をベイリンとアコロンが切り伏せていく。  
「そらそらあ！ 大したことねえなあ？！」

「ふつ！ はつ！ …油断は大敵ですよ！ ベイリン卿！」

「気合入ってるねえ。それじや、私も張り切るとしようか。それっ！」

そう言うとマーリンが剣で切りつける。

…あれ？ 魔術師だろ？ 魔術じゃないんだ！？

「魔術を使うと呪文がいるだろう？ 早口で言うと舌をかんじやうんだよ。」

それに、聖剣で殴りかかったほうが早いだろう？

実を言うとアーサー王の剣の師は私なんだぞ？」

衝撃の事実判明のときである。魔術師とは一体……。

「まじかよ…。」「ほんとですか!?」

戦いながらもアコロンたちも驚いている。

つと、その時、向こうから大きな犬がこちらに向かつてきているのが見えた。

「…なんか見たことある犬だな、オイ。」

「というよりあれって…。」

「カヴァースだね。アーサー王の一番気に入っていた獵犬だ。

あんなに大きくはなかつたはずだけど、ま、細かいことは気にしないでおこう。

どうやら狙いは君みたいだよ? アコロン卿。」

「細かくはないと思います…。…よく見ると何かが馬に乗つてついてきますね。

…あれ、ベディヴィエール卿じゃないですか!?

しかも必死に止めようとしてますよ!?

「君を見て興奮しちやつたんだろう。周りを気にせず一直線にこつちに来てる。」

「ならボクが行く。アーサー王伝説のマスコット枠をいただきに・・・!」

そういうとキヤスパリーグがカヴァースへと向かっていく。マスコット枠つて…。

激しい戦いを繰り広げるキヤスパリーグとカヴァース。

あつ、ベディエールが馬ごと吹き飛ばされた。なーむー。

ベデイヴィエールは無事だつたらしく、起き上がると槍を持つてキヤスパリーグに向かつていく。

カヴァスとは別にもう2匹のでかい犬がこちらに向かつてきた。

「ワタシハファリニシユ！ ユクゾ！」

「オレハライラップス！ キサマタチノ相手ハオレダ！」

「どうやらこつちは被害を食い止めようとしてきたみたいだね。」

「…おや、周りの猫達が怯えて使い物にならない。どうしようか。」

見ると猫達は怯えて槍を落としたところをファリニシユやクーシーにやられている。まずいぞ！ どんどんやられてる！ 救援に行かないと！

「ノガサンン！」

救援に向かおうとしたところでライラップスが目の前に降り立つた。

なんとか通ろうとするが、誰ひとりとして通れない。このままじや猫達が全滅だ！

「うーん、それじゃ、やる気を出させようか。そーれ。」

マーリンが懐から袋を出してファリニシユに向かつて投げ、

当たつた袋から何かの粉がまかれた。

すると、怯えていたケットシーたちが途端に槍を投げ捨ててファリニシユに向かつっていく。

ファリニシユは困惑しながらも向かつてきたケットシーを迎撃つも、

何かに憑かれたかのように次々に突っ込んでくるケットシーに群がられている。よく見ると森側のケットシーでさえファリニシユに突っ込んでいき、

それにつられてクーシーも集まつて大混戦の体をなしている。

「いやあ、さすが特製マタタビ。よく効くねえ。ケットシーがまるでバーサーカーだ。これで心配はなくなったね。

おつと、勘違いしては困るよ。あれは幻覚を使つたわけじやない。

あくまでもケットシーたちが自分の意志で行つたことだからね。

責任は私にはないよ。」

クズだ。クズがここにいる。敵に突っ込ませた挙句に責任はないとのたまつている。見るとアコロンもベイリンも呆れている。

あつ、ファリニシユが崩れ落ちた。まるでゾンビのようなケットシー。

崩れ落ちてなお群がられているファリニシユ。だんだんと動きが弱っていく。しかし、ケットシー側の被害も尋常ではない。早く救援に行かなければ。

「邪魔です！」

ファリニシユの様子を見ながらもライラップスを攻撃していく。二人の騎士とマーリンにより攻撃、牽制を受け、

俺の矢を喰らつて確実に傷を増やしていくライラップス。

突然飛び上がつて俺の方へと向かつてきただが、

「させるか——！」

風によつて飛んできたアコロンに妨害され、吹き飛ばされる。  
背中を打ち付け、転がりながらも体制を立て直したところに、  
ベイリンの追撃を喰らい、頭に剣を突き刺されて力尽きて消滅した。  
後はファリニシユだ！

ファリニシユの方を見ると、更に動きが鈍つており、最早虫の息だつた。  
力なく横たわつていても群がられている。あつ、消滅した。

決着は付いたが、まだ敵は残つている。それにこつちの被害もデカイ。  
さつさと助けに行かないと！

「あいつら森の方から進んで半包围の形を取ろうとしてやがる。まずいな。  
俺は森の方を牽制してくる！」

そう言つてベイリンは森の方へと向かつた。

「あ、ちょっと。ベイリン卿、そつちには行かないほうが・・・。」

マーリンがそんなことを言つてゐる。

ベイリンは聞かず森の方向へと向かう。そして戦い始め……、

「危ない！ベイリン卿！左だ！」

「なにー!?」

その時、突如森から木々をへし折つてものすごい勢いで戦車が躍り出た。そしてすぐ目の前にいたベイリンが戦車に撥ねられ、吹き飛ばされた。

「ベイリンーーー!!!」

「あら？今何か轢いちゃつたかしら？ま、いつか！」

うふふふふふ、これからこのメイヴちゃんの快進撃が始まるのよ、些細なことね？ここに召喚された時はどうしようかと思つたけど、

子の石を拾つて支配権を得て、そのあと目障りな両国が削りあつてくれた。ついでに最も目障りなクーちゃんのパパリンのルーもつぶされた。

これも日頃の私の行いがいいお陰ね！私にしてはここまでよく我慢したほう、私は妖精の女王、マブ！又の名をメイヴ！

さあ！配下の妖精たちよ！思う存分蹂躪しなさい！！

ここでまさかの第3勢力であつたー。

# 濃ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェアリー大戦争！

## Part 6

戦場を一気に突き抜けて敵陣を突破し、ルーがいる場所へと向かう。

奥へ奥へと進むと林の中へと入つた。この奥にルーがいるらしい。

ふと気がついた。なんだか敵の数が少ない。これはまさか。

「間違いなく誘いこまれていやがるな。最初の予測通りだ。」

「つまりこの奥にルーがいることは間違いないにや。」

あいつは穴倉決め込むような奴じやないにや。直接戦場に来ているだろうにや。  
ただ囮まれる事にはなりそうにや。」

つまりルーを相手にしながらその他の軍勢を相手にすることになるのか。

「それなんだがよ、俺に親父の相手をさせてくれねーか？」

クーフーリンはルーの相手をさせてくれと頼んだ。

いいのか？お前の親父なんだろ？それに勝算はあるのか？

「そうにゃ。それにあいつには斬り抉る戦神の剣ラッガクがあるにや。」

「対峙した敵が切り札を使う事」を条件に発動することで自らの攻撃を

「先に成したもの」とする因果を歪ませ順序を入れ替える剣。

あれはこと切り札の出しあいにおいては最強の宝具の一つといつていいにや。真つ正直から戦えばまず負けるにや。君のゲイボルクも封じられるにや。ルーは切り札を使えない状態で戦うには強い相手だにや。

あいつ相手に技量で勝てるかにや？」

「俺の刺し穿つ死棘の槍は因果逆転の宝具。

まず槍が心臓に命中したという結果を作りだしてから原因を作る。

相討ち前提になるがフラガラックを使われてもルーの心臓は貫けるだろう。」

相討ち前提か…。

「それに、技量なんざ親父とは戦つたことがねえからわからん。

長腕のルー。どんくれえ強いか。今からわくわくしてしようがねえ。」

そう言つてニイツと獰猛な笑みを浮かべるクーフーリン。

「なるほど、確かにフラガラックの時間逆行はそれで防げるにや。

しかしそれでルーが倒せなかつた場合はどうするにや？」

その場合致命傷を負うだろうにや。君が抜けると大きく戦力がそがれるにや。」

「その時は私が何とかできます。

致命傷であつても手遅れでなければ靈核ごと修復できます。

だからといって自分を顧みない戦いはやめて下さいねー？

「そいつあ保証できねえな。」

「ふうむ。そこは解決できるんだにや。：：だけどあいつはブリューナクもあるにや。

そいつはどうするきにや？放たれたら防御できるやつは少ないにや。」

「放たれる前にやるしかねえな。どつちにしろ対峙するんだつたらその攻撃は避けられねえ。」

ブリューナクってそんなにやばいのか？

「因果逆転により必ず心臓に当たるとかいうわけじゃないにや。」

轟く五星ブリューナクはざつくり言えば5連のホーミングレーザーのようなもんにや。

ゲイボルクみたくはじかれても攻撃する性質とかはないにや。

ただその威力がかなりやばいにや。その名の通り一つ一つが隕石の落下に近いにや。ついでに放たれたと同時に当たるくらいの速度にや。まさに流星のごとしにや。

避けるのはほぼ不可能と言つていいにや。

ついでにそこまでの威力は出せなくとも“イヴアル”と言うだけで、

相手に飛んでくにや。」

なるほど。一発一発があほみたいに強いうえにそれが5回も来ると。とんでもないな。

「使われないためには使う隙を与えないようにするしかねえな。

それが迎撃に、槍をはじき返せるほどの切り札を使うつて手もあるぜ?」

そしてフラガラックをくらうつてことだな。なかなか凶悪な組み合わせだな。そんなことを考えているとさつきから話を聞いていた二人が話を入ってきた。

「さつきからそこのひ孫が戦うことになつていてるが、われに戦わせろ。

あ奴には借りがある。せつかくの機会だ。ここで返させてもらうとしよう。」

「ルーの武名はわしの耳にも入つておる。是非とも戦いたいものだな。

神殺しと呼ばれた槍さばき、ルーにも通ずるかどうか確かめたい。

のうクーフーリン。さつきお主はオルトロスとじやれあつたばかりであろう? どうだ? ここは師匠に譲つてやるというのが弟子というものではないか? それに親殺しなどするものではないぞ?」

ケルトの戦士は戦闘狂だなあ。実のところバロールが来てからクーフーリンとバ

ロールは割と毎日戦つてゐる。

「ああ。そろそろそこのひ孫との毎朝のスキンシップだけでは飽きた。

久しぶりにバ力がつく孫とも遊んでやろうという爺心だ。」

「お、気が合うな。そろそろ爺とのスキンシップには飽きてきたところだ。

初めての親父とのコミュニケーション、楽しみだぜ。」

まつたく譲り合う気配のない二人。つーかあれでスキンシップかよ。かなり激しいな。

「何を言つて（やがる）（いる）。あんなのはじやれあいだ。

全然本気を出して（ねえ）（おらん）！」

さいですか。まあ異界ではあれと比べ物にならないほど被害でかいもんな。  
つーかそんなに戦いたいなら全員でやれば？  
「できればサシでやりてえんだがな。」

「まあ借りを返せるならばそれでもかまわん。」

「3対1か、気が乗らんな。だがまあ、せつかくのこの体だ、暴れるとしよう。」  
決まつたみたいだな。

その時何やら光る輪がこちらに向かつてきた。相当な熱量を持つている。  
僕はそれをはじき返すと、その光輪は来た道を戻つて行つた。

光輪が通つた道を見ると、燃やされた跡があり、どこかに繞いていた。  
「こつちに来いつてことか。」

罠の可能性もある。十分気をつけていくぞ。

光輪の後を追つて進むと開かれた場所に出た。奥のほうには人の姿をした悪魔がい

る。

ただ切り倒されただけの丸太に無造作に座っている。

緑のマントを身に纏い、マントには白銀のブローチが胸にし、その白肌じかに純金で赤刺繡した王風の膝まで届く絹チュニクを着ていた。そしてどことなくクーフーリンに似ていた。あれがルーか：！

ルーは白い槍をもつていた。その形状はゲイボルクに似ている。

あれがブリューナクか。

「きたか。…くそ爺までいやがるとは。」

ルーはそうだけいうと立ち上がった。マナナンが前に出てルーに問う。

「ひとつ聞きたいにや。どうしてこんなことしたにや？」

島の支配が目的なら支配権を手に入れた段階でボクを殺せば済む話だにや。  
なぜ猫たちを殺して行つたにや。」

「島の支配？ 支配権？ 何の事だかさっぱりわからんが、

あんたは養父だから殺さなかつただけだ。

あの猫どもは俺に逆らつて襲撃を加えた。理由なんざそれだけだ。

今も同じだ。抜け出して反抗して、人間まで巻き込んで、

あまつさえそこのくそ爺まで召喚して手を組むとはな。

バロール

いくら養父といえど、もはや容赦はできん。覚悟しろ。」

そういうと殺気を膨れ上がらせるルー。これ以上の問答は無用という態度だ。同時に周りからガルムたちが出てくる。その中に一匹3つ首の大きな犬がいる。

「オレハケルベロス。オトウトノカタキ、トラセテモラウゾ！」

そういうと一斉に襲い掛かってきた。

ルーはまっすぐマナナンを襲いにかかった。突き出される槍。しかし、それは別の槍によつて受け止められ、

「よう、あんたの相手は俺だ。」

そこから横なぎに振るわれた朱槍を避け、後ろへ下がるルー。

「お前は…。実の親である俺を殺すというのか？セタンタ…いや、クランフーリンの猛犬。」

「こいつも運命のめぐりつてやつだ。主人の敵つてことなら、やりあうしかねえだろ？ま、お互い運がなかつたつてことだ。」

それによ、親殺しなんざ今のあんたが言えた義理じやねえな。」

「そうだそだ！・祖父まで殺したお前が言えた義理ではない！」

便乗して煽るバロール。があえなくスルーされる。

「いや、ほんと実の親を殺すなんて気が乗らねえんだけどなー。」

しつついさつきまでと違うこと言ってんぞ！おい！

つーか説得力が全くない笑顔だな！

「ぬかせー！その顔でよくもそんな言葉ほざけるな。まるで牙をむく猛犬のような顔だ。俺好みのいい顔するじやないか。

できればそれが味方側であつたらよかつたんだが…な！」

そういうと一気に踏み込んで槍を振るうルー。

再び交差する白と紅。対照的なコントラストで描かれるそれは幾度となく交差していく。ときには線を、ときには点を描きながら幾度となく混じり合い、めまぐるしく動きながらふるわれていくそれらはまるで光の芸術のようだつた。

「アオーン！何をヨソミシテイル！」

ケルベロスが襲いかかってきた。はきだした炎の息を避けて斬りかかる。

片手でいなされるが、今度はより深く踏み込んで再び斬りかかり、

それを3回いなしたケルベロスによる噛みつきを跳躍して避け、脳天に斬りかかる。後ろへ跳んで、避けようとしたケルベロス。しかし、踏み込みすぎており、

真ん中の頭の額に剣が当たり、薄く傷つける。

傷つけられたことに怒ったケルベロスは一声吠えると物凄い勢いで突進してきた。ぎりぎりで右に避けると——、ケルベロスの顔と、目があつた。

吐き出される炎の息。体を舐めるように焦がしていく。

その炎の勢いに足を止め、反撃をする間もなく、蛇の尻尾が当たり、吹き飛ばされる。背中から地面に落ちる前に回転して体勢を立て直す。

ケルベロスの方を見ると、してやつたりという笑い顔をしていた。

なるほど、顔が3つあっても無駄じやないか、と思ったがそうでもないらしい。それぞれ独立して動いてお互いカバーしあって死角をなくしている。

視界も広く取れており、やすやすと後ろを取らせず、横も弱点とはなりえない。爪、牙、そして蛇の尻尾に炎の息。中々に強敵だ。

周りの仲魔たちを見渡すが、なかなか数の多い犬たちの対処に苦慮しているようだ。この囮まれている状況が悪い方向に働いている。となれば…、仲魔に念話を飛ばす。

『全員！一旦包囲を抜けるぞ！合図したらついて来い！』

ケルベロスの攻撃をかわしながらタイミングを見図る。

ケルベロスの正面の頭による噛みつきを前に突っ込みながら右にかわす。すかさず迎撃しようふるわれるケルベロスの尻尾をしゃがんで回避すると、

こちらに向き直ろうとするケルベロスの横つ腹に向かって全力で地面を蹴つて跳躍。勢いよくケルベロスを蹴つて、吹き飛ばし、こちらとの距離を稼ぐ。

『今だ！』

合図を出すとともにルーがいる方向の反対側のほうへと突撃した。

一気に攻撃して敵の包囲を食い破り、その穴が埋められる前に包囲を抜け出す。

仲魔たちも次々にそちらに向かっていくが、クーフーリンとバロール、マナナン、スカサハはこちらに来ない。

ルーとクーフーリンの戦いに入ろうとしている者たちを防いでいるのだ。

「無粋な輩は近づけさせん。…ああ、くそ、ルーと戦いたいなあ。あの技のさえを見ているとうずうずしてくる。やはり押しのけてでも主張するべきだつたか。」

「ずいぶん物騒な女だな。それにしても楽しそうだなあやつら。

こつちは露払いで退屈してるというのに…なあつ！」

「まあいいじゃないかにや。こんな機会、もう一度とないかもしれないんだにや。

ちよつと前で言う初めての親子のキヤツチボールのようなもんだにや。」

「ずいぶんと物騒なキヤツチボールがあつたものですねえ！」

つか、投げあおうとしてるのボールじやなくて掴めすらしない槍ですけどお！」

走つてているタマモがそんなことを言つてゐる。全面的に同意するよ。

後衛タイプの仲魔が包囲を抜けたところで前衛が追撃してくる群れを迎撃して押しとどめる。これで後衛が心おきなく戦える。

そのまま迎撃しながら後退していく。クーフーリンたちが戦つてゐるところからどんどんと離れていく。

距離を離したのには理由がある。この辺でいいだろう。ジャックに合図を出す。

「ジャック！ やれ！」

「うん！ 暗黒霧都！」  
フォッグブレス

ジャックの手に骨董品のランタンが出現する。そのランタンからまるで息を吹きかけるみたいにすごい勢いで霧が出てきたかと思うとまたたく間に犬の軍勢を包んでいく。

すると、犬の軍勢が途端に苦しみだした。霧から抜け出せず、もがいている。

ジャックの発生させた霧は強酸性のスマッグであり、呼吸するだけで肺を焼き、目を開くだけで眼球を爛れさせる。

霧によつて方向感覚が失われる上に強力な幻惑効果があるため脱出するには直感などによるものが必要になる。

相手は悪魔とはいえ犬があるので、動物的な勘によつて脱出される可能性もあるが、大半はその鋭い嗅覚を焼く硫酸による痛みなどによつて混乱に陥っている。  
そこに、

「紫煙乱打！」

霧の中に入つて次々に攻撃を加えるジャックによつてさらに混乱の極致に陥つていく。

とうとう同士討ちまで開始したようだ。

運よく霧を脱出できたものもばらばらに単体で出てくるのですぐに倒される。

「ナメルナ！」

その時霧の中から炎が噴き出してケルベロスが出てきた。霧の影響も薄いようだ。どうやら炎の息で霧を吹き飛ばしたらしい。開いた道から軍勢が出てきた。

しかし大多数はまだ霧に呑まれたままで先ほどよりは楽だ。

「ジャック！そのままそこで霧を維持してくれ！その間にケルベロスを倒す！」

「わかった！」

「ヌウウ…。ルー様ヨリ預カツタ者タチハ霧ニ呑マレタママカ。マアイイ。

オレヒトリデモ貴様ラヲ倒スマデダ！」

くるぞ！

「はいはいタルカジヤ、タルカジヤ。先ほどまでよりはるかに楽な仕事ですこと。

とはいえ牽制程度には、ジオンガ！」

「スクカジヤ！ラクカジヤ！タルカジヤ！回復は任せてくれださい！

だからってあんまり無理はしないように！」

「炎の息なら私が防ぐわ！これである程度は軽減できるはずよ！」

ヴィヴィアンが水を操つて僕の周りに水のベールを張った。

息で吹き飛ばされること自体と炎の熱の両方を防いでくれるようだ。

「私は炎の攻撃であれば効きません。故にそれは結構。」

「オイラに炎は効かないホー！：何度目だつたホ？これ言うの。」

「はいはい。それじゃ代わりに、ラクカジヤ！」

「そつちは素直にありがとうございます！」

補助魔法により身体能力と概念というべきものが強化される。

後衛の防衛をジャアクフロストに任せ、ニスロクは僕とともにケルベロスへと向かっていく。周りにいる少數の軍勢はケルベロスの遠吠えとともに散開して僕たちの周囲を取り囲んだ。

「ふつ、このような有象無象で元権天使の長であるこの私を止められると思わないことですね！はあっ！木つ端みじん切り！」

ニスロクは巨大な包丁で軍勢を蹴散らしていく。技の後にできた隙を狙いケルベロスが攻撃を仕掛けるが、そうは問屋がおろさない。僕が横から攻撃を加えて邪魔をしていく。

ケルベロスの狙いを絞らせないために、片方が狙われた場合はもう片方が邪魔を、といった風に戦っていく。後衛からも補助魔法や攻撃として主に氷や水による攻撃が飛んできている。

「ブフーラ！ 後ろ注意ですよ！ サマナー！」

「ナイス！ タマモ！」

こうして死角を補つたりケルベロスへのけん制として攻撃していく。

どうやらケルベロスは氷や水の魔法が弱点らしく、いちいち迎撃か回避するといった反応を見せ、その隙を突いて攻撃する。

さすがに煩わしく思つたのか、軍勢を後衛に向けたようだがジャアクフロストによる肉壁によつて攻撃が通らず、逆に魔法と物理攻撃によつて返り討ちにされてしまった。軍勢が一匹もいなくなつて戦いややすくなつた。このことに焦りを感じたケルベロスは

霧に向かつて炎の息を吐き軍勢を呼び戻そうとするが、ヴィヴィアンに水による妨害を仕掛けられ失敗。その間にも霧の中の軍勢たちはダメージを負つていく。

ケルベロスは時間がたつほどに自分が不利になつていく状況に焦り、猛攻を仕掛けてきた。明らかに焦燥を感じさせる攻撃だつた。その攻撃は激しく、荒々しいものではあつたが、狙いがわかりやすく、よく見て対処すれば容易に凌げるようなものだつた。それゆえ無理に攻撃に移らずに、相手の動きを待つ形になつた。

時間がたてばこちらに有利になつていくので無理に攻撃する必要はない。

それに相手の狙いは分かつてゐる。おそらくは相手を受けに回らせることで…！

ケルベロスはいきなり飛び上がると後衛へと一直線に向かっていく。

先に弱点を突いてくるわざらわしい後衛をつぶすことにしたようだ。

ここまででは予想通り！ 後は…！

「ジャアクフロスト！ 任せた！」

「了解だホー！ 任せるホー！」

タマモたちを守るように前に立ったジャアクフロストがケルベロスにぶつかってい  
く。

ぶつかりあつた両者はケルベロスが優勢。勢いよくジャアクフロストを後ろに突き飛ばし後ろのタマモたちごと押しつぶそうとするがぶつかつた瞬間二人は左右に飛び出してそれを回避した。

ジャアクフロストはケルベロスを受け止めるも地面に跡を残しながら後ろへ運ばれていく。右の頭と左の頭でタマモたちが避けたことを知ったケルベロスは一瞬どちらを攻撃しにかかるか迷った。その隙にジャアクフロストが真ん中の頭を抱え込んだ。

振り放そうとしてケルベロスは体を左右に振りまわす。

体を振るたびにジャアクフロストの体は振り回されそうになる。それでも離さないジャアクフロストに業を煮やしたか3つの首がそれぞれジャアクフロストに牙を突きたてたり炎の息を浴びせかけていく。そこにタマモとヴィヴィアンが一斉に、

「マハブフーラ！」

ケルベロスの後ろから、ジャアクフロスト」とケルベロスに冷気の魔法を放つ。

これに危機を感じたケルベロスはジャアクフロストを盾にしてやり過ごそようと体をひねり方向を変えようとしたが、ジャアクフロストへの攻撃をやめたその時、

「マハブフーラだホ！」

ジャアクフロストからの氷の魔法を接触距離から受け動きを止めたところに、二人からの魔法をくらつて凍りつき動きを完全に停止したところで、

「モータルジハード！」「鬼神楽！」

追いついた僕たちに無防備なところで大振りの技を決められて、致命傷を負った。  
「グゥウウ…。ルー…サマ、モウシワケアリマセン…。」

そういうとケルベロスは消滅した。これでクーフーリンたちを援護しに行ける。その前に霧で包んでいる犬の軍勢だけど、いちいち倒すと時間を取られる。

早めにクーフーリンの援護に行ければ勝率は上がる。

しかし放置することもできない。一応降伏を呼びかけてみるか。

総大将であるルーが生きている限り降伏する可能性は低いかもしないが、やらないよりはましだろう。

「あー、あー！敵軍に告ぐ！ケルベロスは倒した！降伏するのなら命は助ける！

降伏しないというのなら容赦はしない！どうする！」

敵からの返事を待つ。すると、声が聞こえてきた。

「グウ、ワカツタ！ 降伏スル！ ダカラ霧ヲ解除シテクレ！」

まあそうくるだろうな。しかし解除した途端襲い掛かってくる可能性も否定はできない。実際一回降伏すると言つて襲われたことはある。倒したけど。

だからそれをされない保証がほしい。

「解除した途端襲つてくる、なんてことがない保証は？」

「酸ノ霧ノセイデ満足ニ戦エル状態デハナイ！ 降伏スルカラ霧ヲ解除シテクレ！」

霧の内部を分かつていてるはずのジャックに本当かどうか尋ねる。

「うん。ほんとだよ。みんな弱つてるから簡単に皆殺しにできるよ？ 解体する？」

いや、その解体していいる時間が惜しい。それに降伏を呼び掛けたやつぱり殺すつてのはちょっと避けたい。霧を解除してくれ。

ジャックははーいと少し残念そうに返事すると霧を解除した。

犬の軍勢はなるほど、酸によつて傷ついたものが多数。大半は地面に横たわつている。

戦えそなのもいるが、そいつらも無傷ではない。簡単に倒せるだろう。  
ともかく、

「霧は解除した。襲つてこない限りは見逃してやる。」

と言つて、僕たちはクーフーリンたちがいる方向に向かつて走り出した。  
犬たちは僕たちの背中を見つめていることしかできなかつた。

# 凛ちゃんの大冒険！ わんにゃんフェアリー大戦争！

## Part 7

クーフーリン達の元へ急ぎ駆ける。決着が着く前にたどり着いておきたい。あいつの強さを信用していないわけじゃない。だけどやれることはやっておきたい。

クーフーリン達の元に辿り着くとまだ決着はついていないようだつた。槍操る手は止めずにクーフーリンは、

「もう決着の時か。欲を言えばまだ楽しんでいたかつたが。ま、これ以上は贅沢つてやつか。」

と呟いた。

どういうことだ？まるで決着を先延ばしにしてたみたいな言い方だ。

「まるでじやなくて実際そういうことだと思うにや。 あいつも親つてことかにや？」

そばに来ていたマナナンがそう呟いた。

と、その時クーフーリンが後ろへ飛ぶと何やら4つの文字を書いて陣のようなものを作つた。あれは…。

「四枝の浅瀬。<sup>アトゴウラ</sup> 赤枝の騎士団に伝わる不退転の陣。

た

アルジズ、ナルシズ、アンサズ、イングワズの4つのルーンからなりその陣を布いた  
戦士に敗走は許されず、その陣を見たものに退却は 許されない。一騎討ちの大禁戒。

あやつの最期の逸話に因るものだ。本当に勝負を決めるつもりらしいな。  
やれやれ、儂等はいいように使われたということか。これは高くつくぞ。

もつとも、神であるルーがそれに従うかは別だがな。」

「あいつはきっと乗るにや。じやなきや今まで槍の技比べなんてやつてないにや。  
あいつ…。」

そう呟くマナナンの顔はどことなく嬉しそうな、慈愛に満ちたものだつた。まるで戦場に似つかわしくない見つめる先には二人の戦士。親子

「名残惜しい氣もするが、しまいといこうや。言つとくが、様子見なんざ無しだ。

全力でこい！なんだつたらさつきから使つてねえ剣でも構わねえんだぜ？！」

「ふん。若造がよく吠える。お前にはこの槍だけで十分だ。

それとも、いざという時に剣のせいにでもするつもりだつたか？」

「はつ、そつちこそやはり剣を使うべきだつたなんて後悔すんじやねえぞ！

…さて、こういうときは胸を借りるというんだつたか。

それじゃあ遠慮なくいかせてもらうとしますかね！」

「こい！ クーフーリン！」

「<sup>ホルク</sup>突き穿つ……！」

「<sup>ブリュー</sup>轟く……！」

「死翔の槍!!」

「<sup>ナック</sup>五星!!」

互いに跳躍して槍を投げあう。

クーフーリンが投げたゲイボルクは赤い星となり、

ルーが投げたブリューナグは太陽のごとき白き輝きを湛えた5条の流星となり、二人の間でぶつかり火花を散らす。

ブリューナグは5つに分かれた後ゲイボルクとぶつかる一点で一つになり、ゲイボルクとぶつかりあう。

威力は双方とも互角……いや、徐々にゲイボルクが押されているようだ。

投げた後、地面に降り立つたクーフーリンとルーは共に手を己が槍へと向けている。

どうやら槍に魔力を送っているらしいその顔には脂汗が浮かんでおり余裕はないようだ。

何とかしなければあのままではクーフーリンは負けてしまうだろう。だけどあの姿を見ているとルーの邪魔をすることは憚られた。

：ならば、

「クーフーリン！」

呼びかける。クーフーリンがこちらを向いた。

「負けるな！」

そして手をかざし力を送る。クーフーリンはにいつと笑うと、  
「おうつ！」

ゲイボルクの勢いが増す。ブリユーナグを押し戻し互角にもつれこんでいく。  
それどころか今度は徐々に押し込んでいく。

しかしそこで、

「ルルウオオオオオオオオオオオオ!!!」

ルーの裂ぱくの気合とともにさらに激しくぶつかりあい、次の瞬間双方の槍の魔力が  
光と爆発とともに派手に散り、槍が手元に戻ってきた。

槍を手にしたクーフーリンは即座にルーのもとに駆け、  
「刺し穿つ死棘の槍!!」

出し惜しみはしない。僕の援護により即座に魔力を回復させ、槍に再び魔力が集中。  
ゲイボルクの本来の使い方とは違うもう一つの業を発動させる。

ゲイボルクの持つ因果逆転の呪いによりルーの心臓めがけて槍が迫る。

|。

一瞬の静寂の後、ゲイボルクがルーの胸に突き立っているのが見えた。  
 「…さすがだ。まさかはずされるなんてな。」

その槍は身体を刺し貫いていたが心臓をとらえていなかつた。  
 因果逆転の呪いを回避されたのだ。

しかし、ダメージまで無効できるわけではなく、槍を抜くとルーは崩れ落ち…、  
 いや、ブリューナグを支えにしてぎりぎりのところで立つていて。  
 それと同時にアトゴウラが消える。

「…俺も血迷つちまつたか。王として負けるわけにやいかねえってのに、  
 いつの間にか戦士として、親として戦つちまつてた。  
 まるで夢見心地で、情けねえたらありやしねえ。」

獨白するルー。どこか満足そうなその声。クーフーリンが言葉を投げかける。  
 「サマナーの援護がなけりや負けてたのは俺のほうだ。やっぱあんたつええな。  
 情けねえところなんてまるでなかつた。」

「…ふつ、そうかい。そいつはうれしいな。」

そういうと同時にルーは槍を引き抜くと横なぎに振るつた。  
 とても大怪我を追つてていると思えないその威力に後退するしかなつたクーフーリン。

そしてルーは振りかぶると、

「アツサル!!」

槍を投擲した。その先にいるのはマナナン。一条しか光はなくともアツサルの一言によりその槍は心臓を貫く必殺の一撃となり海神に迫り、貫いた。

投げると同時にとうとう前のめりに倒れるルー。

貫かれたマナナンは胸をおさえる。そして倒れこむ直前、

「まだまだ甘いにゃ。」

という声が響いたかと思うと、マナナンの身体がまるで木のようになり、マナナンが分身してその体から出てきた。

「ちつ、どじつちまつたか。あーあ、最後までしまらねえな。

せめてあんただけはしとめておかねえとあいつらに顔向けできなかつたんだが。

「ここはあんたの領域。その程度の権能くらいはお手の物つてか。」

どういうこと？ 今何したの？

「簡単なことだ。確かに心臓は貫いた。だが死を先延ばしにしてその間に時間の因果を

超えて変わり身を作りだした。貫かれたのは本物であるが人形というわけだ。」

スカサハが解説してくれた。

えーっと、つまり、心臓を貫かれた時は本物だけど、死という結末が訪れる前に時間

を超えて人形が貫かれたことにして死を逃れたと。

なるほど。心臓を貫かれた時点で因果逆転の効果は終わっている。それ以上の追撃は槍にはできないということか。割と無茶苦茶なことやらかすな？

「にやはは、これでも魔術神だからね、これくらいはお手の物さ。

とはいえ、かなり力は削られたけど……」

さつきまでがシリアルな雰囲気だから「服も削られてビキニになつてますね。」などという無粋な突つ込みはしないでおこう。

「隙を見てもう一発といきたいところだが……」

「それをさせると思うか？あんたがアスイバルと言つて槍を召還しして投げるまでの間に何回殺せるだろうな。」

槍を構えるクーフーリン。

「だろうな。まあそれでもせいぜいあがくとするか！」

そういうと今も血を流している胸に手を当てるルー。そして手を前に出した。

思わず身構えるクーフーリン。しかし何も起きない。ただぼたぼたと指の先から血が落ちていくだけだ。

「なんだ？ついにあきらめたか？」

そう言いながらも警戒しているクーフーリン。

「あれは、フラガラックの製造だにゃ！」

流れ落ちたちが地面に着くとまたたく間に円の形に薄く広がり、そこから黒い球体が出てきた。球体はそのままルーの周りを漂い始める。

このまま2回戦目かと思われたその時、スマホが鳴りだした。衛宮からだ。  
警戒をしながらもゆっくりと取り出して通話ボタンを押すと、慌てた様子で話す衛宮。

「慎一！大変だ！第3戦力が現れた！相手は妖精の女王メイヴとか名乗ってる！  
猫も犬も関係なく襲つてる！さつきの光はこつちからも見えてる！決着がついたんなら

すぐにこつちに来てくれ！正直だいぶまずいことになつてる！」

「なんだつて！わかつた！すぐ行く！」

「つまり領域の支配に割り込んでいたのはルーじゃなくてメイヴだつてことだニヤ!?」  
「メイヴだと!?あのアバズレ女もこちらに来ていたか！」

そういうと怪我を押して戦場に向かおうとするルー。

「待つにや！どこに行くつもりにや！」

「知れしたこと。メイヴを殺しに行く。正直あいつに総取りされるなんざ  
目も当てられねえ。」

「だつたら今この時ばかりは協力したほうがいいんじゃないのか？」

少なくとも僕たちにとつてもメイヴは敵だし。」

という提案をするが、

「おつと、勘違いするなよ？ メイヴの次はあんたらだ。

それによ、一度殺すと決めて槍をむけたんだ。今更助力なんぞ請えるか。

一人でいいつを仕留める。邪魔だけはするな。」

「その怪我でかにや？」

「だからどうした？ なめるな、この程度の傷…！」

苦しそうに傷を抑えて顔をゆがませるルー。

それを見ると溜息をこぼしてマナナンがルーに近寄る。そして手をかざし、

「ディアラマ！」

ルーの傷を癒した。

「どういうつもりだ？ メイヴを俺に打ち取らせる心算か？ だつたら期待には答えてやる  
が回復したことを後悔する…」

「ええーい！ どうしてこう人の好意を素直に受け取れないものかな？」

まつたく、これじやクーフーリンが来るのを見越して異界を作つたかいがない！」

「ん？ 今なんと？」

「…前に理由を聞いたときはパラダイムシフトを利用して信仰を集め、力を取り戻すためだと言っていた気がするが？」

「それもある！けど！もう死んで世界の裏側に行つたんだから、君がもう少し昔みたく縛られずに生きてみたらどうかと連れ出すためなのも理由の一つか！」

それを自ら王として縛られに行くんだもん、

もうちょっと気楽に生きる事が出来ないのかいきみは？」

その言葉を聞いたルーはポカーンと口を開いている。ようやく言葉を紡いだかと思うと

「…驚いた。あんた割と考えててくれたんだな。考えなしにやらかしたと思つてた。」

「ひどつ!?」

「このような異界を作れば世界に異変が起ることなど明白だろうに、  
勝手に作つた挙句、勝手に人を呼び出しておいて何を言うか。」

「だ、だから知らされて責任を感じて今ここにいるんじやないか！」

妥当な評価だと思う。しかも結局どちらにしても人の世の迷惑だし。

だけどまあ、親としての情はあるつてのは分かつた。

しかし、あきれたもんだ。そつちを言えば誤解されなかつたんじやないのか？

「そういうのを素直に言うつてなんか恥ずかしいじやないか。」

「結局あなたも素直じゃないってことじゃん。似たもの親子だな。

こつちはいい迷惑だけど。」

僕はそう言つた。

「辛辣だなあ。」

「いつまでしやべつている？ 和やかに談笑している暇はないぞ。」

スカサハによつてストップがかけられた。そうだな。衛宮からの声にもそんなに余裕は感じられなかつた。急いで向かわなければ。

「じゃあとりあえずメイヴを倒すまでは休戦でいいんだな？」

「ああ。…こうして肩を並べて戦えるなんてことがあると思わなかつたよ。」

クーフーリンと、ついでにバロールを見てどこか感慨深そうにふつと笑うルー。

「それじや、戦場に急ぐぞ！」

返事が聞こえるやいなや走り出す。持ちこたえててくれよ！

「ベイリン！」「ベイリン卿！」

ベイリンの元へ急いで走る。ものすごい勢いで跳ね飛ばされていた。  
無事かどうか確かめないと！」

「つ痛……」

「ベイリン！ 無事か？！」

「なんとかな。アコロン卿の言葉を聞いて咄嗟に後ろに飛んでなかつたら危なかつた。  
礼を言うぜ。」

「礼はいりません。仲間を守るのは騎士として当然ですかね。それよりあの軍勢……  
女王はメイヴと名乗っていましたが、もしやあれは伝説に聞いた……」

「コノートの女王。クーリーの牛争いでクーフーリンとやりあつたつてやつか。

つくづくケルト神話に縁のあるところだな。」

そんなことを言つてる間にも戦車は突撃してルーとマナナンの軍勢を蹴散らしていく。

そしてメイヴが出てきた森から沢山の妖精の悪魔達が出てきて攻撃し始める。

突如として側面から襲われた両軍は混乱に陥つている。

それでもどこからか混乱を收めようとルーの軍の指揮官が遠吠えが上げる。

そこに、

「まずはあいつから潰しちゃいましょうか！ 突撃……」

マイヴによる突進を受け無惨にも轢き潰される。

「指揮官を狙う心算か。」

そう漏らすとマーリンが否定する。

「いや、たぶん目立つところから潰していくスタイルだと思うよ。現に、ほら。見ると激しい争いを続いている二頭と一人。キヤスパリーグとカヴァス。それにベディヴィエール。そこに突っ込んでいくマイヴ。」

どう見てもマイヴの馬車のような戦車のほうが小さく、無謀に見える。  
しかし、それを引く二頭の牛は荒れ狂い敵を蹂躪する嵐。

二頭は迫りくるそれに気がつくと後ろへと下がりそれを避けた。

そしてその場に一人残されたベディヴィエール。彼は迫りくる暴威に気がつくと、慌てて転がり避ける。

しかし、まるでドリフトするが如く急転した戦車が再び迫りくる。

どうやら今度は彼に狙いを定めたようだつた。あの速度で迫られれば逃れることはできないだろう。

「危ない！」

咄嗟に飛び出したアコロン。風をもつてして急進していく。

「ばつ！」

ベイリンが止める間もなく飛び出したアコロン。間に合わずとも連れ戻すべくベイリンが動こうとするが、突如横から雷撃が放たれる。それをかわす隙に、アコロンはさらに進んでいく。

雷撃の下手人はメイヴに率いられた妖精たちだった。

「邪魔すんじゃねえ！」

ベイリンは近づき、剣をふるい、ひと思いに蹴散らしていく。  
俺も狙われている。とてもではないがアコロンを止めに行くことはできない。  
無事でいてくれと願うほかななかつた。

身体が引っ張られる感覚。どうやら私は何者かに召喚されたらしい。

次第に増えていく感覚。身体が熱を帯びていき、完全に形となり、ここに召喚はなされた。目を開くとそこには一人の人間と、生前見たものより多少図体は大きくなっているがある時の一番のお気に入りの獵犬、カヴァスがそこにいた。

「ベディヴィエール、ここに参上しました。あなたは一体…？」

「わが名はルー。光明神ルード。貴公にやつてもらいたいことがあつて召喚した。」

ルー!? ケルト神話における万能の神であり、太陽神でもある神の名ではないか!? なるほど。万能の神であるルーであるならば英靈を召喚できてもおかしくはないが、しかし、神という存在はとうに世界の裏側に行き、人の世に姿を現すことはないはず。神代であるならばできようが今は西暦2001年だという情報が召喚されたときにある。

ならば目の前の存在は一体？ それに、分靈？ 英靈の一部を取り出してここに呼び寄せたということだろうか？ わからないことが多すぎる。

とりあえず、今、一番知らねばならないことは、

「やつてもらいたいこと、ですか？」

「ああ。近々世界の命運をかけた大きな戦がある。貴方にはその戦の際にこのカヴァスの手綱を取り、戦場へ連れてくる役目とやり働きをしてもらいたい。

今までこの犬は暴れて誰にも手綱を取らせなかつた。そこでこいつの手綱を引いた事

のあるベディヴィエール、貴方の出番というわけだ。」

ひとつ気になる単語があつた。

「世界の命運をかけた戦い、ですか。」

「左様。それに勝たねばこの世界に重大な危機があるだろう。」

貴公には申し訳ないが、ぜひ協力してもらいたい。」

世界の危機とは。目の前の存在がどれだけ信用できるかはわからないが、そう言われて黙つてみているわけにはいかない。選択の余地はない。

「…いいでしよう。協力しましよう。」

「ありがたい。普段の世話は他のものにやらせている。戦いのときまでゆつくりとしていくくれ。」

そういうとルーは部屋を出ていった。後からきたしやべる犬の従者に驚かされたが、案内されて自分の部屋へと案内される。

来る時までここやルーに関する情報を集めながら鍛錬をしていく。

ある時、ルー殿には戦働きするときに不便であろう。と義手をいただいた。それはある程度自分の腕のように動かせるものでとても高度な代物だった。集めた情報や普段の姿を見ていると悪い人物ではないのだろう。

慕われているのがよくわかる。自然と警戒は解けていった。

しばらくの時がたち、その時がやつてきた。この戦いで終わらせるつもりらしい。私も出陣するように沙汰が下つた。急ぎ準備を整えて馬に乗り、カヴァスの手綱を引いて出陣する。

戦場には大量の犬と猫。正直あつけにとられたがここは戦場。気を引き締める。しかし、カヴァースが興奮して落ち着かない様子だ。

今はまだ誰も動かない様子なのでそれに合わせて動いていないが、一度戦いの火ぶたが切られたら一目散に駆けだすだろう。

「何かこの戦場にあるのだろうか…！」

カヴァースが向いている方向をみると、そこには忘れる事の出来ないものを携えた騎士がいた。聖剣エクスカリバー。まぎれもなく我が王の剣であり、私が3度目に湖の乙女に返した王剣だ。なぜあのものが携えているのか？

カヴァースが興奮している理由はそれにあるのか？

それに、そばにはマーリンがいた。これはどういうことだ。

今すぐにでもあそこへ行つて聞いたみたい気持ちで駆られるが我慢する。

不意に、引っ張られる感覚があつた。見るとカヴァースが一目散に駆けだしている。走る先にはエクスカリバーを携えた騎士。やはり、といったところだが、

カヴァースは暴走して敵陣に突出して突っ込んでいる。このままではまずいだろう。何とか抑えようとすると、

そこに、またもや見たことのあるような怪物がカヴァースに飛びかかった。飛びかかった衝撃で跳ね飛ばされる。

「うわっ!?」

空に投げ出され、地に落ちる。急ぎ身を起こし、視線を上げるとそこにいたのは、「キヤスパリーグ!?

キヤスパリーグはカヴァスに飛びかかり、負けじとカヴァスも食らいつく。激しい争いを始めた。あの騎士のことも気になるが、この状況をどうにかせねば! 身体を起こし槍を拾うとキヤスパリーグとカヴァスの戦いに割つて入ろうとする猫たちを妨害、槍で貫いてく。

どのくらい経つただろうか。まだキヤスパリーグとカヴァスの戦いは続いている。すでに100はくだらないほど敵を穿つた。

今まで敵を屠つたその時、轟音とともに森のほうから戦車が飛び出した。

「あれは…。」

2頭の牛にひかれた戦車はまたたく間に戦場を蹂躪していく。

その後に続くようにして紛れ込んできた妖精が犬、猫ともに攻撃していく。この者たちは一体?!

妖精たちは電撃を放ってきた。それを避けると近づいて槍で払う。

横なぎに振るわれた槍を受けた妖精たちはまとめて吹き飛ばされ動かなくなる。

「いつたい何が起こっているというのですか…!?」

その時、いきなりカヴァースとキヤスパリーグがその場を離れる。

先ほどまで争っていた場所の向こうに見えるのは戦場を蹂躪する戦車。こちらに向かっているのを見て慌てて横へ飛び込むように避ける。何とか紙一重で避けることはできた。

しかし戦車は180度回転して再びこちらに向かってくる！

先ほど避けたばかりで体勢を崩している。それに戦車はものすごい速さでこちらに向かってきている。どうやら私が標的のようだ。

これはもはや避けられない。ならば！

右手に槍を持ち、右半身を引いて槍を構える。

せめて一矢報いる。この身がうち滅ぼされようとあのものを倒す。

戦車が目の前に迫る。圧倒的な暴威をまとつて。恐怖を押し殺し敵を見据える。もはやこれまで。ああ、あの騎士が何者か、なぜこの場にマーリンがいたのか、知りたいことは山ほどあつたが――。

敵に向かい槍を突き出す。それが敵を貫くことはなく、しかし、この身が引き潰されることもなかつた。

——暴風が吹いた。とても懐かしいような、荒々しいものだ。

それはこの身を蹂躪せんと迫る戦車に横から吹き付け、その軌道を強引に横に逸らした。その余波をくらいたつていられず座り込む。

「うつ!?

「きやーーーー!?

戦車のある時が悲鳴を上げながら必死に戦車のバランスを取る。目的を果たすことなく戦車は私の横を通り過ぎていった。

風がやんだ後、顔を上げたそこにいた者にしばし目を奪われた。一目見れば我が王ではないと分かるのに、

「ご無事ですか、ベディヴィエール卿。」  
「無事か、ベディヴィエール卿。」

なぜだかその姿は、我が王と重なつて見えた。

# 未来のお話Part2 前篇

「んー、つつかれたあーー。」

深夜の新都を一人の女性が歩いていた。

知り合いの目がないことをいいことにグイーツと背伸びをしながら夜の街を歩く女性。

今日も1日頑張つて働いた自分へのご褒美に高級スイーツを買って、冷蔵庫で冷やしているのを思うとなんだか疲れもやわらいでくる。

明日は休日なのでエステサロンの予約を入れてある。

心も体もスッキリしよう、なんて楽しい明日のことを考えながら歩いていると男性が目の前を走つて横切つていった。

その後には何やら財布のようなものが落ちている。

きっとさつきの人が落としていったのだろう。

今ならまだ間に合うかもしない。追いかけて届けてあげようかと思い、走り出した。

男性の背中を追いかけていくとどうにも付かず離れずで追いつけない。

声を上げてみるが、気付かずして走つていく。

それに人目がないところへどんどん入つて行く。  
そしてとうとう背中すら見失つてしまつたので諦めて、

『交番にでも届けよう。』

そう思つて振り返つて気がついた。

「何処よ……こ……。」

全く見知らぬ所にいることに。

それになんだかわからないが嫌な予感とでもいうのだろうか。

そういつた不安が襲つてきた。

『こんな所さつさと出よう。』

そう思つてひとまず人気のあるところを目指して歩き出した。

道筋にでも出ればどこにいるかわかるだろうと思い、歩いていく。  
しかし、あるけどもあるけども一向に道筋に出ない。

それどころか周りが高いビルに囲まれた路地裏をさまよつていた。

氣のせいだろうか。何処かから見られている。そう感じて足を早めしていく。

鼓動が早くなつていく。不安に押しつぶされそうになる。

早足は小走りになり、小走りは全力疾走になつていく。

あてもなく路地裏を走つていく女性。

とうとう袋小路にたどり着いて息が切れた。

膝に手をついて荒い呼吸を鎮めていく。

そして顔を上げて気がついた。袋小路、その壁に何かある。  
反応が警告を出す。だけどそれが何かがとても気になる。

意を決して近づいていくとその正体がわかつた。  
人の死体である。

「ひっ!?」

死体はひどく無惨な状態であつた。首の一部、腹部、腕などがまるで食い千切られた  
かのように欠損している。

おおよそ人がやつたとは思えない傷。まるで食べられたみたい。

そして嫌でも悟つた。次は自分がこうなる番だと。

「い、いや……！」

暗闇の中から犯人が姿をあらわす。

“まるで食い足りない。”

そう言つているかのようなどう猛な唸り声をあげて近づいてくる。

「嫌ああああああああああああああ” あ” ア” ア”

”!!!!!!?”

深夜の新都に女性の断末魔が響き渡る。

しかし、それを聞いたものはおらず。新都はまた静けさを取り戻した。何もなかつたかのように。

「昨夜未明、二人の女性の死体が見つかった事件で、

遺体調査を行つたところ、身体をかじられたような跡が見つかり、

警察は、噛み跡から山から降りてきた狼によるものだとして調査を進めています。

次のニュースです…。」

「怖いわね、あんたたちも気をつけなさいよ。」

「はーい。」

そう返事をして朝食を食べていく。

「こらつ、孝太、洋介のおかず取らないの！」

いつもの騒がしい朝。私の1日はこうして始まります。

私は三枝由紀香といいます。

「ご飯を食べ終えたら学校に行きます。弟たちも一緒に家を出ます。  
 「」「」「いつてきます。」「」「」

通学路の途中、二人の友達と待ち合わせをして一緒に登校します。  
 「おはよう。鐘ちゃん。」

「由紀香か、おはよう。あとは蒔だけたな。」

この子は氷室鐘ちゃん。冷静で頼れる女の子です。  
 だけど趣味のことになると熱くなる一面もあります。

鐘ちゃんと少し待つていると下り坂の方から走つてくる女の子がいます。  
 「ごめーん！ ちょっと遅れた！」

「おはよう、蒔ちゃん。」

「おはよう、蒔。随分と慌てているようだが、寝坊でもしたか？」

「おはよう、由紀っち、鐘。いやー、まいっただよ、

　　目覚まし止めてついうとうとしてたらやばい時間になっちゃつてて  
 さー！」

この子は、蒔寺楓ちゃん。いつも元気いっぱいな明るい子です。

ふたりともわたしがマネージャーをしている陸上部のエースです。

蒔ちゃんはインターハイを目指せるくらいほどすごいんです！

二人と一緒にいると楽しいです。

学校に着いて教室まで歩きます。二人とも一緒にクラスです。  
向かう途中階段である女の子に会いました。

「おはようございます、遠坂さん。」

「おはよー！遠坂！」

「おはよう。遠坂さん」

「あら、おはよう。三枝さん、蒔寺さん、氷室さん。」

この子は遠坂凜さん。優等生で学園のアイドルです。

実は私も憧れています。

教室に入つてお話ししていると朝のHRのチャイムがなつたので席に着きます。

担任の葛木先生が入つてきました。

「それでは、HRを始める。日直、挨拶を。

……連絡事項を言う。昨日、新都の方で殺人事件があつた。

放課後、用がない場合は速やかに下校するように。」

その後も連絡は続いて、HRが終わつた後は授業です。

四时限目の授業が終わつたらお昼休み。昼食です。

その時に遠坂さんを誘つてみたのですが断られてしましました。

「でさ、そこの店の料理がさ、また美味しいんだよ！」

「ふむ。時がそこまで勧めるのならば、さぞかし期待できそうだ。それでさ、明日みんなで一緒に行かない？」

「ふむ。時がそこまで勧めるのならば、さぞかし期待できそうだ。  
由紀香はどうする？」

「私も食べてみたいな。」

「そう、なくつちや！ それじや！ 明日九時に駅前のバス停ね！」

お昼休みが終わるとまた授業。それを終えたら放課後。

放課後、陸上部の活動を終えたら帰宅です。晩御飯を食べて、  
弟たちと遊んで、お風呂に入つて、おやすみなさい。明日、楽しみだな。

翌日、約束した時間の30分前にバス停にきました。

まだ時ちゃんや鐘ちゃんはきていないみたいです。私が一番乗りなのはちょっと珍

しいかな。

二人が来るまでの間近くのベンチに座つて待つてよつと。

ベンチに座つてぼーっとしながら行き交う人々を眺めていると、

小さな男の子が走つて横切りました。その後に何かが落ちていました。  
近くによつて拾つてみるとそれはなんだか高級そうなハンカチでした。

女の子のほうを見ると走つて横断歩道を渡ろうとしているところでした。

「あ！待つて！ハンカチ落としたよ！そこの男の子！」

大声で呼びながらあわてて追いかけようと走りました。

人込みをかき分けながら必死に走つていると誰かにぶつかつてしましました。

「つて、氣いつけろ！」

「きやつ！」「ごめんなさい。ま、待つて……！」

謝つてすぐにまた追いかけようとすると、肩を掴まれました。  
さつきぶつかつてしまつた男の人です。

「お、君かわいいじyan。ねえちよつと付き合つてよ。」

「えつ、こ、困ります。」

「いいじyan、ぶつかつたお詫びだと思つてさあ。」

数人の男の人たちがニヤニヤしながら私を囲んできました。

「あ、あの、私急いでるので！」

「そう言いながら抜けようとすると行く手を防がれました。  
『そういわないでさあ。俺たちといいことしようぜ？なあ？』

「恐い。誰かに助けを求めようにもみんな絡まれたくないのか見て見ぬふりです。

手を掴まれて引っ張られそうになつて、

「やめてください！」

と手を振り払おうとしましたが力が強くて振りほどけません。

強引に引っ張られてどこかに連れて行きそくなつた時、私の手を引いている男の人が誰かにぶつかつたようでした。ドンッ、と音がして男の人はいらだたしげに、「氣をつけろこらあつ！」

ぶつかつてきた人を蹴飛ばしました。

「ひ、ひどいじやないですか！ぶつかつたのはあなたでしょう！」

「うるせーな！立場わかつてんのか！」

こちらに向き直つて怒鳴る男の人。その時、

「おい。」

「ああん？今取り込み中だよ…。」

言い終わる前に肩を掴まれて向きを変えられ顔を殴り飛ばされた男性。

吹っ飛ばされて転がつて行きました。そして殴った人は一、

「よっちゃん!?なんだてめーは!?ケンカ売つてんのか！ぶち殺すぞ！」

「ん？先にぶつかつてきた拳句に蹴飛ばしてきたのはお前らだろ？」

つまり、お前らが売つてきたケンカの間違い。俺はそれを買つただけ。」

穂群原学園の不良として悪名高い間桐慎二君でした。

「てめえ！ぶつ殺してやる！」

取り巻きの男の人たちが数人で間桐君に殴りかかりました。

間桐君は最初の人のパンチをかわして懷に潜り込んでみぞおちを思いつきり殴りつけ。

その一撃でその人は倒れこみました。

次の人は蹴りかかつてきましたが、横によけて逆に回し蹴りで顔を蹴りつけました。

その人はその場でひっくり返り、地面に背中から倒れこみました。

最後に、体当たりしてきた人をそのままの勢いで投げ飛ばしました。

受け身も取れずに地面にたたきつけられてしばらく立ち上がれないみたいでした。

ものすごい早業でした。

「つ、つええ。」

「おい、まだやるか？相手になるぜ？」

男の人たちは、

「ちくしょう！覚えてろよ！」

という言葉を残してどこかに行ってしまいました。

「弱すぎて覚えてらんねーよ！今度からケンカは相手を見て売るんだな！」

男の人達の背中にそう言うと間桐くんは何処かに行こうと足を向け、急な展開にボーッと見ているだけだった私はそこではつとなり、慌てて「あ、あの！ありがとうございました！」

とお礼を言いました。そこでこちらに向き直った間桐くんは、

「はあ？何？お前自意識過剰なの？別にお前なんて誰も助けてねえよ。

俺はあいつらが売ってきた喧嘩を買つただけ。つーかお前誰？」

と言い放ちました。

まるで私は目に入つてなかつたと言われた上に罵倒されてショックで落ちこみそうになりましたが、

「あ…う…。で、でも、困つてゐるところを助けられたのは本当だから…。

だからありがとうございます！」

「だから助けてねえって言つてんだろ。礼なんざいらねえよ。」

「で、でも…。」

「しつこいな。なんか知らないけど助かつたラッキー程度に思つとけばいいだろ。

それでこの話は終わり。じゃあな。」

そう言つて再び踵を返して何処かに行こうとした間桐くんですが、

ピタッと足を止めて、

「それと、どんだけ急いでたかわからんねえけど、今度からはもうちょっと前見て

歩くこつたな。」

振り向かないままそう言つて何処かへ行つてしましました。

その背中を見送ることしか出来ないままで。

「名前…、言いそびれちゃつたな…。」

「おーい、由紀っち。おつはよー！」

「由紀香。おはよう。」

慎二くんを見送つていると蒔ちゃんと鐘ちゃんが来ました。

「どしたの？なんかぼーっとして。」

「ふむ…あそこにいるのは慎二ではないか。あやつがどうかしたか？」

「慎二？あ、ホントだ。：はつ！もしや由紀っちアソツになんかされた！？」

「許せん！とつちめてやるー！」

「あ、違うよ！ただ絡まれているところを助けてもらつただけ！」

「そうなの？てつきりしつこくナンパでもされたかとおもつたんだけど…。」「ナンパしただけでとつちめるのはひどいと思うよ蒔ちゃん…。」

「いや、あやつの性格から考えてナンパの線はないと思うぞ。」

積極的にナンパするようなやつでもないからな。

以外とおしゃべりというか情報通ではあるのだが。」

「なんだよ。鐘、あいつと知り合い？」

「たまに情報交換する仲だ。あやつ、なかなか人脈が広いようだな。

知りたいことがあつたら聞きに行くことも多い。」

「へー。何か意外だな。あいつ、どちらかというと一匹オオカミな感じするけど。」

「いや、同じクラスの人間や所属している弓道部の者とはそれなりに話すようだぞ？口は悪いが面倒見はいいとか。」

「ええ～!? 見えねーー！」

大げさに驚く蒔ちゃん。

「し、失礼だよ、蒔ちゃん。」

「ま、あいつのことなんてどうでもいいや。それよりさ、さつき由紀つち絡まれたって

言つてたけど大丈夫?」

「あ、うん。間桐くんがその、喧嘩して追い払ってくれたから。」

「え!? 大丈夫!? 怪我してない!?」

「うん。巻き込まれなかつたから。」

「しかし、どうする? そのことで逆恨みされているかもしだれん。」

「それにまだこの辺りをうろついている可能性もある。今日はやめておくか?」

「あー。そうしよつか? また絡まれたら厄介だし。」

蒔ちゃんも鐘ちゃんも私を心配してくれてます。

「でも、楽しみにしてたし…。それに休日で人も多いし、心配しなくても大丈夫だよ!」

「そうか? 由紀つちがそういう言うんならしいいけど…。」

「そんじや、まずは昼まで何して遊ぶかね?」

3人で当てもなくぶらつきながら遊んでいるところがいい時間になりました。

約束していたお店でお昼ごはんに蒔ちゃんから聞いていたパスタを食べました。

「あ! おいしい!」

「確かに。これはなかなか…。」

「だろ!? だろ!?」

お昼ごはんを食べ終わり、お店から出るとまた当てもなくぶらつきます。

「食べた食べた。おなかいっぽーい。」

「おいしかったね。」

「ああ。…む？ あちらにいるのは遠坂さんではないか？」

鐘ちゃんが見た方向をみると確かに遠坂さんがいました。

なにやら人に聞き込みをしたりして探し物をしているようです。

「あ、ほんとだ！ おーい、遠坂ー！」

蒔ちゃんが遠坂さんに近づいていきます。遠坂さんはこちらに気がついて、

「あら、ここにちは、蒔寺さん、氷室さん、三枝さん。奇遇ね。

3人で仲良く遊んでいたのかしら？」

「ええ、そうなんです。遠坂さんは何か探し物でもされてるんですか？」

「あー、えっと、うん。そんなところかしら。」

「よかつたらお手伝いしましょーか？」

「いえ、それには及ばないわ。大したものじやないし…。」

それより、最近この辺は物騒だから近寄らないほうがいいわ。

ほら、今朝のニュースで流れてた狼に食い殺されたっていう事件。

「こら邊で起こったみたいだから。」

「そうなんだ。でも遠坂だつておんなじだろ？人のこと言えないじゃん。」

「それは…そうだけど…。ま、まあとりあえず路地裏には近づかないほうがいいわ。みんな路地裏で襲われるみたいな感じだし。それじゃ、わたし急いでるから！」

そうまくしてると遠坂さんはあわてたようにどこかに行ってしまいました。

「変なやつ。なんか慌てるみたいだつたけど。」

「確かに。様子が変であつたな。余裕がないというか。」

「探し物のことかな？そんなに大切なものを失くしたんだつたら、

やつぱり手伝つてあげたほうが良かつたかも。」

そういうえば私もいろいろあつてつい持つてきちゃつたけど、このハンカチ、

失くした子に届けてあげないと。もしかしたら今頃探しているかもしれないな。

「ま、遠坂なら大丈夫でしょ。それよりどうする？遠坂の言つたことを気にしてるわけじゃないけど、ここら辺でお開きにする？」

「ふむ、とくに用事があるわけでもないが、それでかまわんぞ。由紀香はどうする？」

「あ、私はちょっと用事が出来ちやつたから…。」

「んじや、ここで解散ね。じや、また明日ー！」

「ではな。蒔、由紀香。」

2人と別れてハンカチを拾つた場所に戻ることにしました。

バス停の前まで戻つてハンカチを落とした男の子の姿を探しますが見つかりません。30分ほどうろつきながら探していると不意に声をかけられました。

「何か探し物か？」  
「ひやつ！ は、はい。」

驚きながらも後ろを振り返るとそこにいたのは赤毛の同い年くらいの男の子でした。確か同じ学校の生徒の…。

「衛宮士郎だ。それで何を探してんのだ？ よかつたら俺も手伝うよ。もつとも俺も探し物してる最中だからそのついでになるけど。」

「あ、ありがとうございます！ あ、私は三枝由紀香っていいます。えつと、このハンカチを落とした子を探してんのです。きつと今頃探してるだろうなって。」

「そうか。それでその男の子の特徴は？」

「えーっと、…あれ？」

「どうしましよう。確かに見たはずなのに一向に思い出せません。必死に記憶をたどりますがどうも記憶があいまいです。」

「弱つたな。それじゃ探しようがない。」

「ううん。あ！でも、なんというかこう、狼とか野性を感じる雰囲気だったような…？」

自分でもなぜそう思つたかはわかりません。ただ横を通り過ぎて行つただけなのに。

「狼…？わかつた。何かわかつたら知らせるよ。悪いけど連絡先を教えてもらえるか？」

「あ、はい！これがおうちの電話番号です。」

「わかつた。何かあつたら連絡するよ、それじや。」

そういうと何やら懐から取り出してしゃべりだしました。新しい携帯電話でしょ  
うか？

衛宮君と別れてまた探し始めますが見つかりません。

そのうち夕方になつて日が暮れてきたのでお家に帰ることにしました。

男の子、見つかるといいな。

「くそつ！」

よつちやんと呼ばれていた青年が缶を蹴飛ばす。

先ほどのことでかなりイライラしているようだ。

仲間たちはすでに帰つてしまい一人で何か憂き晴らしできるようなものを探してい

るようだ。

その時、何やらおどおどした青年が路地裏に入つていくのを見た。  
何やら鞄を大事そうに抱えていて、いかにも荒事なんかしたことありませんという風だ。

それを見るといいカモを見つけたと言わんばかりに笑みを浮かべた。

軽くぼこつて憂さを晴らすとともに金でも巻き上げるか。

そんな下衆な考えを持ちながら今しがた青年が入つて行つた路地裏へとはいつていく。

「つち、どこだよ。」

路地裏に入つたはいいがなかなか青年が見つかることに苛立ちを募らせていく。  
かれこれ10分は歩いている。

これは軽くじやなくて10発ぐらい殴らねえといけねえな。

そんな理不尽な怒りを抱きながら角を曲がるとそこにお目当ての青年がいた。

“ようやく見つけた。しかもおあつらえ向きに行き止まりだ。”

獲物を追い詰めた肉食獣のように青年へといやらしい笑みを浮かべながら近づく男。

『実際に罠にかけられた哀れな獲物は自分だとも気付かず』

「よう。ちよつとようがあんだけどよお。」

青年の肩に手をかける男。そこで気がついた。この青年がやたらと毛深いことに。そして青年が振り向く。振り向いたその顔はまさしく狼だつた。

それはまさに人狼と呼ばれるもののようだ。

「…!? お、おらあ！」

最初は度肝を抜かれた男だつたが即座にその人狼を殴りつける。

人蟻は殴り飛ばされて地面に倒れた。

お、驚かせやがつて。」

自分の攻撃がきいたように見えた男は安心して、どうせかぶり物かなんかだろうと思  
い、驚かせた罰としてさらに痛めつけることを心に決めた。

殴り飛ばされた人狼は何事もなかつたかのよう立上ると自分を殴った男のもとに歩いていく。心なしかその顔は笑つてゐるよう見えた。

狼に殴りかかる。

その時、人狼が腕をふるつた。ふるわれた腕は男の手を文字通り《弾き飛ばした》。

最初自分の腕がどうなつたかが分からず、遅れでそれを認識して悲鳴を上げる。

「お、おれ”、お“れ”的うでがあああ”あ“あ“あ“!!!!」

その場で地面に座り込み鮮血を拭きながら半ばより吹き飛んだ自分の腕を見つめる。その時影が差して激痛と衝撃とともに吹き飛ばされ、壁際の地面にたたきつけられる。

激痛に耐えながら飛ばされた方向をみるとゆっくりと人狼が歩いてくる。

「や、やめろ、くるな、くるなあああ！」

そんな懇願が通じるはずもなく一步、また一步と近づいてくる人狼。

「あ、ああ、ああああああああああ！」

恐怖でもはや言葉にならない声を上げるしかなくなつた男。

誰か助けてくれ。そんな思いを抱いて、しかしそんな祈りが通ずるはずもなく。

「やめ、やめっ……！」

誰にも届かぬ断末魔を上げ、やがて静寂が訪れた。

# Fate／Grand Order Strange Journey

## Fate／Grand Order epic of strange journey (序章)

おっす！おら藤丸立花！献血サービスに参加したらなんか一生懸命スカウトされて、ついには折れて参加することを決めた一般人！外国でのバイトで時給かなり高いと聞いてつい乗っちゃったんDA☆

今は標高6,000メートルの雪山にあるカルデアというところに向かって移動しているところ！

実は転生者で、前世はFate／Grand Order から入ったFateシリーズファン！

今から原作で出てきた場所に行けると知つておら、とってもわくわくすつぞ！・・・嘘です。ともうつうつしてます。超死亡率高いじゃないですかあそこ！やだー！

た。

ようし！がんばるぞー！

原作との乖離を疑問に思いながらもカルデアに到☆着

うつそうとした気分で吹雪の中を進んでいく。  
それにもかかわらずおかしいな？原作は西暦2015年。今は西暦2014年だぞ？  
原作との乖離を疑問に思いながらもカルデアに到☆着

——塩基配列　ヒトゲノムと確認  
——靈基属性　善性・中立と確認

ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。

ここは人理継続保障機関　カルデア。

指紋認証　声帯認証　遺伝子認証　クリア。

魔術回路の測定……完了しました。

はーい！ヒトゲノム&靈基チエックはいりまーす！いやー死亡率高いって言つても

原作の場面が出るとわくわくするよね！

その後もアナウンスが流れ、入館手続きの間180秒間模擬戦闘をすることになつ

——化石燃料を採掘している場面が見える。

鉱石を採掘している場面が見える。

動物たちが殺され、牙や皮をはぎ取られていく場面が見える。

植物が伐採される場面が見える。

命が、自然が、資源として搾取される様が見える。

何かの排水で川が、海が汚染されるさまが見える。

工場から煙が立ち上り、大気が汚染されていくさまが見える。

酸性雨で植物が枯れ、土壤が汚染されていくさまが見える。

自然が汚染され、破壊されていくさまが見える。

それは確実にその命をむしばんでいく。それは焦った。

このままでは私は殺されてしまう、と。しかしそれにはどうにかする力がなかつた。ただ死にゆくのを待つよりほかはないはずだつた。

——世界の法則が変わるまでは——

——それは力を手に入れた。自分の命を蝕むものをどうにかする力を。ならばや

ることは決まっていた。それは――

「フォウ……？ キュウ……キュウ？」 「フォウ！ フー、 フォーウ！」

頬をなめられ、 気が付いた。 今のは……？ 夢、 だつたのだろうか。

頬をなめている生物にきがつくと、 思わず君は……？ と、 たずねた。 すると、  
「フォウ！」

という何とも力強い返事をもらつた。 まあ、 知つてたんだけどね！

それにしてもマシユとは出会わないな。 まあ今のころならまだ無菌室から出られない体だつけ？ そこはちよつと残念に思つた。

「フォウ。 ンキュ、 フォーウ！」

そう鳴いてフォウはどこかへ行つてしまつた。 俺は立ち上ると、 歩き始めた。

「しかし、 どこへ行つたものか……」

当てもなく施設を歩いていると、 緑色の紳士と出会つた。

「おや、 君は……？ そうか、 今日から配属された新人さんだね。

私はレフ・ライノール。 ここで働かせてもらつて、 いる技師の一人だ。

君の名前は……？」

「あ、俺、藤丸立花つていいます。」

でたー！胡散臭い人！魔神柱の一人、レフ・ライノール＝フラウロス！

実際に会うと、やさしそうな雰囲気と胡散臭さが大分ミックスしてるぞお！  
俺はできるだけ考えていることが表情に出ないよう努めながら質問に答えた。  
「ふむ、藤丸立花君と、招集された48人の適正者、その最後の一人というワケか。  
ようこそカルデアへ、歓迎するよ。」

一般公募のようだけど、訓練期間はどれくらいだい？

1年？半年？それとも最短の三ヶ月？」

「えっと、訓練はしていません。」

「ほう？ということは全くの素人なのかい？」

ああ……そういえば、数合わせに採用した一般枠があるんだつけ？

君はそのひとりだったのか。申し訳ない。配慮に欠けた質問だった。  
けど一般枠だからって悲観しないでほしい。

今回のミッションには君たち全員が必要なんだ。

魔術の名門から38人、才能ある一般人から10人……  
何とか48人のマスター候補を集められた。

これは喜ばしいことだ。この2014年において靈子ダイブが可能な適性者すべてを

カルデアに集められたのだから。

わからないことがあつたら遠慮なく声をかけてくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

「おつと、もうそろそろ所長の説明会が始まる。君も急いで出席しないと。」

「説明会……ですか？」

「ああ、君と同じく本日付けで配属されたマスター適性者の方達への挨拶さ。ようは組織のボスから、浮ついた新人たちへのはじめの挨拶<sup>しつけ</sup>つてヤツさ。所長は些細なミスも許容できないタイプだからね、

ここで遅刻でもしたら1年は睨まれるぞ。」

それはちょっと勘弁してもらいたい。いや、睨まれているうちにだんだんきもちよくなつてくるかもしれないけども。

「5分後に中央管制室で説明会がはじまる。」

この通路をまっすぐ行けばいい。急ぎなさい。私は所用があるからこれで。」

「はい、ありがとうございます。」

あれ？ なんだいい人じやん。・・・いやいやいや、だまされないぞ！

ちよつと優しくされたからってデレるとおもわないでよね！ふん！

などとふざけたことをおもいつつ。お礼を言つて中央管制室に向かう。

ドアが開き、中に入ると、すでに俺以外の人は並んでいた。話は始まっていたらしく、16歳くらいの少女がこちらをにらんでいる。おつと！さつさと並ばないと。

「時間通りとはいきませんでしたが、全員揃つたようですね。

特務機関カルデアにようことそ。所長のオルガマリー・アニムスフイアです。」

所長がまず挨拶から始めた。ううんそれにしてもかなり眠いな。

「あなたたちは各国から選抜、あるいは発見された稀有な——

ダメだこれ眠い、眠すぎ——

所長の平手打ちを食らい起きた後、怒られて中央管制室からたたき出された。

ついでにファーストミッショソンから外されて、今は与えられた部屋へ向かっているところだ。

「フォウ！」

おおっ!? 気が付くとフォウくんが背中からとびかかって、肩によじ登ってきた。

びっくりするなあもう。ま、いいや、一緒に行こうか。

ええと、ここだな、俺の部屋は。

部屋に入ると、

「はーい、入つてまーーつて、うえええええええ!? 誰だ君は!」

そうですが、——って、それはこっちのセリフだ！

ここは空き部屋だぞ、ボクのさほり場だぞ!?

誰のことわりがあつて入つてくるんだい!」

所長と部屋割りを決めたやつのことわりです。それとさぼるなよ。  
それはともかくここが俺の部屋だといわれたんですが。

「君の部屋? ここが? あー……そつか、ついに最後の子が来ちゃつたかあ……

いやあ初めまして藤丸立花君。予期せぬ出会いだつたけど、改めて自己紹介しよう。僕は医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。なぜかみんなからはDr. ロマンと略されていてね。

理由はわからないけど言いやすいし、君も遠慮なく口マンと呼んでくれていいとも。実際口マンって響きはいいよね。格好いいし、どことなく甘くていい加減な感じがするし。」

「はじめまして、ドクター。」

「うん、はじめまして。今後ともよろしく。

……あれ？君の方にいるの、もしかして噂の怪生物？うわあ、はじめてみた！マシユから聞いてはいたけど、ほんとにいたんだねえ……。  
どれ、ちょっと手なずけてみるかな。

はい、お手。うまくできたらお菓子をあげるぞ。」

「…………フウ。」

「あ、あれ。いま、すぐ哀れなものを見るような目で無視されたような……。  
と、とにかく話は見えてきたよ。」

君は今日来たばかりの新人で、所長のかみなりを受けたってところだろ？

ならボクと同類だ。何を隠そう。ボクも所長に叱られて待機中だつたんだ。」

おい、それでいいのか医療トップ。それは隠したほうがいいものじやないかな？  
「もうすぐレイシフト実験が始まるのは知ってるね？」

スタッフは総出で現場に駆り出されている。

けど僕はみんなの健康管理が仕事だから。正直、やることがなかつた。

コ<sup>コ</sup>ラ<sup>ラ</sup>、  
靈子筐体に入つた魔術師たちのバイタルチェックは機械のほうが確実だしね。  
所長に”ロマニが現場にいると空気が緩むのよ！”つて追い出されて、  
仕方なくここで拗ねていたんだ。

でも、そんなときに君が来てくれた。地獄に仏、ぼつちにメル友とはこのコトさ。  
所在ない同士、ここでのんびり世間話でもして交友を深めようじゃないか！」  
そうですね。そもそもここ俺の部屋だし。というよりだれがボツチ？

「ま、つまり僕は友人の部屋に遊びに来たつてことだ！」

ヤツホウ、新しい友達ができたぞう！」

まあ口マニがうれしそうでなによりです。それから俺は世間話をしたり、カルデアの構造を聞いたりして過ごした。すると、

「口マニ、あと少しでレイシフト開始だ。万が一に備えてこちらに来てくれないか？」  
Aチームの状態は万全だが、Bチーム以下、慣れていないものに若干の変調がみられる。これは不安からくるものだろうな。  
コフィンの中はコクピット同然だから。」

！

ついにこの時が来たか！もうそろそろあれば、管制室爆破があるはずだ！

「やあレフ。それは気の毒だ。ちょっと麻酔をかけに行こうか。」

「ああ、急いでくれ。いま医務室だろ？そこからなら2分で到着できる筈だ。」

「隠れてさぼつてているから…」

「……あわわ……それは言わないでほしい……」

ここからじやどうあつても5分はかかるぞ……

ま、少しぐらいの遅刻は許されるよね。Aチームは問題ないようだし。

ああ、今の男はレフ・ライノールというんだ。

あの疑似カルデアス天体を観るための望遠鏡——近未来観測レンズ・シバを作った魔術師だ。シバはカルデアスの観測だけじやなく、この施設内のほぼ全域を監視し、映し出すモニターもある。

ちなみにレイシフトの中核を担う召喚・喚起システムを構築したのは前所長。その理論を実現させるための疑似靈子演算器……ようは

スパコンだね、これを提供してくれたのがアトラス院

特にこれは急ピッチで完成させられたらしいけど。

このように実際に多くの才能が集結して、このミツショーンは行われる。

ボクみたいな平凡な医者が立ち会つてもしようがないけど、およびとあらば行ないとね。

おしゃべりに付き合つてくれてありがとう、藤丸立花君。

落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。

今度はおいしいケーキぐらいはご馳走するよ。」

そういうて口マンは部屋を出ていった。……あれ？明かりの消滅は？爆発は？

どういうことだ？本来ならここでレフが仕掛けるはず…。

…考えていてもしようがない。何もできることはないし。  
なんか肩透かし食らつたら眠くなつてきた…ふわあ…：

…………はつ！い、今何時だ！つて、寝ちやつてたか。

結局何も異常はないしどうしよう。ちょっと施設を探索でもしてみようか…  
そう思つていると俺の中央管制室への招集を知らせる放送が鳴つた。

どうしたのだろうか。俺は部屋を出て中央管制室へむかつた。

中央管制室に入ると、そこには、深刻そうな青い顔色をした所長、レフたちがいた。  
俺の姿を確認した所長は、口を開いた。

「全員揃つたようね。まず初めに言つておくことがあります。

ファーストミッショソに従事した全員の死亡が確認されました。」

は？どういうことだ、レイシフトに失敗したのか？いつたい何が…  
「レイシフトが失敗したわけではありません。

レイシフトした先で襲われ、死亡したのです。襲つてきた敵の正体は不明。

メンバーは抵抗を試みましたが失敗。ファーストミッショーンは失敗と判断してレイシフトで回収を試みましたが妨害があり、できませんでした。

現状、マスター候補はあなたたちしかいません。」

襲つてきた敵の正体が不明? そもそもどこへレイシフトしたんだ?

そういうと明らかに苦い顔をした所長がいた。

「嘘…よね、あなた覚えていないの?」

「…ため息をつかれた。そして、

「仕方ない。レフ、そちらで説明してあげなさい。」

「わかつた、ほら、こつちにきてくれ。」

「…といわれてレフについていく。」

そして、説明会で説明されたらしいことをもう一度説明していく。

カルデアの設立理念、行っている事業、カルデアのこと。

「しかし今から半年前、突然カルデアスの明かりが消えた

そこで未来観測をさかのぼつていくと、ある時を境に黒い円がカルデアスに広がり始めた。それは徐々に広がり、カルデアス全体を覆いつくした。

つまり、それは地球全体を覆つたことになる。

黒い円？ いつたいどういうものなのだろうか。

「ああ、みせてあげよう、これだ。」

そういうと何やら機械を操作した。

すると、変化したカルデアスの下の部分に確かにそれはあつた。

文明の光を飲み込んでいく黒い円の領域。

「今は情報規制が敷かれていて知られていないがね、これは3か月ほど前に、

南極に突如発生し今もなお周囲を破壊・吸収しながら拡大を続いている。

徐々に拡大して各国の観測基地を呑み込んでいき、やがて半径数100kmにも達す

る

円盤状の空間を形成するに至った。この亜空間の外縁部は高度数1000mに達す

プラズマ雲に囲まれ、それに触れたものを分子レベルで崩壊させる。

現状、人を搭載してそれを突破できるだけの防御力を持つたものはない。

それゆえレイシフトに入る必要がある。

そして、これがその空間の今の様子だ。」

そういわれてモニターに出たのは一枚の写真だった。

うそだろ。という思いしかなかつた。だつて、これは、俺の記憶が正しければ、

「シユバルツ……バース……」

「おや、なんだいそれは。」

「えつ、いや、ただなんとなくおもいついて。」

慌てて取り繕う。

「シユバルツバース……か、そうだな、今度からそう呼称しよう。

話を戻そう、1か月前、シユバルツバースに観測機械を送つた。

そして内部の映像データや構成のデータを取得した。

そのデータを解析して、突入できる座標の特定をした。

そしてシユバルツバースの発生の原因、シユバルツバースの消滅を目的とした探索

それを行うために集められたのが君たちだ。」

唚然としそうになるのを何とか踏みどまつて聞いていく。

正直もうおなかいっぱいです。

話が終わつたのを見た所長が話しかけてきて、

「理解が済んだようね、いい？あの空間の広がりは今もなお加速しています。

我々は一刻も早く原因を突き止め、拡大を止めなければならぬの。

今から新たなマスター候補たちを集めている間、調査しない手はありません。

あなたたちが素人だとしてもあなたたちしかいないの。

レイシフトして、調査を進めてもらいます。

といつても、先行した調査隊が壊滅するほどのところへなにも用意せずに突入させるわけじやないわ。

先行隊の魔術師たちは拒否したけど、国連から最新の科学技術の粋を集めて作成された機能拡張型特殊強化スーツ、デモニカ力をあなたたちに貸与します。マスター候補を招集している間、これを装着してあなたたちは調査をするの。いい？では、早速いまからスーツの登録を行います。」

そういうつて俺たちは所長についていった。

ついていつた先にある部屋には、いろいろな機材や武器が置かれている。

「これよ。」

コンソールを操作して、円柱が開いて出てきたのは、まぎれもなく、

金のバケツ頭だった。

混乱している頭も憂鬱な気分もそれを見た途端吹っ飛んだ。

思わずテンション上がつてうおおおおと声を出した。

だつてあれだぜ？ 強化スーツだぜ？ デモニカスーツだぜ？ かつこいいじやん？

「えつ、」

そういうとだれもかれも信じられないという顔をしている。

まあ、最初は俺もバケツ頭はどうかと思つたよ？

でもそのうちこれじやないとダメになつてくるんだよ。

「まあいいわ、それではスーツの説明と登録、まかせたわよ。

私は今回のことでほかにもやることがあるから。」

そういうつて所長は出ていつた。残された職員が、

「それでは説明を行つていきます。まずデモニカとは……」

デモニカ。着脱拡張型・次期能力総合兵装「DEMOuntable Next I ntegrated Capability Armor」の略称。あらゆる極地で活動できる上に、装着者の戦闘経験に応じてスーツ自身AIがレベルアップ。最適なアシストをするように強化される成長的な拡張性を持つており、俺たち調査隊はこのスーツを装備してシユバルツバース内を探索する。

シユバルツバースは魔術師でない一般人にとつて有害な環境のため、このスーツが必要であるという側面もある。

俺たちは説明を聞き、登録を済ませると早速装備して中央管理室にもどつた。

「登録、装備、完了したようね。デモニカはアプリで機能を拡張していきます。早速このアプリをダウンロードしてもらうわ。」

そういうつてダウンロード表示がされたのは、可視化アプリだつた。

「先行調査隊がやられた際、何もせずにいたわけじやないわ。未知の敵の構成、不可視の理由、撃破の方法。調査隊が送ってきたデータを解析してある程度対抗できるようになるアプリよ。とはいっても付け焼刃。

生存第一にしてできるだけ交戦は避け、データ収集に努めなさい。わかつた? ……では、これよりここに、作戦の開始を宣言します!

人理守護指定・G.O (グランドオーダー)。

魔術世界における最高位の使命を以て、我々は未来を取り戻す!」

命令を受けて俺たちはコフィンに入つていく。

安全の保障なんてなく、命を落とすかもしれない。

だけど、やるしかない。今できることをやることで未来をよい方向に変えられると信じて。

拝啓お父さん、お母さん。過酷と過酷が合わさつてとても生きづらいけど、わたしはげんきです。

これは、人が願いをかなえる物語——ではない。

これは、人類と地球の生存をかけた闘争の物語である。

A D 2 0 1 4 終末回帰領域 シュバルツバース

副題

希望と絶望の地

人理定礎値：G a i a

ビーストⅡ 太母 グレートマザー

メム・アレフ

F a t e / G r a n d O r d e r     e p i c o f s t r a n g e j o u  
s t r a n g e j o u r n e y     続き

「なんともはや、ニンゲンの徒なることよ…。」

「ヤツめが何者か、知つておるのか?」

「知つておつてはこのようなことはできまいて…。」

「もはや世の終わりを止める手立てはあるまいに…。」

「なんだ…?こ…?どうも意識がはつきりしない…。あなたたちは…?」

「ほお…何やら一人、紛れこんできたようだ。」

「捨て置け。どうせ崩れ消えていく魂だ。」

「いやいや、この者…。少し面白いかも知れんぞ。」

「…言われてみれば。なかなか強いところがある。」

「これなら、易々と魂を食らわれることも無さそうだ。」

「いやあ、なんだかわからないけど褒められると嬉しいですねえ。」

「おぬしらがそう言うなら付き合つてやらんでもないが…。」

「どれ、青年よ。おぬしを送り返してやろう。」

「さあ、その名を見せてみるがいい。」

藤丸：藤丸立花です。

「藤丸立花か。その名、覚えたぞ。」

おぼえられちゃつた。きやつ。

「さて、藤丸立花よ。呪われた『滅びの地』で、お前が手に入れるは…。  
未来への光明か、破滅への爆雷か。それとも…。」

「まずは、墮ちて見せよ。足搔いて見せよ。

内に輝き持つなら、それを我らに示さなくてはならん。」

「おい…。」「…おい…。」

部屋の外から声が聞こえる…。

「…おい！聞こえるかい！藤丸立花君！

ダメだ、呼吸が止まってる！くそッ返事をしてくれ！藤丸君！・藤丸君！・

「ここで見たことは…他言無用だ。

もつとも、心に封をするゆえ誰にも言えぬがな…。」

あ…部屋が…遠ざかつてゆく…。

「…藤丸君！ 藤丸君！」

誰かが俺のことを呼んでいる…。

目を覚ますと、そこはなんか金属でできた…シェルター？

「やつた！ 呼吸が戻った！ バイタル、正常値に戻っていくぞ！ これで一安心だ！  
大丈夫かい、藤丸君！？ 意識は大丈夫？ 自分が誰だかわかる？」

君心肺停止状態だつたんだぞ！？」

通信でロマンからそう告げられる。

え？ そんなやばい状態だつたの俺！？ えええええ…。

あたりを見回すと、俺と一緒にレイシフトしたメンバーの一人が倒れた状態から  
起き上がつていた。

「つ、うう…なんだつたんだいまの…なんかぐるぐるとシェイクされた  
感じだつたが…。」

と、そこに、シェルターの外から3人のメンバーが入つてきた。

「…意識が戻つたか！ 大丈夫か？ 動けるか？」

「うん、動ける。ありがとう。」

「きついかもしれないけど、頑張つてくれ。休みがとれる状態じゃない。  
シェルターの電源が入らないことには。」

ああ、うんでもこのシェルターって？

「私が説明するわ。先行隊が突入する前、我々は資材の搬入を行つたわ。そのなかに、ある程度単独で調査活動をする拠点、セーフティハウスとして、そのシェルターを組み立てるものがありました。先行部隊は、まず、調査する部隊と、組み立てる部隊に分かれ、シェルターを組み立てた。組み立てた後に、正体不明の敵に襲われ、先行して調査に言つた部隊が全滅。それを受けて、シェルターの防御フィールドを展開するため、電源を入れよう試みたけど、原因不明のトラブルで失敗。シェルターに侵入されて、組み立てる部隊も全員連絡が取れなくなつたわ。」

そ、そんな経緯があつたのか…。

「そこで、あなたたちのファーストミッショնは原因の調査、特定をして、シェルターの電源を無事にいれて拠点を活動させることよ。わかつた？」

了解しました！

「よろしい。デモニカの通信機能は常にOnにした状態で、シェルターを調べなさい。映像を通して原因を特定、技術部門による指示を仰ぐのよ。」

「こちら、技術班だ。よろしく頼む。」

「こちらこそよろしくお願ひします。」

「ああ。ではまず、電源装置のある所へ移動してもらえるか?」  
了解!

指示を受けた俺たちは移動してゆく。動力部にたどり着き、映像を送っていると、「ふむ、ここを調べてもらえないか?ああ、やつぱりだ。ここに異常がみられる。すぐに修理してくれ。方法は?。」

と、その時、デモニカが異常を検知し、アラートを発生させた。  
「!大変だ!正体不明の敵が接近!まずいぞ。修理と防御フィールドの発生には時間がかかる。急がなければ!」

た、大変なことになつた。ど、どうすればいいんだ?。

「落ち着きなさい!まずは修理を急いで!それとほかのものは交戦準備!こうなつたら仕方ないわ!よく聞きなさい!デモニカには戦闘をサポートするA.Iがあります。あなたたちは敵に狙いをつけて撃てば、あとはA.Iが修正して当たるようにな動かしてくれます。修理するものとここを死守するのよ!」

わかつたらまずは物資保管庫にある武器を取りに行きなさい!」

指示を受けて、とりあえず落ち着いて命令通りにする。

シェルターの周りに展開して敵を待つ。

「敵反応接近:あと10秒!……5, 4, 3, 2, 1、<sup>エングージ</sup>交戦!」

ついに来たか！デモニカの視覚化。プログラムを起動すると、そこには、モザイクに見える何かがいた。

「な、なんだあれは？！」

メンバーに動搖が広がる。が、すぐに武器を構えて、敵に攻撃を仕掛けた。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

攻撃がモザイクにあたるが、モザイクは構わず突っ込んでくる。

俺はモザイクを避けて、また攻撃を加えるが、モザイクはこつちに突っ込んでくる！ダメだ！効いているように見えない！どうする、このままじゃ……！」

と、その時デモニカがハッキングを受け、プログラムがインストールされた。

これは、悪魔召喚プログラム！同時に音声が聞こえてきた。

「そのプログラムを起動しろ。ハーモナイザーを使えば、やつらに少しはダメージを与える。俺がしてやれるのはここまでだ。あとはせいぜいがんばれ。」

そういわれてプログラムを起動した。すると、さつきよりも鮮明に

モザイクの姿が見えた。俺がまた攻撃を加えると、今度はモザイクから何か飛び散つた。どうやらダメージを与えることに成功したらしい。

これなら……！

俺たちは反撃を開始していく。モザイクはどんどん数を減らし、ついに全滅させた。

「勝った…のか…？」

「生きてる…俺たち生きてるぞ！やつた！」  
「し、死ぬかと思つた…」

それぞれが喜びの声を上げる。中には抱き合っているものもいる。  
生き残れた。そのことがとてもうれしかつた。

俺達はプログラムを送つてくれたものに感謝した。  
にしてもなんかCV神谷浩史っぽかつたぞ。

その後、気を引き締めて、警戒を続けていると、

「動力の起動に成功した。防御フィールドを展開するぞ。」

と通信が入つた。どうやら拠点が活動したらしい。防御フィールドの発生を確認す  
ると、シエルターに入れる前に、敵を倒したところを調べた。

おつ、やつぱりあつたな。これを回収していこう。それと、ん？あそこにあるのは？  
他のメンバーに、敵を倒した際の残留物と壁近くに生成された何かを回収することを  
伝えて、回収した後、シエルターに戻つた。

「まずは、ファーストミッショントラブルおめでとう。よくやつたわ。  
シエルターに入った後、通信が入り、シエルターのモニターにカルデアの映像が映し  
出された。

我々はあなたたちに感謝の意を表明します。」  
と所長からお礼の言葉をもらつた。やつたぜ。

「シェルターが活動したことで、カルデアとの経路が安定しました。これで、確実に  
レイシフト、物資の補給ができるようになるでしょう。帰還も可能となるはずよ。」  
よかつた。戻れるようになるのか。

あ、そうだ。すみませんちょっとよろしいでしようか？

「なにかしら？」

さつき敵を倒したときに出た残留物と壁近くに生成された謎の物体があること、  
敵との交戦の際に、どこからハッキングされて謎のプログラムが届いたことを伝え  
た。

「なんですか？ ハッキングされて謎のプログラムが届いた？」

…どういうことかしら…。よし。ではあなたたちはカルデアに帰還。

謎の物質も持ち帰りなさい。」

了解。と、返事をすると、シェルターの機能を使い、レイシフトを開始した。

…原作じや出れなかつたけどできるのかな？

そんなことを不安に思つていながら。

体が引つ張られるような感覚の後、円柱の中にいることに気が付いた。  
ここはコフインの中か。

と、コフインが開いた。コフインを出ると、駆け寄ってきたスタッフに持ち帰ったもの渡し、デモニカの整備ルームへ行けと指示された。

デモニカスースを脱いで中央管制室に行くと、所長から、

「調査」苦劳様。持ち帰った試料と謎のプログラムはいま技術班に解析させているわ。  
そして告げなければならぬことがあります。」

告げないといけないこと？

「レイシフトを行つた後、シユバルツバースの拡大のスピードが上がりました。  
このままいけば、半年で地球は覆いつくされます。」

な!? メンバーに動搖が広がる。あと半年だつて!?

「静まりなさい！ 現存しているデモニカスースはあなたたちのものだけです。

遺伝子まで登録するスースなため、ほかの人物が使うわけにもいきません。

今スースの追加分を要請していますが、届くのがいつになるかわかりません。

つまり、戦えるのはあなたたちしかいないの。」

戦えるのが俺たちだけ：

「人類の未来はあなたたちに託されています。私たちも全力でサポートします。命令します。人類を救つて！」

シーン、とその場が静まり返った。そして、

「了解しました。」

俺は告げた。ここで何とかしないとどのみち死ぬしな！

すると、ほかのメンバーも、次々と、

「了解。」「了解しました！」「りよおうかい！」

最終的に全員が了承した。

「ありがとう。まずはゆっくり体を休めて。明日、ブリーフィングを始めるわ。」

そういうと、所長は話を終えた。

俺たちは管制室を出て、医務室に向かうことになつた。

医務室で、ロマンにあつた。

「やあ、藤丸君。お疲れ様。」

ああ、そつちこそお疲れさま。

「いや、君に比べたらまだまさ。さて、検査を開始するよ。

ただでさえ心肺停止してたんだそれでなくとも異常があるかもしねない。」  
検査の結果は異状なしだった。

俺は許可をもらつて部屋に戻つた。

ふう、疲れたな。今日はいろんなことがあつた。戦つたり死にそうになつたり。  
人類の未来を託されたり。

だけどやるしかない。ここで死にゆくのを待つてたりしたくない。

そう決意した俺はベッドで横になると、すぐに眠つた。

# F a t e / G r a n d O r d e r e p i c o f S t r a n g e j o u r n e y 3 話目

一晩明けてモーニングコールによつて目覚めた俺は、ブリーフィングをするという中央管制室に向かつた。

中に入ると、もう全員揃つていた。また俺が最後のようだ。

「来たようね。ではブリーフィングを始めます。

今から一時間ほど前、連絡が取れなくなり、死亡したと思われていた先行突入部隊のメンバーから救難信号が届きました。

あなたたちはその救助に向かつてもらいます。

シエルター外の位置情報はありませんが、ここを戦区、「セクター」とみなし、名称コードを発行します。当該セクターは「A」。セクター・アントリアと呼称します。

このセクター・アントリアを探索し、救難信号のある場所まで進行。人員の救助を行うのが今回のミッションよ。」  
作戦の概要を頭に叩き込むと、所長は、

「それと、持ち帰った物質と謎のプログラムのことですが……『そこからは私が説明しよう!』ちょっと!?」

ん? いきなり誰かが話に割り込んできたぞ?

あ、ダウインチちゃんだ! 呼符よこせ!

「おっと、紹介がまだだつたね。私の名はレオナルド・ダ・ヴィンチ。

気軽にダウインチちゃんと呼んでくれたまえ。」

そういって自己紹介するダウインチちゃん。みんな啞然としている。

「はあ……今紹介した通り……いっぽはレオナルド・ダ・ヴィンチ。

カルデアの召喚英靈第3号よ。

技術的なことはこいつに聞きなさい。」

「こいつ呼ばわりとはひどいんじゃないかな?」

ま、いつか。それよりも君たちが持つて帰つてきたこれなんだけどね、

こいつはまるで未知のエネルギーを秘めた物質だ。靈子に似た性質はしていること

は

わかつたがこいつがどうやつて生み出されたのか見当もつかない。

こいつを仮に疑似靈子と呼称しよう。こいつを使えばいろいろ作れそうだ。

君たちの装備とかね。燃料としても使えるだろう。」

つまりマツカはＱＰだつた…？宝物庫周回しなきや（義務感）そんなことはおいといで、

「それともう一つ…こつちのほうも解析してみたんだけどね、

こつちはどうやら概念が結晶化したものらしい。それも高純度の。これを使えば高度な概念礼装も作成できる。

こつちも回収してくれれば役に立つものを作つてあげよう。」  
なるほど。概念礼装か…カレスコください。

「そして謎のプログラムだが…正直言つてあれブラックボックスの塊だね。

私でも8割しか解析できなかつた。どうしても解析できない部分は使って効果を確かめてくれとしか言えないね。」

ブラックボックスの塊なのに8割も解析できたのか（困惑）

逆に使つてない部分つて召喚、交渉の部分だから、効果はわかつている分安心できるけど。

「もう一つ伝えておくことがあるわ。」

ん？

「シエルターが稼働したことでカルデアの英靈召喚システム・フェイトを使ってそちらで英靈召喚ができるようになりました。

「いつても、あなたたちの魔術の腕では契約できるかわかりませんが。」  
はつきりいうなあ。まあ事実なんだけど。

「戦力が多いほうがいいわ。そちらにレイシフトしたら起動してみなさい。」  
了解。

「あ、そうだ。昨日の戦闘データを参照して武器を試作してある。

1時間後にシミュレーションルームにきたまえ。」

「では、ほかに質問は？……ないようね。ではレイシフトは3時間後。

それまで各自準備をしておくように。では、ブリーフィングを終了します。」

そういうてブリーフィングは終わつた。

俺は管制室を出ると、食堂に向かうこととした。

そういえば朝食食べずにブリーフィングに参加したからね。

朝食をとると、シミュレーションルームへ向かつた。

職員の一人にあいさつすると、

「待つっていたよ。武器とスースはあそこにおいてある。

詳しく述べダウインチちゃんに聞いてくれ。」

指さした方向にあるドアへと向かい、部屋へと入る。

すると、

「おっ、来たね。待ちくたびれたよ。ささつ、こつちだついてきたまえ。」

と、部屋で待機していたダウインチちゃんに連れられ、ついた場所に置いてあつたデモニカスースを着ると、

「ではお待ちかね、これが試作した武器だ！」

——それは剣というにはあまりにも大きすぎた。

——大きく分厚く大雑把すぎた。

——それはまさに鉄塊だつた……。

なんでだああああああああああああああ!!!もつと他にあつただろ!  
もつと俺向きの戦用のがあつただろ!

「ロマンというのは大事だと思わないかい?」

実用性も重視してください!

「デモニカスースならばたやすく扱えるだろう?

それに、いざというときには盾として扱うことも考えてある。」

普通に盾じや駄目だつたんですか?!

「面白みがないだろ? それに現状あまり相手のことがわかつていしないんだ。  
質量というのは武器だよ。それにいつこれだけだといつたんだい?」

それを先に行つてくださいよ。で? それはいつたいどれですか?

続いて紹介されたのはアサルトライフルのようなものだつた  
「これだ。シンプルに魔術的な改造を施して威力を高めている。

君が持ち帰ったフォルマもつかつてね。あんまり目新しさはないけどね。  
そんなもの必要ないです。

「それと、このナイフだ。武器はこれで全部。さ、データ取りもかねて、  
シミュレーションルームで戦闘訓練してきたまえ。」

言われたとおり、武器を全部装備してシミュレーションルームへ向かう。  
：大剣は割と使いやすかつたのがちょっと悔しい。

これに味を占めて今度は複合武器とか作り出すんじやなかろうか。

戦闘訓練後、少し休憩をはさんで、管制室へ向かう。

「全員揃つたようね。では、救助ミッションを開始します。

総員、コフィンに入りなさい。」

全員がコフィンに入ったことを確認すると、

「人員の救助、頼んだわよ…。 レイシフト開始！」

穴に落ちていくような感覚が体中に広がる。

しばらくすると落ち着いて、目を開けると、シェルターの内部にいた。

今度は安全にレイシフトできたらしい。

メンバーを全員確認すると、通信が入る。

「全員無事についたようね。では、まず英靈召喚を試みなさい。」  
レフ教授が、マップデータを送信して、

「装置はこの位置にある。起動してカルデアの装置と同期してくれ。  
ああ、今同期を確認した。では、フェイト、起動するぞ。  
いいかい、サーヴァントはマスターがないと現界できない。  
まずは一人ずつ試していくぞ。」

そういうつて一人ずつ召喚を試していく…。

結果として来てくれたのは、俺一人だけで、サーヴァントは、  
「サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ、参上した。」

まさかのエミヤである。

「どうした？ 私の顔に何かついているかね？」  
いいえ、なんでも。

俺たちはアーチャーに現在の状況を説明した。

「なるほど。にわかには信じがたいが…。」

とりあえずは納得してもらつたようである。

それでは、外に出て救助に向かおう。

「了解した。」

メンバーは準備を整えて、外へ向かつた。

シェルターの外は氷の洞窟だつた。

「やつぱりここは南極なんだろうか。」

「こんな地形は見たことないけどな。」

「救助を待つてるやつがいるんだ、急ごう。」

そんな会話をしながら、慎重に進んでゆく。

少し進むと、扉のようなものがあつた。これは？

近くによると、扉が開いた。なぜこんな機能が…。

「わからない。でも先には進めるみたいだな。」

扉を通ると、いきなり正体不明の存在に遭遇した。

姿を目撃すると全員が身構えた。

「なるほど。姿は見えないがたしかになにかいるな。」

エミヤがそんなことを言つてゐる。

えつ、見えないの？

「ああ、目視はできない。だが、存在は感知できる。問題はない。」

そういうつて弓を構えた。

あ、ちょっと待つてエミヤ。

「なにかね？ 敵を前に悠長なことをしている暇があつたら…」

なんかこつちに話しかけてきてない？

「なに？…確かに何か聞こえるな。」

目の前の存在から言葉のようなものが発せられている。詳しく述べられないが…。

すると、目の前の存在は突如モザイクの状態から変化していく。

そして、羽の生えた小人の姿になつた。そして俺たちにもわかる言葉で話し始めた。  
「あ、ごめんごめん。こうしないとキミたちには見えないんだつた。

えーと。ここにちは、人間さん。私、人間にキヨーミがあるんだよね。

…だから、ちょっとつきあつてよ！」

どうやら会話がしたいらしい。

「…どうする？ マスター。聞く必要はないと思うが？」

いや、まあ、会話をするだけなら…積極的に戦闘したいわけじやないし。

「そうか、ならマスターの意思を尊重するとしよう。  
そういうことで会話することにした。」

「私ね、前から人間と話してみたかったんだ。

だからねえ…。いつしょにやろうよ悪魔会話！」

デモニカにインストールされた悪魔召喚プログラムに新しい機能が  
アンロックされたと表示があつた。そのまま機能の説明が流れていく。  
そして、ピクシーが説明してくれた。

「悪魔と話すときのキホンはねえ…。やつぱりキゲンをとることだね！」

悪魔は本当は敵だけど、キゲンがよくなれば、人間にもいいことしてくれるよ。」  
なるほどなるほど。

「それじゃあね…。最初はどうしようかな…。なんでもいいから挨拶してみて！  
よし、はじめまして！」

「そうそう！とつてもいいかんじ！」

それじゃあ、次は悪魔とのコウショウだよ。コウショウしたら、  
次は悪魔へのおねがいだね。何かお願ひしてみてよ！」  
え？ いいの？ ジやあ…どうしようかな？」

「なんでもいいんだよ。アイテムが欲しいとか、これ：マツカがほしいとか。  
とつておきのお願いはね：仲魔になつてかな！」

それじゃあ、仲魔になつて！

「そうそう、エンリヨしないで思い切つていうのが大事だよ。  
…で、こういう時つて悪魔もキミにお願いするんだ。」

「どんなおねがいなのか、私がじつさいにやつてみてあげる。

…100マツカくれる？魔石くれる？きみのパワー、吸わせてくれる？  
きみの技のパワー、吸わせてくれる？」

全部オツケー！さあ持つていけ！特にパワー……すまない。魔石は持つてないんだ。

「おい、マスター？」

「…うん、こんなどこかな！えーっと、他には…。そうだ、これ言つとかなくちゃ。  
会話つてさ、相性が大事だよね？ほら、気が合うとか合わないとか、  
そういうのあるでしょ？実はこれつて、スタンスと関係があるんだ。」  
へえ、そうなのか。よくbenkiよーしてるねー。えらいえらい。  
ところでエミヤのスタンスは？

「…中立・中庸だ。」

なるほどそなんだ！

「さつてと…これで全部だね。もうこれでどんな悪魔と話しても大丈夫！」

…話し忘れとか、ないよね？」

うん、それじや、いいかな？さつきから隣にいるのは誰？」

「…あ！ いけない！ すっかりわされてた！」

んもう、ドジっ子さん！」

「マスター、それはやめたほうがいい。軽く殺意がわく。」

あつ、はい。

「え～っと、このコは、アンノウン。もう知ってるよね？」

実はねえ、アンノウンと会話するとちよつと変な会話になっちゃうの。例えば…。」

そういうてピクシーは謎の言語で話始めた。ここではリントの言葉で話せ。

「こんな感じ。言葉がちゃんと伝わらないから、会話だつてうまくいかないよねえ。

たまにマグレができるくらいかな。」

会話にマグレ成功とかあるのか…（困惑）

「はい！ おつかれさま〜今度こそ、これで全部だよ！」

それじやあ、最後におさらい。私もキミにおねがいしてみるね。

…私もいつしょに行つていいかな？」

いいですともおおおおおおおおおおおお!!!

「おいまちたまえ、そんな深く考えず返事をするな！」

いやだつてきみこれ断れる？断れるわけない。（断言）

敵対するなら今ここで会話の練習とかしてくれるわけないだらうし。

懇切丁寧に教えてくれるピクシーちゃん先生かわいいし。

「う…、むう。それは…、そうだが。」

「はい、よくできました！これで、私はキミの仲魔だよ！

それじやあ、あらためて自己紹介しておくね。

私は妖精ピクシー！こんごとも、よろしく！」

／ピクシーが仲魔になつた！ピクシーがスースの中に入つていつた。  
ん？なんかピクシーの声が聞こえる。

「そうそう。いま教えたことは、キミのスース…。

えーっと、デモニカ…だつけ？そのデモニカに送つておくから！

あんまり細かくはないけど、分かんなくなつたら見直してね！」

最高かよ。懇切丁寧に実践を交えて教えてくれてアフターフォローも

忘れないピクシーちゃんマジ先生の鏡。

えーっと、どうやつて呼び出せばいいんだ？

とりあえず悪魔召喚プログラム起動して…あ、これか。

俺は早速召喚した。隣を見るとエミヤが何やらこつちを見ている。  
どうしたんだ?

「……いや、なんでもない。それよりも救援に行くのだろう?  
急いだほうがいいのではないか?」

おつとそうでした。それでは改めて出発しよう。

俺たちの戦いはこれからだ!

# F a t e / G r a n d O r d e r e p i c o f S t r a n g e j o u r n e y 4 話目

悪魔召喚プログラムをゲットし、ピクシーを仲間にした俺たちは探索を続行した。ある程度単独で自衛できる戦力が整つたことで、各自分かれて行動することになった。

道中悪魔が出てくることもあつたがそのたびに対処していく。

途中で手分けして捜査していた、調査隊の仲間の一人が興奮した様子で、

「す、いわ！ 悪魔召喚プログラムが翻訳してくれるおかげでほんとに会話できた！」

神様には悪いけど私いますごい興奮してるわ！」  
とはしゃいでいた。

それを見ていたエミヤはやれやれといった様子だ。

「本当に大丈夫なんだろうね？ 後ろから攻撃されるのは勘弁してもらいたいが？」

大丈夫だよきっと。召喚プログラムの機能だし。召喚プログラムがなかつたら  
きつとみんな死んでた。

「そうだといいがね。…おつと、敵が来たぞ。」

おつと、敵はスライムと…初めて見るな。なになに…ノツカー?  
こちらに気が付くなりノツカーは冷氣とともに氷を飛ばしてきた。  
うわっ! 危ない! …この攻撃みたことあるぞ!

もしかしてさつきまで姿がモザイクで見えて居た奴か!?

「どうやらそのようらしい! いくぞ!」

エミヤが双剣を投影して悪魔に接近してゆく。  
俺も大剣をもって敵へと駆けだした。

「まずはそちらからだ!」

エミヤはノツカーヘと向かい双剣をふるつた。ノツカーは数回は避けるも切り裂かれ、  
消滅した。

「うおおおおお!」

大剣を片手で持ちながら走りつつスライムめがけて銃を発砲。  
けん制しつつ近づいて大剣を両手で持ち直し、振りぬく!

上段から振り下ろした大剣はスライムを飛び散らせ、消滅させた。  
戦闘を終えると、エミヤが近寄ってきた。

「お疲れさま。しかし、もどかしいな。」

なにが？

「今の状態ではかなり戦闘能力が低い。もつとも、そちらの悪魔には負けないが。」

「ああ。しかし、霊基再臨とはいつたい…。」

「ああ。しかしながら、霊基再臨とはいつたい…。」

そこに突っ込まないほうがいい。

それにもなぜ突然ノツカーの姿が見えるようになったんだ？

「君、説明書を読まないタイプの人間かね？ 書いてあるんじやないか？」

そうはいつても、どうやって見れば…あ、デモニカから説明書が見れるようになつてゐる。

「…やれやれ、先が思いやられるな。」

説明書によると、どうやら戦つたり仲魔にすることで解析が進むらしい。

解析が進めば弱点や姿が見えるようになると書いてある。

「つまり、姿が見えない敵でも戦つていくうちに見えると。

初見殺しの相手からしたらさぞやりやすかろう。」

物理反射の象さんは許さない。絶対にだ。

まあ、いいや、それじやあゆここう。

探索を再開し、奥へ奥へと進む。途中、またノツカーに出会った際、会話を試みて、

無事に仲魔を増やすことに成功した。戦力は多いほうがいいもんね！  
スライムはなぜか会話が成り立たないからできなかつた分、  
二体目が出るのはうれしい。

進んでいくと、扉を発見した。開けようとしてみるが、

どうやつて開ければいいのかがわからない。仕方なくそこを後にした。  
その道中で宝箱のようなものを見つけて中身を調べると、玉が手に入つた。  
デモニカの解析によるところは宝玉というらしい。使うと悪魔の傷が治るのだとか。  
それにしてもなんで宝箱のようなものがあるんだろうここ。

道の途中にあつた細い道を調べると、人がうずくまつているのが見えた。  
あれは救出対象の人か！

近くによると、声をかけた。

「ひつ！ああ、今度こそおしまいか。

こんな金のバケツをかぶつたような人間が見えるなんて、おかしな幻覚だな。」  
幻覚じないです。これはデモニカスースというやつです。

あなたを救助しにきました！

「きゅ、救助？ そうか、やつとか！ 遅いんだよ！ さあ、さつさと案内してくれ！」  
りよ、りようかい。

とりあえずシェルターまで一旦戻ろう。

そうしてきた道を戻ろうとするが、また悪魔に遭遇した。スライムが5体！ ちょっと多いな。

「ひつ、ひつ！ また出た！」

あれ？ 見えるんですか？

「あ、ああ、モザイクみたいなやつがおぼろげに…

それよりはやくなんとかしてくれ！」

「こちらも少しずつだが見えるようにはなつてきている。それよりもかたずけるぞ！」

そういうつてエミヤがかけだす。そういうえばアナライズの結果、  
スライムは炎や氷に弱いと書いていた。なら！

俺はピクシーとノツカーリーを召喚した。

「うわっ!? な、なんだそれは！ なぜそいつらを!?」

説明は後！ ピクシー！ ノツカーリー！ スキルで攻撃！

そういうつてピクシーはアギ、ノツカーリーはブフで攻撃し始めた。

これはどうもよくわからないが魔術の一種らしい。

炎や氷がスライムにあたるとスライムを消滅させていく。

その間にエミヤが2体のスライムを倒し、俺が銃で最後の一體を倒した。

ふう。つと息を吐くと、救出した人がこっちを見ていた。

「もしかしてそいつらと契約しているのか？だが、どうやつて？」

このデモニカスースに送られてきた悪魔召喚プログラムというものでやつています。  
あんまり詳しくはわからないけど…。

「な！科学でか！いや、そもそもカルデアのシステムからしてか…。」

まあ襲つてこないのならいい。」

そう話していた。少しづつ落ち着いてきたらしい。

そういえば、エミヤの攻撃が効いているのだから魔術でも傷つけられるはずだけど

…。

「…何？それは本当か？ならば試してみるか…。」

ちようどその時またスライムが一匹。

「ちようどいいところに来たな。くらえ！」

そういうて、炎を放った。スライムに直撃するとスライムは消滅。

「ハハハハハ…。なんだ！見えているならばたいした」とないではないか！」

あのー？でも正体がわからない場合どうするんです？

「ふん。この程度の力しかないのであればわからなくともどうとでもなるだろう？」

ええー？ちょっとそれは油断が過ぎるというか

ずっとこの程度とは限らないというか…。

「臆病風にでも吹かれたか？まあしかたあるまい。それなら先に戻っているんだな！」  
あの！どこにいくんですか！

「決まっている。俺が助けに行つてやるのさ！」

「ちょっと待つて！…行つちやつた。

「行つてしまつたな。それでどうする？マスター。」

「ほつとけないよ！追いかけよう！」

「了解した。」

追いかけてゆくと、大きな岩の前で悪魔に襲われている人がいた。  
さつきの人ともう一人いる。

十数匹くらいの悪魔に囲まれている！

「言わんこつちやない。助けに行くぞ！マスター！」

ああ！

彼らはどうやら多数に囲まれてうまく対処できないでいるらしい。

致命傷は回避できてるもののあちこちボロボロになつていた。

ここから銃を撃てば彼らにも玉が当たる可能性がある。であるならば！

俺は勢いをつけて思いつきり跳んだ。うつひよう！人間ここまで跳べるんだ！

そして下にいる悪魔で彼らの近くにいるやつめがけて大剣を振り下ろした。

大剣は悪魔をとらえ一撃で倒す。そしてそのままの勢いで俺は転がつていった。同じく跳んで悪魔数匹を弓でうちたおしながらエミヤがしゅたつと着地する。

「やれやれ、何を遊んでいるんだマスター？」

うう、しゅ、修練が必要だなこれ。

ともかく、気を取り直して銃に持ち直して彼らの前に立ち、悪魔に銃を撃つていく。仲魔たちもスキルで援護してくれて、数分後には全滅させた。

この戦いの後、デモニカにピクシーとノッカー、レイト・ディブクの解析が完了したと出た。

そしてピクシーとノッカーがあるものをくれた。

もしかしてこれデビルソース？やつたぜ！

戦闘が終わり、彼らに声をかけた。ピクシーにお願いして傷をいやしてもらつている。

「ああ、すまない。助けられたようだな。」

「……」

もう一人の突つ走つていったほうは気まずそうに顔を背けている。

なぜ悪魔に囮まれていたんです？

「近くで隠れていたら大声で救助しに来たというので出てきたらこの岩の向こうからあいつらが来たんだ。悪魔…というのはやつらやそいつらのことか？」

はい。彼らは自分たちをそう呼称しています。

とりあえずここから離れて安全な場所に行きましょう。

シエルターが稼働しました。そこなら安全です。そこまで護衛します。

「ああ。頼む。それと、隠れているときに見たのだが何名か

あの岩の向こうに連れていかれた。」

そうですか。後で調べに行かないと。

どちらも衰弱しているように見えた。まずはこの人たちが優先だ。

俺たちはシエルターへと戻ることを決めた。

シエルターへ戻ると、すでに全員戻つてきていた。

デモニカの情報を共有すると、扉が開かずいけない場所、

あの岩の向こう側以外調べたマップができた。

通信をつなげて報告すると、

「あの正体不明の存在は自分たちを悪魔と呼称していたと…」

だからそのプログラムは悪魔召喚プログラムという名前なのね。

そしてそのプログラムで翻訳により会話、交渉、契約ができると。  
にわかには信じがたいわね。常識外れもいいとこよ。

それに悪魔であるのにそんなに弱いの？」

所長は頭を抱えながらそう言つた。

なんでも超自然的な存在をを総称して悪魔というそうです。だから天使なのに悪魔  
なんてことも…。

「なるほどね…まあ、いいわ。それで後はその岩の向こうに連れていかれた

人物がいて、今現在調べられそうなのはその向こうだけなのね。

いいわ。いまからカルデアからC4を送ります。それで爆破して進んで

調査してください。保護した人物はレイシフトで帰還させるわ。」

あいあいさー。それと悪魔がくれたこれと召喚プログラムのデータを送ります。

それの中に悪魔の解析データも入つてます。

するとダウインチちゃんが出てきて、

「了解。受け取るよ。これで完全に解析できるかもしない。正直プログラム言語が

見たことも聞いたこともない言語で完全には解析できてなかつたんだー。」

あれ？でも8割解析できたって言つてませんでした？

「うん。できたよ？まあでも文章を見て単語と文構成を少しづつ解読していくつ

結果なんだけどね？」

「うん？ 文章の意味が分かるのに単語の意味と文構成がわからなかつた？」

「そうさ。帰つてきたらプログラムの記述式を見てみるといい。

頭に文章の意味が勝手に湧いてくる。しかも思考言語で。

これは厳密な意味でとは違うけど、統一言語の文字式といつていい。

とんでもないプログラムだぞこれは。作つたやつは天才といつていいだろう。

ともかく、単語がわからないやつもあつたしこれで解析できれば、

フェイトにも応用できるかもしれない。結果を楽しみにしてくれたまえ。

それと、送られてきた物質も解析しないとね。アディオス！」

そういうつてダウインチちゃんは通信を切つた。

「そういうことで、物資が送られるまで待機。」

と所長が締めくくつた。

そのあとレフが、

「それにしても悪魔か。ピクシーとノッカー、デイブクという悪魔にあつたんだね？」

そういつた者たちは魔術世界では幻想種と呼ばれている。

ピクシー、ノッカーは精靈種の「妖精」という分類に入る。

しかし、「妖精」と呼ばれるものすべてがそうではないとはいえ、

自然界の触覚。星の抑止力であるはず。いや、まさかね…。」

そのままかです。とは言えないけども、ちょっとドキリとする。

その時、突然通信がまた開いた。

「おっと、一つ伝えておくことを忘れていた！君たちが持ち帰ったエネルギー物質…、あれを使って稼働する動力装置と、魔石とやらの作用を参考にして作つた、ヒーリングマシンを開発しておいた。物資の中にあるから、ぜひ活用してくれたまえ。」

あ、ダウインチちゃん。あのエネルギー物質マツカっていうそうです。  
悪魔たちの通貨にもなるそうで。

「ふーん、なるほど、りよーかい。ではつたえることはつたえたので。」

また通信が切れた。

しばらく後、レイシフトを通じて物資が送られてきた。

装置をシェルターに組み込んで、早速ヒーリングマシンを使う。

なんだかんだ戦つてるので傷ついたり疲れたりしたのだ。

そして、C4爆弾の準備が完了すると、出発の前に英霊召喚することになつた。

何が起きるのかわからない分、戦力は多いほうがいいためだ。

みんなそれぞれ召喚すると、俺の番になる。

召喚に応じてくれた英靈は…

「問おう。貴方が私のマスターか。」

まさかのアントリア…もとい、アルトリア・ペンドラゴンさんでした。  
はい、俺がマスターです。藤丸立花といいます。お願ひします。

「ええ。この剣あなたに捧げましょう。」

つと、そだ一応状況を説明しておこう。

アルトリアに説明を終えた後、シエルターの入り口に集合する。  
いよいよ探索開始だ。不安と希望を胸に抱きながら外へと向かつた。

# Fate/Grand Order epic of strange journey 5話目

シェルターを出発した俺たちは先ほどの大岩へと向かつた。

道中の悪魔もサーヴァントや仲魔たちと一緒に倒していく。

「やりづらいですね。姿が見えぬ敵とは。」

アルトリアがそういった。直感とわずかな大気のブレから推測して迎撃しているらしい。

少しづつモザイク状のは見えるようになつたが、攻撃の仕方がわからないので、防ぎづらいらしい。

そんなことを話しているうちに、

「ついたぞ。この岩だな。」

大岩についた。

「その先に生命反応がある。少し微弱になつていてるがまだ生存しているぞ。

救出してあげてくれ。C4の設置の仕方は…。」

技術者からの通信で、説明を受けながら説明を受けながらC4爆薬を設置していく。

「おっ？ ちょっと余っちゃつたな。 もうつておこうか。」

と言つてジャックという隊員の一人が起爆装置とC4をしまつた。

「爆発するぞ！ みんな！ 離れてろ！」

起爆したC4は期待通り大岩を破壊し、道ができた。

「やつたぞ！ よし！ これでとおれる！」

——ここからが本当の意味での戦いの始まりだつたのかもしれない。

突如道の向こうから俺たちの前に悪魔が現れた。あれは：オリアス！

その姿を見るととんでもない重圧を感じた。本能があれは危険だと警告している。

俺たちはすぐに銃を構えて発砲した。

そこに敵に向かつてサーヴァントたちが突つ込んでゆく。

俺たちの銃撃をうけつつも、サーヴァントを迎撃する悪魔。

押し込めている、そう思つた瞬間、突如咆哮を上げ、

サーヴァントたちを吹き飛ばした。そして、俺たちに向かつて飛びあがり、

調査隊員の一人が踏みつぶされた。

「え…、あ…！」

一瞬あつけにとられる隊員たち。しかし、我に返ると、オリアスに向かつて発砲していく。銃弾が当たりながらもオリアスは隊員たちを襲つていく。  
2人目、3人目と次々に殺されていく。次の標的はどうやら俺のようだつた。  
オリアスはその大蛇の腕を俺に向かつて伸ばす。

まずい！とつさに俺は手に持つていた大剣を伸びてきた腕に横からたたきつけた。  
なんて重さだ！そう思いながらも何とか軌道をそらし直撃を避けるが、  
衝撃で吹き飛ばされる。

「マスター！」

そこでサーヴァントたちが戻つてきてオリアスを迎撃する。

生き残っている奴らも銃撃を仕掛け、オリアスは不利を悟つたのか逃げ出した。  
何とか生き延びれたが手の震えが止まらない。

それはほかのみんなも同じみたいだつた。恐怖に襲われていた。

「くそつ、くそお！なんだつたんだあの悪魔は！くそつ、手の震えが止まらない……」  
ロマニから通信があつた。

「やられた3人の生命反応は消えたよ。即死だつた。」

重い沈黙と悪魔への恐怖が俺たちを包んだ。

：それでも、

「みんな、行こう。」

俺はそう言つた。

「いこうって言つたつてお前：あいつが怖くないのかよ?!」

「怖い。怖いよ。死にそうなくらいに。だけど、今助けに行かないと救助を待つてゐる人たちが死んでしまうかもしれない。それに、調査を進めて原因を取り除かないと、シユバルツバースが拡大するとどのみち死ぬ。だつたら進むしかない。そうだろ？」

「……くそつ、行くしかねえつてのかよ。」

「そうね、死ぬのはいやだわ。」

そういういつつみんな準備して再び探索を再開した。

死んだ仲間たちの遺体は道に隠して置いておいた。

少しづつ距離を開けて慎重に進んでいく。

しばらく進むと開けた場所に出た。慎重に進んでいくと、何かを発見した。

「それは結界だ！…ということは近くに…。」

結界の中心を探すと、人が1人いた。ジャックが近くによつて声をかけた。

「おい！大丈夫か！助けに来たぞ！」

「うう…た、たすかつたのか？」

「よし！すぐに連れて戻ろう！…危ない！」

ジャックがとつさに救助者を俺たちに向かつて放り投げた。

その時、横からオリアスが現れてジャックを腕で締め付けた。

「フシュウウウウ、人間どもめえええ、皆殺しにしてくれるううう！」

「ぐつ、かはあ!?」

そういうつてジャックを締め付ける力を強めていく。

くそつ！ダメだ！今撃つたらジャックにあたる！

締め付けられていく中ジャックは何かを取り出した。あれは…C4!?

「おい、化け物、これでも…くらえ！」

そしてオリアスにむかってC4を投げつけ、スイッチを押して、爆破した。

爆風はジャックも巻き込み、ジャックは天空へ投げ出され、地面にたたきつけられた。

「ジャック!!」

「待て！マスター！まだやつは生きている！」

見るとオリアスはかなり傷ついていたがまだ生きている。

「グルルルルルアアアア!!! フオオ… フオオオオオオオ!! ニンゲン」ときがあ！

許しませんよお！」

「同感です。私も貴様を許せない！ゆくぞ！」

て

オリアスは傷ついたことで動きが鈍っていた。しかしそれでもかなりの脅威となつ

てこちらを襲つてくる。

腕を振り上げたきつけたり、腕を伸ばしての攻撃により、

地面を割り、壁を壊し、俺たちを殺そようとその攻撃の手を緩めない。

しかし、動きが鈍つていることにより、その威力は俺たちを一撃で殺せるものではなくしていた。しかし、一瞬でも気を抜いたら即座に叩き潰されるであろう。俺たちはその攻撃を避け、防ぎ、オリアスを攻撃していく。

仲魔たち、サーヴァントの攻撃もあつてどんどん傷ついていくオリアス。

しかし、こちらも次々に仲間たちが傷つき、戦線を離脱していく。

そして、

「フシュウウウ！、グルルルルアアア！」

俺に向かつて大ぶりの攻撃を仕掛けてくる。俺はそれを大剣でとつさに受ける。

俺は吹き飛ばされ、地面を転がつた。しかし、オリアスに致命的な隙ができた！

「今だ！セイバー！令呪をもつて告げる！宝具をつかえ！」

「ええ、決着をつけましよう！」

俺の左手にある令呪の一画が消費され、膨大な魔力がセイバーに送られる。

「束ねるは星の息吹。<sup>いぶき</sup>輝ける命の奔流。<sup>ほんりゅう</sup>受けるが良い！『約束された勝利の剣』<sup>エクスカリバ</sup>!! 星の聖剣より放たれる極光がオリアスを飲み込み、消滅させた。

俺たちはジャックのもとに駆け寄つた。

「ジャック！ おい！ 大丈夫か！ しつかりしろ！」

「はあっ、はあっ。ぐつ：。」

まだ息がある。仲魔たちと一緒に治療していく。だけど…、

「バイトルなおも低下中…これは、もう…。」

たすからない。残酷な現実が俺たちにつきつけられる。

その時、ジャックがしゃべり始めた。

「なあ、聞いてくれよ。」

「しゃべるな、傷に響くぞ！」

「助からないんだろ？ いいからさ。…おれはよう、最初にここにきて人類救うために

選ばれたって聞いてうれしかったんだ。

でかい男になれるつて。苦労させてきた母さんに胸張れるような人間になれるつて。ところがあの悪魔どもに殺されそうになつてぶるつてる始末。帰りてえつて思った。

お前のあの言葉を聞いてさ、正直お前がすげえつて思ったよ。

そんでさ、このシユバルツバースが広がつて俺の住んでたとこが飲み込まれるの創造してよ、そつちのが怖いって思つた。ここで全員死んだら誰も地球は救えなくなるつて思つた。そこで、気が付いたらあんなことしてた。」

ジャックは弱つていきながらもしやべることをやめない。

「なあ…、頼むよ。シユバルツバースが拡大したら俺の大事な人たちも死ぬんだろう？」  
人類、救つてくれよ…。」

「わかつた、もういい。だからもうしやべるな。」

「最後に頼みがある…。手を…握つてくれないか？」

「…ああ。わかつた。」

そうやつて両手でジャックの手を握つていると、ジャックの力が抜け、

「…バイタル…消滅。」

死が、告げられた。

救助者の魔術師の人を救助して、ジャックの遺体を運ぶ。

その際、オリアスが落とした物質もひろつておいた。

道中の悪魔たちは残りのメンバーで倒し、シェルターへ運んだ後、

「今度は隠していた遺体を回収した。その後、カルデアからの通信がきた。  
「…まずは、まずはレイシフトで帰還して。」

所長は簡潔にそういった。

俺たちは無言でレイシフトしていく。遺体もすべてカルデアに送られた。  
中央管制室に戻ってきた後、すぐにスタッフが駆け寄ってきて、

持ち帰った物質を渡す。そして、デモニカを脱いだ後、食堂へ向かえと言われた。  
食堂へ向かうと、遺体ができるだけきれいにされて置いてあつた。

どうやら簡潔にだけど葬儀するらしい。所長の冥福を祈る言葉の後、  
全員で冥福を祈る言葉を言った。

葬儀が終わつた後は遺体は急速新設された霊安室に置かれるらしい。  
葬儀が終わると、所長が、

「まずは、よく生きて帰つてくれました。…まだ、疲れているでしようから、  
身体検査を受けて休んで。詳しい話は明日します。」

と言つた。そういう所長もかなり疲れている顔をしていた。

食堂を出て身体検査を受ける。そのあと部屋に戻つて横になつた。  
だけど眠れない。仕方がないので、部屋を出て廊下にあるソファーアーに座り、  
外を眺めていた。するとロマンがあらわれて、

「やあ、藤丸君。……眠れないみたいだね。」

「ええ。……。」

しばらく無言が続いた。ロマンは何もたずねない。

「話、聞いてもらつてもいいですか？」

ロマンは無言でうなづいた。

「……俺、今までこうして手が震えてるんです。目の前で人が死んで、それで、握つてたジャックの手が動かなくなつて、それから、それから……。」

だんだんと自分でも言いたいことがわからなくなつてきた。

目の奥が熱い。鼻がきゅうつとしてきた。

「次は自分の番じやあないかつて、思うと今更怖くなつて、だけど、

ジャックに託されたことがあつて、逃げられなくなつたなつておもつて、  
それから……。」

どうしようもない何かがあふれてくる。目の前がにじんでどうにもならない。

「俺つ！俺つ……！」

その時ロマンが俺を胸に抱いて、

「よくがんばつたね、好きなだけ泣けばいい。」

その言葉の後、俺は存分に泣いた。そして精いっぱい泣いた後、

「ありがとうございます。」

「君の役に立てたのならよかつた。」

「…おやすみなさい。」

「お休み。」

そういうつてロマンと別れ、部屋へと戻った。今度は眠れた。

# F a t e / G r a n d O r d e r e p i c o f S t r a n g e j o u r n e y 6 話目

夜が明けて翌日。

俺たちは司令室へ集まつた。所長は少し持ち直したらしく、昨日よりは顔色がいい。「全員集合したわね。：死んだ隊員たちのことは残念だつたわ。しかし、私たちにはあなたたちしかいない。

いやだといつても私はあなたたちに行けと命令します。

それが命を懸けたものであつても。」

所長をじつと見据える。きっとこの人は自分から

泥をかぶろうとしているのだろう。

いくしかないとわかっていても誰だつてあそこは恐ろしいだろう。

昨日、仲間たちが目の前で死んだばかりだ。

誰だつて死にたくはない。

だけど…、

「行くなつて言われても俺は行きますよ。怖くてしようがないけど、

あいつらの…仲間の死を無駄になんてできない。

託されたものだつてある。」

短くとも共に戦つた仲間の思いを無駄にしたくない。

それに、俺はまだ生きていきたい。それが俺の思いだ。

「…俺もです。」「覚悟は決まつてます。」

「あいつが救つてくれた命、無駄にできません。」

次々と仲間から賛同が上がる。

「あなたたち…。」

所長はふつと笑つて、

「いいわ。では、ブリーフィングを始めます。

まず報告することがあるわ。ダウインチ！」

「はいはーい。お呼ばれになつたダウインチちゃんだ。

まずは技術的な報告といこう。

君たちが回収してくるマツカを調べたところ、

さらに追加で分かつたことがある。

これは魂を構成していることになつて いる。」

まるでそれ以前は違つているように聞こえますね？

「うん。そもそもこんな物質なかつたからね。

まあ、そんな話は置いといて、システム・フェイントと悪魔召喚プログラムのシステムを組み合わせることによつて、マツカによるサーヴァントの強化。マツカによる疑似的な魂食らいができるようになつた。

ほかにも解析と視覚の共有によりサーヴァントも悪魔に対処しやすくなつただろう。

また、デモニカにサーヴァントを出し入れすることも可能だ。」  
マジっすか。周回クエストはよ…はよ！

金払うだけでいいとか最高ですね！

真面目にいうとサーヴァントも戦いやくなつたのはいいな。  
「そしてフォルマだが前にも言つた通り概念の塊…

靈子といつてもいい。これを加工してデモニカを強化できる  
アプリケーションを作つた。

アプリケーションの形で現れる概念礼装という感じかな。  
つまりだ。フォルマを集めることでより有利な状況に持つていける。  
そこで、君たちには今回フォルマを集めてもらいたい。

それによつて今まで閉ざされていた扉を開けるかもしれない。

今回作つたアプリケーションは普段見えなかつた

フォルマを可視化するものだ。これを使つてくれたまえ。

それと私も同行する。」

了解！…あれ？もう6章にまでいつたのかな？

「そしてもう一つ。きみが手に入れてくれたデビルソース。  
あれも概念の塊…あれは悪魔たちが使つていたスキル  
をデータ化したものだ。

悪魔たちは概念という皮にマッカで肉体と魂を構成して成立する。

その皮に組み込むことで書かれているスキルを習得することができる。  
もつとも、すでに出来上がつてゐる皮に組み込むことはできない。

おそらくあと一つ、まだ解禁されていない悪魔召喚プログラムの機能、  
それに使うものだろう。…おおよそ予想はつくけどね。」

悪魔合体か。

「が！それだけではつまら…使い方が限定的なので、

君たちの武器に組み込んだ。それについては後で。

武器の説明のときのお楽しみさ。」

わーたのしみだなー（棒）。

「悪魔召喚プログラムも開けないところ以外は解析終了だ。

ハーモナイザーという機能を調べたところ、

あれは概念強化を付与するということが分かつた。

強化の度合いによつてはサーヴァントにも引けを取らない運動能力、宝具並みの威力を出せるだろう。

AIのレベルアップに合わせてレベルアップするようになつていて、解析機能もここにある。

悪魔の正体を暴き、名のあるものに貶めることで、また、使用者を調律して戦いやしくする。

それゆえハーモナイザーという名前なんだろうね。

私からの報告は以上だ。」

なるほど。

「…といふことで、これより3時間後、レイシフトにより探索を開始します。

それまでに準備と武器の確認を済ませるようにな。では解散。」

司令室を出た俺たちは朝食をとつてシミュレーションルームに行く。

そこにはエミヤたちもいた。

「サーヴァントとの連携も視野に入れた訓練をするらしい。

正直、あんなことがあつたからには後ろにいてくれたほうが  
ありがたいが。」

「ええ。マスターにもしものことがあれば一大事ですから。」

それは、まあ、そうなんだけど。

でも四方八方が敵の場合もあるかもだし、ね？

「その時は私たちが守ればいい話です。

：あの時はふがいなさまをさらしてしまいましたが。」

だからこそ最低限身を守れたほうがいいじゃないか。

いや、アルトリアたちが悪いわけじやない。あれは誰が悪いわけじやなかつた。

「まあいい。それよりも早く準備を済ませてきたらどうだ？」

おつと、そうだね。

デモニカなどを準備しているルームに向かつた。

そして相変わらずそこにはダウインチちゃんが待ち構えていた。

「おつと、来たようだね。それでは早速お披露目といこう。

じやじやーん！これぞ新しい武器、銃剣一体型の複合武器だ！」

すごく…神を狩りそうな近未来的な武器です…。有機的にも見えるなー。（白目）

これ使うのに一生外れない腕輪とかつけませんよね？

まあ、神様も狩る：倒すことになるんだけどさ！

「ここ」をこうすることによつて大剣モードから射撃モードへと移行する。

実は初日の戦闘の後から作つてたんだ。もともと一体型にするつもりだつたんだけ

ど

時間がなくてね。大剣だけ先に作つた。

大剣型とマシンガンじや持ち替えが必要だろ？その隙をなくすためにね。

そして、射撃のほうなんだけど、デビルソースとフォルマを組み合わせることで魔力が打ち出せるようになつた。魔術礼装と同じように魔力を通すだけでいい。テストの結果、単発の威力は保証するよ。

これまで通りマシンガンはサブウェポンとして持つていくといい。そちらも開発する。

いやー大変だつたよ。何しろ君たちが帰つてきてから徹夜して作つたからね。

おや？どうしたんだい？感動の涙かい？」

いえ：それはきっと未来を求めている証の涙です…。

まあ冗談はさておき、可変複合武器というのはとてもそそられますね！かあっこいい

！

「そうだろうそうだろう！いやー、君ならわかってくれると思った。  
では早速試してきたまえ。」

大剣をもつてシミュレーションルームに行き、テストした。

主なエネミーはソウルイーターやイノシシ、アマゾネスたちだ。  
途中、巨大なイノシシが突進してきたのに対し、

足止めしたすきにスライディングして下を通り抜けながら射撃。

もう一人、上を大剣で斬りつけて回転しながら着地していたやつもいた。  
そいつと俺は向き合つてグツ！とサムズアップしあつた。

そこには目に見えない友情があつた。

シミュレーションが終わつた後、可変武器のことをサーヴァントたちにも話すと、  
「…かつこいいな。俺も作つてもらおうかな…。」

というエミヤのつぶやきが聞こえたことを記載しておく。  
その後も、使い捨てのアイテムなどをもらい、準備していく。  
そんなこんなであつという間にレイシフトの時間になつた。

「5, 4, 3, 2, 1, レイシフト開始！」

そして俺たちはまたシユバルツバースへ旅立つた。

無事にシユバルツバースに降り立つと、サーヴァントと仲間を召喚して早速出発だ！

「いらっしゃい。お土産のフォルマ、待ってるからね。」  
あれ？ ダウインチちゃんは行かないの？

「私はこのフォルマ解析装置の設置で忙しいし、君たちが持ってきたフォルマも解析しなければならないのでここで待ってるよ。

ついでにこのセクター全域をもつと詳しく調べられる観測装置も設置しないとだし。」

あ、そういう理由でついてきたんだ。

「持ち帰るたびにレイシフトするわけにもいかないからね。  
そんな魔力リソースも時間もない。

ここにいつたん集約、解析して一斉にレイシフトしたほうが安上がりなのさ。」

それもそつか。じゃあみんな、出発しよう！

俺たちは準備のできたものから出発していく。

固まつて探索するよりも効率いいしね。

セクターントリア内を探索していく。フォルマサーチャーは順調に稼働。

すでにいくつかのフォルマを手に入れた。通つたことある道にもあつた。  
奥へ奥へと進んでいくと、扉があつて進めないところに出た。  
そのフロアにフォルマサーキャーが反応している。

探索して発見したフォルマはデモニカによるとレアものらしい。  
「おーっと、藤丸君。珍しいフォルマを見つけたようだね。

反応がその他のやつとは違う。早速持つて帰つてくれ！」  
ちょっと興奮気味だね。

「なに、未知との遭遇に心躍らせてはいるだけさ。さ、早く早く。」

せかされてしまつたのでシエルターへと戻る。

レアもののフォルマ、フエザーフロックをダウインチちゃんに渡す。  
ところでデータが受け取れるのなら来る必要なかつたんじや？

「いや、この機械とフォルマサーキャーは同期しているからね。  
それのおかげで反応からレアものと分かつたのさ。」

あ、なんだ。

「予備解析の結果は良好。これはレメゲトナイトのときと同じように  
メインアプリを作れるかもしれないぞ。

ああ、メインアプリというのはそのフォルマサーキャーのように

探索、観測自体を行うアプリのことだ。

もしかしたらこれで…。まあ、期待させるのはやめておこう。

それにしてもなぜかレフがレメゲトナイトを見せてくれと言つていたが…なんだつたんだろうね？

それよりも他にフォルマは見つかったようだけど見せてもらえるかな？ふむふむ…なるほど…。これらはアイテムや武器を作れそうだね。

回復の概念や解毒の概念、攻撃の概念のようだ。

ともあれご苦労様。今日はもう終わりにするかい？」

いや、もうしばらく探索してフォルマ（とマツカ）を集めときます。

（特にマツカ）

集めるだけ有利になるんでしょう？

「そうだね。…そうだ。マツカはこっちで預かっておける様にしておいた。

それと今からでもサーヴァントを強化しておくかい？」

そうですね、お願ひします。あと、ちょっとだけ持つていくことにします。交渉用に。

「了解。」

サーヴァントを強化した後、また採集に戻つた。

その後ある時刻で全員が戻ってきてレイシフトして帰った。

翌日は休みとなつて、  
そのまま翌日。司令室に集まると、ダウインチちゃんからアプリが完成したことを告げられた。

早いな！また徹夜したんじや？

「心配」無用。解析自体は早く終わつたし。作るのもそんな手間じやなかつた。  
で、完成したのがこのアンロックA。

今まで入れなかつた扉も解析、解除して入れるようにしてくれる。  
探索が進むようになるだろう。

それといくつかフォルマからアイテムを作つてある。持つて行きたまえ。」  
どうやらダウインチちゃんからは以上のようにだ。

続いてレフ教授からの報告。昨日の観測による報告らしい。

「セクターの天頂部に特別な反応を示す領域があり、そこには量子的なトンネルがある。  
そこはセクター外の時空に繋がる経路の一つのようだ。

そして反応から推測されるシユバルツバースの構造は  
いくつかの時空ブレーンが重なり合つた「多重構造」と予測される。

これは言い換えると、串団子みたいなものだ。団子がセクター、くしが量子トンネル。  
そして、アントリアの地下から、天頂の量子トンネルとつながりを見せる  
エネルギー体が観測された。まるで磁力線の極と極のようなつながりだ。  
このエネルギー体を解析することで次のセクターも観測できるかもしない。  
地下を調査、エネルギー体を持ち帰つてきてくれ。」

「というワケであなたたちの次の任務はこれよ。

1時間後にレイシフト。それまで待機。以上、解散。」  
司令室から出て準備をしていく。準備が終わつてレイシフト。  
少しづつ慣れてきた。

後はシエルターで最終チェックして出発だ。

俺たちは道への扉を開きに出発するのだつた。

## 小ネタ集

### ある日のくろひー サブミッション・黒ひげを追え！

シユバルツバースの探索が進み、次のセクターへと通じる量子トンネルを解析しているところ、新たに召喚していた黒ひげ、エドワード・ティーチが、何やら怪しげなことをしていると、

通報があつたのでこつそり後をつけ、何をしているのか突き止めることになった。黒ひげは何やらあたりを見回しながらボーティーズの中を進んでいく。

周りに悪魔が多いから進みずらいな…

おつと、すみません。…ちょっと！謝ったでしょう！すみませんでしたって！通してください！急いでるんです！

え、ちよ、ま、へぶあ！……やろう！ぶつ殺してやあー！

まつたく…。突つかかつてきた悪魔をどうにかお話して黙らせると、黒ひげの後を追う。どうやらばれていないようだ。

黒ひげは人目の付かない道を進んでゆく。こんなところに道があつたのか。

どうやつて知つたんだあいつ？進んでいくにつれどんどん人通り：いや、悪魔通りは少なくなつていく。どこまでいくんだろうか？

と、黒ひげが止まつた。きよろきよろあたりを見回した後、

怪しげな館へ入つてゆく…。どうしようか？

思い切つて何をやつているか突き止めるため潜入することにする。

デモニカの中にあつた、気配を隠せるアプリを作動させ、こつそりと侵入する。

え？ なに？ 追跡のときも使えばよかつた？ ぶつかつたりすると効果きれるんだよ。

それに消費リソース高いし。音を消すのは使用してたけど。

侵入した館の内部は一言でいえば真つ暗闇だつた。

このままでは何も見えないので俺はダークスキヤナを起動し、内部を探索してゆく。

うおつ、アブね！ ラップが仕掛けである！

トラップを回避した時、アラームが鳴つた。作動したことばれたか！

そして、どこから声が聞こえてきた。

「デュフフフフフ、おやおや？ マスター奇遇ですなあ、

こんなところになんのようがあるのですかなあ？」

これはお前の仕業か黒ひげ！ こんなところでなにをしているんだ！

「ん、それはですな、ひ・み・つ。知りたかつたらトラップを潜り抜けて  
たどり着いてみせるのですなあ！ま！たどり着けたらの話ですけどね！  
デュフフフフ！」

そういうて声は聞こえなくなつた。やろう…こうなつたら何が何でも突破してやる  
なんか途中おかしくね？

そこからは苦難の連續だつた：落とし穴、落ちてくる天井、鉄球が転がつてくる坂、  
落ちたら燃え盛る炎に真っ逆さまな鉄骨渡り、  
時間制限のある、アトラクションを超えてカギを取つて来ないといけない扉：

そのすべてを突破してなんとか黒ひげがいるであろう部屋にたどりついた。  
観念しろ黒ひげ！

そういうて扉を開けた先にあつたのは、部屋中にポスターが貼られ、  
フィギュアが所狭しと並べられ、同人誌とえろげーが山のように積まれた、  
いわゆるオタク部屋であつた。しかもかなり暗い。

なんだこれは、どういうことなのだ！

「おうつと、ここまでたどり着いていましたかマスター！」  
黒ひげ！ここはいつたい？

「デュフフフフフ、その前に紹介したい人が…出番ですぞ、ルツキー！」

黒ひげがそういうと、どこからともなく怪しい人物…悪魔？が現れた。

「フハハハハハハ！俺！参上！愚民どもよ！ひれ伏すがよい！」

うわあ、また濃い悪魔が現れたなあ。で、この人だれ？

「俺の名前を聞いて恐れおののくがいい！我が名はルキフグス！魔界の宰相だ！」

ルキフグス？かなり大物悪魔じやないか！黒ひげお前どうやつて知り合つたんだ？

「いやあ、ボーティーズでファイギュアを買いあさつてた際にばつたりと。

同じファイギュアを求めて争つて友情を築いたわけですなー。いわばオタ友。」

そうなんだ。じゃあ、この部屋はルキフグスの？

「そのとおり！俺が経済を回すのに合わせてあたふたする愚民どもを

見ながら楽しんだりお宝を観賞するための部屋よ！」

うわあ性格悪いなあ。

「彼、部屋からなにもせずに経済まわしたり、働かなくても勝手にかなりの額の金が手に入るシステム構築してますからね、たまーに働く程度です。

いわばだいたいネオニートつてやつですな。」

「ふははは！友よ、そんなに褒めるな。照れるだろう！」

褒めてたのあれ？

「それと、貴様、その金のバケツをかぶつたおまえだ。さつきのは映像で見ていたぞ。

お前の必死に足搔く姿、最つ高の見物だつたぞ！ふははははははは！あはははははははははははは！はーつはつはつはつはつはつは！」

「ちよつ、ルツキー、悪いってそんなに笑つたら！」

まあ、拙者もあれは大爆笑したんですけどデユフフフフフ！」

かなりイライラがたまつてくる。こいつらを今すぐぶん殴りたくなるほどに。「ん？まだいたんですか？拙者たちこれから鑑賞会始めるんですけどー？」

ほら、邪魔だからあつち行つて。ほら、しつしつ。」

「そうだ。もうお前に用はない。ほら、さつさと出て行け。」

ぶ  
ち  
ん。

返せ！俺の苦労を返せ！俺の時間を返せ！

もはや我慢の限界だつた。俺は構わず銃をぶつ放した。

「ちよ、おまつ、やめ、「

「うぎやあああああ!! 黒ひげ死すとも萌えは死せずー!!」

気が付くと、黒ひげとルキフグスは消滅していた。

疲れた。もう帰ろう…そして休もう…俺はそう決心した。

多分、いつか起ることもあるんじゃない?というよ  
なこと

その日、カルデアの内部はいつもと同じであつた。

もちろん、人類の滅亡を回避するため、慌ただしく、緊張感はあつたが。  
穏やかで、楽しく会話したり。休憩をもらい、趣味に興じたり。  
そこには日常があつた。それはこの後も変わらない。

——あの出来事が起きた後も。

カルデア指令にして所長のオルガマリーは、その日も司令室にいた。  
いまもなおシユバルツバースで探索、調査を行つて、  
シユバルツバース調査隊がいるからだ。

彼らが命懸けで調査しているのに、所長である自分が休んでいるわけにはいかない。  
そういう思いで司令室に立っていた。

そんな彼女に技術者にして、最も信頼できる相手である、レフ＝ライノールが話しか  
ける。

「マリー。ここは私が見ておくから君は少し休んでおきなさい。

あまり根を詰めすぎるのもよくないぞ。」

「ありがとう、レフ。だけど私がここを離れるわけにはいかないわ。

ここで待つことしかできないけど、命がけで戦っている彼らに何かあつた時、そこにいなくて後悔したくないもの。」

「マリー…。君がそういうのなら止めないさ。

それなら、何か飲み物でも持つてくるとしようか。」

「ありがとう、レフ。お願ひするわ。」

そういってレフが退出していく。

今日も彼らが無事に帰つてきますように。そう祈つていると、

突如としてカルデアに警報が鳴り響いた。

慌てる職員たち。そこに所長の声が響く。

「落ち着きなさい！何があつたの？！」

職員の一人が返す。

「ト、トリスメギストスに何かの干渉を受けています！

干渉元を現在特定中！……そんな！」

「落ち着きなさい！干渉元は？」

「か、干渉元は…干渉元は、カルデアスです！」

「な、なんですつて…!?」

「どこからともなく声が聞こえてくる…。そして、モニターに映像が流しだされた。

「このままシユバルツバースの拡大に飲み込んでしまえば簡単だが、

少々目障りになつてきたのでな。消えてもらうぞ…！」

「力、カルデアスは地球環境モデル。地球の魂を複写することによつて作られたもの！

それを利用して…！」

「!? 現在カルデアの周辺に亜空間が発生！ 地表から切り離されていく!?」

「レイシフトを繰り返したことによつて座標を特定されたんだ！ くそつ！」

「カルデア座標、シユバルツバースに接近中！ このままで

プラズマ雲に突っ込みます！」

次々と上がる絶望的な報告。その中でオルガマリーは、

「職員全体に通達！ 今すぐ中枢部に集合！ 確認後、全隔壁を展開！

突入に備えて！ 少しでも生き残る確率が高い方法を選ぶのよ！

それと、直ちに調査隊を帰還させて！

必死に指示を出していた。

そこにある人物が司令室に入室する。

「こんなこともあるうかと、カルデアに防御フィールド装置を取り付けておいた!  
それをつかうんだ!」

「ダウインチ!また勝手なことを…。今は感謝します!展開!いそいで!  
防御フィールドを発生させたカルデアが引き寄せられ、  
シユバルツバースに引き込まれていく。

「あと5分で突入します!」

「総員!衝撃に備えて!」

「後、5、4、3、2、1!」

カルデアがシユバルツバースのプラズマ雲に突入。そのうちに内部亜空間へ  
突入していく。

つよい衝撃の後、カルデアはシユバルツバース、そのうちのセクターントリアへと  
着陸した。

「…つう、全員無事?被害状況を報告して。」

「カルデア、一部損傷のほかは軽微。ですが、プロメテウスの火が停止。」

「なんですか?すぐに復旧にとりかかるつて!」

「ですが肝心の燃料が…」

「…!」

魔力リソースが足りない。それはここでは望むべくもなかつた。  
しかし、

「それならあてはある。マツカだ。幸いマツカを燃料にして発電するやつは作つたもの  
がある。それを使えばいい。」

ダウインチの言葉に、

「よし！ではすぐに切り替えて！防御フィールドを優先的に発動！  
悪魔の侵入を防いで！続いてトリスマギストスの復旧！」

「了解！」

「それと………」

オルガマリーは迷つた。それはともすれば父への裏切りになるのだから。  
だが迷つた末決断した。

「それと今後、カルデアはシユバルツバース部を残し破棄！  
余剩リソースを他へ回して！」

「……了解！」

こうしてカルデアはシユバルツバースへとらわれた。  
これよりカルデアはさらに追い詰められていくのであつた。

## 流星・時を超えた出会い。

時は紀元前1万2千年。

天の川銀河に彗星が近づいていた。その彗星の名はヴエルバー。  
異星人たちが作つた観測装置である。

おや？ ヴエルバーから何かが発射されたぞ？ まっすぐどこかへ向かつていくようだ。  
向かう先に見えるのは…あれは我が故郷、地球です。

なんということでしようこのままでは地球に落ちてしまいます！  
しかし、発射された3つの何かは地球ではなく月に落ちました！

ああ、よかつた！

おや？ 今度は月に刺さつた3つの何かから何かが地球に投下されたぞ？  
ああ！ あれはセファール！ 文明の破壊者です！ なんということでしよう！

ヴエルバーが発射した3つの何かは捕食遊星ヴエルバーの尖兵だったのです！  
そのうちのヴエルバー02、破壊のコンセプトでデザインされたアンチセルが  
マテリアルボディを形成し、地球の蹂躪を開始したのです！

ああ、なすすべもなく文明と、人類と、その庇護に回った神々、  
他天体からの降臨者たちも含めて蹂躪され、破壊されていきます…

唯一残つた文明は神々が命乞いをしたメソポタミアだけ…

これからどうなつてしまふのでしょうか…

……おやおや？ 何かが地球から生まれました。

これは…聖剣です！ 星が聖剣を生み出したのです！

やつたあ！ 聖剣を使い、セファールに致命傷を与えました！

セファールは傷ついた状態で砂漠を歩いていきます。あつ倒れました！  
どうやら力尽きたようです！ 人類は救われました！

しかし、残された傷はとても大きいです：復興には時間がかかるでしょう…

と、その時、地球に何かが降臨してきました。

これは後に「大いなる存在」とよばれるものです。

「大いなる存在」は、魂を回収することが仕事です。

「大いなる存在」は人類が衰退しているのを嘆きました。

地球の人類の文明が破壊されていることは「大いなる存在」にとつても  
不都合です。人類が繁栄していないと魂の収穫量が大幅に減ってしまいますから。  
そこで人類のメソポタミア以外に文明をもたらしました。

ありがとう「大いなる存在」。崇拜します「大いなる存在」。

そして1万2千年後になつたらまた来ると言い残して地球を去つていきました。

そして：

時間にルーズな「大いなる存在」うつかり宣言した時より2千年遅れて  
地球上向かっています。

そこへ、天の川銀河へむかうヴエルバーが。

こんにちわ、どちらへ行かれるのですか？と、「大いなる存在」

天の川銀河です。地球上用がありますと、ヴエルバー

そうなんですか、私もなんですよ。何しに行かれるのですかと、「大いなる存在」  
人類に用がありましてね。そちらは？と、ヴエルバー

えつ、……私は人類の魂の収穫です。と、「大いなる存在」  
えつ、……そうですか。と、ヴエルバー

ここに至つて、お互いが商売敵だと気づきました。

もはや言葉は不要。あとはこぶしで決めるのみ。

そう悟つた二柱の迷惑な者たちは戦い戦い戦つて、

お互いに傷ついて、このままでは共倒れになつてしまふ。と思いました。

そこで捨て台詞を吐きながら、両方とも撤退していきました。

こうして人知れず人類の危機は救われたのです。めでたしめでたし。

# しん・めがみてんせい えくすとら

その日も町は平和だった。

西欧財閥のもと、徹底した秩序と平和が約束された管理都市。その男は労働階級であり、その日も1日しつかりと働き、愛する家族の待つ家へと帰るべく家路についていた。こんな日常が続くはずだった。

街中で突如爆発が起きた。そののちに銃声が鳴り響き、悲鳴が上がった。何が起きたのか、それは過激派テロ組織によるテロだった。

悲鳴を上げ、人々はテロリストたちから逃げ出していく。何人かは背中から撃たれた。

あちこちで火の手が上がった。

騒ぎを聞きつけた鎮圧部隊が駆けつけてきた。

テロリストたちは武装しているとはいって、数が違う。すぐに鎮圧されるだろう。そう思い、巻き込まれないように男はすぐさまその場から離れ、避難を開始した。しかし、現実は違った。

異変が起きた。テロリストたちは何やら電子機器を操作し、何かを起動させた。するとその場に異形の怪物が現れた。

対峙していた鎮圧部隊に動搖が走る、がすぐさま怪物に向かつて発砲を始めた。

次々と弾が怪物にあたる。が、まるで怪物は意に介さず、鎮圧部隊へと接近する。

「くそつ、なんなんだこいつは！じゅうがききやがらない！」

「おい！もつと火力のあるの使え！」

鎮圧部隊の一人が、グレネードランチャーを使い、手りゆう弾を射出した。

怪物にあたり、爆発。爆風が巻き上がり、あたりが粉塵に包まれる。  
部隊から歎声が上がる。

「よし！」「やったか？！」

そのとき、粉塵の中からにゅうつ、と手が伸び部隊員の一人をつかんだ。

怪物は生きていた。そして、そのまま持っていたものをつぶし、口に放り込んだ。

「うわ、うわああああああああああああ！！」

恐慌状態に陥り、効くはずのない銃を怪物に乱射する部隊。

次々に鎮圧部隊は殺され、食われていく。

「よし！いいぞ！そのまますべてくらい、力に変えろお！」

我々の正義をなすために！」

テロリストの一人がそう叫ぶ。

その時、怪物がにやりと笑い、怪物を召喚したテロリストを叩き潰した。

「なつ！」

あたりに鮮血と人間だつたものの臓物が飛び散る。

テロリストたちに動搖が走る。制御されていたはずじやないのか。

「き、貴様！ 裏切るのか!?」

「ウラギル？ オマエタチハハジメカラエサダ。ツゴウノイイヤドヌシダツタノサ。」

怪物は待つっていたのだ。人間と契約し、力をつけ、人間界に単独で顕現できるようになるまでを。

そうして今度はテロリストたちを皆殺しにした。

そして…その悪魔の後ろの空間がゆがみ、そこから次々と「何か」が現れ出た。

それはつぎつぎとどこかへ飛び去つてゆく。

「サア、クラエ、ジュウリンシロ。」

怪物はそういつて次の獲物を探しに行つた。

次の異変は逃げ出している人々に起つた。

逃げ出している途中、突如苦しみだし、うめき声をあげ倒れる人が出た。  
逃げている人間のうちの一人が、

「だいじょうぶか!?」

と近寄つて声をかけた。しかし、

「ううう、ああ、うああああ···」

と声にならない声を上げるばかりだつた。苦しそうな声は次第に大きくなり、  
やがて悲鳴のようなものに変わつていく。

「ううああああ···！うあ、うああああああああああ!!!!!!」

その男の体に異変が起きた。突如体が歪に膨らみ、人の形から離れていく。

そして異形となつた存在は近くにいた人間に襲い掛かり、その上半身を食らつた。

「うわっ、うわああああああああああ!!」

あちこちで悲鳴が上がる。見ると同じように異形と化した存在が次々と現れている。  
そして人が食らわれていく。

人を異形へと変わつていく姿はまるで「悪魔」に取り憑かれたみたいだつた。

人々は一層混乱し、異形から逃げるため、無秩序に逃げまどつてゐる。

鎮圧部隊は既にやられてしまつたのだろう。

守つてくれる存在がないと知つた人々は恐怖に駆られていた。

町は破壊され、燃え、異形が闊歩して人々は次々に食らわれていく。  
そこはまるで地獄だった。

男は、家に残してきた妻子が心配になり、妻子を逃がそうと家へと駆ける。  
そこらじゅうでうめき声が上がり、助けを求める声が聞こえる。

その中を突つ切り、家へとたどり着くと、妻子を呼んだ。しかし返事がない。  
家中へと進み、子供と一緒にいる見慣れた妻の後姿を見つけ、

男は安心し、声をかけた。

「ああ、よかつた。おい！外は大変なことになってる！早く逃げるぞ！」

「あなた。いってらっしゃい。」

何を、ふざけているのだろうか、

「何を言つてゐるんだ。お前も一緒に逃げるぞ！」

「はいこれ、お弁当。」

「は？な、何を言つてゐるんだ…。」

そこで妻が振り向いた。子供いつしょに。

その姿は子供と肉でつながつた異形となつていた。

「パパ！お帰りなさい。」

「パパ！お帰りなさい！」

異形となつた子供の声が発せられる。

異形となつた妻子はこちらを見ると少しづつこちらへと進んできた。

「今日のお弁当はこれよ。」

「パパ！遊んで！」

まるで生前をなぞるかのように声を発しながらこちらへ向かつてくる異形。

男は腰が抜け、悲鳴を上げながら後ずさる。

「ひ、ひつ、ひつ……！」

訳が分からぬ。なぜこんな目に、これは夢なのか、であるなら早く覚めてほしい。

そんな思いを抱きつつ、男は妻子から目を背けられないまま、後ずさるしかなかつた。

「ねえ、今度のお休みは一緒に出掛けない？」

「パパー！連れてつてーー！」

録音テープのように声を発しながら少しづつ距離を詰めてくる異形となつた妻子。

その時、

「伏せて！」

と声がして、同時に銃声が鳴つた。

見ると、金髪の少女が銃をもつて異形へと発砲していた。

次々と弾は当たり、異形の肉ははじけ飛んでいく。

悲鳴を上げ、異形は脅威を取り除くべく触手をはやして、鞭のようにして少女にたたきつけた。

「つ……！」

触手をしゃがんで避けた少女は、体勢を立て直すと、「こんの……これでも食らいなさい！ ジオンガ！」と叫んだ。すると、少女から電撃が光とともに迸り、異形を貫き、焼いていく。

異形は悲鳴を上げ身をよじる。

「くそつ、まだ倒れないか。なら今度はこれをお見舞いしてやるわ！ アギダイン！」

灼熱の炎が上がり、異形を焼き尽くしていく。今度こそ異形は動くことをやめ、物言わぬ肉塊へと成り果てた。

「やつと倒したか…。ねえ、あなた大丈夫？ 怪我はない？」

突如現れた少女にそうたずねられた。その時、ぞろぞろと武装した男たちが入り、少女に声をかけた。

「おい嬢ちゃん！ あまり突っ走るな！」

「悪い。けどこんな状況よ、じつとしてらんないわ。」

男たちと少女が会話している。

「それより、どこの誰がこんな事してかしたのか分かつた？」

悪魔を都市部に放つなんて！」

「ああ、魔術協会の再興を目指してた連中だ。

だが悪魔を制御できずに殺されちまつてた。」

「そう。それでその悪魔は？」

「今討伐した。しかし、その前に呼び出した悪魔どもが人間に憑きまくつて正直手が足りない。」

「わかつた。すぐそつちに向かうわ。だれかこの人を避難させて。」

と、その時無線が飛んできたらしく、会話をし始めた。

「こちらリン。ええ、ええ…、なんですって！」

「どうした、嬢ちゃん!? なにがあつた?」

少女は男たちに向き直ると、

「今すぐ救助できる人たちができるだけつれて町から脱出するわよ！

西欧財閥がこの都市に向けて核ミサイルを発射したわ！  
町ごと悪魔を焼き払うつもりよ！」

「なんだつて！」

「そこまでしても悪魔のことを知られたくないみたいね。

とにかく、あと一時間でここに着弾するわ！ 急ぐわよ！」

「ああ！」

そういうつて少女たちは出ていく。男が一人残つて、

「ほら、大丈夫か？どうした、悪魔を見つめて…。…そうか、この悪魔は…。

つらいだろうな。だがここにいても死ぬだけだ。ほら、行くぞ。」

と言つて、こちらを立たせた。

そして、男に連れられて、街を進んでゆく。止めてあつたバスに乗せられ、待つていると次々と避難する者たちが載せられてゆく。

10分は立つただろうか。少女が乗つてきて、

「ごめん、ちょっと遅れた！」

「遅いぞ！早く脱出しねえと間に合わなくなる！さつさと乗りな！」

少女が乗り込むとバスを急発進させる。

街を全速力でかけていく車。20分ほどで街を脱出し、その後も道をかけてゆく。そして、30分ほど後、集合地点である小高い丘に止まつた。

男がバスを降り、街を振り返ると、ちょうどそこにミサイルが着弾。

光が街を包み、消滅してゆくところであつた。

ここまで届いた爆風の余波が男をなぜる。

少女たちが話す。

「生き残っているのはこれだけか…。」

「気に病むな嬢ちゃん。あんたのせいじゃない。あの正義を掲げて馬鹿なことをした

馬鹿どものせいだ。」

「…そうね。これだけ助けられただけでもよしとするか。」

「ところでこいつらはどうする?」

「私たちのキャンプに避難させましよう。悪魔のことを知つてしまつたからにはもう西欧財閥のいるところにはいられないでしようし。」

少女たちはそんなことを言つてゐる。

男はようやく理解し、そして現実を受け入れ始めた。

そして…、

「ふざ…るな…。ふざけるな……！」

うつむき、涙を流しながら、そんな言葉を出し始める。

「なにが正義だ…！何が悪魔だ…！ふざ…けるなあ！

ふざけるな——!! ふざけるなあ——!! バカヤロ——!!!!

ちくしょう！ちくしょうお———!! ふざけるな———!!!!

!!!!」

顔を上げ、慟哭し、涙を流しながら、どうにもならない現実を、正義を掲げ妻子を異形に変え殺した者たちを、そして、何もできない無力な自分を呪つた。

「返せ！返せよ！俺の妻を！俺の子供を！返せー！返してくれよー！！」しばらく泣き叫び続けた。そして、

「なあ、あんたら。」

少女たちに声をかけ、

「あの化け物たちは何なんだ？」

「あれは悪魔。マグネットイトと呼ばれる物質で構成される、超自然的な存在よ。」「どうやつたらあいつらを殺せるんだ？あんたら知っているんだろう？」

「ええ。でもそれを知つてどうするつもり？」

「決まつてる。もうこんな悲劇起こしてはならない。この手で止めてやる！」

復讐する対象を失つた男はせめてこんな悲劇を止めたいと、

自分のような人間が生まれるのを防ぎたいと願つた。

それが精いっぱいの慰めだつた。

「そう…、それならいいわ。ついてきなさい！あなたを鍛えてくれる場所に送つてあげる。」

そうして男はレジスタンスに参加した。もう一度とこんな悲劇を起さないために。

# Fate/EXTLA ダンシングオールナイト

どこかにある平行世界、月にある聖杯をめぐる戦い、

聖杯戦争が行われるはずであった世界。今はまだムーンセルによる生存トライアルが行われているだけの世界。今まさに、トワイズ・H・ピースマンが熾天の玉座へと至り、

聖杯戦争のルールが作られ、生存トライアルが姿を変えられようとしていた…！  
「これで聖杯戦争の骨子となるルールはできた。あとはこれを適用するだけだ。

聖杯戦争ができたのならば、あとは待つだけ。

ああ、やつとだ。さあ、早く来てくれよ、聖杯戦争の勝者。

最も素晴らしいマスターよ。」

トワイズは最後の引き金を引いた。そして、生存トライアルは聖杯戦争へと姿を変えていく。

——だがしかし、この時、神のいたずらか、とある致命的なバグが紛れ込んでいた。  
それはとてもなくしようもないが、ともすればトワイズの目的を破綻させるものだ。

——それは……

「な!?なんだこのプログラムは!?やめろ！やめてくれ！くそっ！  
インストール中止……出来ないだと!?なんてことだ……！」

無情にもインストールは進んでいく。世界は書き変わっていく。  
それは、時が止められないのと同じように思えた。

「やめろおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

そんな悲痛な叫び声は届かず、世界は、完全にその在り様を変えた。

違和感に突き動かされるままに転校生、レオの後を追う。

男子生徒と話を終えたレオが壁に手をかけて、その場から消える。

男子生徒も後を追うようにして壁に手をかけて、吸い込まれるように消えた。  
彼らが消える瞬間、ジジツ、と視界のノイズが強くなり、脳幹に衝撃が走った。  
これは一体……どういうことだ？

ここが……違和感の終着点なのだろうか。

自分もまた、彼ら同様、吸い寄せられるように壁に手をかける。

そうだ、ここが終着への出発点。真実を、この違和感のもとを一。

真実に目を凝らした。空気が変わると同時に扉が現れた。

この扉の向こうには自分がるべき場所があるのだろう。扉の向こうに足を踏み入  
れた。

扉の向こう、異界への入口と呼ぶのがふさわしい場所に、  
つるりとした肌の人形ドールがあつた。

これは、この先で自分の剣となり、自分の盾となる。

どこからともなくそんな声が聞こえてきた。

何がわかつたわけではないが、何をすればいいかだけは示された。

この先に違和感の正体があるのだろう。

ともかく、奇妙な人形の従者とともに先に進むとしよう。

にしてもこの人形つるりとしている割になんかやたら肉々しいというか、  
やたら装飾過多というか。本当に剣と楯の役割を果たせるのだろうか?  
どちらかというとこれMMDとかで踊らせる奴じやないのか?

顔がシンメトリーでツインテールで、ネギ持つてどう見てもはつねえ!です。

ほんとうにありがとうございました。

剣と盾という割に本当に戦えるのか疑問しかわからない。

……ためしに踊らせてみようか。

踊れと指示してみたが動かない。どうしたことだろうか？  
無表情でこちらを見つめるだけだ。

次は手を挙げろと指示してみた。これはちゃんとした。

もしかしてこれは具体的な指示が必要なのだろうか。

くるつとターン！という指示にもしつかり聞いた。どうやらそのようだ。

もしかしたら喋らせるることもできるかもしない。

少し悩んだ末に、ご主人さま、としやべれと指示すると、

抑揚のない、しかしどもきれいな声で指示したとおりに、

「（ご）主人さま。」

としやべった。思わずうんうんとうなづいた。どうやらしやべれもするらしい。

どうでもいい事実が判明したところで先へと進む。

そこは学校の面影など微塵もない場所だった。ここを形容するのなら、地下迷宮とい

う言葉がぴったりだろう。

どこからともなく聞こえてきた声に導かれるままに進んでいくと、

ダンジョン

なにやら人型の今度こそそのつペらぼうのマネキンが現れた。

「それは敵性エヌ・プログラムだ。君に敵対行動をとるようにできている。バトル！と叫ぶとすぐダンスバトルになるだろう。」

……なんですか？

「ダンスバトルになるだろう。」

大事なことなので2回（r

ちよつと待て！うすうす気づいていたけどなんでダンスバトルなんだ！

というよりダンスバトルってなんだ！勝敗の基準は？

「それは実際にやつてみるとわかるだろう。……まあ、実際に踊るのは君ではない。先ほど与えた人形だ。君にいきなり踊れと言つて無理だろう？」

それにダンスバトルなのだから見目美しく声も美しいものでなくてはね。」

後半だいぶ余計なひと言混じりませんでした？

…とりあえず避けて通ることはできなさそうだ。であれば言うしかないだろう。

「バトル！」

そういうと目の前のマネキンは動き出し、音楽が流れ出した。

「まずは説明しよう。こういうモブのエネミーに対しては、スペースチャンネル5……といつてわかるかな？」

あ、はい、大丈夫です。やつたことあるんすね、チャンネル5。

「……ともかく、それと同じように、敵の動きを記憶し、音楽に合わせて

アップ、ダウン、ライト、レフト、決めポーズ。この5つの動作を返すんだ。」

見ると敵はもうすでに踊りだしている。最初のほう見忘れた……！

「…ダウン、ライト、レフト、チュツ、チュツ、チュツ！」

ええと、ダウン？、ダウン、ライト、レフト、チュツ、チュツ、チュツ！

「……もし間違えた場合、ペナルティが発生する。十分気を付けたまえ。」

どうやら最初を間違えていたようだ。不快感に襲われ、力が抜けていく。

それは生命力の喪失のようだ。大量に血液が流れていくみたいだつた。

これがペナルティか…！

「間違えすぎてライフを全て失くしたらそれは君の死を意味する。注意したまえ。」

なるほど、身をもつて実感した。今度こそは間違えない！

今度は敵の動きを見誤らず、全て正確にトレースして踊らせた。

すると、なんか敵がダメージを受けて消滅した。

「どうだね？ ひとまずはエネミーとの闘い方だけわかればいい。  
それさえ理解していれば、あとは経験を積むだけでいい。

……さて、ゴールはまだ先だ。勝利の余韻に浸るよりも、足を前へと進めたまえ。」

声の言う通り、進んでいく。途中エネミーが何体か出てきたが、全て撃破。  
それぞれ違うジャンルの音楽だつた。いろんなテンポの曲が流れた。

—そしてたどり着いた。息苦しさすら感じる莊厳な空間。

今は失われた、聖霊の宿る場所、ここがゴール。そう思えた。  
そこに誰かが倒れていた。

顔を確認すると——先ほどレオを追つていった男子生徒だ！

声をかけてみるが、返事がない。ゆすり起こそうと体に触れ、気づく。  
—冷たい。

目の前の事実に体の血が引く感覚を覚え混乱する。

そのときだつた。

彼の傍らに倒れていた、こつちと同型の人形が立ち上がつた。なんどかエネミーと戦つた今ならわかる。あれは敵だ。

人形はこちらを指差したかと思うと、

「ミュージックスター。」

そういうとどこからか音楽が流れ始める。そして、目の前の敵は歌い始めた。  
どういうことだ…？

「目の前の存在が歌い始めたらそれはダンスバトルの始まりだ。

それは歌に合わせて攻撃を放つてくる。

見極めて指示することによつて回避するのだ。そして隙をついて決める！  
いきなりそんなこと言われても。ああ！人形が攻撃を受けている！  
くつ、ライト、レフト、アップ！だめだ！動きが見極めれない！

次々に攻撃を受けた自分の人形は破壊されてしまつた。

体から生命力が失われてい…く…。

そしてその場に倒れこんだ。

「ふむ、君もだめか。」

遠く、声が聞こえる。

「そろそろ刻限だ。君を最後の候補とし、その落選をもつて今回の予選を終了しよう。  
—さらばだ。安らかに消滅したまえ。」

声はそう言い放った。

否定する力もなく、ぼんやりと床を見つめるコトしかできない。

……このまま死んで行くのだろうか。

突然霞んだ視界に、いくつもの土色の塊が浮かび上がった。  
それは、月海原の生徒たちだった。

ここまでたどり着き、しかし、果てて逝つた生徒たち。

……自分も間もなくその仲間入りをするのだろう。

このまま目を閉じてしまおうか。やれることはやつた。

もう終わりにしてもいいのかも知れない。

本当に？

：諦めたくない。そう思つて起き上ろうと体に力を入れるが、  
体中に激痛が走り、まったく動かない。

—それでも、まだ諦めない…！

このまま終わるのは許されない。

体中をめぐる痛みはもう許容外の感覚だ。全身を裁断されるような痛み。

恐い。

痛みが恐い。

感覚の消失が恐い

先ほど見た死体と同じになることが恐い。

そして。無意味に消える事が何よりも恐ろしい。

ここで消えるのはおかしい。とノイズにまみれた意識が訴える。

ここで消えるなら、あの頭痛は何のために、彼らは何のために。

一立て。恐い今までいい。痛い今までいい。その上で、もう一度、考えないど。だつてこの手は、まだ一度も、自分の意思で戦つてすらいないのだから――！

一聲が、聞こえた。

そして、ガラスの碎ける音がして、ともに部屋に光がともつた。

軋む体をどうにか起こし、頭痛に耐えながらあたりを眺める。

部屋の中央には、いつの間にか、ぼうつと何かが浮かび上がりつつあつた。

その姿は―。

外見はほとんど普通の人間と変わらない。だが違う。明らかに。

ここへ来るまでに出会つた敵などとは比べ物にならぬ程の、人間を超えた力。

触れただけで蒸発しそうな、圧倒的なまでの力の滾り。  
それが体の内に渦巻くのが、嫌でも感じ取れる。

かくして、予選を突破した岸波白野は月の聖杯戦争を勝ち抜いていく――

「なるほど。歌とダンスバトルか。余の独壇場だな！ぼえー！」

「え？ 歌とダンスバトル？ 英靈をなんてことに使ってんですか!? ムーンセルは!?」

「は？ 歌とダンスバトルだと!? ちょっと待て、そんなことのためには呼ばれたのか私は!?  
ムーンセルは一体英靈を何だと思つてるんだ!?」

「余の歌とダンスに見惚れるがよい！ 我が才を見よ！ 万雷の喝采を聞け！ インペリウム  
の

誉れをここに！ 咲き誇る花のごとく……開け！ 黄金の劇場よ!!

アエストゥス・ドムス・アウレア  
招き蕩う黄金劇場！ 余のステージであるぞ！

アンリミテッド・ブレイドワークス  
無限の剣 製！……ついてこれるか？

「それじゃ、ウズメちゃん仕込みのダンス、見せちゃいます？」

### パートナーとの会合

「ルールはもう一つある。英靈との闘いでは、それぞれが互いに一曲づつ歌つて踊り、そのダンスの美しさ、声の素晴らしさ、相手との対比によつて評価を下す。つまり、相手に合わせた選曲も、自分を貫く選曲もありだ。

勝負は全部で三回。つまり、3曲歌つて踊るのだ。」

「ダンスは苦手なんだけどねえ。」

「そんなこと言つてる場合か！いいから指示したとおりに踊つてればいいんだ！」

「たとえダンスバトルであつても私は無敵です。」

「頼もしいです。ガウエイン卿。」

「なんでダンスバトルなんだよおい！ちくしょう、なんだつてこんなことに…。」「いいから練習するわよ！ランサー！」

英靈たちとの闘い！

ぐわああああああああ!!!おとぎ銃士赤ずきんのOP曲ぐわあああああああ童話迷宮ぐわああああああ!!!

「どうしたマスター！落ち着きたまえ！非常にあつてゐるけども！」

霧囲気びつたしだれども！」

くつ！こうなつたらアーチヤー！」

ラストナンバー U n l i m i t e d B l a d e W o r k s だ！お前の十八番の曲、E M I Y A で、

自慢のラップとヒップホップを見せてやれ！

「そんなものを自慢にした覚えはない！」

最後の戦い……！

「生死のかかつた戦いでこそ、人は精神を成長させうる。人類にとつて私は悪である。だが生命とは転輪するもの。

全を活かす為に、個に救いをもたらす為に、私はこの力を授かつた。見るがいい、凡百のサーヴァントよ。ムーンセルがその蔵書から私に与えた救いの姿を……！來たれ、救世の英靈！この世でただひとり、生の苦しみより解脱した解答者よ！」

これがピースマンのサーヴァント、セイヴアー……！

「これは……まさか！」

ああ。この踊りは！まさしくインド映画伝統のインドダンス！

これはとんでもない強敵だ！！あのカラパリヤットによつて培われた身体から繰り出される無駄のない動きによる激しいダンス！

そして流れる曲は…！

「ああ、これは、まさしくあれだ！」

人類は衰退しちやつたアニメの！

「リアルワールド…なんて選曲だ！そしてなんてものを踊らせるんだあの男！

なんでそれに従つてるんだセイヴアー！」

いこう！アーチャー！これが最後の戦い…、ラストナンバーだ！

「ああ！」

そして、月の裏側で起ころる新たな闘い！

「こーんなへんなルールはへ・ん・こ・う…あれ？何ですか!?変更できない！」

「この私にぴつたりの舞台じやない！いくわよ！ボエー！」

「だ、ダンスは苦手です…。」

「ああ、ルール変更を前提にした設計にするんじやなかつた…。」

「いくわよ、私の踊りに、ついてこられるかしら？」

「こつちは逆に私よりダンスが上手だしいいい!!」

「ふははははははは！ 我のダンスを見せてやろう！ 冥土の土産にするがいい！」  
なんて夜の帝王なんだ！」

「和光同塵、真如波羅蜜。慈悲です、戯れといたしましよう」

結局最後までダンスか！しかもキアラのダンスは…！

「ホールダンス、リンボー、果てはストリップ！さあ、最悪のダンサーの登場だ！」  
最悪だあああああああ!!!

戦いを勝ち抜け！ サーヴァントのマスター、いや！

「「「プロデューサー！」」

英靈たちをレツスン！ 相手の情報を調べる！ 曲を選択！

三つのパラメーターをレツスンで上げろ！

「うむ、大成功だな！」

相手の情報を調べてこちらに有利な状況に持つて行け！

—相手はダンスが苦手、と。

情報をもとに曲を選択しろ！

—相手の曲の傾向はこうだ。ならば、この曲がいいだろう。

そしてダンスバトルに勝て！

「僕はまだ8歳だぞ！そもそもダンスバトルで死ぬなんていやだああああああ！」

それはわかる。

Fate／EXTELLA ダンシング・オールナイト2030年、2月22日発売予定  
！（中止）

ガウエインの聖者の数字を破る方法がこれだ！

「なに？ミラー・ボール！あたりが暗く……」

今夜はオールナイト、だぜ？